

山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

若者の自立と進路選択に関する研究

2009年3月

林 寛 子

学位論文要旨

学位論文題目 若者の自立と進路選択に関する研究

申請者氏名 林 寛 子

若者の社会問題としてあげられるフリーター、ニート、不登校、ひきこもりなどには、自立できない若者という共通点がある。若者の自立をめぐる問題は、1987年、臨時教育審議会による「教育改革に関する第四次答申（最終答申）」が示した新自由主義教育改革の下に顕著になったといえる。若者には個性や自立や自己責任、自分の将来を主体的に選択することが求められ、若者は「自己実現」の欲求をもち、自分らしさを求めて終わりのない自分探しを行っている。

1990年代以降、若者の「自己実現」の欲求の強まりや自分探しに関して、出身階層における若者のアスピレーションや進学状況の変容に関する研究、学校トラッキングにおける若者のアスピレーションや進学状況の格差に関する研究、若者の居場所づくりに関する実践的事例研究、進路指導に関する研究、若者の対人関係と自己意識の変容に関する研究、若者の職業意識に関する研究などが蓄積されてきている。

これらの先行研究はそれぞれ部分的な側面に焦点を当てていることから、本研究は若者の生活の居場所である家庭要因、学校要因、その他の地域社会の要因が、若者の自己意識をどのように規定しているのか、自己意識の関連から若者の自立を総合的にとらえ、若者の進路選択の場面において肯定的自己意識の形成を可能にする対面的な他者との関係の部分が若者の自立支援となることを検証することを目的としている。

また、日本の学校教育は学習指導要領のもと全国一様に行われ、情報化の進展によって地域間の格差は生じにくいとはいえ、進学状況や就職状況に地域間格差があることは事実である。居住する地域によって若者の価値観や行動様式は異なる。本研究では、山口と東京の高校生2446名を対象として実施した「高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査」結果に基づいて、地方と大都市の若者の自立の違いを実証的に解明するところに大きな特色がある。

本論文は2つの部分で構成した。第1部は序章から第4章で、若者の自立をめぐる理論的先行研究と実証的先行研究を検討し、若者に自立を求める教育改革の変遷や統計データから若者がおかれている今日的状況を分析する部分である。第2部は第5章から終章で、「高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査」結果を用いて自己意識を規定する学校要因、家庭要因、地域社会要因の分析と地域間の比較分析を行う部分である。

序章「自立を求められる若者の問題」では、若者は学校教育において「自己実現」が焚きつけられていることにより、「自己実現」の欲求を肥大化させ、それに固執することにより自立できない状況に陥る若者の問題を示した。

第 1 章「若者の自立と自己実現」では、若者の自立を発達段階からとらえ、自立は居場所における他者との関係の中から自己意識が形成され、自己実現の欲求がもたらされること、自己実現を阻む学力や学校トラッキング、社会階層や社会の私事化を検討し、自立と自己実現の概念を整理した。

第 2 章「『自立』を強調する教育改革と若者の今日的状況」では、戦後日本の教育改革の変遷をたどり、新自由主義の教育改革が若者に「自立」や「自己実現」を強く求めていることと、進学状況と就職状況、ニートや不登校などの自立できない若者の実態から若者の今日的状況を明らかにした。

第 3 章「実証的先行研究にみる若者の『自己実現』の欲求と進路選択」では、出身階層における若者のアスピレーションや進学状況の変容に関する研究、学校トラッキングにおける若者のアスピレーションや進学状況の格差に関する研究、若者の居場所づくりに関する実践的事例研究、進路指導に関する研究を検討した。

第 4 章「実証的先行研究にみる若者の自己意識と職業意識」では、若者の自己意識に関する研究、若者の職業意識に関する研究を検討した。先行研究の検討から、分析枠組みとして若者の自己意識は家庭要因、学校要因、その他地域社会における要因から規定され、肯定的自己意識が進路選択における自立をもたらすことを導き出した。

第 5 章「高校生の生活と進路選択」では、大都市の高校生は「自己実現」の欲求が強く、学校の規定力が地方より弱いこと、地方の高校生は学校における規範や先生の存在を重んじるなど学校の規定力が強く、学力や生活などの諸条件を考慮しながら現実的な進路選択をしていることが明らかになった。

第 6 章「地方と都市の高校生の自己意識と進路選択」では、肯定的自己意識は学校要因、特に友人関係の規定が強いことが明らかになった。地域間の比較では、肯定的自己意識の規定要因に地域差はないが、大都市の多元的自己意識は、肯定的自己意識と同様自立した状況にあり、多くの高校生がアルバイトなど学校外に所属集団をもつ大都市において家庭、学校よりも地域社会による要因に規定されていることが明らかになった。

第 7 章「高校生の進路選択の規定要因」では、高校生全体では学校要因の学校区分、成績、友人関係、家庭要因の母親との関わりが進路選択を規定しており、地域間の比較では、地方は学校要因、大都市は家庭における親子関係が進路選択を強く規定していることが明らかになった。

終章「進路選択にみる若者の自立の問題と課題」では、若者の自立を困難にしている問題として、教育改革による高校の多様化と社会の一元的評価の矛盾、高校における進路指導、他者不在の自己意識の形成の問題を明らかにした。若者の自立支援、特に都市の若者の自立支援は、居場所の「場」の提供ではなく、友人関係、親子関係など居場所における対人関係が重要であり、継続可能な他者との対面的な関わりが必要であることを示した。

本研究は、地域間の比較分析から、大都市の高校生は「自己実現」の欲求が強いために自立が困難な状況にあり、地方の高校生は都市よりも対人関係が保たれているために自立している状況にあることを明らかにし、若者の自立には居場所における対面的な対人関係が必要であることを示したところに本研究の意義がある。

若者の自立と進路選択に関する研究

目 次

第1部

序 章 自立を求められる若者の問題	1
第1章 若者の自立と自己実現	6
第1節 若者の発達段階にみる自立	6
1 発達段階の理論	6
2 発達段階における若者の自立と社会化	10
第2節 自立と自己実現	13
1 マズローの欲求段階説における自己実現	13
2 キャリア発達理論における自己実現	14
3 自立と進路選択	16
4 自己実現とアスピレーション	17
第3節 自己実現の阻害要因	18
1 社会階層と文化資本による阻害	18
2 学力と学校トラッキングによる阻害	20
3 私事化による阻害	21
第4節 若者の自立をめぐる問題の構築	24
第2章 「自立」を強調する教育改革と若者の今日的状況	30
第1節 「自立」を強調する日本の政策	30
1 新自由主義の歴史的背景	30
2 政策における「自立」の強調	31
第2節 戦後日本の教育改革の変遷	33
第3節 若者の進学・就職状況と格差	43
1 進学状況および進学にともなう移動と格差	43
2 若者の就職状況と格差	51
3 学校における進路指導	54
第4節 若者の今日的状況	56

第3章 実証的先行研究にみる若者の「自己実現」の欲求と進路選択	61
第1節 若者の「自己実現」の欲求に関する研究	61
1 1990年代以降の若者の研究	61
2 若者の「自己実現」の欲求と階層・文化資本	63
3 若者の「自己実現」の欲求と学校トラッキング	64
4 若者の「自己実現」の欲求と地域社会における活動	66
第2節 進路指導と進路選択に関する研究	68
1 進路指導に関する研究	68
2 若者の進路選択のプロセスに関する研究	69
3 「自己実現」を求める進路指導と学力による進路指導	73
第4章 実証的先行研究にみる若者の自己意識と職業意識	79
第1節 若者の自己意識と対人関係に関する研究	79
1 若者の自己意識	79
2 若者の自己意識と対人関係	83
3 若者の自己意識とコミュニケーションツール	88
第2節 若者の職業意識と対人関係に関する研究	90
1 若者の職業意識	90
2 若者の職業意識と対人関係	93
第3節 先行研究の考察と若者の進路選択に関する分析枠組みと方法	101
1 先行研究の考察	101
2 本研究の分析枠組と方法	103
第2部	
第5章 高校生の生活と進路選択	108
第1節 調査の概要と方法	108
第2節 高校生の生活	110
1 家庭生活	110
2 学校生活	112
3 地域社会における生活	115
4 地方と都市の高校生の生活	120
第3節 高校生の進路選択と職業意識	120
1 高校生の進路選択	120
2 高校生の職業意識	123
3 地方と都市の高校生の進路選択	126
第4節 高校生の進路選択における「自己実現」の欲求	127

第6章	地方と都市の高校生の自己意識と進路選択	131
第1節	高校生の自己意識	131
第2節	地方と都市の高校生の自己意識の規定要因	133
1	自己意識を規定する家庭要因	133
2	自己意識を規定する学校要因	139
3	自己意識を規定する地域社会における要因	144
4	地方と都市の高校生の自己意識と進路選択	147
第7章	高校生の進路選択の規定要因	153
第1節	高校生の進路選択を規定する家庭要因	153
第2節	高校生の進路選択を規定する学校要因	170
第3節	高校生の進路選択を規定する地域社会における要因	182
第4節	地方と都市の高校生の進路選択にみる自立	187
終章	進路選択にみる若者の自立の問題と課題	190
1	進路選択にみる若者の自立の問題	190
2	若者の自立の課題	193
資料		196
(1)	「高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査」調査票	196
(2)	「高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査」単純集計	208
参考文献・引用文献		220
あとがき		229

第 1 部

序章 自立を求められる若者の問題

現代社会において、ニートやフリーターなど、自立できない若者が問題になっている。若者の社会的背景として、友人関係や親子関係などの人間関係の希薄化がある。また、教育改革による「個性」や「自己実現」を重視した学校教育がある。

若者の自立は、家庭を中心として、仲間集団、学校、地域などの居場所における人間関係の中で形成されていくものである。その中でも特に学校は若者が生活時間の多くを過ごす場であり、学校における友人や教師との関わりの中で、若者の自立をはかることがその役割としてある。

また、学校における教育は、若者が教師に従うことが求められる強制の側面と、若者の主体的な選択が求められる自由の側面を持ち合わせている。現代社会は学校教育において特に自由の側面が強調されている。その一つの例として、若者は学校教育において職業をとした「自己実現」が求められており、主体的な選択として進路を決定することが求められている。若者の進路選択にかかわる学校における指導は進路指導としてだけではなく、総合学習の時間などにおいても行われている。若者は学校教育における指導において「自己実現」が焚きつけられており、若者の「自己実現」の欲求が強まっている。この学校教育において作りあげられた「自己実現」の欲求の強まりが自立できない若者を増加させた一因である。

現代の若者は友人関係や親子関係などが希薄化しているため、生き方や進路について他者と真剣に語り合う機会が少なくなっている。学校教育において焚きつけられた「自己実現」の欲求を景気や社会情勢などの社会環境などを含め、家庭の事情や本人の能力などの現実の生活における諸条件を検討する機会を与え、「自己実現」の欲求を冷却する他者の存在は薄れている。学校教育において焚きつけられた現代若者の「自己実現」の欲求は、皮肉にも学校教育において冷却されている。高校生は進路指導の流れの中で「自分の好きなことを見つけなさい」「将来の夢をもちなさい」と教師から指導されながらも、大学進学や就職などの進路選択は、高校の学業成績の結果によって高校の進路指導のもとに決定されている。

しかし、現代日本の社会においては高学歴化が進んでいる。現代の若者の進路選択が学業成績をもとにした進路指導による決定であっても、その進路指導は若者の「自己実現」の欲求を冷却するほどのものではなくなっている。大学進学者の増加により、学校教育において焚きつけられている「自己実現」の欲求は、大学に進学しても引き続き就職支援などにおいて焚きつけられ、若者は高校時代とかわらず大学においても「自己実現」の欲求を持ち続けることになる。

現代日本の高学歴化の状況は、高校への進学率（通信制課程を含む）97.7%（平成19年

度)であり、高校は誰もが行く時代である。また、大学・短期大学等の高等教育機関への進学率(現役)は51.2%(平成19年度)である。M.A.トロウは高等教育進学率50%以上の社会をユニバーサル・アクセス型と表現している¹⁾。ユニバーサル・アクセス型の社会では高等教育を受けた者の特権はなくなり、高等教育の機能が産業社会に適応する国民の育成になるという。現代の日本社会は、まさにM.A.トロウがいうユニバーサル・アクセス型の社会となっており、大学を卒業した者への特権はなくなりつつある。一流大学をできれば一流企業に就職でき、安定した幸せな生活ができるという学歴社会のシナリオの信憑性が失われている。

日本における学歴社会の実態は、1980年代まで右肩上がりの高学歴化で、教育機会は高校進学機会と大学進学機会の2段階であった。この時代の若者を学歴取得に駆り立てた要因は、大衆化したメリトクラシーによる社会全体の加熱であった。高度経済成長による一億総中流の時代が背景にあり、教育機会の平等が強調をされていた。この時期の日本においては、何をめぐって競争し、何を目指して努力すれば良いかは人々にとって明白であった。与えられた共通の教育内容を一生懸命に消化すれば、成績や学歴などの教育達成を手にすることができ、その教育達成に基づいて学校を出た後の社会的地位はかなりの確実性で予測することができた。人々がたどるべき道筋はほぼ整えられており、人生における努力と地位達成という結果の結びつき方は明白であった²⁾。

しかし、1990年代以降は学歴が高水準で安定している³⁾。教育機会の境界は大学進学機会の一点に集約される。若者の大学進学の見路選択に関わるメカニズムは、大衆メリトクラシーから親の学歴から下降することを回避する動機に変わっている。つまり、親の学歴が大卒層であれば、子どもはそれと同等かそれ以上の学歴を求めて大学進学の見欲を高めるが、親の学歴が高卒層であれば高校卒業によって相対的下降が既に回避されているため、大学進学への差し迫った要求は作動しないのである。

このメカニズムは、大卒層の固定化傾向を強める方向の変化である。つまり、現代社会において学歴社会のシナリオの信憑性は失われても学歴社会は強固に存在しており、新たな学歴社会の背後で格差・不平等が生じている。現代の若者は1980年代以前の若者と同様に競争をしているが、何をめぐって競争しているのか、何を目指して努力すればいいのかはみえていない。どんなに学校における教育内容を一生懸命に消化して、学歴などの教育達成を手にしても、その後の社会的地位は予測できない。

若者は「自己実現」の欲求を強く持ち続けているが、現代社会はそれを可能にするような社会ではない。現代若者は「自己実現」という達成すべき文化目標があるものの、若者の「自己実現」という欲求を実現する手段は社会的に十分に提供されてはいない。「自己実現」のために利用できる制度的手段は欠けているにもかかわらず目標となる「自己実現」ばかりが強調され、目標達成のための手段は不平等である。

荻谷剛彦は、教育改革により若者に「自己実現」を求める欲求は強化されているのに、若者が「自己実現」を達成するには明確な階層間格差が存在し、特に、職業選択における

「自己実現」においては若年労働市場の逼迫により「自己実現」を達成するための職業機会はむしろ縮小していること、また高学歴化にともない若者の「自己実現」の欲求は昂進しているのにそれを実現する手段が社会的に十分に提供されていないことを指摘し、その状況を「自己実現アノミー」と呼んでいる⁴⁾。

多くの若者は職業を選択する時期までに現実の生活における諸条件や社会環境を他者と関わりの中で検討し、職業における「自己実現」の欲求を調整し、自立していく。しかし、学校教育において焚きつけられた「自己実現」の欲求をもち続け、敢えてニートやフリーターの道を選ぶ若者も少なくない。学校教育において焚きつけられた「自己実現」の欲求が自立できない若者を生み出しているといえるであろう。

若者に「自己実現」を強く意識させ、「自己実現」を掲げて強力に学校における進路指導・支援を行っているのは高校である。高校における進路指導は若者の「自己実現」の欲求を過熱させ冷却もさせる。学校教育によって若者の「自己実現」の欲求が強められ、その「自己実現」の欲求が自立できない若者を生み出していることを明らかにするためには、若者の高校生の段階を把握することが重要である。たとえ職業をとおした「自己実現」が大学に先延ばしされたとしても、高校生はそれまで学校教育において焚きつけられてきた「自己実現」が揺らぐ時期である。

そこで、高校生の進路選択に焦点をあて、学校教育によってもたらされた「自己実現」の欲求が自立できない若者を生み出している状況を明らかにし、若者の自立を可能にするために、若者の生活の居場所である家庭、学校、その他の地域社会の要因が、若者の自己意識をどのように規定しているのか、出身階層や学校トラッキングなどが規定する自己意識の関連から若者の自立をとらえ、若者の進路選択における肯定的自己意識の形成を可能にする自立支援のあり方を検討し、自立支援が居場所としての「場」の提供ではなく対面的な他者との関係をつなげる支援であることを示すことが本研究の目的である。

若者に関する先行研究では、出身階層における若者のアスピレーションや進学状況の変容に関する研究、学校トラッキングにおける若者のアスピレーションや進学状況の格差に関する研究、若者の居場所づくりに関する実践的事例研究、進路指導に関する研究、若者の対人関係と自己意識に関する研究、若者の職業意識に関する研究が行われており、これらの先行研究により失われた 10 年といわれる 1990 年代の若者の変容が明らかにされている。これらの先行研究はそれぞれ部分的な側面に焦点が当てられており、若者の自立を総合的にとらえて研究されたものはない。

また、これらの先行研究の調査対象者は、東京、仙台、神戸、福岡の若者であり、大都市、地方都市の若者の状況が明らかにされている。しかし、日本の学校教育は学習指導要領のもとほぼ全国一様に行われ、情報化が進展しているとはいえ、進学状況、就職状況は地域間の格差がある。また、地方の若者は進学時や就職時には都市への移動があり、有名大学の所在も私立学校の数も塾や習い事の数も就職の求人数やアルバイトの求人数も都市が多く、都市には若者の「自己実現」を可能にするための環境がそろっている。しかし、

地方ではそれらは得られにくい場合が多い。しかし、大都市と地方の比較が行われた先行研究はない。

先行研究において若者の学校の生活比重は小さくなっていると指摘されているが、この指摘は大都市の若者であって、地方では依然として学校の生活比重は大きいままだと予測される。それは、大都市の若者は学校外のネットワークを自ら選択して所属することが可能な環境にあるが、地方の若者は学校外のネットワークは乏しく学校が若者の居場所の中心となっていると考えられるからである。つまり、学校の位置づけには地方と大都市では異なるはずである。

さらに、家庭においても、都市では血縁的關係や地縁的關係が薄れているために家族が孤立した状況にあり、その中で家族の構成員それぞれが自己実現を目指すため、あるいは親の離婚により、家族の人間關係が希薄化しているケースが考えられるが、地方では血縁的關係や地縁的關係などの人間關係の希薄化は都市ほどではないと予測される。つまり、地方の若者よりも大都市の若者が「自己実現」の欲求が強く、その欲求を対面的な人間關係において見つめなおし調整することがないために、欲求のみが肥大化し自立が困難になっていると考える。

本研究では、山口と東京の高校生を研究対象として、若者の生活の居場所である家庭要因、学校要因、その他の地域社会の要因が、若者の自己意識をどのように規定しているのか、自己意識の関連から若者の自立を総合的にとらえ、若者の進路選択の場面において肯定的自己意識の形成を可能にする対面的な他者との關係の部分支援となることを検証し、地方と大都市の若者の自立の違いを実証的に解明するところに大きな特色がある。

山口と東京の高校生の「自己実現」の欲求と進路選択の実態を比較分析するにあたって、若者が進路選択を可能にして自立するためには、若者の自己意識の形成が重要であると考えられる。肯定的自己意識が形成されれば若者の進路選択が可能になり、自立がもたらされ、肯定的自己意識が形成されなければ進路選択は危うくなる。逆に、進路選択が思うようにならなければ否定的自己意識が形成される循環もある。このように考えられるのは、肯定的自己意識が形成されている若者は対人關係を築き、維持することができる若者であるはずだからである。対人關係を築いてそれを維持することができれば、「自己実現」の欲求を調整することが可能である。肯定的自己意識を形成するためには、日常生活において安心感をもつことができる居場所をもつことである。

現在、国の若者政策でも教育政策においても若者の居場所づくりがすすめられているが、多くは「場」の提供である。重要なのは、安心感を持つことが可能な居場所における他者との対面的な継続可能な關係であると考えられる。

以上の予測から、①学校教育により若者の「自己実現」の欲求が強められている、②若者の「自己実現」の欲求の強まりは、その欲求そのものに問題はないが対人關係が乏しかった場合は欲求だけが肥大化し自立を妨げるものになる。つまり、対人關係を築くことが、肯定的な自己意識を形成する。この肯定的な自己意識が進路選択を可能にし、若者の自立

をもたらす。対人関係が希薄化し、「自己実現」の欲求が肥大化する若者は大都市の若者であるというのが本研究の仮説である。この仮説に基づき、地方と都市の若者のそれぞれが抱える自立の困難さを明らかにするとともに、それぞれの地域の若者に有効な自立支援を検討する。

<注>

- 1) Trow, M 1961 *The Second Transformation of American Secondary ducation*, *International Journal of Comparative Sociology* 2:144-165 天野郁夫訳1980「アメリカ中等教育の構造変動」天野郁夫他編訳『教育と社会変動（下）』東京大学出版会
Trow, M 1974 *Problems in the Transition from Elite to Mass Higher Education*. In *Policies for Higher Education*. Paris OECD 天野郁夫他訳1976『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』東京大学出版会を参照。
- 2) 本田由紀 2005『多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT 出版 p11-12
- 3) 吉川徹 2006『学歴・格差・不平等—成熟する日本型学歴社会—』東京大学出版会 p250-251
- 4) 荻谷剛彦 2003『なぜ教育論争な不毛なのか—学力論争を超えて』中公新書ラクレ p252-253

第1章 若者の自立と自己実現

第1節 若者の発達段階にみる自立

1 発達段階の理論

多くの社会において若者は親からの自立を果たすことが求められている。現代日本の社会においても同様であるが、ライフスタイルの多様化により自立の時期や自立のあり方が一様ではなくなってきた。

人の生涯をいくつかの段階に分けて、その段階の発達の特徴を整理したものが発達段階である。発達段階の理論は、生涯発達という視点が含まれない理論と含まれる理論の2つに大きく分類できる。まず、生涯発達という視点が含まれない発達理論は、古い時期の理論であり、主なものとして、精神分析の始祖といわれるフロイト (Freud,S) やピアジェ (Piajet,J.) の理論がある。

フロイトは心理、性的エネルギー (リビドー) の発達段階を口唇期 (～6歳)、肛門期 (2から4歳) 男根期 (3から5歳)、潜伏期 (6から13歳)、性器期 (12から15歳) の5つの段階に分類し、0歳から15歳までの発達段階を説明している。フロイトは心理、性的エネルギーの局在化が発達段階を特徴づけるとし、幼児期の心的外傷が成長後の葛藤や神経症の原因になることを主張した。早期の発達段階の重要性を強調しており、成人以後の発達には言及していない。

また、ピアジェは認知発達論の立場から、思考の発達段階を感覚運動的知能の時期 (～2歳)、前操作の時期 (2から7歳)、具体的操作の時期 (7から12歳)、形式的操作の時期 (12歳以上) の4つに分類した。ピアジェも乳児期から青年期までの発達段階であり、成人期や老年期の思考や認知については述べていない。フロイトやピアジェの発達段階の理論はともに早期の発達段階への関心が強く、人間の完成は性器期、形式的操作の時期、すなわち青年期ということになる。

これに対して、生涯発達という視点を含めた発達理論をハヴィガースト (Havighurst,R.J) やエリクソン (Erikson.E.H) が展開した。彼らの発達理論は、人間の誕生から死に至るまでをライフサイクルの発想で考えたものである。

ハヴィガーストは人間の生涯を乳児期および早期児童期 (誕生から6歳まで)、中期児童期 (6歳から12歳)、青年期 (12歳から18歳)、早期成人期 (18歳から30歳)、中年期 (30歳から60歳くらいまで)、老年期 (60歳以降) の6段階に区分し、それぞれの段階で個人が達成すべき課題をあげている。この課題を発達課題という。発達課題はハヴィガーストが初めて用いた概念である。ハヴィガーストは生きていくこと、成長することは学習であるとした。ハヴィガーストの発達課題はそれぞれの発達段階で学習によって形成しなければならない身体運動技能、知識や判断などの認知的習得、パーソナリティ発達、

各段階にふさわしい役割などを含んだ具体的な発達課題の内容を示している。

ハヴィガーストの青年期の発達課題¹⁾をみると、「同年代の異性と新しい成熟した関係をつくりだす」「男性あるいは女性としての社会的役割を獲得する」「自分の身体つきを受け入れ、身体を効果的につかう」「親や他の大人からの情緒面で自立する」、「結婚と家庭生活のために準備をする」「職業につく準備をする」、「行動の指針としての価値観や倫理の体系を身につける、イデオロギーを発達させる」「社会的責任をとる行動をとりたい」と思い、またそれを実行する」があげられている。青年期は次なる成人前期に向けた準備段階といえる。つまり、成人前期への準備を学習によって形成することが青年期の若者は期待されている。

エリクソンはフロイトの理論を継承し、リビドーの高まりが自我の発達と内的に関連していることや対人関係や歴史的・文化的環境が自我の発達に欠かせないことに注目している。アイデンティティの形成は生涯をわたって続く無意識的な発達過程であるとして、人格の中核である自我がライフサイクルを通じて発達していく過程を研究している。

アイデンティティという言葉はエリクソンが用いたものである。エリクソンは、「自分は他者と違って自分である」という斉一性の感覚と自己はこれまでいかにして自分となってきたのかという連続性の感覚からなるものをアイデンティティと呼んでいる。このような感覚をもった主体的な自分が、社会の中で認められた自分の地位、役割、職業、身分などの「～としての自分」という感覚に合致して安定感、安心感、自信を持ち、私が私である実感を形成する。

エリクソンの発達段階は8つの段階に区分されている。8つの段階とそれぞれの発達課題は次のとおりである²⁾。乳児期(0歳から1歳半頃)は、母子関係を通じて身体の安全と基本的な信頼感が獲得される。幼児期初期(1歳半から3歳頃)は周囲の環境と自己統制との関連の中で羞恥心や自己の価値に対する疑惑が生じる一方で、しつけをとおして自律性が芽生える。遊戯期(3歳から6歳頃)は自主性・積極性の獲得と罪悪感の克服が家族関係の中でなされる。学童期(6歳から13歳頃)は学校において教師や仲間と過ごす中で、勤勉に学習することを学び、また他者と自分を比較することや、学習の達成状況を評価されることなどから劣等感を感じるようになる。青年期(13歳から22歳頃)は自我同一性の獲得と役割の混乱がみられる。前成人期(22歳から40歳頃)は友情、性愛、競争や協力によって自分を他人の中に見失い、また発見することによって、親密感の確立と孤立感の克服がなされる。成人期(40歳から60歳頃)は次の世代を生み育て、導くといった生殖性、生産性の確立と停滞感の回避が生じる。老年期(60歳以降)はあるがままに世界と自己を受け入れ、自己と人間としての英知を獲得し、自我同一性の確立と絶望感の回避がなされる。

エリクソンの発達理論は、それぞれの発達課題が「肯定的」対「否定的」という形で表されている(図1-1-1)。これは、成功か失敗かではなく、両方のバランスが大切で「否定的」な部分を乗り越えて、「肯定的」な部分を身につけるとエリクソンは考えている。つまり、各段階で自我を発達させるためには、図1-1-1に対で示してある拮抗を克服する必要がある。

あるとしている。

老年期	VIII								統合 対 絶望、謙遜 英知
成人期	VII							生殖性 対 停滞 世話	
前成人期	VI						親 対 孤立 愛		
青年期	V				同一性 対 同一性混乱 忠誠				
学童期	IV			勤勉性 対 劣等感 適格					
遊戯期	III		自主性 対 罪悪感 目的						
幼児期初期	II		自律性 対 恥、疑惑 意志						
乳児期	I	基本的信頼 対 基本的不信 希望							
		1	2	3	4	5	6	7	8

図 1-1-1 エリクソンの発達理論

(出所) Erikson1982=村瀬孝雄・近藤邦夫訳 1989『ライフサイクル, その完結』p73

また、図 1-1-1 の対で示してある拮抗の下に示されている希望や意思などは、対で示してある拮抗を克服したときに獲得される心的特性である。乳児期は希望で、自分が自分としてこの世界に存在しても良いと思える第一歩となる。幼児期初期は意志で、自分のことを自分でしようとする自立の意志と、自分のわがままを抑え、コントロールしようとする自律の意志である。遊戯期は目的で、自分の目的や課題を積極的にたて、それをやり遂げようとする力である。学童期は適格で、有能性とも言われているが、勉強やスポーツ、芸術など自分の得意なものを見つけたり、友達と遊んだり、喧嘩をしたりしながら人間関係を学び、自分の力を発揮し、物事をやり遂げることが出来るという力である。

青年期は忠誠で、社会環境や人間関係における自分の居場所を求めて、心理的な帰属感を得て、帰属集団に対し自分の能力を発揮し、忠誠・貢献を行う力である。前成人期は愛であり、配偶者・恋人・親友などとの関わりの中で、愛を通した幸福感・喜び・安らぎなどを得ることである。成人期は世話で、自分の子どもや孫の身の回りの世話だけでなく、後輩や若者に、自分が人生において経験し得た知識・技術・知恵などをさずけ、育成していくことである。老年期は英知で、「死」という自分の終局面を受け入れ、自分自身の生涯を振り返り、その価値を見だし承認する中で、「生」の意味・目的を自分なりにみつけ実感することである。

エリクソンは、幼児期の基本的信頼は全ての生活・行動の基礎であり、これが得られる

と次の発達段階で自律性を獲得して、自我はだんだんと固まっていき、各段階で心理社会的危機の克服ができないと自我の発達は歪むと説明する。エリクソンの発達段階は、生涯発達の視点を持って理論的枠組みが示され、その後の生涯発達という視点の発達段階理論に大きな影響を与えた。

アイデンティティの問題が最も問い直しを必要とされる時期は青年期である。青年期には、自分の人生について考えなければならないさまざまな問題に直面する。進学、就職などの進路の問題、友人関係の問題などがある。これらの問題のそれぞれに青年期の若者は自分自身で決定していかななくてはならない。この一つひとつの決定が青年期における危機である。

エリクソンは青年期における自我と社会の相互関係によってもたらされる心理・社会的危機を通じて、自分らしさ、つまりアイデンティティを確立していけるのか、それとも自分を見失い混乱していくアイデンティティ拡散がもたらされるのか重要な問題であるとした。つまり、自分らしさは、他者の期待や態度、評価や反応に基づいて構成されるため、他者から肯定的にまたは好意的に評価されれば、人はその評価を受容して自己意識を安定化させ、その評価を自己の中に統合して、その評価の方向に自己意識を発展させていくため、多様な他者に肯定的に評価されるほど自己意識は安定化する。居場所を持つほど自己は強く認識されて安定化し、自尊的な自己を形成していく。

他者の評価が、若者が抱いている自己意識を毀損したり、制約したり、敵対するというように否定的であると若者の自己意識はその基盤を失って不安定となり、若者は不安な孤独な状態に陥る。また、他者との関係が否定的であれば、他者との関係性を一切排除して若者は閉塞的な居場所に閉じこもってしまうことになる。そうすると、若者の自己意識は自分だけの閉ざされた狭い世界からしか生み出されず、自己の内で繰り返し自己を確認していくため、自己意識は修正されることはない。また、社会に適応できなくなるため、自己を護るために閉塞的な狭い世界に閉じこもってしまう。以上のことから、アイデンティティの形成は自己意識の形成といえる。

ところで、個人は他者との関わり方が大きく変容するような状況においては、自己のあり方も変化する。他者との関係の変容と自己の変容とはその意味で表裏一体である。リースマン (Riesman, D) はこのことについて、1950年代のアメリカが経験した消費社会への転換において人間関係の変容を観察し、人間関係の変容が自己のあり方に新しい型をもたらしたと指摘した³⁾。近代初期における自己が自らを方向付ける基準を自身の内側に持っていた「内部志向」であったのに対して、消費社会における自己はその基準を自分の周りの他者に求めようとする「他人志向」であるとした。

エリクソンがアイデンティティという言葉が登場させたほぼ同時期に、リースマンはアイデンティティが想定しているような一貫した自己というものが消費社会において崩れつつあることを指摘している。

2 発達段階における若者の自立と社会化

以上のような発達理論の展開をふまえて、日本では久世敏雄が自立の過程を発達の観点からとらえて研究している。久世はエリクソンの発達段階をふまえて、エリクソンの青年期までの5段階を乳児期、幼児期前期、幼児期後期、児童期、思春期・青年期と分類している。久世の発達段階設定は、エリクソンの発達段階をふまえているのだが青年期までしか説明されておらず生涯発達という視点は乏しい。

久世は、発達の5段階において「身体的自立」「行動的自立」「精神的自立」「経済的自立」の4つの自立がどのように発達するのかを説明している⁴⁾。「身体的自立」とは適切な排泄の仕方を学び排泄機関の自律ができあがること、「行動的自立」とは身体的自立を基礎として、日常生活習慣が確立することと、性別の区別ができ、良心に基づいて自己の意識と感情を抑える自己統制を行い一人で行動できるようになることである。「精神的自立」とは、行動的自立を基礎として多様な価値基準から自己に適した選択を自らの判断にもとづいて行うことであり、主体的自我の確立である。「経済的自立」とは、若者が職業に就き、収入を得ることである。若者の自立の最終段階は親から精神的、経済的に自立することが設定されている。幼児期、幼児期前期に「身体的自立」、幼児期後期、児童期に「行動的自立」、思春期・青年期に「精神的自立」を達成し、以降、「経済的自立」がもたらされるとする。

また、久世は発達の5段階は社会化⁵⁾の過程であるとし、社会化の課題について、乳児期は離乳・排泄・着脱衣・清潔などの基本的な生活習慣の形成、幼児期前期は性役割行動の習得、幼児期後期は道徳的判断の確立、児童期は対人行動とその技能の発達、思春期・青年期は職業・政治などの社会化と人格の形成をあげている。また、それぞれの発達段階における社会化の担い手について、乳幼児期の社会化は、家族、特に母親が中心となるが、子どもが成長するに従って、教師、仲間、マス・メディアなどにその担い手が広がっていくこと、乳幼児期・児童期の子どもは誰のどこをモデルにするのかの選択は意図的ではなく無意識的に身近な他者となるが、思春期以降では子どもは誰のどこをモデルにするかの選択は、意図的・自覚的に行われるようになることを説明している。

住田正樹らは子どもの所属する集団を社会化の形態として示すために、図1-1-2のように「フォーマルな関係—インフォーマルな関係」と「拘束的他者—選択的他者」の2軸を用いて（Ⅰ）拘束的他者とのインフォーマルな関係による社会化、（Ⅱ）選択的他者とのインフォーマルな関係による社会化、（Ⅲ）選択的他者とのフォーマルな関係による社会化、（Ⅳ）拘束的他者とのフォーマルな関係による社会化の4つに分類している。

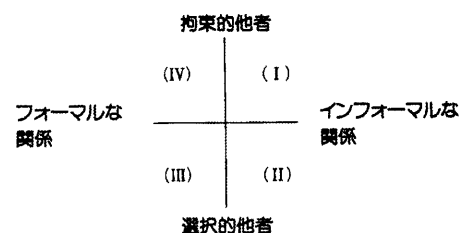


図 1-1-2 社会化の形態

また、4つの社会化形態に即応する集団を（Ⅰ）は家族集団、（Ⅱ）は遊戯集団・

（出所）住田正樹・高島秀樹・藤井美穂『人間の発達と社会』福村出版 1999年 p19

仲間集団・近隣集団、(Ⅲ)は地域集団、(Ⅳ)は学校集団と示し、それぞれの集団での社会化について次のように説明している⁶⁾。

- (Ⅰ) 家族集団では、子どもにとっては運命的に決められ、選ぶことのできない親との自然的な対面的接触を通して社会化されていく。
- (Ⅱ) 遊戯集団・仲間集団・近隣集団では、子どもは近隣という一定の居住範囲の中で遊び仲間を選択し、その遊び仲間との自由な関係を通して社会化されていく。また、子どもは遊び仲間の親やその他の近隣の精神との自然的な直接的接触によって社会化されていく。
- (Ⅲ) 地域集団では、子どもは子供会や少年団などの居住地域に存在する教育的活動を目的とした地域集団や地域組織に自由に参加し、共同的な地域活動を通じて社会化されていく。
- (Ⅳ) 学校集団では、教育機関として学校は計画的に体系的知識を伝達することによって子どもを社会化していく。学校は、国家の力を背景にした厳格な秩序と規範を持った集団であり、内部の関係は規範的である。子どもは居住地の属する行政区画に従って選択の余地なく特定の学校に所属させられ社会化されていく。

さらに、住田は子どもは(Ⅰ)－(Ⅱ)－(Ⅲ)－(Ⅳ)の順序で集団に所属して社会化されていき、社会化は血縁(Ⅰ)から地縁(Ⅱ・Ⅲ)への自然的紐帯による集団から人為的な集団へと移行すると説明する。子どもの日々の生活は一定範囲の土地の上で営まれており、その生活が完結性を持っている地理的範囲が地域社会である。その地域社会を外側から包括している環境が情報である。今日では、情報化が急速に進み、とりわけテレビの接触が多く、メディアの営利のために興味本位の遊樂的情報が子どもの日常に入り込んでいるが、これも子どもの社会化の環境であることを説明している。

住田は社会化の環境となる集団を居場所とし、その構成条件を整理して居場所の類型化をおこなっている。居場所の構成条件としては、主観的条件と客観的条件に分けている⁷⁾。主観的条件とは、若者自身がその場所を自分の居場所として実感し、その場所に自分の居場所として意味を付与するという主観性のことである。つまり、若者自身が抱く実感や意味によって、同一の場所も若者によっては居場所になったりならなかったりする。居場所は個々の若者の主観性によって形成されることが第一の条件だと説明している。

客観的条件とは関係性と空間性と説明している。関係性については、若者は自己を認識し再確認させてくれるような重要な他者との関係がなければ、自己を肯定する感覚や安心感といった感覚は身につかず、孤独な状態に陥ると説明する。空間性については、他者との関係が営まれる物理的な空間のことで人が居る所をさし、関係性は空間性と意味的に結びつけられて一体的に組み合わさって「居場所」となると説明している。

この関係性と空間性についてそれぞれ個人的－社会的という軸を設定し、2軸を用いて居場所を4つの型に分類している。社会的関係性をもつ社会的場所における居場所は、自分の存在が必要とされている場所で、集団に所属することによってわれわれ意識や帰属意識

を実感し安心感を得る場所であること、また、関係性が個人的であるか社会的であるかを問わず個人的な居場所は、自分であることを取り戻すことのできる場所としての機能があることを説明している。

人は他者との関係の中で不安や苦痛を感じた時、特定の他者に対してかかわりを求めようとする。多くの場合、特定の他者は親である。この特定の他者との間に築いた密接な関係をアタッチメントと呼ぶ。アタッチメントの理論はボウルビィ (Bowlby,J.) が提唱したものである。ボウルビィによると⁸⁾、人は特定の他者との密接な関係の確立、維持、回復をとおして安全であるという感覚を確保しようとする本性があり、アタッチメントは人の心理行動的な安全制御システムである。人の本源的な欲求としてあるアタッチメントが十分に満たされ、特定の他者を安全基地として安心して多様な探索活動をすることが可能な時に、子どものさまざまな活動が効率的かつ適切に行われ、心身健やかな成長が保証されると考えた。

このアタッチメントは乳幼児期あるいは児童期ごろまで適用されるように思われるが、ボウルビィは、アタッチメントは人が自立を獲得した後でも形を変え、一生涯を通じて存続するものだとしている。たとえば親とのかかわりでは、距離的に近い所に居続けることだけでなく、距離は離れていても特定の他者との間に強い信頼関係が築き、何か問題が生じればその信頼関係がある特定の他者から助力してもらえするという期待を絶えず抱いていることも意味する。また、乳幼児や児童期は特定の他者となる対象は保護者が主であるが、児童期以降は特定の他者が親だけでなく友人や恋人や、配偶者なども加わってくると考えている。

若者は社会化の過程においてさまざまな集団に所属し、居場所をもつことになる。若者にとっての最も基礎的な居場所は家族であり、家族の中におけるアタッチメントの確立、維持は若者の自立にとって基礎的で重要な他者とのかかわりといえる。この基礎的な居場所と基礎的な他者とのかかわりが、発達とともに居場所は学校や地域社会に広がり、その居場所における他者との関係が広がり、それとともに行動的自立、精神的自立、経済的自立を可能にしていく。

しかし、他者との関係は好ましい関係が常に続くことはなく、居場所や他者との関係が広がっていかない場合がある。他者との関係において不安や苦痛を感じる時には、基礎的な居場所となる家族やこれにかわる強い信頼関係が築かれた他者との関係において、安全であるという感覚、安心できるという感覚が重要になる。個人が、安全であるという感覚、安心できるという感覚を求めるのは、この感覚が人間の重要な欲求であるからである。個人はこの感覚が確保できれば居場所を拡大していこうとする。つまり、新たに集団に所属していくことになる。こうして個人は集団に所属し、複数の居場所をもつことにより、精神的自立を維持することが可能になるのである。

第2節 自立と自己実現

1 マズローの欲求段階説における自己実現

マズロー (Maslow, A.H.) は、人間は何らかの欲求をもち、人間の行動はこの欲求を満足させるためのプロセスであるとして欲求理論を提唱している。マズローは、人間の欲求は5段階のピラミッドのようになっていて、秩序を持って順序よく欲求充足が行われており、底辺にある1段階目の欲求が満たされると1段階上の欲求を志し、またその欲求が満たされるとい段階上の欲求を志すという。マズローのこの理論は欲求段階説といわれる。5つの段階の欲求⁹⁾は底辺となる1段階目の欲求から順に示すと以下のとおりである。

- ① 生理的欲求：食べる、飲む、休むなど生命維持に不可欠な欲求
- ② 安全欲求：危険を避け生命の安全を求める欲求
- ③ 集団所属と愛情の欲求：集団に所属し、友情や愛情を交換したいという欲求
- ④ 自尊の欲求：自分の才能や業績を認めてもらいたいという欲求
- ⑤ 自己実現の欲求：自己のもつ可能性を最大限に追求したり、発揮したいと願う欲求

これらの欲求の中で満足されていない欲求があると、個人は内部に心理的な緊張を生じさせる。個人はこの緊張を解除しようとしてなんらかの行動をとる。しかし、ある行動によって緊張が解除されると、不満足であった欲求は満足され、もはや行動を動機づける力をもたないとマズローは仮定している。マズローの欲求段階説を見ても安全であるという感覚、安心できる感覚は、2段階目の欲求であり、その段階の上に、集団に所属し友情や愛情を交換しようとする集団所属と愛情の欲求となっている。

マズローの欲求理論において特徴となる部分は、自己実現を人間の欲求の一つとして、人間の行動に関する欲求を分類する試みを行ったところである。マズローはフロイトが主に神経症の人を対象に研究し、精神分析を開発したのに対し、マズローは健康で人々から尊敬されるような人を研究対象にした。

マズローのいう自己実現の欲求を実現している人間（自己実現的人間）とは、その人が本来もっていると思われる潜在的可能性を十分に実現していると世間的に思われている人たちである。自己実現の欲求を実現している人間の特徴は、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求などの基本的欲求より高次の自己実現欲求に動かされているという。

つまり、マズローのいう自己実現の欲求を実現している人間は、欠乏動機よりも成長動機によって生きているということの意味する。つまり、外界を利用して自分に欠乏しているものを満たし、それによって自己の定常状態を保持するのに終始するのではなく、これまでの自己のあり方とは異なる新しい自己のあり方を実現しようとする自己実現の欲求に動かされているのである。

マズローの自己実現の研究における被験者は、個人的な知り合いや友人、及び有名人や歴史上の人物からなる。マズローにとって、自己実現の欲求を実現している人間を健康で

あるとして、被験者への印象をもとに分析をしている。その中で、自己実現の欲求を実現している者の対人関係の特徴をまとめている。それによると、自己実現の欲求を実現した人間は、他者に溶け込むことができ、他者を愛し、完全に同一視し、自我の境界を取り去ることもできる。また、人に親切であり、少なくとも忍耐強い傾向をもっている。しかし、どちらかというとも少数の人々と特別深い結びつきを持つ傾向にあり、彼らの深く愛する人々、友人の範囲はかなり狭いという。それは、自己実現的方法での生活では、多くの友人のためにさく時間がないという理由からである。

また、自己実現の欲求を実現した人間の欠点として、自己実現の欲求を実現した人間は非常に強い人間で、他の人々の意見には左右されずにかんしゃくをおこしたり、無慈悲になったり、無礼な行動をとることがあること、自己実現した人は基本的には親切であるために、不幸な人と必要以上に親しくしすぎて後期したり、必要以上に与えすぎて、逆におべっか使いになったりすることを挙げている。自己実現した人間でさえ、罪悪感、不安、悲しみ、自己を責めること、内的闘争、葛藤などを避けて通ることができないという。結果、完全な人間などというのは存在しえないという。

しかし、このマズローの自己実現に関する欲求理論は、組織における人間の行動を理解するのに有効な理論であり、職業的（キャリア）発達の理論においては、仕事への動機づけ、社会的存在としての欲求、自己実現の欲求が、職業的発達課題に結びついてくる。

2 キャリア発達理論における自己実現

スーパー（Super, D.E.）は、発達理論の中心に自己意識¹⁰⁾を置き、適性や興味への動機づけ、価値、マズローの欲求理論をふまえてキャリア発達理論を提唱している。キャリアとは、人が生涯にわたる時間経過の中で過去と未来をつないで人生にひとつのまとまりを見出し、個人的価値あるいは社会的価値を実現する経歴をいう。つまり、個人のキャリアは、自分自身とその環境についてのその個人なりの解釈や意味づけが主要な決定要因であるという。

スーパーの発達段階の区分は、成長段階（0歳から14歳）、探索段階（15歳から24歳）、確立段階（25歳から44歳）維持段階（45歳から64歳）、解放段階（65歳以上）という5つの段階で構成されている。それぞれの段階の間には移行期があり、その移行期は、ある段階から新たな段階へ進むための意思決定の過程であると説明する。このスーパーのキャリア発達理論は、エリクソンやハヴィガーストが生涯発達という視点をふまえて発展させた発達理論に移行という過程を導入した新たな発達理論として位置づけることができる。

スーパーは発達段階の中で仕事とその環境や状況に適応するライフコースに焦点を当てており、一生涯を通じて行われる選択や変化を予測可能なものとして説明するために、個人のキャリア上に、時間の視点からとらえたライフ・スパンと役割の視点からとらえたライフ・スペースという発達の視点を盛り込んだ。これらの視点はライフ・キャリア・レイナーと呼ばれ、図1-2-1のとおり表されている。

ライフ・キャリア・レインボーの役割軸は、仕事に関するものだけでなく、個人の人生における役割全体を描写している。スーパーはキャリアを単なる職業だけでなく、個人が経験する多様な役割と、その取り組み方によって構成されるとする。多くの人が生涯を通じて経験する共通的な役割として「子供」、学ぶことに従事する「学生」、余暇を過ごす「余暇人」、「市民」、「労働者」、家計を維持する人、親など「家庭人」、その他、病にある者や年金受給者など「その他のさまざまな役割」をあげている。

個人は生涯のいろいろな時期に、複数の役割を演じており、その結果、その人ならではの人生、つまりキャリアを構成している。それぞれの役割間の相互作用は、広範囲であることもあれば、非常に小さい場合もある。また、それぞれの役割は相互に補い合うこともあれば、独立していることもある。一方、ある役割が他の役割に必要とされる時間やエネルギーを侵害する場合には役割が相互に衝突することもある。すなわち、多数の役割を持つことは、人生を豊かにもするし、ときには過度の負担を強いることにもなり、ワーク・ライフ・バランスの問題や理想と現実生活の葛藤となりうる。

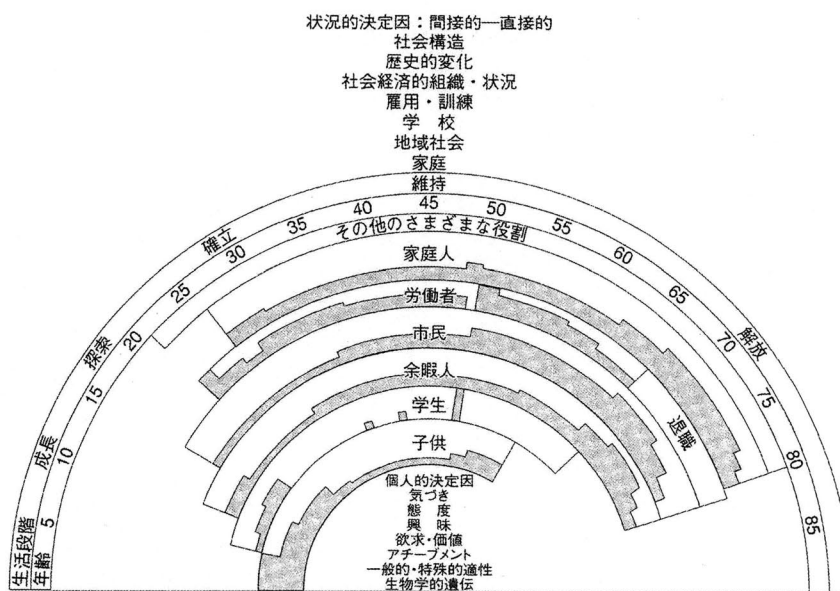


図 1-2-1 スーパーのライフ・キャリア・レインボー

(出所) Super, D.E. 1980 A life-span, life-space approach to career development. Journal of Vocational Behavior 16 p289¹¹⁾

スーパーのキャリア発達理論が提唱されて以降、人の移行に関する研究が行われている。例えば、山本多喜二は発達心理学において移行を研究¹²⁾し、移行には、発達段階における節目もあれば、人生の中で起こるさまざまな出来事を節目とすることも整理している。後者の例としては、入学、卒業、就職、結婚、退職など社会の大多数の人が経験したり、社会の構成員はある特定の時点でその移行をすることを社会全体から期待されていたり本人もそれを予期している移行と、災害や病気など予期できない不幸な出来事などの突

発的に起こる移行を説明している。

また、移行を単なる変化の場合と危機を内包している危機的移行に分類している。危機的移行とは生活の劇的な変化であり、その中にある人は激しいインパクトを受け、混乱が生じる。危機は分かれ目であることから、適切に乗り越えれば成長につながり、失敗すれば、精神や行動に問題が生じる可能性がある。適切に乗り越えるためには、生活の均衡を回復するために、認知の仕方や社会的関係のとり方、意思・感情の統制や再構成し、自己に対する意識を改めて新しく均衡のとれた生活を作り上げなければならないと山本は説明する。

つまり、若者に求められる経済的な自立に結びつく就職や進路選択は社会全体から期待され、本人もそれを予期している人生における節目としての移行であり、人によってはその移行は単なる変化の者もいれば、危機を内包している移行である者もいると考えられる。

3 自立と進路選択

スーパーは発達理論の中心に自己意識を置き、自己意識のキャリアに関する側面をキャリア自己意識とよぶ。スーパーはこのキャリア自己意識はキャリア発達をとおして形成されると考え、キャリア自己意識は自己と他者、自己と環境との相互作用の中で、修正、調整されると仮定している。また、環境だけでなく、個人の特性としての職業適合性も自己意識の形成に重要であるとする。

スーパーは職業的適合性を能力とパーソナリティの 2 つに大きく分けている。能力は適性と技量に分け、適性は、将来何ができるか、または達成できる可能性を示す。技量は、現在到達している状態を表し、現在何ができるかを示すものである。技量は学力とスキルに分けており、技量は学業においては学力、仕事においてはスキルと呼んでいる。パーソナリティは欲求、特性、価値、興味からなるものとしている。つまり、環境や個人の持つ能力やパーソナリティといった要因が自己意識やキャリア発達の規定要因と設定している。

職業は、個人が生きていくための物資を獲得するための継続的活動であり、また同時に社会存続のための役割を担う活動でもある。職業の意義について、尾高邦雄は①生計の維持、②社会的役割の実現、③個性の発揮という 3 つをあげている¹³⁾。生計の維持は、労働の分担であり、経済的価値を生み出す活動である。社会的役割の実現は、個人が社会に参加し、何らかの社会的役割をもち、その役割を遂行するために継続的に行う活動である。柳井修は、人は職業に携わることによって社会的責任を果たし、個性の発揮は、単なる生計維持のために収入を得るだけでなく、自分にふさわしい職業を選択し、個性を発揮し、自己実現をはかるといふ側面をもっているといふ¹⁴⁾。

つまり、働くことは、人間として生きていくうえで重要な価値である。働くことは、生計の維持のためにただ収入を得ているだけでなく、職をとおして人から認められること、人間関係の楽しみ、社会に対する貢献、健康など様々な欲求を充足させることができる。働くことによって自己の存在感を認識し、自己実現の欲求を満たそうとしているのである。

また、進路や職業の選択は他者とのかかわりの中で形成される自己意識によって可能になるとする。

青年期の若者は就職や進路選択を前にして、今の自分である現実の自己となりたい自分としての理想の自己との間で揺れる時期である。将来どのような学校に行きたいのか、将来どのような職業につきたいのか考えることは青年期の発達課題であり、こうして思い描かれたものが若者の夢や希望という形で現れる自己実現の欲求である。

4 自己実現とアスピレーション

若者が将来どのような学校に行きたいのかは教育アスピレーション、将来どのような職業につきたいのかは職業アスピレーションといわれる。アスピレーション¹⁵⁾は、社会学においては1960年代からのアメリカのウィスコンシン大学を中心として展開されてきた社会的地位達成の過程に関する研究により本格的に扱われ、蓄積されてきた概念である。このウィスコンシン大学でおこなわれた研究をウィスコンシン・モデルと呼ばれる。ウィスコンシン・モデルでは、個人がアスピレーションを達成していく過程が計量的手法で分析されている。また、地位達成は、個人が両親や友人・教師といった重要な他者の影響をうけつつ自らのアスピレーションにもとづいて学歴や職業などの社会的地位を達成していくととらえられている。ウィスコンシン・モデルはG.H.ミード(Mead, G.H.)などのアメリカ社会学において展開されてきた自己論を地位達成過程と階層構造の研究に接続しようとするものである。

しかし、その後、ウィスコンシン・モデルが学校による教育選抜や労働市場への参入による障壁などの構造的、制度的要因を軽視しているという批判が登場し、構造的な要因も取り込んだモデルを構築する試みがなされた。その一人にカーコフ(Kerckhoff, A.C.)がいる。カーコフは、ウィスコンシン・モデルは家族における教育アスピレーションの形成を重視する点で「社会化モデル」とし、地位達成を学習された個人の動機づけ(アスピレーション)の所産であるとみなした。「社会化モデル」は個人が主体的に社会移動をおこなうものとみる。これに対して教育選抜による地位の配分を強調する説は「配分モデル」とし、学校や企業などの社会制度による選抜の結果であるとした。「配分モデル」は個人が社会構造に拘束されているとみなしている。教育選抜や労働市場などの構造的・制度的拘束のもとで、家族における教育アスピレーションがどのようになされているのかを明らかにすることが「社会化モデル」と「配分モデル」の接合であるとした。

竹内洋は、日本の選抜システムが人々のアスピレーションを過熱させ、多くの人を学歴競争に巻き込むが、その一方で早々にその競争から撤退していく者がいることを学歴ノン・エリートのアスピレーションの冷却を明らかにしている。その中で、日本の学校が学業成績を強調する教育体制の中にあり、成績が低位の評価を受けるものは、地位不満がもたらされる可能性があるが、学校の中で同じ境遇のものとの交流によって新たなアスピレーションを設定しなおし、自足が促進されているといった2次的適応を明らかにしている。

竹内のアスピレーションの冷却論の基盤的理論には、クラーク(Clark, R. B.)の冷却論

16) がある。クラークは、コミュニティカレッジが学生に4年制大学への転入学の幻想を与えながら、大半の学生にとっては袋小路になっている状況について、学生の期待や希望にいかなる冷却が働いているのか分析し、冷却の特徴を「代替的達成」「漸次的離脱」「客観的拒否」「慰撫のエージェント」「基準の回避」の5つに分類している。「代替的達成」とは、拒否されたり失敗したりしたことに気づいた者が第二の努力のほうが自分には適切だとすることである。「漸次的離脱」とは、一連の段階を踏みながら自己評価をし、最初の目標から次第に離れていくことである。「客観的拒否」は成績などの客観的な資料によって志向を組み替えることである。「慰撫のエージェント」とは、カウンセラーが時間をかけて過熱されたアスピレーションを冷ましていくことである。「基準の回避」とは、能力について単一の尺度ではなく、能力にはいろいろあるのだとして加熱時の一元的価値基準を相対化することである。クラークは、冷却によって学生は4年制大学への転入から就職への移行を余儀なくされるか、あるいは自発的に就職へ移行するかの選択をするが、その選択は敗北や失敗ではなく、個人の能力に応じた合理的な判断であると指摘している。

現代の若者の進路や職業の選択は、職業をとおした自己実現の要求が含まれており、理想の自己を膨らませ、アスピレーションを過熱させる。しかし、全ての人々が望み通りの教育達成や地位達成をかなえることが不可能であり、どこかの時点でこの過熱されたアスピレーションは冷却されるメカニズムを伴っていると中村高康は指摘する¹⁷⁾。荻谷剛彦は、アスピレーションの冷却過程は、若者がどのような自分になるのかという自分探しと折り合いをつけながら、何にでもなれるチャンスを自ら納得しながら狭めていく過程と説明している¹⁸⁾。

現代社会の若者は、就職や進路選択において将来どのような自分になりたいかを考え、自己実現をめざすことが可能である。しかし、アスピレーションを冷却させる要因が自己実現を阻む要因となっている。

第3節 自己実現の阻害要因

1 社会階層と文化資本による阻害

自己実現を阻む要因に関しては、家庭要因である社会階層と文化資本による阻害、学校要因である学力と学校トラッキングによる阻害、社会全体の私事化という価値による阻害について研究が行われてきている。まず、家庭要因である社会階層と文化資本による阻害についてみてみる。

社会には社会的資源¹⁹⁾に関して不平等が存在する。この社会的資源を相対的に多く保有している人を「高い地位にある」とか「地位が高い」といい、逆に保有が少ない人を「低い地位にある」とか「地位が低い」という。つまり、社会的資源の保有量が示す概念が社会的地位である。人々は資源の保有に関わるさまざまな社会的地位を占めることによって異なるさまざまな社会的地位を得ることになる。社会的地位について、同等

の地位をもつ社会的位置をグループ化した概念が社会階層である。社会的・経済的な生活条件が似ているということから、類似した生活様式や意識を持つことが予測される。

日本では、1990年代末から階層による不平等や格差に関する議論が高まっている。その議論は新しい不平等の様相を見せている。近年の規制緩和と競争という動きの背景には、国の介入は個人の活動の自由を損なうものだという考え方がある。この考え方には、機会の平等が成立していることが前提である。例えば、さまざまな職業に就くチャンスが平等に開かれているものであれば、結果の不平等はしかたのないものであり、規制緩和や競争は受け入れられるものである。しかし、現代の日本社会ではこの前提が崩れており、以前の結果の不平等の議論から、新しい機会の不平等の議論が展開されている。この機会の不平等は、社会的資源を獲得・保有するチャンスの不平等であり、社会的位置を獲得する、あるいはさまざまな階層に到達するチャンスの不平等であるといえる。

この機会の平等—不平等に関して、再生産と社会移動の議論がある。ある恵まれた地位の階層があり、この階層の成員は不変ではなく、移出や引退、死亡などにより空席が生じる。その空席がその階層出身者（例えばその階層の所属する子ども）によって埋められた場合は同一階層による再生産である。これに対し、別の階層出身者、例えば別の階層に所属する人の子どもによって埋められた場合は他の階層からの社会移動である。

再生産が多ければ、その階層はある特定の階層出身者にしか機会が開かれていないことになり、機会は不平等である。この階層はある特定の同一の系統の人々によって構成され続けるので、非常に見えやすいものになるが、上昇機会のない下層の人々の地位に対する不満を増大させる。これに対して、他の階層からの社会移動が多ければその階層は別の階層の出身者にも開かれていることになり、機会は平等である。

ブルデュー (Bourdieu,P) はこの再生産に関して、家族の文化資本²⁰⁾の再生産を主張した。文化的再生産論と呼ばれるものである。文化資本とは、個人が所有する文化的資産を意味し、無意識的に獲得され蓄積されたものの言い方、感じ方、振る舞い方といった日常の実践である身体化された様態、絵画、書物、辞典、道具、機械といった具体的な形式をもって現れた資産である。文化資本の獲得、蓄積、継承のためには、経済資本の保持が重要な前提となっており、この点で、文化資本の分配構造は経済資本の分配構造と密接な関連を持っているとする。親から子へと家庭で伝達される文化を媒介としてその文化が再生産される構造が文化的再生産である。

現代日本は、どのような家庭に生まれたかによって、どのような成績か、どのような学歴を得るのか差が生じており、不平等が再生産される仕組みが働いているといえる。文字や数字などの記号を操る能力、論理的能力、物事をとらえる上で具体から抽象へと飛躍する能力などの獲得において、どのような家庭のどのような文化的環境のもとで育つのが、子どもたちの間に差異をつくりだしている。

学歴の問題を例にすれば、学歴社会の中で高い地位を得る高学歴層は文化資本などさま

ざまな資源を用いて子弟に再び高学歴を得させることができるので、学歴社会は学歴を通じて地位の再生産と階層の維持に貢献しているという。

つまり、若者が自己実現の欲求を達成しようとした場合、家庭要因といえる出身階層の経済状況や親の学歴、家族の文化が規定するものとなる。つまり、出身階層による社会的資源がすくなく、自己実現の達成のための機会をもっていなければ、自己実現の欲求の達成は困難であると考えられる。

2 学力と学校トラッキングによる阻害

ところで、文化的再生産において例に挙げた学歴だが、学歴は2つの社会的価値をもつ。1つは社会的地位の維持や上昇のための知識や技術を身につけるといった手段的価値であり、もう1つは学歴そのものが価値であり社会的尊敬の対象になるという象徴的価値である。しかし、基礎的な平等化が達成された現代社会において、学歴の手段的価値は失われたと感じる人も現れている。学歴の手段的価値は失われたと感じる人々にとって、学校は社会生活を送るために必要な知識や技術を身につける場ではあっても高い地位や良い学校を目指して懸命に勉強する場ではなくなっている。

学業成績である学力は、若者の自己実現の欲求の達成のために重要である。学力は能力評価であり、序列ができる。日本における学力は多様な意味が与えられている。荻谷剛彦は学業達成という意味はもちろんだが、若者の興味・関心、意欲や態度までを含めて学力と呼んだり、学んだ結果としての学力だけでなく、これから学んでいくための力も含めたり、さらには、目に見える学力と目に見えない学力といった区分までされるように多様なあいまいな意味が付与されていると説明している²¹⁾。

しかし、学力という言葉は多様な意味が与えられているものの、大学入試も、日常の学校教育で行われている試験も、若者が一般的に受ける学力の評価は教科目試験の結果である。つまり、若者は試験の結果によって学習の成果を問われ、学力的な自己の位置づけの認識をうえつけられている。

この学力は先に述べた家庭環境の影響を受ける。高い階層にある家庭の子どもは文化資本などさまざまな資源を用いて子どもを塾に通わせたりすることができ、学力が高まり、再び高学歴、高い階層を得させることができる。しかし、1980年代までの日本社会においては、学校で測られる業績、つまり学力は特定の集団や階層が伝統的に占有していた文化からとりだされてものではないと考えられていた。荻谷は1980年代までの日本の学歴について、学歴取得による生まれ変わりが可能であると信じられており、学校で測られる学力は特定の階層文化から中立的であるとみなされ、子どもは誰でも無限の能力、無限の可能性があるとする平等観が広まっていたと指摘する²²⁾。

教育における平等観は広まっていたが、学校格差は認められていた。高校における学校格差（高校格差）では、成績上位の高校の生徒は学校文化に対して適応的、肯定的であるのに対して、下位の高校の生徒は不適応的、否定的、ないしは逸脱的、反抗的である。有

利な立場にいる生徒たちはより有利に、不利な立場にいる生徒たちはより不利な状況が累積するという構図があった。この構図は、生徒たちの将来的な社会的・職業的地位獲得に関連づけて、一般にトラッキングシステムと呼ばれている。高校には学力に応じたトラックがあり、そのトラックは将来の社会的・職業的地位にまで続いている。中学生のときの学力・成績によってそれぞれのトラックに振り分けられた若者たちは、それ以降そのトラックを走り続けるしかないというものである。

トラッキングについては、ローゼンバウム (Rosenbaum, J.) がアメリカの公立高校の高校生を対象にして、生徒の興味や希望進路や教科選択に応じていくつかのグループ分けをした研究がある²³⁾。これは課程別のトラッキングの研究である。ローゼンバウムは生徒が学年間で課程別のトラックをどのように移動したかを分析した結果、「就職」トラックから「大学進学」トラックへの移動がほとんどないのに対し、「大学進学」トラックから「就職」トラックへの移動は少なからず存在することを明らかにしている。ローゼンバウムの分析は課程別のトラッキングであるが、実際には生徒の能力によるグループ分けと重なっていることから、学校におけるトラッキングは競争的選抜の基盤となっていることが示された。

学校トラック間には序列があり、トラック間の移動は困難で、トラックに対応した意識や行動様式などの社会化が行われるのである。つまり、若者が社会的・職業的な自己実現の欲求を達成しようとしても、所属する高校のトラックの先にある社会的・職業的地位であれば大きな問題は生じないが、トラックが違えば実現不可能なのである。

3 私事化による阻害

最後に、私事化による阻害についてみる。私事化とは社会が近代化していく過程で、共同体の求心力が弱まっていく過程である。日本社会では、共同体そのものが「公」であり規範的な存在であったが、私事化は「公」と「私」という関係の組み換えの中で、「公」重視から「私」尊重への転換がはかられた。人々の関心も「公」的領域への比重を薄め、「私」的領域へと集中している。

私事化は、決して否定的な現象ではない。私生活とその中心にある「私」を大切にし、自分らしさを求めようとする価値やライフスタイルを登場させた。また、私事化は、社会の中での個のあり方を問い直す過程であり、個人の幸福追求価値が社会の中に浸透していくにつれて、人々の権利観念への関心を高め、人権のあり方が生活の様々な領域で問題にされることになった。私事化の動向は、自由、解放、個人の幸福などの価値理念が正当性を持つだけでなく、社会に潜在していたさまざまな問題を社会問題化させたことは、私事化の功績といえる。

しかし、私事化という現象には否定的側面がある。私的なものへの関心が高まるあまり、人々は社会や集団への関わりを弱め、私生活を重視する傾向や他者への無関心を生み出している。自分を大切にするために、自己利害だけが突出し、欲望や欲求を絶えず膨張させ肥大化させている。つまり、自己実現の欲求は私事化の否定的な側面によって肥大化され

ている。

現代若者は、私事化傾向にある社会の中で、自己実現は達成すべき文化目標になっているものの、若者の自己実現という欲求を実現する手段は社会的に十分に提供されてはいない状況にある。若者が自己実現のために利用できる制度的手段は欠けているにもかかわらず目標となる自己実現ばかりが強調され、目標達成のための手段は不平等である。つまり、若者のおかれている状況はアノミーといえる。

アノミーという語はデュルケムが最初に用い、19世紀の末ごろに議論が展開されたものである。このデュルケムのアノミー概念とそこに含まれた意味内容を継承して、さらに社会の一般的次元に展開してとらえなおし、20世紀半ばにアノミー論を発展させたのがロバート・マートン (Merton.R.K) である。

米川茂信によれば、デュルケム (Durkheim,E) のアノミー概念は、社会規範がその機能の遂行に障害をきたし、その結果、個人の欲求充足行動を適切に道徳的に方向付けることができないような社会的無規範状態として定義される²⁴⁾。

マートンのアノミーは社会的アノミーである。マートンのアノミー概念は、文化的目標と制度的規範の2つを要素とする文化構造の崩壊として定義される。文化的目標を達成しようとしても制度的規範否定され、制度的規範を遵守しようとするれば、文化的目標が放棄されなければならないというように文化的目標と制度的規範が合致しておらず、不釣り合いの状況を文化構造の崩壊、つまりアノミーとした。マートンのアノミー概念は、文化的目標の過度の規範的浸透と制度的規範の機能障害から説明される。

文化的目標とは、すべての人に対し正当な対象として、提供され、かつ文化的に定められた目標、目的、関心からなり、アスピレーションの準拠枠組みを内包するものとして定義される。人はみな目標に向かって努力しなければならないとされ、文化的目標の概念の実態が富や地位をシンボルとする成功目標である。文化的目標の過剰機能とは、特定の成功目標の達成に向けての努力が全ての人に対し、一面的に制度的手段との現実の対応関係を無視して強調され、その強調される成功目標が多くの人に認知されるような状況を指す。

制度的規範は、文化的目標を達成する様式を限定し、調節し、コントロールするところの法的、社会的規範として定義される。制度的規範によって是認された目標達成手段が制度的手段である。一つには社会的に形成されてきた因襲的な行動様式ないし行動パターンがある。

文化的目標と制度的規範の根底には、目標に向かうための努力が文化的命令として規範原則となっている。この規範原則は、平等主義とともに利己的個人主義と功利的業績主義を本質としており、その機能的帰結がアノミーなのである。

マートンは、文化的目標と制度的手段のそれぞれに対する受容と拒否の二分法的区分を通して、アノミーの圧力に対する5つの個人的適応様式の類型²⁵⁾ (同調、革新、儀礼主義、逃避主義、反抗) を識別した (表 1-3-1)。まず、同調と逸脱的4類型 (革新、儀礼主義、逃避主義、反抗) に区分される。逸脱行動は、文化的目標が強調されていながらもこれを

達成すべき制度的手段が社会構造に制約されている場合の適応様式となる。

革新は、文化目標が十分に内面化されておりながらもそれに相応して制度的規範が内面化されていない場合の適応様式である。これは、制度的規範への遵守がそれほど強調されない下流階層、非常に高い経済的水準層、ビジネス階級において典型的である。

儀礼主義は、文化的目標に比べて制度的規範の内面化が過度に行われている場合の適応様式である。これは、制度的手段へのアクセスが社会構造的に制約されているにもかかわらず、制度的規範の遵守が道徳的命令として強調される下層中流階級において典型的である。

逃避主義は文化的目標と制度的規範の両者が内面化されている場合の適応様式であり、社会的無関心層のとする逸脱類型である。犯行に関しては、マートンは新興階級に見られる適応様式であるとするだけだが、文化的目標と制度的規範の両者とも十分に内面化されていない場合の適応様式である。

表 1-3-1 マートンの個人的適応様式の類型

適応様式	文化的目標	制度的手段
同調	+	+
革新	+	-
儀礼主義	-	+
逃避主義	-	-
反抗	±	±

注) + : 受容 - : 拒否 ± : 既存の目標・手段を別の目標手段で代替する。

(出所) Merton.R.K 1957 *Social Theory and Social Structure*, Free Press=森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳 1961『社会理論と社会構造』みすず書房 p129

私事化傾向にある社会では、さまざまな意思決定作業が個人に委ねられるため、人々は自らが意思決定せざるを得ない状況に置かれることになる。人々は、自分自身でリスクや被害に気づき、自分の力で対処していかなければならなくなっており、それぞれが自ら適応状況を見出して生活しなければならない。

ジョーンズ (Jones,G) とウォーレス (Wallace.C.) はこのように私事化傾向にある社会では、「シティズンシップの形成」が重要であることを主張している。ジョーンズとウォーレスは、シティズンシップを「近代国家におけるメンバーとしての個人の地位を表す用語。個人と国家の間の、権利と義務に関する契約を指す。たとえば、個人は投票や納税の義務を負い、国家は必要に応じてケアや福祉事業を供給する。」²⁶⁾ と定義している。

つまり、シティズンシップは、ある年齢に達すれば暗黙のうちに与えられる市民としての権利と責任であり、青年期は「シティズンシップへの移行」、すなわち「社会へ完全に参加する状態」へと移行する期間とみなしている。

また、ロジャー・ハート (Roger A.Hart) は「子どもの参画」の重要性を主張している。ハートは参画について定義を示してはいない。しかし、私事化した人々の価値や今日のグローバル化、競争主義というという全世界を覆う経済の流れがコミュニティを崩壊させる

と懸念し、ジョーンズとウォーレスと同様に子どもたちを市民として考え、子どもたちが地域の中で地域の人々と交流をもち活動したり、集団に所属したりしてコミュニティづくりに参画する必要性を子どもの能力の発達に関する理論から主張している。

門脇厚司は、若者の社会に関わっていかうとする力を「社会力」と呼び、「社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力」²⁷⁾と定義している。門脇は「われわれに求められているのは人間や社会への強い関心であり、社会の仕組みを解剖する能力であり、あるべき社会を考えデザインする構想力であり、何よりそうした社会を作り運営していく能力と意欲である」²⁸⁾と主張し、「社会力」がシティズンシップの概念と共通すると説明している。また、「社会力」のおおもととは、他者への関心、他者への愛着、他者への信頼感であると説明している。

このように「シティズンシップ」や「子どもの参画」「社会力」の必要性が叫ばれるのは、現代社会が私事化によりこれらを形成できにくい社会になっているからである。現代若者は、私事化による価値が浸透したため、社会とのつながりをなくしており、他者への関心、他者への愛着、他者への信頼感が希薄化しており、社会の中での自己実現を見出し実現することが困難になっているのである。

第4節 若者の自立をめぐる問題の構築

本研究において、研究対象とする若者とは、エリクソンによる青年期、ハヴィガーストによる青年期・成人前期、スーパーによる探索段階の若者である。つまり、12歳頃から25歳頃までの若者を想定している。この時期の若者の自立とは、青年期における発達課題が達成されている状態、または、達成に向けて学習がすすめられている状態である。つまり、エリクソンによる自我同一性の獲得、ハヴィガーストによる両親や他の大人からの情緒的な独立、経済的なキャリア（経歴）に備えての準備、結婚と家庭生活のための準備など、次なる成人前期に向けた準備が達成されているまたは、学習をすすめている状態といえる。

若者が自立するため、つまり発達課題を達成するためには、居場所における他者との関わりが重要である。他者とのかかわりの中で自己意識が形成され、その自己意識の形成は、青年期の発達課題の中でも中心となる職業的発達への準備において、仕事への動機づけ、集団に所属し自分の才能や業績を認めてもらいたいという社会的存在としての欲求、自己のもつ可能性を最大限に追求したい発揮したいと願う自己実現の欲求をもたらす。つまり、自己意識や自己実現の欲求が形成されることも自立であるといえる。

現代社会は、私事化の浸透により、個人の自己実現の欲求が肥大化する傾向にある。しかし、個人の自己実現の欲求は全てを満たすことはできない。社会には社会規範があり、その社会規範によって個々人の欲望や欲求は制限され、制約されるからである。今日の自己中心的な私事化が自己実現の欲求のアノミー状況をもたらし、自立できない若者を生み出していると考えられる。

自己実現は、現代社会の青年期の若者の文化目標といえるものになっている。しかし、自己実現という目標は、達成すべきとされる文化目標であるにも関わらず、その達成に利用できる制度的手段が欠けている状況にあり、目標ばかりが強調され、目標達成のための手段は不平等である。つまり、文化的目標の過剰機能が生じている。私事化傾向にある現代社会の中で、若者は自己実現の欲求を肥大化させ、また、若者に関わる大人たちも学力や学校トラッキングと呼ばれる学校間格差、出身家族の社会階層による影響などを無視して、すべての若者に対して一面的に自己実現を強調している状況にある。

荻谷剛彦が「自己実現アノミー」²⁹⁾ というように、現代若者はまさに自己実現を達成目標とするアスピレーションはアノミー状況にあるといえる。マートンによる適応様式に従って、自立できない若者といわれるニートや引きこもりは「逃避」といえる。また、自立できない若者の中には自分の思い描く生き方ができないことへの不満から社会的に認められない犯罪という形で社会への不満を爆発させる者も出てきている。これらの行動は「革新」といえる。若者はそれぞれが、アノミー状況の中でさまざまな適応をしているのである。

本研究では、日本において若者の自立が問題とされるのは、若者をとりまく教育制度や社会の経済状況、雇用状況、社会的価値などの要因が、ニートや引きこもりや不登校などの若者を生み出し、その若者の状況を自立できない若者と多くの人々が認識することによって構築された問題³⁰⁾ と考える。また、自己実現という若者の価値そのものも社会が構築した価値と考える。

そこで、若者の自立における問題を社会問題とし、社会的、制度的な要因が若者に自立を求めながらも社会的、制度的要因により自立が困難な状況にある若者、また社会的、制度的な要因が若者に求める自立が一律の尺度のため、そのルールから外れる若者が自立できない若者として問題が構築されている点について原因の究明と改善策の提示をめざす。

また、本研究では若者の自己意識に注目する。若者が自立するためには、門脇が言うように、他者への関心、他者への愛着、他者への信頼感が必要である。若者は他者とのかかわりの中で自己を確立し、自己実現の欲求がもたらされ、キャリアを形成し、自立し、市民となっていく。現代の若者が準拠集団の中で自己意識を形成し、自己実現の欲求をもって進路選択する姿を理解することにより、現代若者の自立の困難性を描き出す。そのためには、若者の対人関係とともに若者の自己意識について検討する必要がある。

<注>

- 1) Havighurst, R.J. 1972 *Developmental Tasks and Education* New York David McKay Company=児玉憲典・飯塚裕子・三島二郎訳 1997『ハヴィガーストの発達課題と教育 生涯発達と人間形成』「第5章 青年期の発達課題」p 67-124
- 2) Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society*. New York W.W.Norton. 仁科弥生訳 1997『幼児期と社会』

みすず書房を参照。

3) リースマンが 1961 年に発表した *The Lonely Crowd*. Yale (=加藤秀俊訳 1994『孤独な群衆』みすず書房)によれば、今日の人々が直面している社会は近代産業社会であり、人間の行動パターンは、歴史とともに「伝統指向型」から「内部指向型」「他人指向型」へと変わってきているという。現代は「他人指向型の社会であるという。「他人指向型」とは、他人がどのように行動しているかに照準を合わせて周囲の状況をたえず把握しながら自己の行動を決定していくタイプである。「内部指向型」は、自己の内面化された価値、たとえば富、名誉、善、成功によって行動を決定していくタイプであり、目的を成し遂げるために失敗もしながらとにかく努力する。「伝統指向型」は、その社会に伝わってきた伝統をもっとも重要な価値とし、行動を決定していく。この型は、若い者に伝統に対する服従を教え込むことによって支えられている。

4) 久世敏雄・久世妙子・長田雅喜 1980『自立心を育てる』有斐閣 p6-14 を参照。久世は発達 の 5 段階について以下のように説明している。

1. 乳児期 (0 から 1 歳)

母体からの分離に始まり、一歳前後には直立歩行ができるようになり、言語が発生する。この時期は保護者に自己の生命が委ねられている。

2. 幼児期前期 (1 から 3 歳)

子どもは括約筋のコントロールを学び、自らの身体を自律させていく。この身体的自立の完成ごろには、外界を積極的に探索するようになる。

3. 幼児期後期 (4 から 5 歳)

家庭生活の中で、性別の区別を知る。また、善悪の区別を理解するようになり、良心の発達が促される。快と不快の感情をもとに自意識が芽生え始め、自己主張をするようになる第一次反抗期の時期である。自分で服を着たり、顔や手を自分で洗えるようになるなど、日常生活での自立と自己の意識と感情を抑える自己統制ができるようになり、行動の自立を確立していく。

4. 児童期 (6 から 12 歳)

子どもの生活空間は、家庭から学校・仲間集団に拡大される。読み・書き・計算といった学習の基本的技能を初め古くからの文化遺産と現代に生きる人間として必要な知識・技能・態度を学習する。また、仲間と一緒に遊びの世界に没頭する。子どもは遊びを通して豊かな創造性と情緒を養う。この時期の子どもにとって、自己と自己以外のものの区別は重要であり、現実と非現実の分離も迫られる。これらの能力は自立性保持の能力とも言えるものであり、行動の自立を支える。

5. 思春期・青年期 (13 歳以降)

行動的自立から精神的自立が重要になる。これは、多様な自己から統一された自己になる過程である。青年は、自己とは何かを真剣に問い、自己の可能な生き方の中から、自己に適した職業を選び、男性として、女性としての社会的役割を身につけていき、自我の中にこれらを統合する。青年が職業に就き、経済的自立を果たす準備の時期といえる。また、異性と交際し、結婚のための準備の時期でもある。価値や論理の体系を学ぶとともに市民として必要な知識と態度を学ぶ時期でもある。青年は、主体的自我にもとづいて、さまざまな価値と多様な情報から自己に適した価値を

選択できるようになり、家族から独立し自立的に行動するようになる。

5) 社会化とは、「生物学的固体として生まれた人間が社会学的固体となっていく過程を意味する。個人が他者との相互行為を通して、その社会ないし集団の価値態度・技能・知識・動機などの集団的価値(文化)を習得し、その社会ないし集団の成員としてその社会ないし集団の一定の許容範囲内の思考・行動様式を形成していく過程」(住田正樹・高島秀樹・藤井美穂 1999: 15)である。社会化は、他者との相互作用をとおして進行していく。その相互作用の様式には、他者との対面的な接触となる直接的接触と、マス・メディアのような何らかの媒体をとおして他者と接触する間接的接触があり、直接的接触による相互作用の方が社会化への影響は大きい。その直接的接触には、個人が所属する家族、仲間集団、近隣集団、地域集団、学校などがある。これらの集団はそれぞれに固有の集団的価値と規範をもっており、成員がそれらを内面化して集団に適応することが個人は要求される。

6) 住田正樹・高島秀樹・藤井美穂 1999『人間の発達と社会』福村出版 p15-21

7) 住田正樹「序章子どもたちの「居場所」と対人的世界」住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会 2003 P12を参照。居場所の4つの類型は以下のとおりである。

I型 他者との共感的な関係性が安定的に形成されている社会的な場所としての居場所のタイプである。子どもが学校で親密な友人関係を形成し、その友人に信頼感や安心感を抱いて自己を再確認できるような場合、あるいは地域において形成される仲間集団に所属感覚や安心を感じることができるといった場合、子どもにとっては学校や地域での仲間集団が居場所となる。

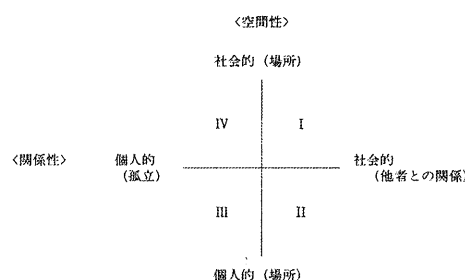


図 居場所の類型

II型 他者との共感的な関係が私的空間において形成されているというタイプの居場所である。親やきょうだいなどの家族との親密な関係が形成される家庭を居場所とする場合である。

III型 他者との関係性から切り離されて孤立した状態のまま、私的空間を居場所とするタイプ。社会生活領域において、自己を再確認させてくれるような他者の選択に失敗し、共感的な関係性を形成できないような場合、子どもは自己を否定するような他者との関係性を遮断して自室や家庭内などの私的空間に閉じこもり、そこだけを唯一の居場所とする。

IV型 他者との関係性から切り離され、孤立しているにもかかわらず社会的な場所を居場所とするタイプである。生活領域においても他者との安定的な関係性を形成することもできず、だからといって自由に振る舞えるような私的空間もないためにもかく自分の身の置き所を社会的な場に求めることになる。例えば、ゲームセンターなどの娯楽施設などに身をおくことによって、束の間の開放感と安定感に浸る。

8) Bowlby, J. 1969 Attachment and loss: Volume 1; Attachment. New York Basic Books 参照。

9) Maslow, A.H. 1954 Motivation and personality. Harper and Row 小口忠彦監訳 1975『人間性の心理

学』産業能率大学出版 p56-73

- 10) スーパーの自己意識については、多くが自己概念と訳されているが、本研究では自己意識という言葉を用いる。
- 11) スーパーが 1980 年に発表した論文 A Life-Span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior* 16 において、発達段階が説明されている。また、p289 においてライフ・キャリア・レインボーが説明され図が示されている。その図の日本語訳は渡辺三枝子編『キャリアの心理学 キャリア支援の発達のアプローチ』ナカニシヤ出版 p37 を使用する。
- 12) 山本多喜司・Wapner.S 編 1991『人生移行の発達心理学』北大路書房 p15-22
- 13) 尾高邦雄 1953『新稿職業社会学』福村出版 p10-20
- 14) 柳井修 2001『キャリア発達論 青年期のキャリア形成と進路指導の展開』ナカニシヤ出版 p183-184
- 15) アスピレーションとは、個人がより高い目標に到達しようとする欲求のことで、向上心とも呼ばれる。アスピレーションの研究は、大きく 2 つに分けることができる。1 つは、アスピレーションと行動との関係を検討するものである。たとえば、学業成績や学歴達成、職業選択や職業移動などがアスピレーションとどのように関係しているのかを解明する。もう 1 つは、アスピレーションの社会化である。個人の性別や親の学歴・職業の違いによって、あるいは所属集団によって、個人のアスピレーションがどのように形成され、変容されるのかを検討するものである（『新社会学辞典』：p9-10）。
- 16) ゴフマンが冷却という言葉が社会学用語にした人物である。ゴフマンは、信用詐欺師を例にあげ、信用詐欺のカモになった人は騙されてしまったことに自尊心が大きく傷つけられており、そのままの状態にしておく警察に訴えたり、悪い評判をたてられたりして以降商売がやりにくくなるため、詐欺仲間の一人が「運が悪かったのだ」などと言ってカモになった人の怒りを鎮め、失敗をうまく受容する状況をつくる。この自尊心の墜落を最小限にし、失敗を外傷化しないことが冷却であるとした。このゴフマンの冷却の概念を選抜問題に導入したのがクラークである。
Clark, R. B. 1960 "The Cooling Out Function in Higher Education," *American Journal of Sociology*, No. 65 p569-576
- 17) 中村高康 2002 「教育アスピレーションの過熱・冷却」中村高康・藤田武志・有田伸編『教育から見る日本と韓国 学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社 p73-90
- 18) 荻谷剛彦 2003 「選抜と進路選択」『学校臨床社会学—教育問題をどう考えるか—』日本放送出版協会 p170-188
- 19) 個人または社会システムにおける行為の客体。手段的な価値をもつ場合に資源となる。社会的資源は物的、人的、関係的、文化的資源に分けることができる。物的資源は有形の生産財や消費財一般、人的資源は人員や労働力など、関係的資源は権力や権威、権利など、文化的資源は情報や知識などが含まれる。（『新社会学辞典』：p638）
- 20) ブルデューは富を再生産するための元の資金を「資本」と呼び、この資本の考え方を経済のみならず文化的なもの、象徴的なものの概念にまで拡張し生産・蓄積・投資といった経済的な用語を用いて説明した。経済的な資本を経済資本、文化的なものの資本を文化資本としている。ブルデューは資本と用いるが、資本と資源はどちらも同じ意味で用いられている。

- 21) 荻谷剛彦・志水宏吉 2004『学力の社会学』岩波書店 p2
- 22) 荻谷剛彦 1995『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社 p202-205
- 23) Rosenbaum, J. 1976 Making Inequality: The Hidden Curriculum of High School Tracking. Wiley
- 24) 米川茂信 1991『現代社会病理学—社会問題への社会的アプローチ』学文社 p81
- 25) Merton.R.K 1957 Social Theory and Social Structure, Free Press 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳 1961『社会理論と社会構造』みすず書房 p129-145
- 26) Jones, G.・Wallace. C. 1992 Youth, Family and Citizenship, Open University Press. 宮本みち子監訳 1996『若者はなぜ大人になれないのか』新評論 p16
- 27) 門脇厚司 1999『子どもの社会力』岩波書店 p61
- 28) 門脇厚司 1999『子どもの社会力』岩波書店 p71
- 29) 荻谷剛彦 2003「若者よ、丁稚奉公から始めよう」『文芸春秋』文芸春秋 81(6) p359-365
- 30) この考え方は構築主義であり、構築主義は社会学だけでなく文学、歴史学、人類学など学際的な分野に広く影響を与えているものである。社会学において社会構成は社会構成とも訳語が与えられている。社会構成と訳語が与えられたのはバーガーとルックマンの『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』であった。バーガーとルックマンの主張は「現実とは社会的に構成されており、知識社会学は、この構成がおこなわれる過程を分析しなければならない。」というものである (Berger,P and Luckmann,T 1966 : 山口節郎訳 1977)。構築（構成）主義は、このように、社会的に構築（構成）されるものと説明されることが多い。構築主義という訳語が与えられたのは、スペクターとキツセによる『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて』であった。これは社会問題におけるラベリング理論から発展してきている。ラベリング論とは逸脱の原因を逸脱者の側にはなく「逸脱者」というラベルを恣意的に貼り付ける人々の側に求めるものである。社会問題における構築主義のアプローチは基本的な概念としてクレイム申し立てがある。クレイムとは要望や要求、主張や抗議である (Spector, M and J I Kitsuse 1977=村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳 1990)。このクレイム申し立てを通じて社会問題というレッテルを貼ることによって社会問題が構築されるとし、社会問題とは何かという問いから始められる社会問題の構築主義には厳格派とコンテクスト派の 2 つの代表的な立場がある。厳格派は社会問題の原因の究明と改善策の提示を目指すことを目的としていない。原因の帰属のされかたやその変遷を調査する。これに対して、コンテクスト派は、理論的純粋性よりも社会的有用性を選択している。コンテクスト派は、クレイム申し立て過程に焦点を当てながら、なぜ、特定の社会において、特定の歴史的時点で、この現象にかんするクレイム申し立てが行われ、社会問題が構築されたのかを問う。制度的な要因が社会問題の構築の考察に欠かせない視点であることを導く。また、社会問題の構築は言語的に構築されて始めて存在する。言語化されることによって初めて社会問題としての必要条件を満たす。この社会問題をつくりだす言語的構築も研究されている。

第2章 「自立」を強調する教育改革と若者の今日的状況

第1節 「自立」を強調する日本の政策

1 新自由主義の歴史的背景

戦後、日本は個人主義や平等主義を重要な価値観としてきた。これらの価値観の背景には「自立」した個人が設定されていた。そのため「自立」という言葉は日常においてよく用いられる。それが現在、ますます「自立」が強調されている。政策において「自立」が強調されるようになっており、その背景には現在すすめられている新自由主義的構造改革がある。新自由主義とは、個人の責任に基づく競争と市場原理を重視する考え方である。この考え方のもとに教育改革が進められている。新自由主義教育改革についてみるまえに、新自由主義が資本主義化の自由競争秩序を重んじるという点に着目し、新自由主義の歴史的背景を確認しておく。

資本主義の史的段階は3段階に分類することができる¹⁾。まず、第1段階は19世紀後半から世界大恐慌のあった1930年代までであり、初期資本主義経済の自由主義国家である。自由主義国家は、①経済政策としては絶対主義的国家規制の撤廃による自由市場・自由貿易を推進、②社会政策は未確立、③経済と社会編成のための政治的尺度は市民社会の国民・世界志向と労働者世界の地域社会志向が並存、④国家機構は、通貨通商・法と秩序・外交軍事などの小規模・限定的な官僚制を特徴とする。社会の様相は、財産と教養のあるブルジョアジーからなる市民社会の支配に貧困な労働者世界が従属する二重構造の階級社会であった。文化の様相はモダニズム文化である。

第2段階は1930年代以降1980年代までである。この段階においては、①機械制大工業の技術、②テイラー主義型の標準労働、③未熟練労働者の大量雇用によるベルトコンベア方式での生産、④産業別労働組合・団体交渉による高賃金と労働者大衆家族による大量消費、⑤国内での長期経済成長を支える国民という特徴が挙げられる。経済は、北米・西欧が基軸となる環太平洋フォード主義経済であった。そして、この経済を支えたのは、都市化、脱階級化、大衆社会化、核家族を単位とする同質的な生活様式の国民によってもたらされた「都市型個人主義社会」である。この経済と結びついて、文化の様相は大衆消費文化であり、国家は、①産業補助金と失業対策費・社会保障費など公的創出をおこなう、②社会政策は労働者大衆家族の生活水準を維持するための社会保障・医療・年金・教育・住宅などの福祉給付を中心とする、③都市と地方・農村双方に配慮した国民統合を重視する、④国家機構については大規模な中央集権的官僚制を特徴とするケインズ主義福祉国民国家である。

第3段階は1980年代以降から現在である。この段階においては、時間・空間の多様性が特徴であり、経済では、脱製造業化を推進する米英型と、重化学工業を保持しながら情

報・金融・サービス諸産業へ移行をねらうドイツ型があり、社会編成でも多文化主義の傾向と新保守主義の傾向が時間・空間によって多様に展開している。国家については、①アメリカ・イギリス・オーストラリア・ニュージーランドなどの新自由主義、②北欧の社会民主主義、③ドイツ・フランス・イタリアなどの団体協調主義、④経済成長優先主義に分かれている。文化の様相はポストモダニズム文化である。

アメリカ・イギリス・オーストラリア・ニュージーランドなどの新自由主義の思想は、ケインズ主義福祉国民国家を批判する理論として 1947 年にフリードリヒ・ハイエク、ミルトン・フリードマンらによって提唱された。以降、この思想はアメリカの大学などで成長し、1973 年にチリで社会主義政権を倒したピノシェ政権において、1979 年イギリスのサッチャー政権、1980 年アメリカのレーガン政権で政治的権力を獲得した。1980 年代は南米で、1990 年代には先進諸国で勢力を拡大し、2000 年代にはほぼ体制化した。

新自由主義では、経済政策は国内の私的所有権至上主義と市場競争原理および国際的な財・サービス・金融・労働力などの自由貿易秩序を維持し、それに必要な限りで公共政策を遂行するといういわゆる小さな政府を遂行する。また、私的所有権や市場競争などが確立する以前である領域である自然環境などや、福祉国家によって抑制されていた、公衆衛生・社会保障・医療・教育・住宅などに協力を国家介入を行い、能動的に自由市場を創出する。

日本は、資本主義の第 3 段階の前半、1980 年代から 1990 年代にかけては経済成長優先主義として資本主義の一つの型を形成していたが、1990 年代後半に世界の資本主義諸国の大きな流れであった新自由主義への転換をはかった。日本は、小泉・安部政権の構造改革に至る前 10 年ほどは国家介入を特色とした国家の体制であったが、小泉・安部政権において新自由主義によってそれまでの体制を解体し、新自由主義国家を通して、先行するアメリカやイギリスのようにグローバル化する知識集約型経済の確立を推進した。

2 政策における「自立」の強調

この小泉・阿部政権における新自由主義的構造改革以降、現代日本の社会は国民すべてに対して「自立」を強調するようになる。政策や制定された法律の中で自立支援という用語が頻繁に使用されている。特に福祉・社会保障の分野を中心に「自立」が強調されており、公的保障を削減することが方向づけられている。つまり、政策で用いられている「自立」は他人に面倒をかけないことであり、公的支援にたよることなく自己責任の下で生活を営むことをさしている²⁾。

若者に関しては、「若者自立・挑戦プラン」(若者自立・挑戦戦略会議 2003 年)、「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会報告」(内閣府 2005 年)などがあり、若者の自立支援策が打ち出されている。「若者自立・挑戦プラン」は 2003 年 6 月に内閣府・文部科学省・厚生労働省・経済産業省が合同で発表したものであるが、日本におけるほぼはじめての包括的な若年就業支援政策として注目を集め、2004 年 6 月に閣議決定された「経済財政運営と構造改革に関する基本方針 2004」においても、若者が公的支援にたよることなく

自己責任の下で生活を営んでいけるための支援の強化が重点施策として掲げられている。

この諸施策の内容は大きく分けて、①新規学卒労働市場の自由化、②若年就業を促進するための職場体験学習や試行的雇用の推進、③自発的な教育訓練の受講など生涯学習の奨励、④キャリア教育＝職業意識の啓発の強調、⑤若者に総合的な就業支援を実施するための新しい機関の設置の5つに整理することができる³⁾。若者に関する自立支援の政策においては、主として経済的な自立を求めている。

この流れの中で、若者の居場所についても自立政策の一つになっている。居場所づくりが政策として行われるようになった背景には、1980年代後半に不登校の子どもたちに対応する活動をしていた母親や支援者による「不登校の子どもたちには居場所がない」という訴えがあった。彼らは、子どもの声から居場所を提供する援助を求め、また、自ら居場所をつくる活動を展開した。

1990年初頭、不登校の子ども達の発達保障という観点から、学校にかわる場として学校外の子ども達の居場所づくりが不登校の子どもたちを支援する人々から始まったことをきっかけに、すべての子どもたちの健全な育成のために、学校における活動、また学校外における活動においても、地域における体験活動等が重視されるようになった。

そして、1992年の学校不適応対策調査研究協力者会議が出した「児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して―登校拒否問題について最終まとめ―」以降、すべての子どもたちが安心できる居場所が必要だとして体験活動などを含めた提言や施策が出された。

2004年からは、文部科学省が青少年の問題行動の深刻化や地域や家庭の教育力の低下などの緊急的課題に対応して、子ども達の居場所づくり新プラン（地域子ども教室推進事業）を開始した。これは、心豊かでたくましい子どもを社会全体で育むため、学校などを活用して、2004年から3ヵ年継続事業として子どもたちの居場所（活動拠点）を整備し、地域の大人の教育力を結集して、安全管理員・活動アドバイザーとして配置し、子どもたちの放課後や週末におけるスポーツや文化活動などの様々な体験活動や地域住民との交流活動等を支援するものである。2005年から民間団体への直接委託となった。

文部科学省はすべての子どもになぜ居場所づくりが必要なのかについて、①子どもと家庭、学校、地域を取り巻く環境の変化に伴い、子どもたちの放課後や週末の過ごし方が課題となっていること、②少年非行対策のためにも子ども同士、子どもと大人の交流ができる活動拠点が必要であること、③家庭に保護者がいても、十分なしつけが行われていないなど、家庭の教育力が低下していること、④文化活動やスポーツ活動など、子どもたちの体験活動の機会が不足しており、機会を提供する必要があること、⑤子どもを核として地域の大人が一体となった地域コミュニティの再生が必要となっていることを挙げている⁴⁾。

もちろん、すべての子どもを対象としたものではなく、不登校やフリーター、ニートのための居場所づくりも同時に進められている。不登校は、サポート相談支援の機関や学校外の居場所づくりなどが整備されている。また、フリーターやニートについては居場所づくりと銘打たれてはいないが、フリーターやニートの若者を対象とした自立支援として、

2003年6月に策定された「若者自立・挑戦プラン」に基づき、ジョブカフェの整備がすすめられている。

居場所づくりという言葉は、居場所づくりが政策として始められた当初は、若者たちの避難所、逃避場所といった消極的な意味合いで使われてきたが、現在は、自己回復の場、自己承認と自己確認の場、自己安定の場といった積極的な意味を持つようになってきている⁵⁾。

第2節 戦後日本の教育改革の変遷

教育改革においても国がすすめる新自由主義への転換の中で行われ、強力に推進されている。日本における新自由主義教育改革の起点となっているのは、臨時教育審議会（以下「臨教審」とする。）の発足である。臨教審は、明治期、戦後期に次ぐ第三の教育改革を目指すとして、当時の中曽根康弘総理大臣の直属の諮問機関として1984（昭和59）年8月に発足し、1987（昭和62）年8月までの3年間にわたって、四次にわたる答申を総理大臣に提出した。その最終答申において、「個性」「自立」「自己責任」などの発想が示された。

今次教育改革においてもっとも重要なことは、これまでの我が国の根深い病弊である画一性、硬直性、閉鎖性を打破して、個人の尊厳、個人の尊重、自由・自立、自己責任の原則、すなわち「個性重視の原則」を確立することである。この「個性重視の原則」に照らし、教育の内容・方法、制度、政策などの教育の全分野について抜本的に見直していかなければならない。

臨時教育審議会（以下臨教審） 1987年8月

また、この臨教審の報告は、教育の自由化を謳っていた。つまり、教育における規制緩和と教育サービスの提供主体の多様化、そして、教育を受ける側の選択の機会の拡大を謳ったのである。ここに、市場に基づく新自由主義の思想が示されていた。

その後の教育改革は、臨教審の最終答申を継承し、1991年には中央教育審議会（以下中教審）最終答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」が出され、そして、1996年に公表された第15期中教審第1次答申「21世紀を展望したわが国の教育のあり方について」、1997年の第2次答申では、「ゆとり」と「生きる力」「心の教育」の重要性や「新しい学力観」「総合学習」などが主要な柱となった。いわゆる「新学力観」は、学習指導要領に取り入れられ、1999年に改訂され、実施は、小中学校は2002年4月、高校は2003年4月からとなった。

この改定の基本方針は、①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること、②自ら学び、自ら考える力を育成すること、③ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着をはかり、個性を生かす教育を充実すること、④各学校が創意工夫を生かし、特色ある教育、特色ある学校づくりをすすめることであつ

た。そして、これらを具体化するために「学習内容の3割削減」「総合的な学習の時間の創設」「学校5日制の完全実施」からなる「ゆとり教育」がスタートした⁶⁾。

しかし、この「ゆとり教育」は1999年の時点で、とりわけ大学生の理科系学力の低下という視点から批判され、学力低下論争を生み、見直しを余儀なくされた。そのため、新学習指導要領の実施直前の2002年1月に「確かな学力の向上のための2002アピール—学びのすすめ—」を公表し、「発展的な学習として、学習指導要領を超える内容を教えても良い」と通達を出した。2003年12月には早くも学習指導要領を一部改定し、その法的拘束力を弱め、現場の学校の裁量を認めた。また、2007年4月には学力低下を検証するために43年ぶりに全国学力テストを実施した。

現在、公立の小中学校は「特色ある学校づくり」を目指すよう教育委員会から指導されている。これは、1998年の学習指導要領で「総合的な学習の時間」の創設とあわせ「特色ある学校づくり」が強調されたからである。

斉藤貴男は、「学校が特色づくりを進める根底には、消費者に選ばれるような学校にするという企業の論理が働いており、消費者に選ばれなければその学校はつぶれても仕方がないという市場原理がある。しかし、公立の学校がこのような体制になることは、学校に勝ち組と負け組をつくり、それぞれに通う子どもの中にもそのレッテルの意識を植え付けることになる。そして、学校の序列化が進めば、受験競争も過熱化する⁷⁾」と指摘している。つまり、これは、親や子どもの自己責任に基づく自己決定を掲げ、それを建前に、公教育の多様化によって格差の拡大を容認する方向性である。新自由主義における教育改革は指摘されている学力低下問題を生じさせただけでなく、学習意欲の階層間格差を生むことを荻谷剛彦は指摘している⁸⁾。

日本の教育改革の背景には、新自由主義を推進する国の方針というだけでなく、経済界の諸提言があった。つまり、文部科学省は経済界が求める人材像を育成するためのシステムを構築することが求められ、経済界からの要望を反映したかたちで教育改革を進めている。

戦後の文部科学省における教育改革の動き、臨教審や教課審などの答申と、経済界からの提言を整理したものが表2-2-1である。また、時代背景がわかるように社会の動向を付記した。臨教審発足の翌年1985年に、財界四団体（経済団体連合会・日本経営者団体連盟・経済同友会・日本商工会議所）の協賛で運営される日本経済調査協議会（以降、経済調）が「21世紀に向けて教育を考える」という報告書を出している。この報告書は、今の教育では、子どもたちの「天才」「能才」「異才」の能力を伸ばすことができないと当時の教育を批判したものであった。

1980年代以前は、義務教育を終えるまでにしっかりと勉強させ、たくさんの知識・技能を身につけさせて社会へ送り出して欲しいというのが経済界の一番の要求であった。当時の教育は詰め込み教育であり、それは教育の機会均等を保障することにもつながっていた。しかし、1980年前後から、日本の産業構造が大きく変わり、産業の中心が第二次産業の製

造業から第三次産業のサービス業へと移る中で、経済界が求める人間像が変化する。市場がグローバル化するにともない、国際的な競争力をつけなければならなくなった企業は、国際的に通用する個人を求めるようになった。この経済界が求める人材づくりを「21世紀に向けて教育を考える」という報告書をもって学校教育に要請したのである。この要請を受けて臨教審の最終答申は「個性」「自立」「自己責任」の発想が示された。

表 2-2-1 日本の教育改革と経済界の提言

年	国・文部科学省の動き	審議会(臨教審・中教審・教課審)などの動き	経済界の動き	社会の動向
1946			・経団連発足	
1947	・教育基本法・学校教育法公布 ・新学制による小・中学校発足 ・学習指導要領一般篇(試案)発行			
1948	・新制高校発足		・日経連発足	
1949	・文部省設置法公布(教育課程審議会の設置を規定)	・教課審設置		
1951	・児童憲章制定 ・学習指導要領一般篇(試案)改定発行			少年非行第一次ピーク 対日平和条約調印
1952	・中央教育審議会令公布 ・文部省 産業教育のモデル校を中・高校 307 校指定		・(日経連)「新教育制度の再検討に関する要望」	GHQ 占領解除
1953		・中教審発足 ・(中教審)「義務教育に関する答申」		
1954	・大学入試進学適性検査廃止 ・文部省「高等学校教育課程の改訂について」一次通達	・(中教審)「教員の政治的中立性維持に関する答申」 ・(教課審)「高校教育課程改定案答申」		
1955	・高校学習指導要領第二次改定	・(中教審)「教科書制度の改善方策について答申」 ・(教課審)「第二次答申」		
1957		・(中教審)「科学技術教育の振興方策についての答申」		
1959	・文部省「わが国の教育水準」発表			
1960	・文部省 高等学校の新学習指導要領を告示 ・文部省「高等学校生徒に対する指導体制の確立について」通達 ・文部省「高等学校生徒会の連合的な組織について」通達	・(教課審)「高等学校教育課程の改善について答申」		安保条約締結問題 高校生の政治行動への対応
1961	・文部省「公立高等学校の設置、適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律」公布(高校生急増対策法)			

	一斉学力テスト(中学2・3年生全員)			
1962	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 高等学校生徒急増対策を決定 ・工業高等専門学校発足(国立12校、公立2校、私立5校) ・文部省 「高校生急増対策と高校全入運動の可否」発表 		・日経調発足	
1963	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育法施行規則改正 ・文部省 「少年非行集団対策について」 ・文部省 「青少年非行防止に関する学校と警察との連絡強化について」 			第一次ベビーブームの高校教育における影響頂点へ
1964	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 「高校生の適性・能力・学力に関する調査報告書」の発表 			少年非行第二次ピーク
1965		<ul style="list-style-type: none"> ・(中教審)「期待される人間像」中間発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・(日経連)「後期中等教育に関する要望」 	
1966	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 公立高校の入学者選抜について通知 ・文部省 全国一斉学力調査実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・(中教審)「後期中等教育の拡充整備について」答申 		
1968	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 教育白書「わが国の私立学校」発表 			東大紛争
1969	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省「高校における政治的教養と政治活動について」指導方針を発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・(教課審)「高等学校教育課程改善の方向について」答申 		
1970	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 高等学校の学習指導要領を告示(現代化カリキュラム)①多様化②弾力化③高度化 			OEDC教育調査団来日「日本の教育政策に関する調査報告書」(OEDC教育調査団)
1971		<ul style="list-style-type: none"> ・(中教審)「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」答申 ・(全国教育研究所連盟)「義務教育改善に関する意見調査」結果発表 		
1972	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 「中学校及び高等学校の進路指導に関する実態調査」の結果(中間報告)発表 ・文部省 学習指導要領の弾力的運用通達 		<ul style="list-style-type: none"> ・(日経調)「新しい産業社会における人間形成」 	
1973		<ul style="list-style-type: none"> ・新教育課程審議会発足 		
1974	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 教課審に小・中・高教育課程の改革を諮問 	<ul style="list-style-type: none"> ・(中教審)「教育・学術・文化における国際交流について」答申 		
1975	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 「小学校、中学校および高等学校における生徒指導の充実強化について」通知 ・文部省 公私立高等学校協議会の設置を通知 	<ul style="list-style-type: none"> ・(教課審)教育課程作成の中間報告 		
1976	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 業者テストの調査結果発表 ・文部省 「学校における業者テストの取り扱い等について」業者テスト自粛 	<ul style="list-style-type: none"> ・(教課審)「教育課程の基準の改善について」答申 		

1977	<ul style="list-style-type: none"> ・大学入試センターの発足 ・文部省 「児童生徒の学校外学習活動に関する実態調査」を公表 	<ul style="list-style-type: none"> ・（都道府県教育長会協議会高校問題プロジェクトチーム）「高校教育の諸問題と改善の方向」 		学業問題での自殺増加
1978	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 新高等学校学習指導要領を告示（ゆとりのカリキュラム） ・文部省 「児童・生徒の問題行動の防止について」通知 	<ul style="list-style-type: none"> ・（中教審）「教員の資質能力の向上について」答申 		暴走族が急増
1979	<ul style="list-style-type: none"> ・国公立大学入試共通一次試験を実施 		<ul style="list-style-type: none"> ・（経済同友会）「多様化へ挑戦」 	
1980	<ul style="list-style-type: none"> ・通産省アドホックグループ 「日本の教育について一提言」 ・文部省 「高校における進路指導に関する総合的実態調査」を中間報告 ・文部省 「児童・生徒の非行防止について」通知 		<ul style="list-style-type: none"> ・（関西経済同友会）「教育改革への提言」 	
1981	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 「青少年の暴力非行防止対策について」通知 	<ul style="list-style-type: none"> ・（中教審）「生涯教育について」答申 		
1982	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 「豊かな心を育てる施策推進会議」設置 		<ul style="list-style-type: none"> ・（日経調）教育問題を取り上げる 	
1983	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 「校内暴力等児童生徒の問題行動に対する指導の徹底について」通知 	<ul style="list-style-type: none"> ・（中教審）「教科書の在り方について」答申 		校内暴力ピーク 少年非行第三次ピーク
1984	<ul style="list-style-type: none"> ・臨時教育審議会設置法公布 「荒れる教室」対策に教員重点配置を決定（文部省） ・文部省 高校入試改善通知 ・文部省 「生徒の健全育成をめぐる諸問題 登校拒否問題を中心に（指導手引書）配布 	<ul style="list-style-type: none"> ・臨時教育審議会（87年まで） ・臨時教育審議会第1回総会 		
1985	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 「児童生徒の問題行動に関する指導の充実について」通知 ・文部省 「児童生徒の問題行動に関する検討会議」発足 	<ul style="list-style-type: none"> ・（臨教審）「教育改革に関する第一次答申」を提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・（日経調）「21世紀に向けて教育を考える」報告 	いじめと教師の体罰問題化
1986		<ul style="list-style-type: none"> ・（臨教審）「生涯学習体系への移行」を主軸とした第二次答申を提出 		いじめがさらに問題化
1987	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 初の「高校中退者進路状況等調査」結果発表 ・教育改革実施本部設置 ・文部省 高校定時制・通信制教育検討会議報告書提出 	<ul style="list-style-type: none"> ・（臨教審）「教育改革に関する第三次答申」提出 ・（臨教審）「教育改革に関する第四次答申（最終答申）提出 ・（教課審） 「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」答申 		

1988	<ul style="list-style-type: none"> ・定時制、通信制高校の修学年限を3年以上とする学校教育法案を成立 	<ul style="list-style-type: none"> ・（中等教育改革の推進に関する調査研究協力者会議）「6年生中学校（仮称）の在り方と課題について」審議とりまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・経済同友会 「教育委員会」設置 	不登校が問題化
1989	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 新高校学習指導要領を告示 			連続幼女誘拐殺人事件
1990	<ul style="list-style-type: none"> ・生涯学習振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律公布 ・文部省 生涯学習審議会発足 ・国連児童権利条約が発効 ・初の大学入試センター試験が始まる 新学習指導要領の移行措置スタート 	<ul style="list-style-type: none"> ・（中教審）「生涯学習の基盤整備について」答申 		管理教育が問題化 兵庫県女子生徒門扉に挟まれ死亡
1991	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 高校教育改革推進会議発足 	<ul style="list-style-type: none"> ・（中教審）「高校教育の改革と受験競争の緩和について答申」 		
1992	<ul style="list-style-type: none"> ・月1回の学校5日制による土曜休業が4万7千校の国公立学校で開始（幼・小・中・高） 	<ul style="list-style-type: none"> ・（高校教育改革推進会議）「第一次報告」 ・（高校教育改革推進会議）「高校入試改善に関する中間まとめ」 ・（学校不適応対策調査研究協力者会議）「児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して」登校拒否問題について最終まとめ 		第二次ベビーブームピーク
1993	<ul style="list-style-type: none"> ・文部省 「高等学校の入学者選抜について」通知 ・全日制単位制高校などの高校制度改革が施行 ・文部省 高校指導要録の改定を通知 ・文部省 「新学習指導要領に基づく中学校の教育課程編成状況」公表 ・文部省 「高校中退問題の対応について」通知 	<ul style="list-style-type: none"> ・（高校教育改革推進会議）「高校入試改善に関する報告書」 ・（高校教育推進会議）第四次報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・（東京商工会議所）「わが国企業に求められる人材と今後の教育のあり方」 	
1994	<ul style="list-style-type: none"> ・児童権利条約が発効 ・総合学科発足 7校を設置 ・高校の新学習指導要領（男女家庭科共修など）が本格実施へ 	<ul style="list-style-type: none"> ・（いじめ対策緊急会議）「いじめ問題について当面緊急に対応すべき点について」 	<ul style="list-style-type: none"> ・（経団連）「新しい高等教育のあり方についての提言」 ・（東京商工会議所）「新しい高等教育のあり方についての提言～自主開発型人材の育成と複線型高等教育の構築に向けて」 	愛知県大河内清輝君いじめ自殺事件
1995	<ul style="list-style-type: none"> ・スクールカウンセラーの小・中・高校（154校）への派遣を開始 ・文部省 1994年度「学校教育と卒業後の進路に関する調査」を発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・（調査研究会議）「職業高校改革に関する報告「スペシャリスへの道」」を提出 ・（いじめ対策緊急会議）「いじめ対策緊急会議」最終報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・（日経調）「理工系大学教育の抜本的充実に向けて－創造的人材育成強化のために－」 ・（同友会）「学校から『合校』へ」 	地下鉄サリン事件

			<ul style="list-style-type: none"> ・(日経連)「新時代の日本的経営」 ・(日経連)「新時代に挑戦する大学教育と企業の対応」 	
1996	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程審議会発足 ・文部省「いじめの問題に関する総合的な取組みについて」通知 ・文部省「高校教育改革に関する進捗状況」調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・(中教審)「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について(第1次答申)」生きる力の育成とゆとりの確保へ ・(児童生徒の問題行動に関する調査研究協力者会議)「いじめの問題に関する総合的な取組みについて～今こそ、子どもたちのために我々一人一人が行動するとき～」報告書 	<ul style="list-style-type: none"> ・(経団連)「創造的な人材の育成に向けて～求められる教育改革と企業の行動」 	
1997	<ul style="list-style-type: none"> ・経済企画庁「教育経済研究会」発足 ・経済企画庁教育経済研究会「エコノミストによる教育改革への提言」 	<ul style="list-style-type: none"> ・第16期中教審「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について第2次答申」 ・(教課審)「教育課程の基準の改善の基本方向について」(中間まとめ)発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・(東京商工会議所)「人材流動化時代の企業人教育のあり方」 ・(京都経済同好会)「『教育と道徳』について考える」 ・(同友会)「『学働遊合』のすすめ」 ・(日経連)「グローバル社会に貢献する人材育成」 	神戸連続児童殺傷事件
1998	<ul style="list-style-type: none"> ・改正学校教育法成立 	<ul style="list-style-type: none"> ・(児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議)「学校の「抱え込み」から開かれた「連携」へ～問題行動への新たな対応」報告書 ・(教課審)「幼稚園・小学校・中学校・高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」答申 ・(中教審)「心の教育の在り方について、新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機」答申 ・(生涯学習審議会)「今後の地方教育行政の在り方について」答申 ・(中教審)「今後の地方教育行政の在り方について」答申 	<ul style="list-style-type: none"> ・(日経連)「『変わる企業の採用行動と人事システム』事例集～教育改革に向けての企業からのメッセージ」 	栃木県黒磯市中1生徒による教師刺殺事件
1999	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領告示 ①完全学校週5日制②総合的な学習の時間の創設③生きる力の重視 ・「21世紀日本の構想」懇談会発足 ・新指導要領告示(三割消滅、学校5日制) 	<ul style="list-style-type: none"> ・(生涯学習審議会)「生活体験・自然体験が日本の子どもたちの心をはぐくむ」答申 ・(中教審)「初等中等教育と高等教育との接続について」答申 ※キャリア教育という文言が使用される 	<ul style="list-style-type: none"> ・(東京商工会議所)「時代を担う子どもたちの健やかな成長を支援するための地域企業の協力について～教育現場の荒廃や多発する少年事件を憂えて」 ・(日経連)「エンプロイアビリティの確立をめざして『従業員自立・企業支援型』の人材育成を」 ・(同友会)「創造的科学技术開発を担う人材育成への提言」 	

2000	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育法規則改正 ※民間人校長可 ・「21世紀日本の構想」懇談会最終報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・（教課審）「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」答申 ・（高校生の就職問題に関する検討会議）「高校生の就職問題に関する検討会議報告」 	<ul style="list-style-type: none"> ・（経団連）「グローバル時代の人材育成について」 ・（京都経済同友会）「世紀末の日本と教育改革（緊急提言）」 ・（日本商工会議所）「教育改革国民会議中間報告に対する意見」 	
2001	<ul style="list-style-type: none"> ・文科省 「少年の問題行動等への対応のための総合的な取組みの推進について」通知 ・文科省 「学校教育及び社会教育における体験活動の促進について」通知 	<ul style="list-style-type: none"> ・（少年の問題行動などに関する調査研究協力者会議）『少年の問題行動などに関する調査研究協力者会議報告』 	<ul style="list-style-type: none"> ・（同友会）「学校と企業の一層の相互交流を目指して～企業経営者による教育現場への積極的な参画」 	池田小学校児童殺害事件
2002	<ul style="list-style-type: none"> ・文科相アピール「学びのすすめ」 ・完全学校週5日制開始 	<ul style="list-style-type: none"> ・（中教審）「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策などについて」答申 ・（中教審）「大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について」答申 ・（不登校問題に関する調査研究協力者会議）「今後の不登校への対応のあり方について」 	<ul style="list-style-type: none"> ・（商工会議所）「教育のあり方について～『健康な日本』を担う優れた人材の育成を目指して～」 ・（同友会）「『教育基本法を考える会』教育基本法改正に関する意見書」 ・（日経調）「21世紀の教育を考える—社会全体の教育力向上に向けて—」 ・経団連と日経連が統合し日本経団連が発足 	
2003	<ul style="list-style-type: none"> ・文科省 「不登校への対応のあり方について」通知 	<ul style="list-style-type: none"> ・（中教審）「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画のあり方について」答申 ・（中教審）「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」答申 	<ul style="list-style-type: none"> ・（同友会）「『若者が自立できる日本へ』～企業そして学校・家族・地域に何ができるのか～」 ・（日本経団連）「若年者を中心とする雇用促進・人材育成に関する共同提言」 ・（日本経団連）「若年者の職業意識・就労意識の形成・向上のために—企業ができる具体的な施策の提言—」 	長崎県幼児殺害事件（「俊君事件」） 若者自立・挑戦プラン（文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣）
2004	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな体験活動推進事業推進の地域・推進校の指定 ・子どもの居場所づくり新プラン 	<ul style="list-style-type: none"> ・（中教審）我が国の高等教育の将来像 ・（キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議）「キャリア教育推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業意識を育てるために～の骨子」 	<ul style="list-style-type: none"> ・（日本経団連）「企業の求める人材像についてのアンケート結果」 ・（日本経団連）「若者自立・挑戦プランの強化の具体化に向けて」 ・（日本経団連）「21世紀を生き抜く次世代育成のための提言—「多様性」「競争」「評価」を基本にさらなる改革の推進を—」 ・（日経調）「これからの大学を考える～21世紀知識社会・グローバル化の中で～」 	長崎県佐世保市同級生殺害事件

2005		<ul style="list-style-type: none"> ・(中教審)「新しい時代の義務教育を創造する」答申(義務教育の構造改革) ・(中教審)「我が国の高等教育の将来像」(答申) 	<ul style="list-style-type: none"> ・(日本経団連)「これからの教育の方向性に関する提言」 ・(日経調)「人間力で新たな産業ダイナミズムをニューエリートが導くパラダイムシフト」 ・(同友会)「教育の「現場力」強化に向けてー地域と学校の力を育てる教育改革の推進をー」 	
2006	<ul style="list-style-type: none"> ・文部科学大臣が「教育改革のための重点行動計画～どの子どもにも豊かな教育を～」を発表 ・文科省「いじめの問題への取組の徹底について」通知 	<ul style="list-style-type: none"> ・(キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議)「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書ー普通科におけるキャリア教育の推進ー」 	<ul style="list-style-type: none"> ・(日本経団連)「主体的なキャリア形成の必要性と支援のあり方～組織と個人の視点のマッチング～」 ・(日本経団連)「義務教育改革についての提言」 ・(同友会)「教育の視点から大学を変えるー日本のイノベーションを担う人材育成に向けてー」 	<p>いじめによる自殺が相次ぐ</p> <p>高校必修科目未履修問題</p>
2007	<ul style="list-style-type: none"> ・文科省「全国学力・学習状況調査」開始 	<ul style="list-style-type: none"> ・(中教審)「青少年の意欲を高め、心と身体の相伴った成長を促す方策について(中間まとめ)」 ・(中教審)「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」 ・(中教審)「教育基本法の改正を受けて緊急に必要なとされる教育制度の改正について」 	<ul style="list-style-type: none"> ・(日本経団連)「子育てに優しい社会づくりに向けて～地域の多様なニーズを踏まえた子育て環境整備に関する提言～」 	
2008	<ul style="list-style-type: none"> ・文科省「新しい時代に求められる青少年教育のあり方について」諮問 	<ul style="list-style-type: none"> ・(中教審)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」答申 ・(中教審)「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～地の循環型社会の構築を目指して～」 	<ul style="list-style-type: none"> ・(日本経団連)「大学・大学院改革に向けた取組み等に関する報告書」 	

注) ・中央教育審議会：中教審 ・教育課程審議会：教課審 ・臨時教育審議会：臨教審
・経済同友会：同友会 ・経済団体連合会：経団連 ・日本経営者団体連盟：日経連
・日本経済団体連合会(経団連・日経連)：日本経団連
・日本経済調査協議会：日経調 (発足当時、経済団体連合会、日本商工会議所、経済同友会、日本貿易会の経済界4団体の協賛を得て任意団体として発足)

文部科学省、日本経済団体連合会、日本経済調査協議会、経済同友会 HP(審議会情報、提言等)

樋田大二郎・耳塚寛明編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 2000

斉藤貴男『教育改革と新自由主義』子どもの未来社 2004 を参考に筆者が作成。

臨教審が解散した 1988 年には、経済界は、経済同友会の中に「教育委員会」という研究・提言のための組織を設け、以降、経済界からさまざまな提言を出している。表 2-2-1 をみると教育改革は経済界の提言の後、しかも速やかに経済界からの提言に対応するかたちで進められていることがわかる。

教育改革に影響した経済界の提言の中で、注目すべきは 1996 年に経済団体連合会(以

降、経団連)が提出した「創造的な人材の育成に向けて一求められる教育改革と企業の行動一」である。この提言では、それまでの経済社会システムは制度疲労を起こしているとし、今後求められる人材は、「主体的に行動し、自己責任の観念に富んだ、創造力あふれる人材」であると示した。これを受けて、教育改革は知識や学力ではない意思や発想、素質を重視し、主体性、独創性、自己責任が強調された。

そして、これを反映して 1996 年の中教審第一次答申は、「生きる力」を文部科学省の教育理念を示すキャッチコピーとして掲げ、教育内容の 3 割削減や総合的な学習の時間の新設などを進めたのである。「生きる力」について、1996 年第一次答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」は以下のように説明している。

これからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。「生きる力」は、全人的な力であり、幅広く様々な観点から敷衍することができる。

(出所) 中教審 1996 年第一次答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/960701e.htm

これには主体性、判断力、創造性、問題解決能力の必要性が示され、経済界が求める人材像が反映されていた。経済界も国がすすめる新自由主義のもと、新自由主義の思想をもって経営がなされていることから、経済界の提言を受けてもたらされる教育改革は新自由主義的な市場主義の考え方が強く組み込まれているといえる。

日経連は 1997 年度より会員企業を対象に企業の大卒等新卒者採用活動についてアンケート調査を実施し、経済界が求める人材について企業が採用選考時に重視する要素として明らかにしている。その要素には 24 項目(図 2-2-1)が設定されており、重視する要素の第 1 位は 2003 年度調査以降 5 年連続で「コミュニケーション能力」という結果となっている。

近年では 2006 年に時代の変化に対応した望ましい人材育成支援策のあり方や具体的な方策について検討を行い、報告書「主体的なキャリア形成の必要性と支援のあり方—組織と個人の視点のマッチング—」をまとめている。その中で「企業が求める人材像」について言及しており、現在、企業が求める人材像として最低限必要な要素は「コミュニケーション能力」、「主体性」、「環境適応能力」であること、そして、①志と心：社会の一員としての規範を備え、物事に責任を持って取り組むことのできる力、②行動力：情報の収集や交渉、調整などを通じて困難を克服しながら目標を達成する力、③知力：深く物事を探求し考え抜く力の 3 つを備えた人材を求めていることを示している⁹⁾。

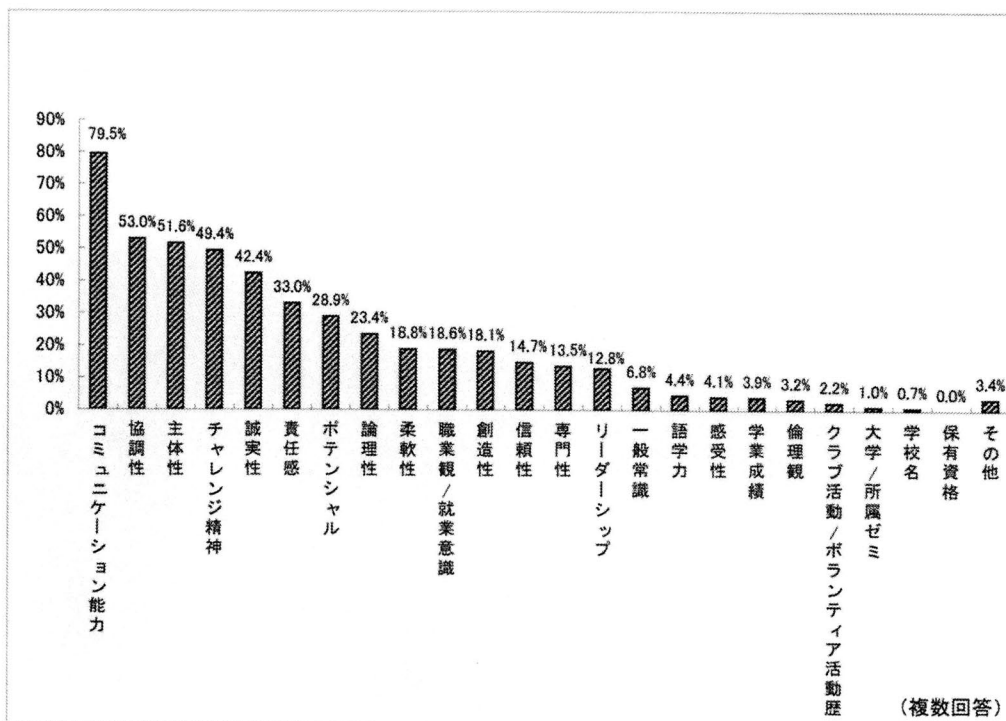


図 2-2-1 企業が新卒者採用選考時に重視する要素

(出所) 日本経済団体連合会 2008 「2007 年度新卒者採用に関するアンケート調査結果の概要」 p7

第 3 節 若者の進学・就職状況と格差

1 進学状況および進学にともなう移動と格差

次に、若者の進学状況を見てみる。文部科学省の平成 20 年度学校基本調査によると中学卒業者の進路状況 (図 2-3-1) は、平成 20 年 3 月の中学校卒業生数は 119 万 9 千人で、高等学校等 (高等学校・中等教育学校後期課程・特別支援学校高等部の本科・別科及び高等専門学校) への進学率 (通信制課程を含む) は 97.8% で過去最高である。就職率は 0.7 パーセントで前年と同率であった。中学校卒業時の進路は、卒業生数と進学率の推移をみてわかるとおり、高校進学率が高くなってきており、多くの中学生が高校に進学する。

高校卒業者の進路の状況 (図 2-3-2) は、平成 20 年 3 月の高校卒業生数が 108 万 8 千人で、大学等の高等教育機関 (大学学部、短期大学本科、大学・短期大学の通信教育部、大学・短期大学の別科、高等学校専攻科、特別支援学校高等部専攻科) への進学率 (中等教育学校 (後期課程) 卒業生を含まず) は 52.8% で過去最高である。ちなみに、大学・短期大学への入学状況となる過年度高卒者等を含む進学率は 55.3%、大学への進学率 (過年度高卒者等を含む) は 49.1% でこれらも過去最高の値となった。

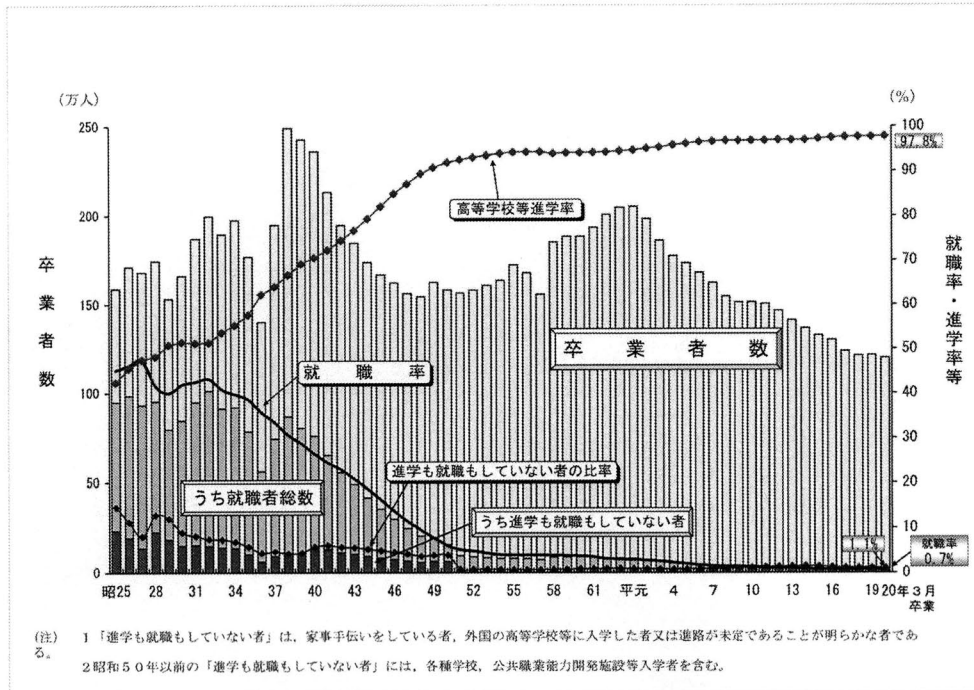


図 2-3-1 中学生の進学率・就職率の推移

(出所) 文部科学省 平成 20 年度学校基本調査速報 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08072901/index.htm

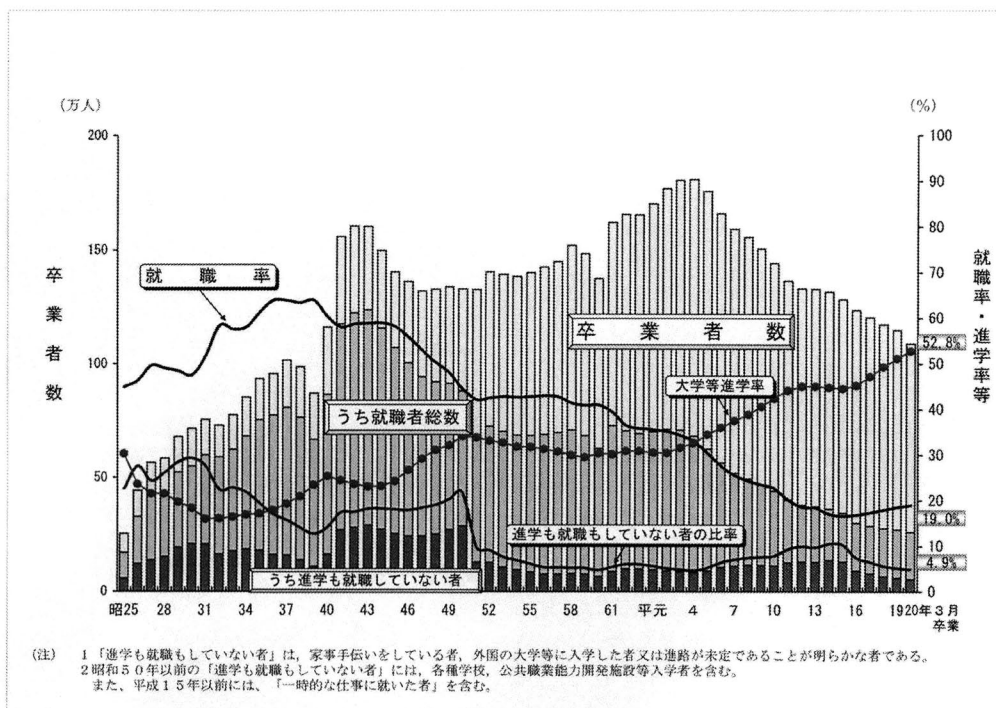


図 2-3-2 高校生の進学率・就職率の推移

(出所) 文部科学省 平成 20 年度学校基本調査速報 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08072901/index.htm

高校卒業者の就職率は19.0%で、平成16年度から調査が開始された「一時的な仕事に就いた者」(アルバイト、パート等の臨時的な収入を目的とする仕事に就いた者)は1万3千人で卒業者に占める比率は1.2%である。さらに、卒業者のうち進学も就職もしていない者(家事の手伝い、外国の大学等に入学した者、就職でも大学等へ進学や専修学校への入学等でもなく進路が未定であることが明らかな者)は5万4千人で、卒業者に占める比率は4.9%となっている。

中学校卒業者の進学率および就職率を都道府県別(表2-3-1)にみると、高等学校等進学率は新潟県が最も高く、山口県は沖縄県に次いで2番目に低い。中学卒業者の就職率は愛知県が最も高い状況にある。同様に、高校卒業者の都道府県別進学率および就職率を(表2-3-2)にみると、大学等進学率は京都府が最も高く、次いで東京都である。山口県は、全国平均を大きく下回り43.1%である。高校卒業者の就職率をみると、東北、九州地方で高く、中でも佐賀県が最も高い。高校卒業者の就職率が低いのは東京である。

表2-3-1 中学校卒業者の都道府県別進学率および就職率

区分	高等学校 等進学率 (%)	専修学校 (高等課程) 進学率(%)	就職率 (%)	区分	高等学校 等進学率 (%)	専修学校 (高等課程) 進学率(%)	就職率 (%)	区分	高等学校 等進学率 (%)	専修学校 (高等課程) 進学率(%)	就職率 (%)
北海道	98.6	0.2	0.3	福井	98.5	0.2	0.6	山口	97.0	0.3	0.6
青森	97.7	0.0	0.5	山梨	98.4	0.1	0.7	徳島	98.5	0.1	0.4
岩手	98.7	—	0.4	長野	98.5	0.0	0.3	香川	97.3	0.1	1.0
宮城	98.6	0.0	0.3	岐阜	97.9	0.1	0.9	愛媛	97.6	0.1	1.0
秋田	98.2	0.3	0.2	静岡	97.4	0.3	1.1	高知	97.5	0.4	0.6
山形	99.0	0.2	0.2	愛知	97.2	0.1	1.2	福岡	96.7	0.5	0.7
福島	97.9	0.4	0.5	三重	98.1	0.1	0.9	佐賀	97.5	0.1	0.8
茨城	98.1	0.3	0.5	滋賀	98.3	0.0	0.6	長崎	98.7	0.1	0.5
栃木	97.6	0.0	0.6	京都	98.3	0.1	0.6	熊本	98.6	0.2	0.5
群馬	97.9	0.2	0.7	大阪	97.4	0.3	0.9	大分	98.6	0.0	0.6
埼玉	98.0	0.2	0.8	兵庫	97.8	0.1	0.9	宮崎	97.9	0.2	0.6
千葉	97.8	0.2	0.6	奈良	98.1	0.6	0.4	鹿児島	98.4	0.0	0.5
東京	97.9	0.4	0.5	和歌山	98.4	0.2	0.4	沖縄	94.3	0.3	1.0
神奈川	97.6	0.5	0.6	鳥取	98.3	0.2	0.5	全国	97.8	0.2	0.7
新潟	99.1	0.0	0.2	島根	98.7	0.1	0.5	男	97.6	0.2	0.9
富山	98.6	—	0.6	岡山	97.7	0.0	0.6	女	98.1	0.2	0.4
石川	98.7	0.0	0.4	広島	97.5	0.6	0.7				

(注) 高等学校等進学率は、高等学校の通信制課程(本科)への進学者を含む。

(出所) 文部科学省 平成20年度学校基本調査速報

表 2-3-2 高校卒業者の都道府県別進学率および就職率

区分	大学等 進学率 (%)	専修学校 (専門課程) 進学率(%)	就職率 (%)	区分	大学等 進学率 (%)	専修学校 (専門課程) 進学率(%)	就職率 (%)	区分	大学等 進学率 (%)	専修学校 (専門課程) 進学率(%)	就職率 (%)
北海道	40.4	21.5	21.1	福井	56.8	14.5	21.1	山口	43.1	16.3	30.6
青森	41.7	14.5	33.3	山梨	57.6	16.7	16.0	徳島	51.9	16.7	21.4
岩手	39.0	18.7	33.0	長野	50.6	20.8	16.1	香川	51.6	16.7	17.7
宮城	44.9	14.8	25.8	岐阜	55.3	12.8	23.8	愛媛	52.5	18.1	22.7
秋田	43.1	15.7	31.2	静岡	52.6	16.4	23.9	高知	44.9	22.0	19.1
山形	45.1	18.2	28.9	愛知	58.4	11.2	20.4	福岡	51.7	13.7	18.9
福島	42.6	16.3	31.6	三重	51.1	13.2	27.2	佐賀	42.6	14.4	33.5
茨城	51.0	15.8	21.3	滋賀	56.8	15.1	18.0	長崎	41.0	16.5	32.2
栃木	52.6	15.9	22.7	京都	64.5	12.9	9.9	熊本	41.7	17.2	30.2
群馬	52.9	19.2	18.0	大阪	57.1	13.1	12.9	大分	46.1	18.2	28.7
埼玉	55.1	16.3	14.9	兵庫	59.3	12.9	15.4	宮崎	42.2	16.5	33.0
千葉	53.3	16.4	14.4	奈良	57.5	11.2	12.5	鹿児島	40.5	18.3	28.8
東京	63.8	11.1	7.5	和歌山	49.9	15.7	21.6	沖縄	36.1	23.9	16.9
神奈川	60.3	14.0	9.9	鳥取	43.6	19.7	24.7				
新潟	48.7	23.2	19.8	島根	45.9	20.2	24.6	全国	52.8	15.3	19.0
富山	54.6	15.6	20.3	岡山	51.9	14.4	22.9	男	51.4	12.0	21.8
石川	54.5	14.3	22.1	広島	61.6	13.2	15.0	女	54.3	18.8	16.1

(注) 大学等進学率は、大学・短期大学の通信教育部への進学者を含む。

(出所) 文部科学省 平成 20 年度学校基本調査速報

さらに、大学卒業者の進路状況(図 2-3-3)をみると、平成 20 年 3 月の卒業生数は 55 万 5 千人であった。大学院等(大学院研究科、大学学部、短期大学本科、大学・短期大学の専攻科、別科)への進学率は 12.1%、就職率は 69.9%、進学も就職もしていない者(家事の手伝いなど、就職でも大学院等への進学や専修学校・外国の学校等への入学等でもないことが明らかな者)は 6 万人で、卒業生に占める比率は 10.8%であった。「一時的な仕事に就いた者」は 1 万 1 千人で、卒業生に占める比率は 2.1%である。

短期大学卒業者は、平成 20 年 3 月の卒業生数は 8 万 4 千人で、大学等への進学率は 11.3%、就職率は 72.0%であった。進学も就職もしていない者は 8 千人で、卒業生に占める比率は 10.0%、「一時的な仕事に就いた者」は 3 千人で、卒業生に占める比率は 3.8%であった。

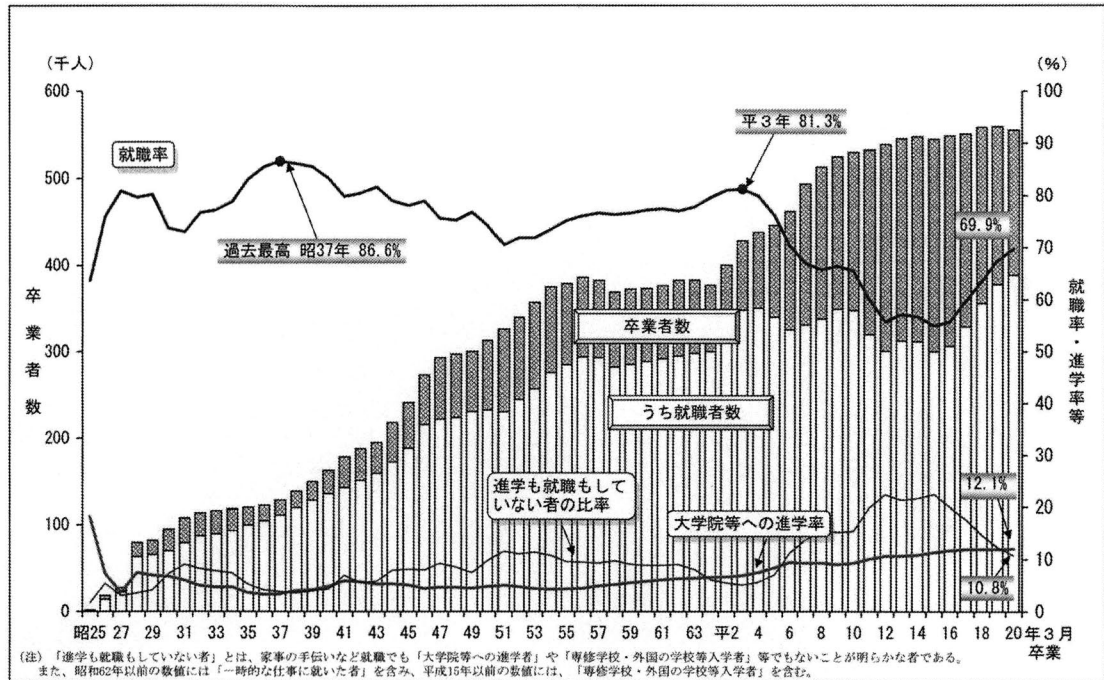


図 2-3-3 大学卒業者の進路状況

(出所) 文部科学省 平成 20 年度学校基本調査速報 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08072901/index.htm

以上、中学卒業時、高校卒業時、大学卒業時の進路状況を眺めてみると、現代の若者は、半数以上が高等教育機関に進学し、その多くが高等教育機関を卒業後に更に進学するか就職している。しかし、高等教育進学者の 1 割近くが進学も就職もしていない状況にある。そして、多くの若者が高校に進学し、若者の半数が高等教育機関に進学するようになった時代の中で、その傾向は東京と地方では違いがみられる。高校卒業者の都道府県別の進学率 (表 2-3-2) が示すように、東京は 63.8%、山口は 43.1%と大学等への進学率には大きな開きがある。

また、東京と山口の若者の就業・進学・通学状況には、人口の流入・流出と、私学の位置づけという点で大きな違いがある。まず、通学における人口の流入・流出状況をみると、東京にある小学校、中学校、高校、大学は、東京都在住の子どもたちが通うだけでなく、近隣の県に在住している子どもたちが通学しており、その数は極めて多い。東京都の昼間人口の流入・流出 (表 2-3-3) をみると、15 歳未満は 24,986 人、15 歳～19 歳は 146,562 人が他県から通学のために流入している。それに対し、東京都から近隣の県へ通学のために流出しているのは、15 歳未満で 7,847 人、15 歳～19 歳では 32,779 人である。

表 2-3-3 東京都の昼間人口の流入・流出

年齢(5歳階級)	昼間人口			流入人口			流出人口		
	1)	うち就業者	うち通学者	総数	通勤者	通学者	総数	通勤者	通学者
東京都	14 977 580	8 205 300	1 729 370	3 051 277	2 704 196	347 081	489 483	414 429	75 054
15歳未満	1 441 806	-	784 598	24 986	-	24 986	7 847	-	7 847
15～19歳	689 857	96 835	535 550	163 769	17 207	146 562	36 880	4 101	32 779
20～24歳	1 146 373	589 953	347 081	345 327	190 716	154 611	58 696	27 994	30 702
25～29歳	1 297 845	941 627	38 939	364 124	350 465	13 659	47 509	44 932	2 577
30～34歳	1 470 963	1 075 087	11 998	404 269	400 250	4 019	54 995	54 312	683
35～39歳	1 333 670	986 343	4 730	360 066	358 567	1 499	52 412	52 194	218
40～44歳	1 148 784	888 757	2 104	312 003	311 330	673	48 365	48 258	107
45～49歳	950 491	754 885	1 094	256 612	256 269	343	42 777	42 724	53
50～54歳	989 983	777 910	771	263 191	262 996	195	43 262	43 225	37
55～59歳	1 190 515	901 065	713	299 841	299 608	233	47 995	47 982	13
60～64歳	950 026	582 486	601	163 870	163 707	163	27 266	27 246	20
65歳以上	2 367 267	610 352	1 191	93 219	93 081	138	21 479	21 461	18
うち75歳以上	982 932	122 254	441	8 726	8 700	26	2 977	2 970	7

(出所) 東京都「東京都の昼間人口」(平成 17 年国勢調査結果) 第 7 表 平成 20 年 3 月 27 日公表

地方の就業・進学状況として、山口県の状況をみると、小学校、中学校、高校の通学における人口の流入・流出状況を示す統計はない。近隣他県への通学者がいることはいるが、多いとは言えない状況である。

しかし、公立学校の高校を卒業した者の大学進学時の流出状況(表 2-3-4・表 2-3-5)をみると、他県への流出が多い。山口県内への大学進学は 21.5%、短期大学進学は 41.2%で、短期大学よりも大学進学による他県流出が多い。他県への流出は、大学も短期大学も福岡県への流出が多く、近畿と関東への若者の移動を比べると、近畿への移動が関東よりも上回っている状況にある。

表 2-3-4 山口県の公立学校卒業者の大学進学者の流出状況

区分	大学進学者数	山口県	広島県	福岡県	地域ブロック別						
					九州	中国	近畿	東海	関東	その他	
国立	実数(人)	1,059 (1,001)	367 (367)	121 (88)	134 (126)	214 (225)	596 (538)	97 (90)	22 (12)	71 (53)	59 (83)
	構成比(%)	100.0 (100.0)	34.7 (36.7)	11.4 (8.8)	12.7 (12.6)	20.2 (22.5)	56.3 (53.7)	9.2 (9.0)	2.1 (1.2)	6.7 (5.3)	5.6 (8.3)
公立	実数(人)	358 (379)	210 (188)	19 (26)	60 (84)	75 (94)	239 (220)	20 (36)	5 (5)	9 (12)	10 (12)
	構成比(%)	100.0 (100.0)	58.7 (49.6)	5.3 (6.9)	16.8 (22.2)	20.9 (24.8)	66.8 (58.0)	5.6 (9.5)	1.4 (1.3)	2.5 (3.2)	2.8 (3.2)
私立	実数(人)	2,143 (2,243)	189 (226)	383 (323)	488 (496)	532 (564)	675 (650)	486 (565)	37 (50)	373 (366)	40 (48)
	構成比(%)	100.0 (100.0)	8.8 (10.1)	17.9 (14.4)	22.8 (22.1)	24.8 (25.1)	31.5 (29.0)	22.7 (25.2)	1.7 (2.2)	17.4 (16.3)	1.9 (2.1)
合計	実数(人)	3,560 (3,623)	766 (781)	523 (437)	882 (706)	821 (883)	1,510 (1,408)	603 (691)	64 (67)	453 (431)	109 (143)
	構成比(%)	100.0 (100.0)	21.5 (21.6)	14.7 (12.1)	19.2 (19.5)	23.1 (24.4)	42.4 (38.9)	16.9 (19.1)	1.8 (1.8)	12.7 (11.9)	3.1 (3.9)

表 2-3-5 山口県の公立学校卒業者の短期大学進学者の流出状況

区分	短期大学 進学者数	山口県	広島県	福岡県	地域ブロック別						
					九州	中国	近畿	東海	関東	その他	
国公立	実数(人)	44 (42)	7 (4)	12 (12)	0 (0)	11 (4)	31 (35)	0 (1)	1 (2)	1 (0)	0 (0)
	構成比(%)	100.0 (100.0)	15.9 (9.5)	27.3 (28.6)	0.0 (0.0)	25.0 (9.5)	70.5 (83.3)	0.0 (2.4)	2.3 (4.8)	2.3 (0.0)	0.0 (0.0)
私立	実数(人)	507 (595)	220 (263)	69 (78)	134 (143)	140 (147)	305 (364)	42 (56)	2 (1)	14 (25)	4 (2)
	構成比(%)	100.0 (100.0)	43.4 (44.2)	13.6 (13.1)	26.4 (24.0)	27.6 (24.7)	60.2 (61.2)	8.3 (9.4)	0.4 (0.2)	2.8 (4.2)	0.8 (0.3)
合計	実数(人)	551 (637)	227 (267)	81 (90)	134 (143)	151 (151)	336 (399)	42 (57)	3 (3)	15 (25)	4 (2)
	構成比(%)	100.0 (100.0)	41.2 (41.9)	14.7 (14.1)	24.3 (22.4)	27.4 (23.7)	61.0 (62.6)	7.6 (8.9)	0.5 (0.5)	2.7 (3.9)	0.7 (0.3)

(注1) () 内は前年調査の数値。

(注2) 短期大学進学者には、高等専門学校への編入者を含む。

(注3) 地域ブロック別の区分

九州・・・福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県
 中国・・・山口県・鳥取県・島根県・岡山県・広島県
 近畿・・・滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
 東海・・・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
 関東・・・茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県
 その他・・・「北海道」・「東北」・「北陸・甲信越」・「四国」地域

(出所) 山口県教育庁高校教育課「平成20年3月公立高等学校等(全日制・定時制)卒業者進路状況調査」

<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50300/shinro/20top.html>

次に、私学の位置づけを確認しておく。東京都の私立・公立・国立の学校の生徒数は表2-3-6、表2-3-7のとおりで、私立高校が全日制・定時制高校合わせて56.4%を占めている。東京都が全高校に占める私立高校の割合は全国1位である。全国の割合は29.7%であることを考えると東京都は極めて高い。東京都の高校教育において私立高校の位置づけは大きいといえる。

山口県の状況(表2-3-6)は、私立高校数は20校で10,261人である。学校基本調査19年度山口県版によると、公立高校は71校27,448人在籍である。また、山口県の大学等への進学者合計は5520人であり、内訳は公立高校4260人、私立高校1260人である。山口県は、大学への進学意欲のある若者は公立高校の進学校を目指す傾向にあり、公立高校の位置づけが大きい。

以上のように、若者の進学状況および進学にともなう移動は地域により状況は異なる。若者の高学歴化が言われているが、高等教育への進学率が50%を超えているのは都市であり、地方では依然として50%に届かないところが多い。若者の進学状況および進学にともなう移動には地域格差がみられる。

表 2-3-6 全国の私立学校数と児童・生徒数 (平成 19 年 5 月 1 日現在)

	高校(全・定)		中学校		小学校		幼稚園		専修学校		各種学校	
	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数	学校数	生徒数
北海道	54	31,942	15	3,658	2	74	472	63,802	164	33,483	66	5,124
青森	17	9,541	2	247	1	0	116	10,392	36	2,287	16	830
岩手	13	7,265	2	204	1	103	87	11,330	32	5,360	10	466
宮城	19	17,194	6	1,426	4	749	195	28,652	65	21,799	26	1,675
秋田	5	3,470	1	81	0	0	72	7,768	26	1,840	5	211
山形	15	10,393	1	108	0	0	94	11,742	21	1,854	7	253
福島	19	11,195	5	415	3	782	152	21,088	51	5,556	13	652
茨城	22	20,582	9	4,092	2	306	199	30,620	63	7,409	25	1,349
栃木	14	17,643	8	1,752	1	432	197	32,754	62	7,933	35	1,115
群馬	12	12,062	5	1,090	2	451	130	17,812	67	9,732	40	1,795
埼玉	47	51,048	24	8,794	5	1,685	572	113,824	106	19,483	34	3,547
千葉	54	45,718	22	11,074	8	3,252	432	86,394	103	17,463	31	836
東京	238	172,984	183	80,013	53	26,908	868	162,524	444	160,757	179	31,054
神奈川	79	66,985	63	27,278	28	10,709	683	142,896	116	24,367	19	3,241
新潟	15	12,385	4	539	0	0	113	14,052	77	16,450	11	230
富山	9	5,729	1	350	0	0	60	6,734	29	2,826	30	2,862
石川	10	7,593	3	315	1	150	67	7,966	35	4,239	26	3,868
福井	7	5,801	4	343	1	17	32	3,348	21	1,822	25	2,716
山梨	11	5,888	5	1,099	2	634	69	7,295	21	2,215	20	259
長野	16	10,204	4	696	3	155	106	13,266	54	5,412	37	2,410
岐阜	16	11,948	8	1,342	1	228	105	19,643	32	4,142	43	3,820
静岡	43	32,694	23	4,993	4	1,338	241	43,137	89	12,378	45	1,832
愛知	55	59,058	22	10,262	1	356	430	88,864	171	45,333	118	13,957
三重	14	10,946	10	2,993	2	591	61	11,294	45	3,466	82	3,703
滋賀	9	6,460	5	1,179	1	160	25	3,193	21	1,195	12	764
京都	41	28,541	25	8,715	9	3,812	162	27,447	62	15,653	59	5,914
大阪	94	81,315	61	23,755	16	7,994	443	101,279	244	80,190	63	10,363
兵庫	52	37,033	41	13,715	9	3,542	243	46,135	91	16,510	95	9,794
奈良	15	10,300	10	4,769	4	1,615	39	6,400	38	3,194	40	4,127
和歌山	8	5,002	7	2,353	2	565	46	6,643	17	1,269	53	3,362
鳥取	7	3,038	2	191	0	0	29	4,321	20	1,607	13	1,787
島根	10	4,150	3	281	0	0	17	978	17	2,248	9	496
岡山	24	15,888	9	2,326	3	1,015	34	5,595	54	9,595	18	1,148
広島	36	23,059	28	8,605	7	1,741	211	30,711	85	13,943	35	2,750
山口	20	10,261	8	1,037	1	7	143	14,939	37	4,690	56	3,408
徳島	4	1,024	2	553	2	540	13	1,658	20	1,862	16	309
香川	10	6,031	5	636	0	0	36	5,535	26	4,743	42	1,039
愛媛	12	7,849	4	818	0	0	108	15,648	47	4,685	15	411
高知	9	5,605	8	3,580	1	213	33	3,540	26	3,962	15	876
福岡	60	52,265	28	7,473	7	2,308	436	61,441	184	46,736	51	6,043
佐賀	8	6,069	5	1,335	0	0	94	8,963	29	3,097	5	21
長崎	21	12,916	14	1,466	5	753	133	13,354	43	4,632	12	338
熊本	22	15,717	7	1,292	0	0	112	14,008	52	8,698	9	1,187
大分	14	8,018	5	680	1	270	74	8,549	41	5,245	23	2,079
宮崎	15	10,071	7	1,533	1	22	118	10,159	37	4,507	10	303
鹿児島	22	14,732	10	2,124	3	558	153	16,211	48	8,971	7	124
沖縄	5	2,547	5	2,213	3	761	37	3,819	49	9,838	41	1,830
計	1,322	1,008,159	729	253,793	200	74,796	8,292	1,367,723	3,218	674,676	1,642	146,278

注1) 出典：学校基本調査
 注2) 高校は本科生のみ

(出所) 東京都生活文化スポーツ局私学部私学振興課「東京都の私学行政 平成 20 年」2000 年 3 月

表 2-3-7 東京都の私立・公立・国立の生徒数（平成 19 年 5 月 1 日現在）

区 分	高 校		中等教育 学校	中学校	小学校	幼稚園	特別支援 学校	専 修 学 校	各 種 学 校	合 計	
	全・定	通信制									
児 童 生 徒 数	私立	172,984	18,385		80,013	26,908	162,524	194	160,757	31,054	652,819
	(%)	(56.4)	(92.5)		(26.3)	(4.6)	(91.5)	(2.0)	(98.7)	(100.0)	(41.3)
	公立	130,345	1,496	1,247	221,426	556,969	14,773	9,078	1,936		937,270
	(%)	(42.5)	(7.5)	(60.9)	(72.7)	(94.7)	(8.3)	(93.4)	(1.2)		(57.9)
国立	3,481		801	3,116	4,497	378	450	239			12,962
(%)	(1.1)		(39.1)	(1.0)	(0.7)	(0.2)	(4.6)	(0.1)			(0.8)
計	306,810	19,881	2,048	304,555	588,374	177,675	9,722	162,932	31,054	1,603,051	
(%)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)	(100.0)
全国の私立学 校生徒の割合	29.7%	50.7%	40.0%	7.0%	1.0%	80.2%	0.8%	95.9%	99.3%	21.2%	

注) 高校、中等教育学校の生徒数は本科のみ

資料：学校基本調査

(出所) 東京都生活文化スポーツ局私学部私学振興課「東京都の私学行政 平成 20 年」2000 年 3 月

2 若者の就職状況と格差

現代の若者は、職業をとおして「自己実現」を達成することを目標にしているが、若者が職に就くことは、簡単なことではない。若者の雇用についてみると、1990 年代以降のバブル経済の崩壊にともなって労働市場は大きく変容した。また、長引く景気の悪化に伴い若年労働者の求人が減少した。企業も学校と同様に個人の責任に基づく競争と市場原理を重視する新自由主義の導入により派遣社員などの新しい雇用スタイルを登場させ、ますます若者の雇用状況を悪化させた。それにより、若者にとって学校を卒業した後すぐに就職することが困難な状況となり、社会とかかわることのできない若者が増えている。

日本においては、新規学卒者の求人は一般求人とは別枠で扱われている。新規学卒者の労働市場においては、1990 年代までは高卒者が過半数を占めていた。しかし、若者の労働市場は低学歴のものに大きな変化を及ぼしている。

学歴別に新規学卒者の入職率の推移(表 2-3-8)をみると、大学卒業者の増加が著しく、高校卒業者は減少している。続いて、新規学卒者の求人状況についてみる。まず高校新卒者(図 2-3-4)では、求人数は平成 4 年をピークとして以降 10 年ちかく減少傾向にあった。平成 18 年頃からわずかだが増加傾向に転じている。少子化の影響もあり、求人数が減少していることもあり、求人倍率も増加傾向にあるが、内定率も増加傾向にある。

表 2-3-8 学歴別 新規学卒者の入職率

		(%)																
区分		平成3年	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
計	学歴計	(1,132.6)	(1,220.3)	(1,093.4)	(1,003.9)	(1,043.9)	(1,090.4)	(1,087.1)	(952.5)	(1,036.0)	(981.9)	(972.4)	(893.7)	(916.0)	(851.1)	(1,122.2)	(995.7)	
	中学卒	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
	高校卒	4.1	4.1	2.2	3.2	2.6	2.3	3.7	3.0	4.7	4.5	6.0	3.5	4.6	1.8	6.6	8.1	
	専修卒	51.7	49.6	47.1	47.1	39.1	37.9	35.1	37.3	34.7	33.3	31.9	33.8	37.6	33.1	33.3	31.0	
	高専・短大卒	·	·	·	·	·	15.9	14.8	15.1	12.8	14.5	15.2	14.7	12.2	14.4	14.4	12.0	
	大卒	19.7	23.8	22.8	23.4	27.2	14.7	14.8	12.4	12.9	13.3	10.9	11.2	11.1	10.4	10.2	7.8	
男	学歴計	(560.5)	(582.7)	(503.1)	(513.7)	(544.0)	(563.4)	(531.9)	(480.0)	(556.5)	(520.6)	(486.3)	(452.0)	(430.7)	(439.5)	(541.1)	(541.3)	
	中学卒	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
	高校卒	5.7	6.2	2.8	4.0	3.2	2.5	2.3	2.9	4.1	4.8	4.8	2.8	3.3	1.9	6.3	8.4	
	専修卒	51.0	46.6	43.4	46.8	36.1	38.0	35.1	36.7	33.9	33.2	31.7	33.1	34.6	35.4	34.4	29.6	
	高専・短大卒	·	·	·	·	·	15.5	14.5	16.1	13.2	13.9	14.2	15.0	12.6	14.3	12.8	13.0	
	大卒	6.8	12.3	9.5	11.2	16.2	3.2	5.9	3.8	2.8	6.9	4.6	4.8	4.3	4.4	3.5	3.2	
女	学歴計	(572.0)	(637.6)	(590.2)	(490.2)	(499.9)	(507.0)	(555.2)	(472.5)	(479.5)	(461.4)	(486.1)	(441.7)	(485.3)	(411.5)	(581.1)	(454.4)	
	中学卒	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
	高校卒	2.4	2.1	1.7	2.4	1.9	2.1	5.1	3.0	5.5	4.1	7.1	4.1	5.8	1.6	6.8	7.7	
	専修卒	52.3	52.2	50.3	47.4	42.3	37.8	35.0	37.9	35.7	33.5	32.0	34.5	40.2	30.7	32.2	32.8	
	高専・短大卒	·	·	·	·	·	16.3	15.1	14.1	12.3	15.3	16.1	14.5	11.8	14.5	15.8	10.7	
	大卒	32.3	34.3	34.1	36.1	39.2	27.6	23.3	21.1	24.6	20.5	17.2	17.7	17.2	16.8	16.4	13.2	
大卒	12.8	11.4	14.0	14.0	16.5	16.3	21.5	23.9	21.8	26.6	27.6	29.2	25.0	36.4	28.7	35.5		

注 1) ()内は入職者数(単位:千人)を示す。
 2)平成8年より専修学校(専門課程)と高専・短大を分離して調査している。
 3)平成16年から新産業分類で「教育,学習支援業」を含む。

(出所)厚生労働省 雇用動向調査(時系列表)

http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/kouhyo/indexkr_14_1.html

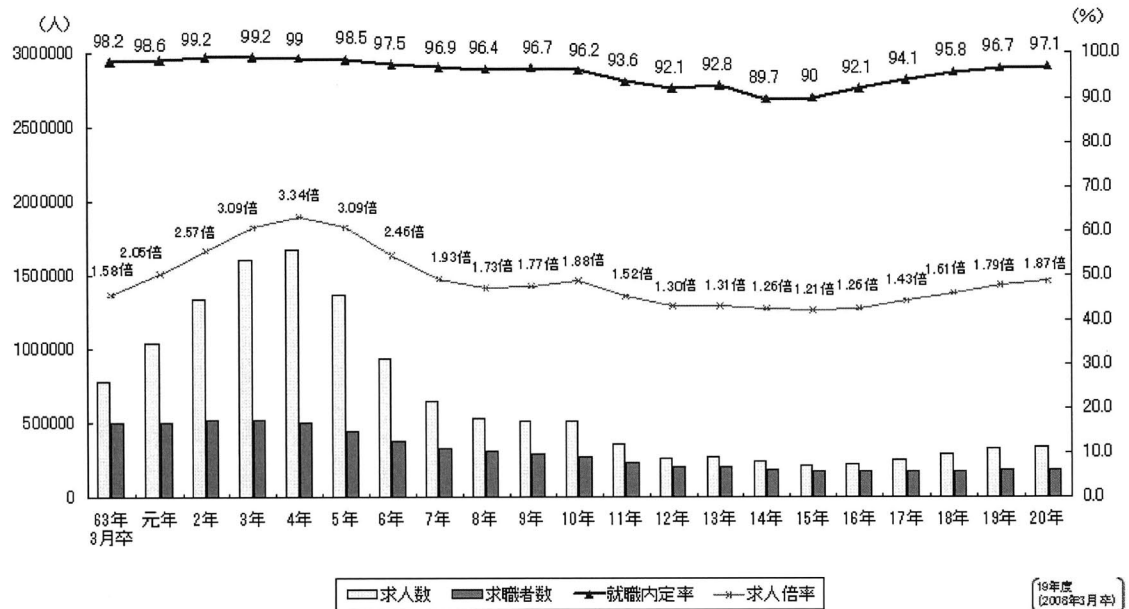


図 2-3-4 高校新卒者の求人倍率の推移

(出所)厚生労働省 「平成19年度高校・中学新卒者の就職内定状況等(平成20年3月末現在)について」 <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/05/h0516-2.html>

大学新卒者（図 2-3-5）では、求人数は 1991 年（平成 3 年）をピークとして急激に減少し、1998（平成 10）年をピークとして 3 年ほど増加したが、2000（平成 12 年）に再び減少し、以降徐々に求人総数は増加している。2007（平成 19 年）には平成 3 年のピーク時の状況にまで回復し、2008（平成 20）年には、さらに求人数は増加し、最高水準を更新した。民間企業への就職希望者数は、1998 年頃から 45 万人程度がつついており、求人総数が増加したことに伴い、求人倍率は 2005（平成 17）年以降増加している。

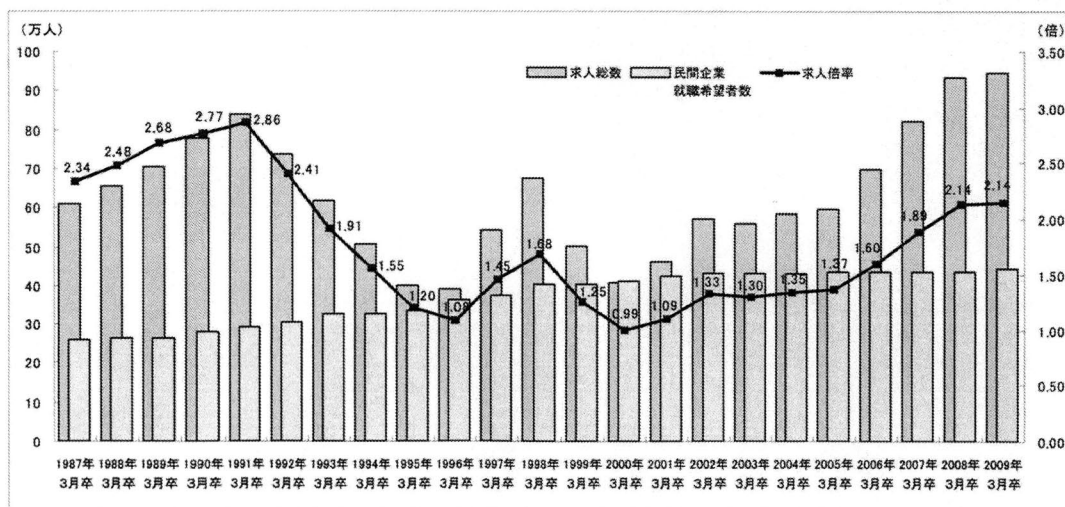


図 2-3-5 大学新卒者の求人倍率の推移

(出所) リクルートワークス研究所 「第 25 回ワークス大卒求人倍率調査 2009 年卒」 p3

これら 2 つの図からわかるように、1991 年以降の大学新卒者の求人数、高校新卒者数の求人数の急激に減少している。理由はバブル経済の崩壊によるものであるが、小杉礼子はその理由をバブル崩壊によるものだけではないと指摘する。小杉は高校生を採用したことのある都内の企業を対象として行った調査における採用中止の理由の結果が、「経営環境の悪化」48%、次いで「専修学校卒・短大卒・大卒の各学卒が該当職務を代替して充当」42%、「業務の高度化」20%、「該当業務を非正規従業員に移行」19%、「応募者の質の低下」17%であったことに注目し、景気が回復しても求人数が復帰する可能性が低いことを指摘している。それは、学歴の代替や非正規社員重視の採用管理への転換は、景気が回復しても戻らない要因であるからである。また、学歴代替が起こるのは企業に高校卒業者の質的低下の認識があるため、高卒者への評価の低下が回復することは難しいとみている¹⁰⁾。

次に、地域別の若者の就職率をみってみる。表 2-3-1 の中学校卒業者の都道府県別進学率および就職率をみると、東京の就職率は 0.5%、山口の就職率は 0.6%であり、中学卒業者の就職率が高い県でも 1.2%（愛知県）である。しかし、表 2-3-2 の高校卒業者の都道府県別進学率および就職率では、東京は 7.5%であるのに対し山口は 30.6%である。東北や九州地方で高校卒業者の就職率が 30%を超えているところが多い。以上のことから、若者の

就職状況は学歴による格差、地域による格差が生じている。

3. 学校における進路指導

学校教育における進路選択は、学校トラッキングとの関連がある。高校のトラッキング構造が完成した過程を確認しておく。戦後、新制高等学校（高校）が 1948 年に発足し、1947 年に制定された「学校教育法」において、高校を卒業した者は大学に入学する資格を持つことになった。1951 年には産業教育振興法で中堅技術者の用例を目的として職業科が整備された。1956 年の学習指導要領から類型選択・学年制の導入によって、進学準備を目的とする普通科高校、職業科目やその他の専門科目を併習する普通科高校、職業科単独高校の 3 つのタイプの高校がつけられた。

高度経済成長期に入ると、第一次ベビーブーム世代が高校進学適齢期を迎えたこともあって、高校進学率は 1951 年には 45.6%であったが、1965 年には 70.7%、1974 年には 90%を超えるという高校教育の準義務教育化が急激に進んだ。しかし、職業科の人気は落ち、志願倍率は普通科よりも低下した。それは、1962 年に高等専門学校制度が発足し、中堅技能者養成は一つ上の学校段階に移されたことに影響する。また、この時期に家計所得が伸びたことを背景に、大学進学率が上昇した。大学進学実績のある普通科高校への人気が高まり、学校間格差が生み出され拡大していった。

こうして大学進学を目指した高校選択が始まり、中学校の進路指導では、自校内に蓄積された進学実績データをもとにして面談をし、生徒が合格することが確実な受験校を選択させることが重要な進路指導となった。この中学校の偏差値による進路指導の手法は、全国の進路指導担当者に広まり、やがて業者テストから算出される偏差値を利用した進路指導へと発展していった¹¹⁾。高校のランクがつけられ、生徒は偏差値序列の枠組みの中で、高校も次なる進路先への指導が学校主導のもと学業成績に基づいて行われ、生徒に努力することを強く求める受験指導体制が整ったのである。

ところが、1980 年代ごろから不登校や高校中退者の増加が問題となり、受験指導への批判が高まった。そこに、近年の一連の教育改革が始まり、その流れの中で高校の進路指導の在り方も議論された。高校の進路指導は高校生の進路選択や決定の在り方、進路選択に必要と考えられる態度や能力の育成をはかることを目的とした「在り方生き方指導」へと転換された。

現在、進路指導に関する研究はキャリア教育研究として発展している。進路指導に関する研究の学会である「日本進路指導学会」は、2005 年 4 月より「日本キャリア教育学会」に改称している。これは、高校における進路指導の位置づけの変化によるものでもある。

進路指導は、1957 年の中教審答申「科学技術教育の振興方策について」の中で、「職業指導」にかえて始めて使用された。この答申を受け、学習指導要領でも学校で行う指導は「進路の指導」となった。戦後から 1950 年代前半は、高校において職業科が整備された時代である。この時代においては、社会の要請に応えるかたちでの職業的知識・技能の教

育と追う卒業後の就職の指導が行われていた。それが、1956年の学習指導要領から進学準備を目的とする普通科高校や職業科目やその他の専門科目を併習する普通科高校、職業科単独高校が作られたことにより、進路指導も「学校卒業時時期の進学・就職指導」から「将来の進路を選択する能力を養う」¹²⁾ ことへ指導の目標が移行した。

その後、第一次ベビーブーム世代が高校進学適齢期を迎えたこともあり、高校進学率が上昇した。1977年の文部省の「中学校・高等学校進路指導手引き―進路指導主事編」では、学校における進路指導を「進路に関心を持たせ、進路の世界への知見を広め、進路の計画をし、実現をはかるという一連のプロセスに対して、指導・援助する活動である」¹³⁾ とした。学習指導要領（1978年）では、進路指導は学校の教育活動全体を通じて計画的・組織的に行うことが強調され、学校教育における進路指導の位置づけは一層明確になった。時代は大学受験競争が激化しており、進路指導は、受験指導、出口指導、偏差値輪切りの指導が行われることになる。

しかし、1980年代に受験指導、出口指導、偏差値輪切りの進路指導体制は批判されるようになる。臨教審第一次答申（1985年）においても学歴偏重の社会的風潮の中で、親・教師・子どもも偏差値偏重、知識偏重の教育に巻き込まれていることが指摘されていた。

進路指導は、偏差値偏重の教育に対して「生き方」指導が指摘された政策的議論、中教審答申「生涯教育について」（1981年）、中教審「教育内容等小委員会審議経過報告」（1983年）、臨教審「教育改革に関する第二次答申」（1986年）、教課審「幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について答申」（1987年）などをうけて、在り方生き方指導へと転換することになる¹⁴⁾。

新自由主義の教育改革において登場した「ゆとり教育」「個性化」「多様化」「生きる力」などをキーワードとする教育目標が進路指導にも持ち込まれ、進路指導における在り方生き方指導は学校教育における重要なテーマとなった。

中教審答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」（1991年）では、高校教育改革において、「偏差値偏重から個性尊重、人間性重視へ」が強調された。文部省通知「我が国の文教政策」（1996年）においても、今後の進路指導にあつては学校・教師主導の指導ではなく、生徒自身の主体的な進路選択を支援する考え方や方向性が示されている。教育改革における社会の変化を背景に進路指導は生徒の個性や人間性を基盤とした自己選択、自己決定、「自己実現」に必要な能力や態度の育成に重点を置く指導へと移行した。

近年、進路指導はキャリア教育へと変更されつつある。このキャリア教育は高校だけでなく、幼稚園段階から大学にわたって必要性がさげばれ実施されている。日本においては1999年12月の中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の中で初めて「キャリア教育」という言葉が正式に使われた。

キャリア教育が必要になった背景として、加澤恒雄は次の2点を指摘している。1つは、学校から社会へのスムーズな移行を果たすために必要な学習や準備が不十分であり、学校教育における進路指導が十分にその機能を果たしていないこと、さらには社会の変化が激

しく、また、雇用状況が悪化しており、学校教育の対応が困難な状況になっていることである。

もう1つは、未来への準備の仕方や内容を適宜に変えなければならないということである。「激変する社会」、「選択の自己責任の増大」するような状況の中で労働や職業が個人にとって持つ意味の重要性をいかに認識するかということがこれからの人間の生き方にとってきわめて大切になっていることである。つまり、働き方と生き方を自己責任において選択・決定する能力の育成の重要性がますます高まっているという¹⁵⁾。

キャリア教育の背景は、現在進められている在り方生き方指導としての進路指導の背景と同様であり、働き方や生き方を選択し、決定するために取得するためのスキルを幼稚園段階から養成しようとするものであり、現在の進路指導と同義といえる¹⁶⁾。

第4節 若者の今日的状況

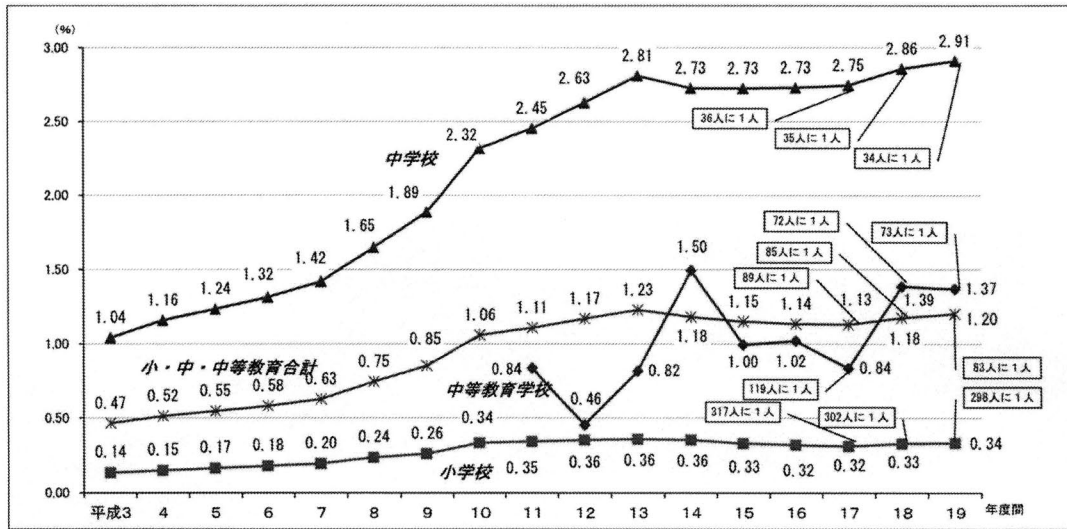
現在、小中学生、高校生の頃に不登校になり、そのまま年齢を重ねてひきこもりの状況にある若者、教育を受けず、職にも就かず、職業訓練も受けずにいるニートといわれる若者の増加、さらに、仕事に責任を伴わない、また生活の保障のないフリーターの若者も増加が指摘されている。「自立」できない若者が実際にどのくらい存在しているのだろうか。

不登校の状況は、文部科学省が毎年行っている学校基本調査における長期欠席者（30日以上欠席者）のうち、「不登校」を理由とする児童生徒数として把握されている。平成19年度の不登校児童生徒数は129,000人（前年度より2000人増加、対前年度比1.9%増）であった。内訳は、小学生24,000人（前年度より101人増加、対前年度比0.4%増）、中学生105,000人（前年度より2000人増加、対前年度比2.2%増）、中等教育学校131人（前年度より23人増加、対前年度比21.3%増）である。

全児童・生徒数に占める不登校の比率（図2-4-1）をみると、平成19年度の小・中学生合わせた不登校の比率は1.20で、83人に1人という計算である。不登校の比率の推移は、小学生は平成3年と比較して大きな変動をみることはできないが、中学生は3倍近くに増加している。

ひきこもりの数については公的な実態の把握はなく、さまざまな機関・団体でそれぞれの手法における推計が行われている。例えば、NPO法人全国引きこもりKHJ親の会は、2000年に文部科学省の学校基本調査の不登校児童生徒数20年分のデータにもとづいて推計し、その値をホームページ上に掲載している。その推計値は160万人である。

また、東京都はひきこもりの若者への効果的な支援策を講じるための基礎資料を得るため「若年者自立支援調査研究」に取り組んでいる。その調査研究の中でひきこもりの実態調査を実施し、2008年に結果を発表した。アンケート調査の有効回答者1,388名中10名（0.72%）が、ひきこもり群と判断されたことにもとづいて、都内のひきこもり数を25,000人と発表している。この結果から、全国のひきこもり数は100万人を超えるとみている。

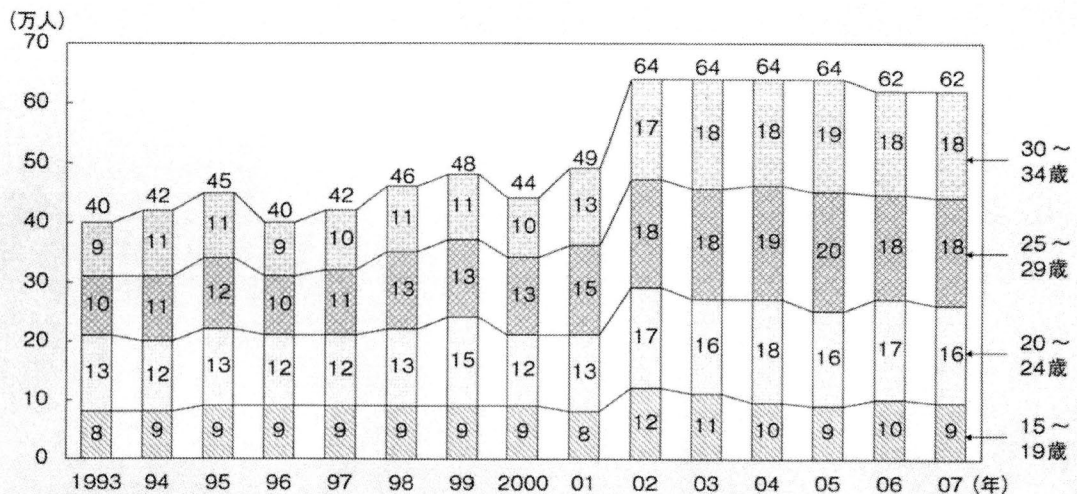


小学校、中学校、中等教育学校（前期課程）の理由別長期欠席児童生徒数（30日以上）

2-4-1 全児童・生徒数に占める「不登校」の比率

(出所) 文部科学省 平成20年度学校基本調査速報

ニートと呼ばれる若年無業者（15～34歳の非労働力人口のうち、家事も通学もしていない者）の状況については、厚生労働省が総務省の労働力調査をもとに労働経済白書において発表している（図2-4-2）。これをみると、2007年は62万人と前年と同水準となった。ニートは横ばいの状況にある。年齢別にみると25歳から34歳までが半数以上を占めている。統計は34歳までしか把握されていないが、35歳以上のニートが増加していると考えられる。



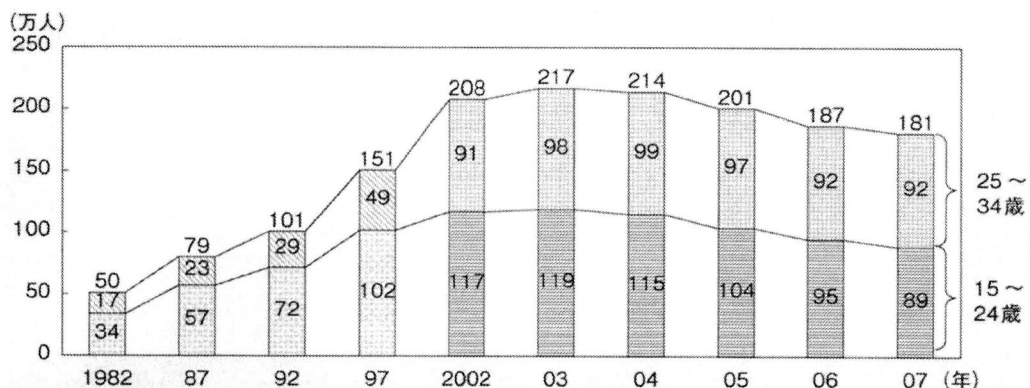
資料出所 総務省統計局「労働力調査」

(注) 若年無業者について、年齢を15～34歳に限定し、非労働力人口のうち、家事も通学もしていない者として集計。

図2-4-2 ニートの推移

(出所) 厚生労働省 労働経済白書20年版

フリーターについても厚生労働省が総務庁統計局の「就業構造基本調査」や「労働力調査」をもとに労働経済白書において発表している（図 2-4-3）。フリーターは 2002 年までは年齢は 15 歳～34 歳と限定され、①現在就業している者については勤め先における呼称が「アルバイト」または「パート」である雇用者で、男性については継続就業年数が 1～5 年未満の者、女性については未婚で仕事を主にしている者とし、②現在無業の者については家事も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事希望する者と定義されていた。



資料出所 1982年、87年、92年、97年については「平成17年版 労働経済の分析」より転記。2002年以降については、総務省統計局「労働力調査（詳細集計）」

- (注) 1) 1982年、87年、92年、97年については、フリーターを、年齢は15～34歳と限定し、①現在就業している者については勤め先における呼称が「アルバイト」又は「パート」である雇用者で、男性については継続就業年数が1～5年未満の者、女性については未婚で仕事を主にしている者とし、②現在無業の者については家事も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事希望する者と定義し、集計している。
- 2) 2002年以降については、フリーターを、年齢15～34歳層、卒業者に限定することで在学者を除く点を明確化し、女性については未婚の者とし、さらに、①現在就業している者については勤め先における呼称が「アルバイト」又は「パート」である雇用者で、②現在無業の者については家事も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事希望する者と定義し、集計している。

図 2-4-3 年齢階級別フリーター数の推移

(出所) 厚生労働省 労働経済白書 20年版

2002年以降は、在学者を除く点を明確にするため、男性は卒業生、女性は卒業生で未婚の者のうち、①雇用者のうち勤め先における呼称が「アルバイト」又は「パート」である者、②完全失業者のうち探している仕事の形態が「パート・アルバイト」の者、③非労働力人口のうち希望する仕事の形態が「パート・アルバイト」で家事も通学も就業内定もしていない「その他」の者と定義している。フリーターの定義が変わったことにより、実際の推移を正確に把握することはできないが、フリーターの増加は読み取れる。2004年から2007年は景気回復に伴ってフリーターは減少傾向にある。これらの「自立」できない若者として統計上で把握された若者の他にも、その実態把握からこぼれた若者、予備軍となる若者も存在すると考えられる。

「自立」できない若者という問題は、データで見れば一部の若者であるが、この問題は

一部の若者の問題だけでなく若者全体の問題でもある。それは、問題の背景に近年の教育改革と日本社会の産業における職業構造があるからである。

近年の教育改革では、個性化を強く求める新自由主義の教育観があり、憲法や教育基本法にいう自由と平等に代えて「主体的選択＝自己責任」と「多様化＝選別」の論理を学校教育にもち込んだ。1980年代以前は、義務教育を終えるまでにしっかりと勉強させ、たくさん知識・技能を身につけさせる詰め込み教育であった。また、学校は家庭に代わって社会化機能を担い、生活面に関しても厳しく指導する管理教育が行われていた。管理教育のもとで子どもたちの不登校やいじめの問題が増加していた。

この管理教育への反省から、新自由主義の教育観を背景に登場してきたのが「個性」「自立」などを強調する「ゆとり教育」である。しかし、学校教育において「個性」「自立」を求められる若者がそれまでの管理から解放されたわけではなく、管理教育の時代以上に、不登校やひきこもり、ニートといった「学校からの逃避」や「社会からの逃避」がさらに増加している。現在の学校教育は「個性」「自立」という言葉により若者たちに自由を与えているように感じられるが、結局は以前と同様に画一的に若者は教育され、一律に「個性」「自立」が求められ管理されている。若者の中には、一律に求められる「個性」「自立」を見つけ出せない段階にいる者は行き場を失うことになる。

日本社会の職業構造の現状では、バブル経済崩壊後の景気の悪化に伴い若年労働者の求人が減少している。さらに、グローバル化の進展で、海外での現地生産が増大し、国内の生産工程の仕事の需要が減少したことから採用が削減されている。企業も学校と同様に個人の責任に基づく競争と市場原理を重視する新自由主義の導入により、派遣社員などの新しい雇用スタイルが登場させている。この新しい雇用スタイルは、ますます若者の雇用状況を悪化させている。若者は学校を卒業した後、すぐに就職することが困難な状況となり、社会とかかわるための手段を失っている。最近の雇用状況の動向としては、大学新卒者の求人数は回復傾向にあるが、高校新卒者は減少したままである。企業における職の学歴代替も指摘されており、若者の雇用にも参入時の学歴格差が生じている。

また、現代の若者は半数以上が高等教育機関に進学している。高等教育卒業後、多くの若者が就職するか、更に進学するかを選択しているが、高等教育進学者の1割近くが進学も就職もしていない状況にある。雇用時の学歴格差が生じているとはいえ、学歴をもった若者も「自立」できない状況にいる。

高学歴化にともない、多くの若者が高等教育機関に進学する中で、高い学歴を求めて進学する地方の高校生は、その多くが地元から流出しており、地方都市や都市へと移動している。都市である東京では、小中学校段階から通学による他県からの昼間人口の流入があり、高校や大学においては昼間人口の流入だけでなく、進学や就職による転入の若者が増加する。地方よりも都市が就職にしても進学するにしても若者にとって恵まれた環境が整っている。しかし、環境など地域格差はあるものの「自立」できない若者の問題は都市や地方に関係なく、日本全体で問題になっている。

<注>

- 1) 進藤兵は、資本主義の史的段階を国家の様相、社会の様相、文化の様相から3つに分類している。進藤兵 2008「ポストフォーディズムと教育改革 資本主義史の第3段階と新自由主義の歴史的位位置」佐貫浩・世取山洋介編『新自由主義教育改革 その理論・実態と対抗軸』大月書店を参照。
- 2) 中西新太郎 2007「第4章 「自立支援」とは何か—新自由主義社会政策と自立像・人間像」後藤道夫・吉崎祥司『格差社会とたたかう』青木書店
- 3) 本田由紀 2005『若者と仕事』東京大学出版会 p180-186
- 4) 文部科学省生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室2004「子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業 実施のための手引き」
- 5) 住田正樹・南博文編 2003『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会 p ii
- 6) 文部省 1999『教育白書 平成11年度 我が国の文教施策—進む「教育改革」—』
- 7) 斉藤貴男 2004『教育改革と新自由主義』子どもの未来社 p144
- 8) 荻谷剛彦 2001『階層化日本と教育危機』有信堂高文社
- 9) 日本経済団体連合会 2006「主体的なキャリア形成の必要性和支援のあり方—組織と個人の視点のマッチング—」
- 10) 小杉礼子 2001「2章変わる若者労働市場」矢島正見・耳塚寛明編『変わる若者と職業世界』学文社
- 11) 岩木秀夫 2000「2章高校教育改革の動向—学校格差体制（日本型メリトクラシー）の行方—」樋田大二郎・耳塚寛明編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 12) 田村鍾次郎 1986『生き方にせまる進路指導』ぎょうせい p112-114
- 13) 文部省 1977「中学校・高等学校進路指導手引き—進路指導主事編」
- 14) 吉田辰雄 2005『キャリア教育論 進路指導からキャリア教育へ』文憲堂
- 15) 加澤恒雄 2006「現代日本における大学教育のパラダイム転換の必要性に関する一考察 —「大学教育の中核としてのキャリア教育」論—」『広島大学高等教育研究開発センター大学論集第37集』p131-147
- 16) 望月由起 2007『進路形成に対する「在り方生き方指導」の功罪 高校進路指導の社会学』東信堂 p21-39

第3章 実証的先行研究にみる若者の「自己実現」の欲求と進路選択

第1節 若者の「自己実現」の欲求に関する研究

1 1990年代以降の若者の研究

現代の若者は、社会の新自由主義思想の導入、経済界の教育に対する提言を受けてすすめられている教育改革によって、自立や個性や自己責任が求められている。特に1987年の臨教審の「教育改革に関する第四次答申（最終答申）」において、自立や個性や自己責任は明確に示された。この答申以降、若者の自立をめぐる問題が顕著になっている。

千石保は、1980年代後半の若者たちは、将来よりもその時、その場の欲求充足を重視し、仕事や出世よりも余暇や私生活、「自分らしさ」を優先する価値観が芽生えつつあると指摘し、学歴や地位達成志向の揺らぎを「まじめの崩壊」と表現している。将来出世することを目指して、日々の学業に対して禁欲的に勉強する生活態度のことを「まじめ」とし、「まじめ」こそが、産業社会の形成と存立を支えたと説明している¹⁾。

1990年代に入って、若者の価値意識は学歴や地位達成を求める志向が弱まる一方で、職業や趣味を通じて「自分」を探し、「自己実現」を求める欲求が強まっていることが指摘されるようになる。1990年代以降の若者研究は、1980年代までの若者と1990年代以降の若者を比較から変容を明らかにし、若者像の描き直しがおこなわれた。若者像の描き直しが必要になった背景は、もちろん社会の新自由主義の導入による経済の変化、雇用状況の変化、学校教育の変化などがある。若者はその社会の大きな変化に適応し変容している。若者の価値や規範、さらに進路選択や職業意識などの若者の変容をとらえるための実証研究が1990年代以降多数行われた。

これらの研究では、出身階層における若者のアスピレーションや進学状況の変容に関する研究、学校における若者のアスピレーションや進学状況の格差の変容に関する研究などが蓄積されている。また、若者の自己と他者に注目をし、若者の自己意識の変容と対人関係、中でも特に友人関係の変容に関する研究も蓄積されている。これらの実証的先行研究の多くが質問紙法調査によるもので、経年比較を行ったもの、地域比較を行ったもの、また、先行研究との比較で単一地域の単年度調査がある。

経年比較の主なものとしては、①樋田大二郎ら東京大学を中心とする研究グループによる東北地方と中部地方の高校2年生を対象として1979年と1998年に実施した調査²⁾、②尾嶋史章ら大阪大学を中心とする研究グループが兵庫県の13校の高校3年生を対象として1981年と1997年に実施した調査³⁾、③海野道郎・片瀬一男ら東北大学グループが仙台圏の高校2年生を対象として1986年、1988年、1994年、1999年、2003年に実施した調査⁴⁾がある。

地域比較の主なものとしては、高橋勇悦ら青少年研究会グループが行った1992年から1993年にかけて東京都と神戸の16歳から29歳の青少年を対象に行われた調査⁵⁾がある。

この研究は、グループのメンバーである富田英典・藤村正之⁶⁾、浅野智彦⁷⁾らによって更に実証研究が展開されており、主に若者の自己と他者に注目し若者の自己意識の変容と友人関係の変容に関する研究が展開されている。この若者の自己意識や友人関係に関する研究については第4章で整理することにする。

最後に、先行研究との比較の単一地域の単年度調査としては、友枝敏雄・鈴木譲ら九州大学グループが福岡県内の高校2年生を対象として2001年に実施した調査⁸⁾がある。

また、若者の変容を明らかにすることを目的とした研究ではないが、研究の一部に現代若者の教育機会や学校トラッキングの実態など戦後日本の教育社会に関する研究をもつ階層研究がある。これは、「社会階層と社会移動に関する全国調査」(SSM調査)⁹⁾における階層研究である。

以上のようなデータにもとづいて若者の変容を明らかにしている研究以外にも、不登校など学校という場に居場所を求められなかった若者の研究の流れから登場してきた家庭や学校外における若者の活動、居場所づくりに関する事例報告や居場所のあり方に関する実態分析などの研究が蓄積されている。

例えば、田中治彦ら¹⁰⁾は社会教育の現場における変化を手がかりに若者の変容を分析し、特に社会教育に関係して子どもが大きく変化したのは子どもの「集団離れ」であることを明らかにしている。具体的には、子ども会、ボーイスカウトなどの青少年団体の会員数、また児童館、少年自然の家などの青少年健全育成施設での利用者が1980年代前半をピークに数を減らしていること、身近なところでは公園で親子連れではなく子どもたちだけで自由に遊ぶ姿を見かけなくなったことなどを指摘し、若者の居場所における事例から、居場所をいかに構想できるのかを検討し、居場所づくりのための方法論、指導者論、施設論・計画論を展開している。同様に、子どもの参画情報センター¹¹⁾も若者の居場所の構想として「子ども・若者の参画」の必要性を訴え、田中らと同様さまざまな居場所における実践を取り上げ、その居場所に集う若者を個々に分析している。その中で、新谷周平は若者の居場所と進路選択について分析を行っている。

これらの先行研究において、現代の若者像として共通して認識されていることは、「自己実現」や「個性」を実現することが望ましいという新たな規範が大衆的規模で広がってきており、自分らしさを優先するということである。友枝敏雄・鈴木譲らの研究グループの室井研二・田中朗は教育や学歴の価値を職業的地位達成のための手段的有効性といった観点から評価する考え方のことを地位達成志向とし、この思考は高度経済成長期に社会的に定着したものと位置づけた上で、地位達成志向の現代的様相を分析し、現代若者が地位達成について求めるものが地位よりも収入に傾斜していること、また、地位達成を求めない価値もかなりの比重を占めるようになってきたことを明らかにしている¹²⁾。この点は、どの先行研究においても確認されている現代若者の姿である。

本章では、出身階層における若者のアスピレーションや進学状況の変容に関する研究、学校トラッキングにおける若者のアスピレーションや進学状況の格差に関する研究、若者

の居場所づくりに関する実践的事例研究、進路指導に関する研究を検討し、それぞれ実証的に明らかになっている現代の若者像を明らかにする。

2 若者の「自己実現」の欲求と階層・文化資本

若者の研究において、家庭要因としての家族（出身階層）との関係を分析する階層研究がある。例えば、原純輔・盛山和夫¹³⁾は、「社会階層と社会移動に関する全国調査」（1995年SSM調査）において、教育機会と出身階層（父親の職業）間の格差を分析している。彼らは人びとの欲求の対象となる有形無形のことを「財」とよび、その財を「基礎財」「上級財」の2つに分類したうえで、教育機会においては中等教育機会が「基礎財」、高等教育機会が「上級財」とよぶ。「基礎財」としての中等教育機会の分布の平等化が進み、「上級財」としての高等教育機会の階層間格差は依然として残存していること、しかし「基礎財」としての中等教育機会が平等化したといっても、細かくみると高校には明白な学校ランクが存在し、それが高等教育機関への進学機会を強く規定していることを指摘している。戦後日本は教育機会が全般的に拡大し、「大衆教育社会」¹⁴⁾といわれる状況が生じたが、高等教育機会を中心とした階層間格差は縮小されなかった。

尾嶋は、階層間格差をふまえて戦後日本における高学歴化の趨勢と教育達成や教育アスピレーションの規定構造の変容について、1995年の「社会階層と社会移動に関する全国調査」（SSM調査）のデータをもとに研究している。教育達成の規定要因をコーホート別に分析し、女子の教育達成にも「成績原理」が浸透し、女子の教育達成の規定構造が男子に近づきつつあることを明らかにした¹⁵⁾。従来は中学時の成績はとりわけ男子の教育達成を規定していたが、高学歴化の進行にともなって女子においても中学時の成績が教育達成に対する規定力を強めているという。男子と同様、女子においても出身階層と教育達成を媒介する位置に学業成績が位置づけられるようになってきたことを明らかにしている。

また、教育アスピレーションに関して、兵庫県で1981年と1997年に実施した高校生調査データの分析¹⁶⁾から、女子の教育アスピレーションが出身階層に規定される傾向が弱まり、進学する高校種別を通じて影響をうける度合いが強まったことを明らかにしている。

片瀬も、尾嶋と同様に高校生の教育アスピレーションをとりあげている。片瀬は教育アスピレーションがどのように変容してきたのか、出身階層や高校種別によってどのように規定されているのか、その規定構造のジェンダー格差にどのような変容がみられたのかを検討している¹⁷⁾。

片瀬の研究では、高校生の教育アスピレーション・職業アスピレーションの形成過程をウィスコシン・モデルを用いて分析している。ウィスコシン・モデルの批判を考慮し、カーコフが言うように教育選抜や労働市場の構造といった制度的・構造的要因も導入したうえで、アスピレーションの形成を分析している。

教育アスピレーション・職業アスピレーションと家庭要因の関連を分析するために、家庭要因として、①親の教育期待、②親の学歴や職業などの出身階層、③きょうだい数と学

習塾や通信教育などへの教育投資、④読書や芸術への文化資本をあげている。分析の結果、①親の教育期待の水準は父親、母親、学校種別に関わりなく子どもの教育アスピレーションの水準を上回っており、親の教育期待は子どもの教育アスピレーションを加熱する傾向があること、②親の学歴や職業などの出身階層では、階層的地位が高い親ほど、親の教育期待が子どもの教育アスピレーションと一致する傾向にあり、階層的地位が低い親ほど子どものアスピレーションを冷却もしくは加熱する傾向を持つこと、また、職業アスピレーションでは、出身階層による専門職志望率の格差は縮小していること、③きょうだい数や教育投資に関しては、少子化がすすんでいるためきょうだい数や出生順位に関係なく子どもの教育に配慮する家庭が階層をこえて出現していること、教育投資は女子にとっては生活水準が学校外教育投資の制約になっているが、男子の場合は制約されているとはいえないこと、④文化資本については、父親・母親とも学歴が高いほど、または職業上の地位が高いほど芸術文化資本・読書文化資本の保有量が高いこと、芸術文化資本よりも学校文化に親和的な読書文化資本が学校的な学習態度を形成し、それによって教育アスピレーションが形成されていることを明らかにしている。

以上、尾嶋と片瀬の研究では、出身階層が教育アスピレーションを規定する度合いが弱まっており、大学進学に関する階層間の平等化の可能性が指摘されている。

3 若者の「自己実現」の欲求と学校トラッキング

学校要因としては、学力がもとになって形成されている学校トラッキングを取り上げた樋田・耳塚らの研究がある。彼らは、近年の教育改革は、「個性」重視の原則をもってこれまでの画一化・硬直化した教育制度から多様化・弾力化が進み、受験プレッシャーにあえぐことを余儀なくされてきた高校生を解放することができたとして、学校トラッキングの機能が弛緩しているという考えを仮説に掲げている。この学校トラッキングの弛緩という仮説を導いたのは主として以下の理由と説明している¹⁸⁾。

- ① 高等教育進学をめぐる競争が著しく緩和されたことを主たる原因として、高校教育における進路面でのトラッキングに対する機能的要請が小さくなったこと。
- ② 多様化・個性化を理念とする教育改革が進展したことにより、学校の特色化が進んだであろうこと。それは、学校間の一元的な序列構造を曖昧なものとした可能性がある。
- ③ 高校の特色化に応じて、中学校からのいわゆる偏差値輪切りによる進学が変化した可能性があること。
- ④ 青年文化の影響力が増して、学校格差に対応した生徒の下位文化が形成されにくくなり、学校間の生徒の行動様式の差異が縮小したであろうこと。

以上の理由から導き出された仮説を検証するために、1979年に学校トラッキングが高校生の進路と行動様式を形成する基本枠組みとして機能していることを明らかにした調査結果をもとに、1997年に高校2年生を対象として1979年と同様の調査を実施して比較分析

を試みている。

その分析結果は、学校トラッキングが弛緩しているという仮説を否定した。例えば、学校による生徒指導、進路指導、学習指導組織は全体としてみれば学校階層間の差異が小さくなる方向へと変化してきたが、進路選択では、かつて就職者が大勢を占めた専門高校において多様な進路をとる生徒が出現するようになった。この意味では学校トラッキングは弛緩しているといえるものの、専門高校でも学校階層の上層部分ではむしろ4年制大学の選択が増加している。生徒の行動様式と意識に関しても上層部分とそれ以外の層の格差が見られ、単純に学校トラッキングが弛緩しているという仮説は当てはまらないと説明している。

樋田らの1979年調査からは明らかになった1980年頃の日本の学校トラッキングは、客観的な学業成績に基づき厳格に進路が決定されるという限りにおいてメリトクラティックな人材の選抜メカニズムであったといえる。また、学校トラックの壁によってアスピレーションが冷却されて進路が制約されていたこと、学校トラッキングによって挫折した欲望が地位欲求不満を経由して逸脱的な下位文化を形成する側面もあることを明らかにし、学校トラッキングはアスピレーションを冷却するための概念として使われていることが示された。

しかし、1979年調査と1997年調査の比較で明らかになったことは、1980年代までの学校トラッキングは、一定程度共有された目標に向けて、アスピレーションを煽る役割を果たしていたという事実である。この煽りは業績レベルに応じた分相応の目標に向けての煽りであったかもしれないが、あらゆる出身階層の若者を業績主義的競走の世界につなぎとめることを可能にしたわけではなかった。

ところが1997年では、学校トラックにかかわらず競争の熾烈さは学校生活から失われ、学習時間は減少し、学校生活自体若者の生活世界の中での比重を小さくしつつある。学業成績や学校ランクという若者の地位を測っていた指標自体、若者に地位欲求不満を惹起するほどの意味を持たなくなった。樋田は、特定の低階層出身の若者は競争に参加することなく離脱していると分析し、今注目しなければならないのは競争に参加することなく学校トラックの低層に押し入れられた若者の地位が、学校トラックの壁によって固定化されてしまうメカニズムだと指摘している¹⁹⁾。

つまり、現在の学校トラッキングについては、学校トラックに関わらず競争の熾烈さは学校生活から失われ、学習時間は減少し、学習への構えが否定的な方向へと変化することになり、学業成績など高校生の地位を測っていた指標自体は意味を持たなくなっている。学校生活自体、若者の生活世界の中で比重が小さくなりつつあり、特定の低階層出身の生徒たちは、競争に参加することなく離脱していることを明らかにしている。

また、荻谷は樋田らの調査研究データを用いて、若者の勉強時間、勉強に対して積極的に取り組む意識についての学校トラッキングによる差異を分析し、高校生にとって「勉強」や「学校」がもつ意味の希薄化というべき状況を明らかにしている。高校生の学校外での

学習時間はどのランクの高校でも 1979 年から 1997 年にかけて大幅に低下し、勉強に熱心に取り組む姿勢も後退していることを明らかにしている²⁰⁾。

さらに、現代高校生の中で学校トラックによる相対的な格差は基本的に維持されながらも全体として高校や勉強の重要性が後退し、かわって家庭の重要性が浮上したことを描き出した。特に 1997 年時点では高校生の母親の学歴によってさまざまな違いが生じるようになってきている。たとえば、進路志望の規定要因に関する分析結果によれば、父親の職業や学歴の影響力は 1979 年と比べて 1997 年でむしろ低下しているのに対して、母親の学歴の影響力は拡大し、同じランクの高校の生徒でも母親学歴に応じて進路志望の格差が生じるようになってきている。また、母親学歴は、高校生の家庭学習時間の長さにも影響を及ぼすようになってきている²¹⁾。つまり、学校トラックよりも出身階層が高校生の進路や意識、行動を分化させる要素として、関係が強まっている。

現代の若者における進路選択は、学校トラックによって進学目標がほぼ決定されているものの、学校教育では教育改革のもと「人間としての生き方、在り方」を考えさせる進路指導が行われている。これは、以前の画一化・硬直化した教育体制で生じた受験をめぐる高校生の問題行動を改善することにはつながっても、新たな不平等という問題を生じさせているといえる。

4 若者の「自己実現」の欲求と地域社会における活動

不登校やいじめなど学校における子どもの深刻な問題状況について、門脇は地域に住む身近な人同士のコミュニケーションの減少、地域コミュニティの空洞化、地域の教育力の衰退といった地域の弱体化によって若者の社会に関わる力が衰退していると指摘している²²⁾。現代社会は、個人の生き方や価値観が可能な限り尊重され、個人の自発性があらわれ、「自己実現」の欲求が肥大化し、私事化傾向にある。私事化傾向にある社会では、門脇のいう「社会力」が形成できにくくなっているのである。それは、まさに私事化の浸透によりもたらされたものである。また、私事化の浸透は1980年代後半、不登校やいじめなどの他者への関心や他者への愛着、他者への信頼感に乏しい若者の問題行動を増加させた。

日本においては、1990年代以降不登校の増加に伴って学校外の居場所が求められ、フリースクールやフリースペースといった民間の営利・非営利活動の取組が数多く行われた。このフリースクールの活動の中では子どもや若者の意見を居場所づくりに反映させるなど不登校の子どもたちの発達保障の観点から子どもたちの参画的な取り組みが行われている。

不登校の子どもたちへの居場所づくりが盛んになった1990年代半ば、第15期中教審答申(1996年)では、学校・地域社会全体を通して、「生きる力」をはぐくむことを重視すべきであるとされ、その中で子どもたちの生活体験・自然体験等の機会の増加の必要性がうたわれた。ここに不登校の子どもたちにだけでなく全ての子どもたちに対する地域における子どもの居場所づくりという考え方が登場した。本来家庭や地域社会で担うべきものを学校が担っている現状を改善しようとする動きから、学校のスリム化がはかられた。こうし

て現在、地域では若者に対するさまざまな青少年団体やイベントや講座などが設けられるようになった。

私事化傾向にある社会への対応として、若者の社会とのつながりを求める居場所、つまり家庭や学校以外における活動に関する研究は、計量分析はなく、事例を取り上げた分析がほとんどである。居場所に関する研究²³⁾は居場所とは何か、居場所と参画など居場所の理論化がすすめられている段階にある中で、新谷はある一人の若者に4年間寄り添い、参与観察・インタビューを行い、若者のストリートダンス体験における居場所と進路選択に関する分析を行っている²⁴⁾。新谷は、事例となる若者が若者を代表するとは言えないが、大人が望ましいと考える場に集まらない者の多様な自己形成をとらえる事が重要であり、若者個々の在り方の把握の集積し共通性を見出すことが必要であると述べている。

新谷の調査対象者は男性で、私立進学校に通いながらストリートダンスをはじめ、高校卒業後、大学に進学することなくフリーターという道を選択した。彼は、教育制度への反発や高校受験後の脱力感などから高校入学後は遊びまわる生活をつづけた。しかし、遊びまわる生活を続けるよりも「何か一つのことをやりたい」とダンスを始めた。その後、大学には魅力を感じないとフリーターの道を選択した。しかし、「何でも選べることは厳しいことだ」と自由のきつきを感じるようになる。また、アルバイトが忙しくなりダンスの練習ができない時期も経験し、卒業後2年目に大学進学を考えるようになる。その理由は高卒が不利という状況を身をもって経験したからであった。しかし、その進学意欲は長続きせず、次には就職採用試験を受けたりするがうまくいかなかった。やはりフリーターとして生きていく可能性を見出した。

新谷は、彼のダンス活動と進路選択のプロセスから、高校入学後遊びまわるようになったこと、そこから何かやりたいとダンスを始めたこと、フリーターの厳しさから進学・就職を考えたこと、それでもやはりフリーターとして生きていくことを決めたこと、それぞれの局面に「居場所」の問題がかかわっていると分析する²⁵⁾。

彼は教育制度への反発などから、学校に適応して見える同級生にも反感を覚える。その時彼にとって学校は居場所とならず、学校外の世界に居場所を見出した。当初は街で遊びまわる状態であったが、その後、ストリートダンスを始める。その後、ダンスへの思いと同級生や学校への反発からフリーターを選択するが、自由の厳しさや高卒学歴の不利など、フリーターは彼にとって予想以上に厳しいものとなる。しかし、新谷はこの厳しさについて、友人関係もかかわっていると分析している。彼は、それまでの主要な準拠集団である学校の友人との関係はほとんど断ちダンスの道へ進むが、ダンスの世界では先輩との練習が主で、新しい居場所となりうるような集団を彼は持っていなかった。そのため、彼はフリーターのきつきを厳しく感じ、進学・就職を目指すことになった。しかし、その選択はすでに一度レールを降りた者にとって居場所となりうるものではなく、再びダンス、フリーターの道を目指したと分析している。

こうして再度フリーターを目指したのであるが、今度は以前のようにつらいものとはな

らなかった。それは、彼に新しい準拠集団を 2 種類獲得したからとみている。一つは唯一の高校時代の友人を介した友達のつながりと、もう一つは友人のついでに関わることになったクラブのイベントスタッフである。居場所を見出すことによって、フリーターであることを以前ほど厳しいものとは考えなくなり、自分が目指す道に進めるようになったと解釈している。

しかし、居場所ができればすべて解決するというものではない。新谷はこの事例を、従来標準的と思われていた学校を経由した職業への移行に向かわなかなっただけのこととみている。このことは、一部の若者にとって学校が居場所となりえていないこととも関連している。学校が居場所となりえなかった若者にとっては、成績や出席日数を基準として選抜される学校推薦を受けられず、職業先を選べない状態に陥るのである。

新谷は、今後学校以外の居場所を経由した職業・社会への移行はますます増えてくると考えており、その時に彼のように学校外に安定した居場所を見つけ、その先の展望を見出す努力ができるものは限られると考えている。単に職業意識をつけさせることだけでは補えない学校外からの社会への移行の困難さを指摘している。現代若者の現実志向や「自己実現」の欲求の強さについて、現実の職業との関係を見えなくさせる可能性も否定はできないとした上で、当事者にとっては学校という場に居場所を見出せず、学校外の居場所から進路を選択しようとするとき、「自己実現」の欲求は学校外での居場所を確保し、何とか将来を展望しようとするものであることを理解することも重要であると指摘している。

この事例は、地域におけるダンス集団を居場所とした事例である。若者の家庭や学校外における居場所の重要性は中教審においても指摘されているところであり、地域における自然体験活動や就労体験、地域の団体などへの参加などが叫ばれている。地域における若者の居場所への参加としては、この事例のような趣味活動だけでなく、若者の稽古事も含まれるし、青少年育成団体や地域における子ども会などへの参加や学習などの講座への参加などもある。家庭や学校外における場での活動についてはその必要性はさげばれていても、その実態と若者の進路選択とのつながりに関する分析は少なく、新谷のような事例分析は珍しい。

第 2 節 進路指導と進路選択に関する研究

1 進路指導に関する研究

荒川（田中）葉は、現在の高校における進路指導の実態について、樋田ら東京大学を中心とする研究グループによる東北地方と中部地方の高校 2 年生を対象として 1979 年と 1998 年に実施した調査の中で分析している。その結果、進路指導の在り方の変化として以下の 5 点を明らかにしている²⁶⁾。

- ① 個性化・多様化の理念のもと、高校のカリキュラムを弾力化する政策がとられ、必修単位数が大幅に削減されたこと

- ② 学習指導要領の拘束の弛緩を受け、特色ある学科・コースを導入したり、普通科と専門学科の枠をとりはらって総合学科化したりする高校が出てきたこと
- ③ 89 年告示の学習指導要領で「生徒が自らの在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう」「計画的、組織的な進路指導を行う」必要性が説かれたことにより、受験を乗り切ることを第一の目標とする進路指導から、「人間としての生き方、在り方」を考えさせる指導に転換していこうとする動きが強まっていること
- ④ 少子化によって大学入試競争自体が優しくなっていること
- ⑤ バブル崩壊後の不況で高校卒業生の就職が厳しい状況になっていることを背景に、より多い回数 of 指導が組織され、より体系的な指導が行われるようになってきている。内容も 1979 年は卒業生の進路実績や大学受験の内容について資料を配布して説明するかたちの指導が主だったのに対し、1997 年は外部教師や卒業生を招いて講演を行ったり、大学・専門学校に体験入学をさせたり、自分で大学や学部について調べさせたりと多様な内容になっている。

しかし、想定される進路目標については必ずしも多様になっておらず、学校のランクに関係なく、むしろ全ての高校で大学進学にシフトした指導が行われていた。ただ、専門校はあくまでも推薦入試を利用した進学を念頭に置いており、中位校は大学進学一般、上位校は国公立難関大学進学に進路目標を設定しており、高校が念頭に置く大学のレベルや大学入学の手段には、学校ランクによる微細な差異が維持されていることが明らかにされている。

高校における進路指導は生徒に与える影響力は大きく、卒業後の進路先に対する指導は学校トラックによって違いがある。樋田らの調査において耳塚寛明は高校のランクにおける卒業後の進路先を分析している。その結果は、普通科の「上位校」では主に国公立の 4 年制大学進学を志望する生徒が 1979 年、1997 年とも大半を占めており、難関大学の受験に向けての教科指導が行われている。普通科「中位校」では 1979 年と比べて 1997 年で国公立 4 年制大学志望者の比率が増大し、やはり進学指導が強化されている。それに対して「専門校」では、就職志望の生徒が約 2 割減少したものの、かわって専門・各種学校への進学志望者が増加しており、4 年制大学への進学率は大きく増加していないことが明らかになっている。また、かつて就職校としての性格を持っていた専門校が「進路多様校」へと変身し、下位校（下位トラック）においても、就職者の減少、進学者の増加によって「進路多様校」としての性格を持つに至った高校が多く、その進学先の多くは専門・各種学校や短大であることを指摘している²⁷⁾。

2 若者の進路選択のプロセスに関する研究

高校生の進路選択は、高等教育機関が高校生を選ぶ時代から高校生が高等教育機関を選ぶ時代になりつつあるといわれている。このような時代において、高校生がどのようなプロセスを経て進路を決定しているのだろうか。リクルートによると²⁸⁾、高校卒業後の進

路先は大学進学が著しく増加している。高校卒業後の進路先（図 3-2-1）は 1999 年調査と 2007 年調査を比較すると大学進学希望者が著しく増加している。これに対して、専門学校進学希望者が減少し、また、浪人も減少している。この結果は、荒川が高校における進路指導の変化について、現在全ての高校で大学進学にシフトした指導が行われていることを指摘しているとおりでである。

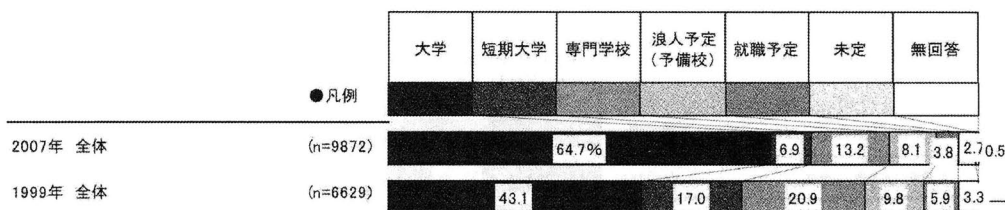


図 3-2-1 高校卒業後の進路先（各時期単一回答）

希望進路の移り変わり（図 3-2-2、図 3-2-3）をみると、就職希望者は高校入学時から増減がみられない。それに対し、大学進学希望者は、高校入学時から高校 3 年の 4 月ごろまで増加し、それをピークに以降減少している。短大、専門学校志望者は、高校入学時から徐々に増加していく傾向にある。希望進路の移り変わりについて 2007 年、1999 年を比較してみると、希望進路の移り変わりの時期はどちらもほぼ同様で、短期大学希望、専門学校希望者が減少した分、大学希望者が増加している。

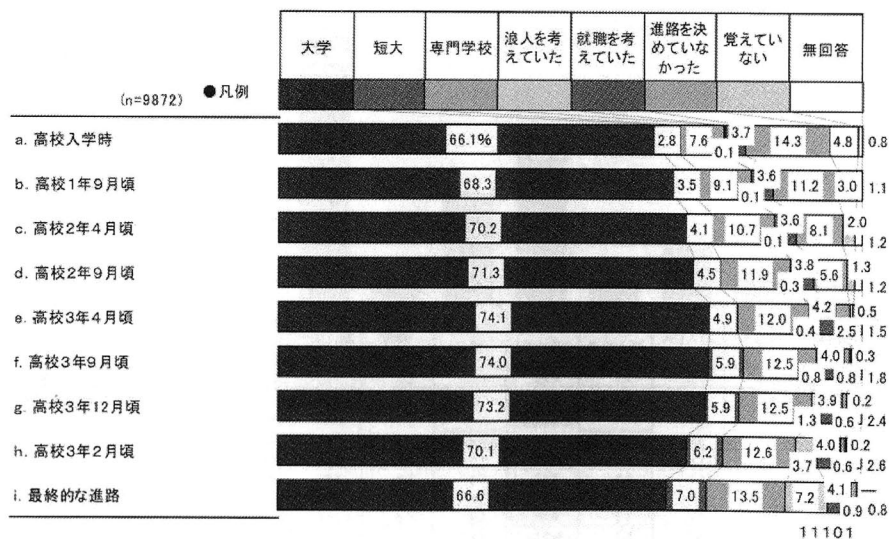


図 3-2-2 希望進路の移り変わり 2007（各時期単一回答）

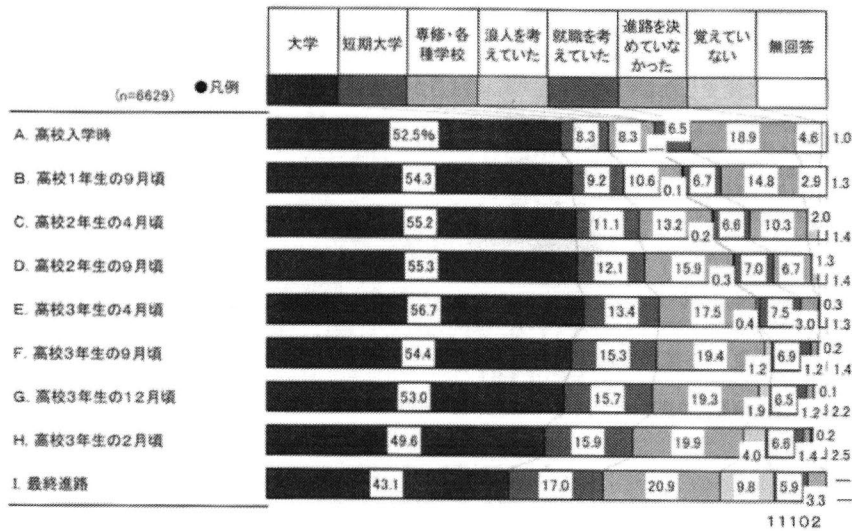


図 3-2-3 希望進路の移り変わり 1999 (各時期単一回答)
 (出所) リクルート「進学センサス 2007 高校生の進路選択に関する調査」2007

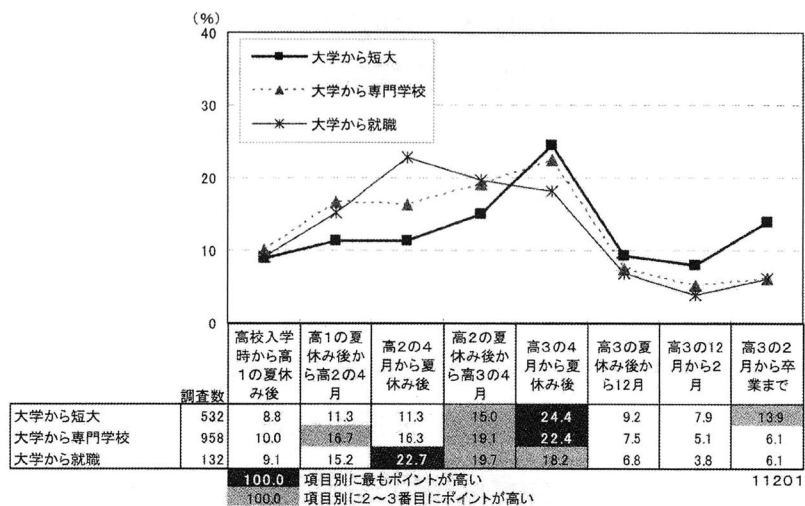


図 3-2-4 希望進路の変更とその時期 大学からの変更
 (出所) リクルート「進学センサス 2007 高校生の進路選択に関する調査」2007

希望進路の変更の時期について大学から他の進路先への変更(図 3-2-4)をみると、就職への変更が高校 2 年から高校 3 年の夏休み後までに变更しており、短大、専門学校への変更は高校 3 年の 4 月から夏休み後の間に变更している。短大への変更は、高校 3 年の 2 月から卒業までの進路選択直前に变更する者も多い。大学進学希望から变更する时期的なポイントは高校 3 年の 4 月から夏休みであり、現実的な進路選択を検討が始まる時期といえる。また、高校 3 年の 2 月以降卒業までの期間は現実の進路選択において、学力などの調整のための変更といえる。

短大、専門学校、就職からの大学への変更は、全て高校 2 年の夏休みから高校 3 年の 4

月までに変更のピークとなっており、大学からの進路変更よりも早い時期に変更している。高校3年12月から変更は少ない状況である。大学進学希望は、早い段階で決定しなければその受験準備が難しいということであろう。

大学への進路変更理由は、「幅広い教養」といった知識欲のほか、「就職が有利」「学歴」といった地位に関わることを重視した理由、「家族の勧め」が主な理由となっている。大学から短大への進路変更の理由は、「仕事に役立つ知識や技術」「資格や免許」の取得という理由もあるが、学力の問題が大きく、「自分の学力に合わせた」「大学の受験結果が不合格だったから」という理由が大きい。大学から専門学校への進路変更理由も「大学の受験結果が不合格だから」という学力の問題も見られるが、短大ほどのではない。「新しい分野に興味をもった」「仕事に役立つ知識や技術が身に付くと思った」という将来の仕事や就職を考慮した理由が際立っている。

進路選択の決定を時系列でとらえると、進学か就職かを決めた時期（図3-2-5）については中学のころに決めた割合が高く、高校2年になるまでには決定している。進学先を大学・短大・専門学校のどれにするのかを決めた時期は、大学進学者は「中学の頃」、「高校1年の頃」までに決定をしており、短大・専門学校進学者は「高校1年の頃」にピークであるものの全体にばらついていて、学びたい学問分野を決めた時期は、どの進学先も「高校1年の頃」、「高校3年の4月頃」にピークがあるが、大きなピークはみられず高校3年の12月ごろまでは模索が続いている。第一志望校を決めた時期は「高校3年の8月・9月」に集中し、最終的な進学先となる入学校を決めた時期は「高校3年の2月、3月」に集中する。

しかし、将来の仕事について考え始めた時期（図3-2-6）は進学希望先によって違いが生じている。全体では「中学の頃」「高校1年の頃」から考え始めた者が多く、中学の頃からは短大・専門学校進学者が大学進学者よりも割合が高い。これまで考えたことがない者は大学進学者に多く、17%と他の進学者と比較しても割合が高い。

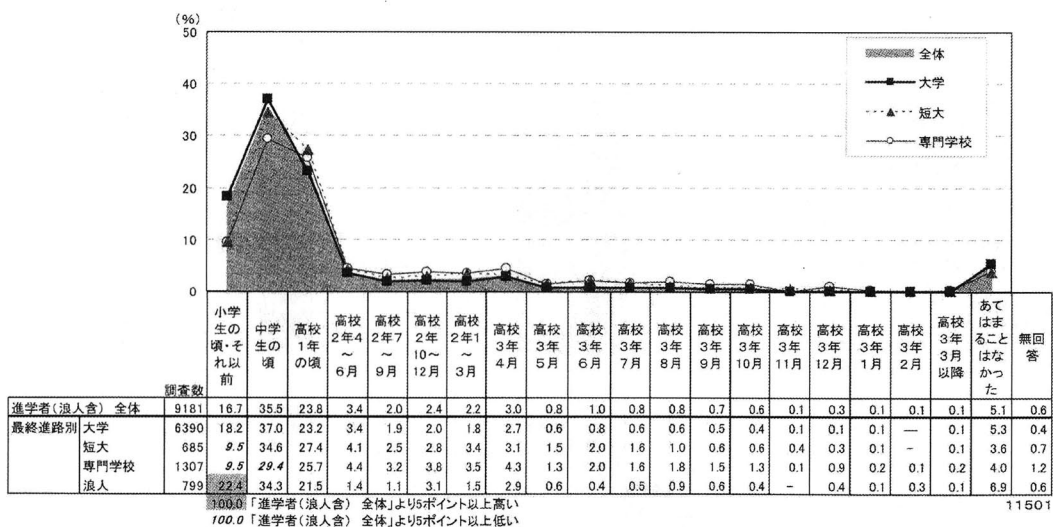


図3-2-5 進学か就職かを決めた時期（各単一回答）

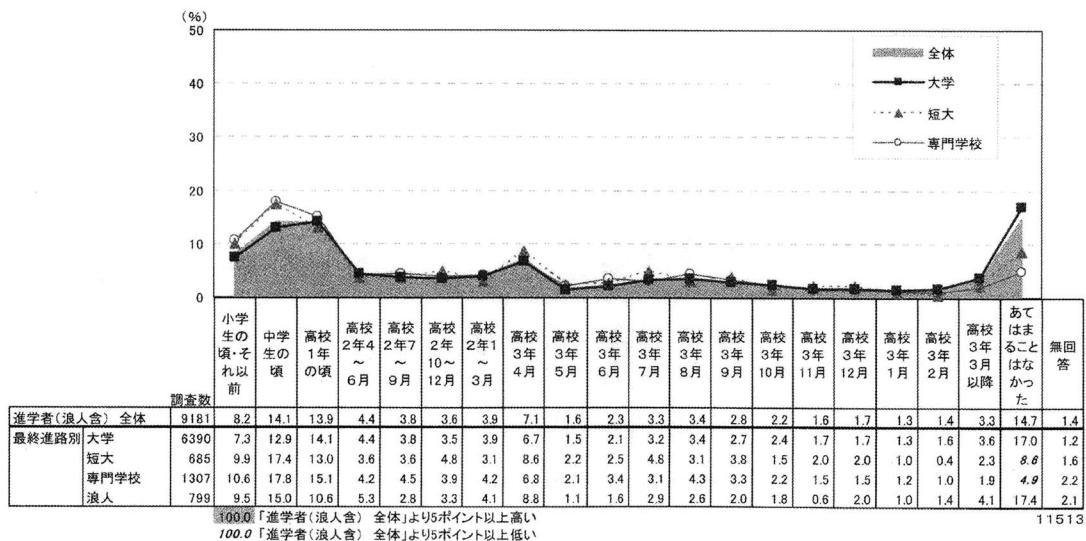


図 3-2-6 将来のしごとについて考え始めた時期 (各単一回答)
(出所) リクルート「進学センサス 2007 高校生の進路選択に関する調査」2007

以上みてきたとおり、現代の高校生の進路選択は、高校入学時までには、大学か、短大・専門学校か、就職かはほぼ決定をしている。高校入学時前までの中学生の時期が第一の選択期といえる。また、高校時代に具体的な進路先を選択し、希望進路を変更する者は、高校2年生から高校3年の夏休み後までの間に変更している。この時期が第二の選択期といえる。さらに、受験結果に伴う進路変更と受験結果に伴う入学校の決定が高校3年2月に行われており、第3の選択期といえる。

それぞれの選択期における選択を決定づける理由は、早い時期では将来に対する現実的な選択と考えられる理由も見られるが、全体として自分の学力を問題とする理由が強く働いているようである。高校卒業後の進路については真剣に検討をしているように思われるが、その進路先に進んだ後の将来についてはそれほど真剣に検討されていない高校生の進路選択の実態が明らかになっている。

3 「自己実現」を求める進路指導と学力による進路指導

高校での進路指導の内容として、進路指導の際に先生に言われたこと(図 3-2-7)についてみると、言われたことのトップは「自分のやりたいこと・向いていることを探みなさい」で、80%の高校生が進路指導において高校教員から言われている。高校の進路指導において、教員が高校生に「自己実現」を求める典型的な実態といえる。

高校において受けた進路指導の影響度(図 3-2-8)についてみると、全ての項目において影響があるという傾向にある。しかも影響力が7割を超える内容は「どんな学校があるのか」「最終入学校の決定」など6項目にもわたる。高校生にとって、学校における進路指導の影響は大きいといえる。

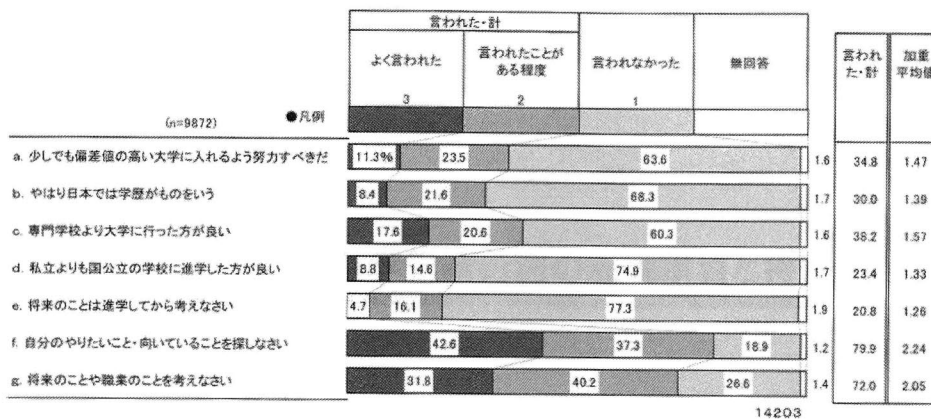


図 3-2-7 進路指導の際に先生に言われたこと (各単一回答)

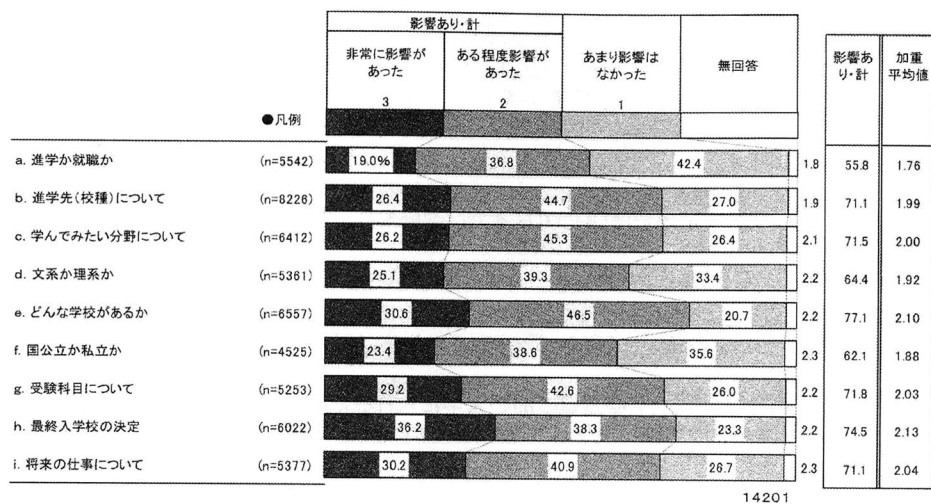


図 3-2-8 進路指導内容の影響度 (各単一回答)

(出所) リクルート「進学センサス 2007 高校生の進路選択に関する調査」2007

現在、高校の進路指導は強い影響力をもって以上のような指導が行われているが、実際の高校生の進路選択は「在り方生き方」による選択とは程遠いようである。高校生の進学・将来に対する意識(図 3-2-9)をみても、図 3-2-9 は上から 1 つ目のグループは「進学前の考え・行動」、2 つ目のグループは「学歴と将来の関連に対する考え」、3 つ目のグループは「進学先に対する考え」、4 つ目のグループは「将来に対する考え」である。

「進学前の考え・行動」については「高校を卒業してすぐに就職したくなかった」ため、「進学先や進路のことについてよく考えた」高校生が多い。「学歴と将来の関連に対する考え」では「将来は自分のがんばりしでいで決まると思う」が「大学を出ていた方が将来何かと有利だと思う」傾向にある。また、「進学先に対する考え」では、「学生生活を楽しまたい」「自分の可能性を広げたい」「仕事に役立つ知識・技術を身につけたい」と考えている。「将来に対する考え」では「自分の夢をかなえる仕事につきたい」「自分の趣味や好きなことができる仕事につきたい」と考えている。

■進学・将来に対する考え方（進学者（浪人含）／各単一回答）

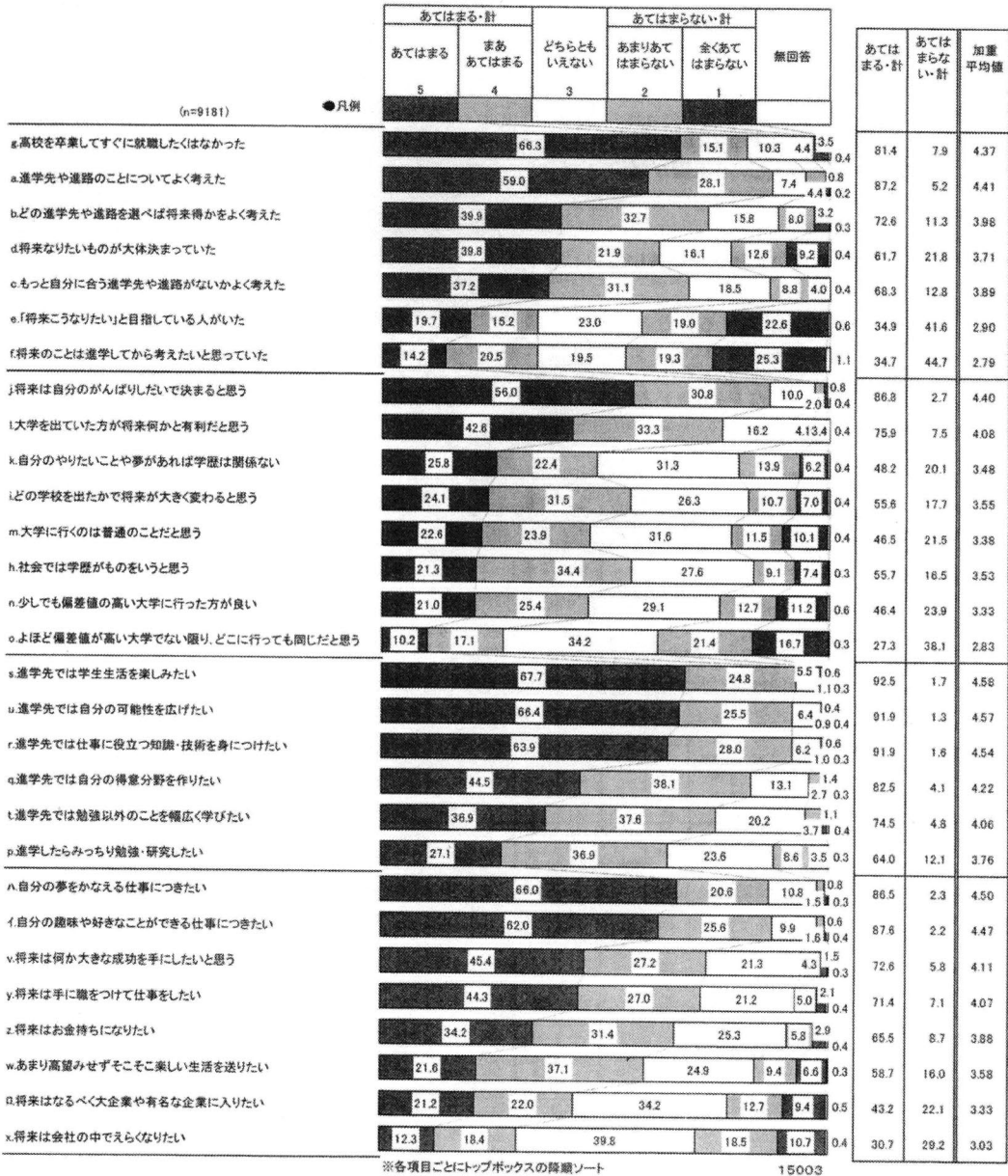


図 3-2-9 高校生の進学・将来に対する意識（各単一回答）

（出所）リクルート「進学センサス 2007 高校生の進路選択に関する調査」2007

リクルートが行っている大学進学時の若者の意識調査では、「自分の夢をかなえる仕事に就きたい」「自分の趣味や好きなことができる仕事に就きたい」と夢や好きなことを仕事にすることを憧れがみえ、若者の将来への「自己実現」の欲求が表れている。ここに、高校の進路指導において「やりたいことをみつけよう」と「自己実現」を求める指導がおこなわれている実態があらわれている。

しかし、実際の進路選択は学力を理由とした進路選択が中心におこなわれているのが実

態である。山口大学の入学者の意識調査（図 3-2-10）においても、山口大学への進路選択理由の上位は「国立大学だから」が最も多く、次いで「入学難易度が自分にあっていたから」（2006年調査：47.5%、2007年調査：44.5%）である。値は少ないが、「滑り止めだった」や「先生が勧めるから」という者もある²⁹⁾。ここに、高校における「自己実現」を求める進路指導と学力による進路指導という矛盾が生じている。

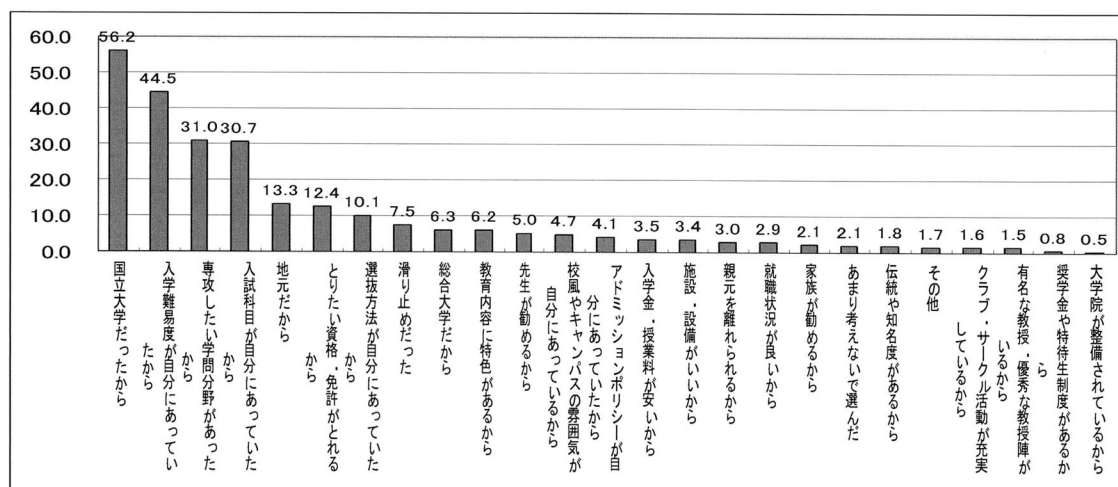


図 3-2-10 山口大学への進路選択理由（複数選択）
 (出所) 山口大学アドミッションセンター「山口大学大学進学時調査 2007」2007

高校の進路指導は、「生き方在り方」指導のもとに教師は生徒自身に将来の自分の在り方、生き方を生徒に考えさせ、職業選択を見据えた進路選択を生徒に説きながらも、最終的な進路選択時には大学選択であればどの大学なのか、どの学部なのか、合格可能なのかどうかといった内容が最終的な指導となる。「生き方在り方」指導が導入されたとはいえ、受験指導に重点が置かれていた 1990 年頃までの進路指導とかわらず、現在も進学実績を上げることが教師の目標である。

また、若者は学校教育において将来をデザインすることを求められても、また、職業選択を見据えて進路選択することを求められても、リアリティーをもって検討するだけの材料を持ち合わせていない。他者とのかかわりから比較をする中で個性や自分の価値観を磨く経験に乏しい若者たちは、進路における具体的な目標を明確にもって選択するというよりも、成績や学力に応じて選択する若者が大半を占めている。

つまり、若者は「自己実現」を強調されるばかりで、その欲求を具体的な職業にどう結び付けていけば良いのか、あるいはどう修正していくべきかについては指導されていないのが現状である³⁰⁾。職業選択を通して「自己実現」をはかろうとする若者は増加し、その「自己実現」の欲求が肥大化している若者も少なくない。しかし、高校卒業後の進路選択としては、多くの大学進学者が明確な目的をもって大学を選択するというよりは、偏差値

などの情報をもとにした選択を行っている。近い将来職業を通じて「自己実現」を達成しようとしている若者の姿とはつながらないような状況が生じている。

<注>

- 1) 千石保 1991『「まじめ」の崩壊—平成日本の若者たち—』サイマル出版会
- 2) 樋田大二郎他編著 2000『高校生文化と進路形成の変容』学事出版において発表されている。
- 3) 尾嶋史章編著 2001『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房において発表されている。
- 4) 片瀬一男 2005『夢の行方 高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会
海野道郎・片瀬一男編 2008『<失われた時代>の高校生の意識』有斐閣 において発表されている。
- 5) 高橋勇悦編 1995『都市青年の意識と行動 若者たちの東京・神戸 90's 分析編』恒星社厚生閣において発表されている。
- 6) 富田英典・藤村正之編 1999『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣を発表している。
- 7) 浅野智彦編 2006『検証・若者の変貌 失われた 10 年の後に』勁草書房を発表している。
- 8) 友枝敏雄・鈴木譲編著 2003『現代高校生の規範意識—規範の崩壊か、それとも変容か—』九州大学出版会において発表されている。
- 9) この SSM 調査は 1955 年から 10 年おきに日本社会学会において実施されているものである。この調査の目的は、日本社会における社会的・経済的な不平等についてデータを収集することで、若者だけでなく日本全国の 20 歳から 69 歳の有権者のなかから約 1 万 4 千人を無作為に選びだして実施されている。
- 10) 田中治彦編 2001『子ども・若者の居場所の構想「教育」～「関わりの場」へ』学陽書房を発表している。
- 11) 子どもの参画情報センター編 2004『居場所づくりと社会つながり』（子ども・若者の参画シリーズ I）萌文社において発表されている。
- 12) 室井研二・田中朗 2003「第 3 章 高校生の学歴＝地位達成志向—その現状と展望—」友枝敏雄・鈴木譲編著『現代高校生の規範意識—規範の崩壊か、それとも変容か—』九州大学出版会
- 13) 原純輔・盛山和夫 1999『社会階層—豊かさの中の不平等』東京大学出版会
- 14) 荻谷剛彦 1995『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社
- 15) 尾嶋史章・近藤博之 2000「教育達成のジェンダー構造」盛山和夫編『ジェンダー・市場・家族』（日本の階層システム 4）東京大学出版会
- 16) 尾嶋史章編著 2001『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房
- 17) 片瀬一男 2005『夢の行方 高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会
- 18) 樋田大二郎他編著 2000『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 p15-16
- 19) 樋田大二郎 2000「おわりに 予見と失望と驚き」樋田大二郎・耳塚寛明編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 p 220
- 20) 荻谷剛彦 2000「8 章学習時間の変化」樋田大二郎他編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 p152

- 21) 荻谷剛彦 2000 「8 章学習時間の変化」 樋田大二郎他編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 p158-161
- 22) 門脇厚司 1999 『子どもの社会力』岩波書店
- 23) 筆者も子どもの居場所について研究をしてきた。フリースクールについては沖田寛子 1997 「不登校現象と子どもの『居場所』」『山口大学文学会志』第 48 巻山口大学文学会 p17-35、沖田寛子 1998 「欧米と日本におけるフリースクールの比較研究」『社会分析』日本社会分析学会第 25 巻 115-128 を発表し、社会教育における野外体験活動（夏休みを利用したキャンプ）については沖田寛子 1999 「野外教育活動の実践と課題」『社会分析』第 26 巻日本社会分析学会 p193-206 を発表している。
- 24) 新谷周平 2004 「ストリートダンス体験と居場所・社会つながり」子どもの参画情報センター編『居場所づくりと社会つながり』（子ども・若者の参画シリーズ I）萌文社 p186-194
- 25) 同 上 p195-200
- 26) 荒川（田中）葉 2000 「5 章学習指導組織・進路指導組織」 樋田大二郎他編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 p100
- 27) 耳塚寛明 2000 「4 章進路選択の構造と変容」 樋田大二郎他編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 p 79-80
- 28) リクルートは、2007 年 3 月高校卒業の男女 50000 人を対象として質問紙による郵送法で 2007 年 3 月～4 月に実施している。在籍高校所在地は埼玉、千葉、東京、神奈川、愛知、京都、大阪、兵庫の 1 都 2 府 5 件である。有効回答数は 9872 名で回収率は 19.7%であった。1999 年にも同様の調査が実施されている。リクルート 2007 「進学センサス 2007 高校生の進路選択に関する調査」を参照。
- 29) 山口大学アドミッションセンター2006 「山口大学大学進学時調査 2006」
山口大学アドミッションセンター2007 「山口大学大学進学時調査 2007」を参照。
- 30) 荒牧草平 2001 「第 3 章高校生にとっての職業希望」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 p103

第4章 実証的先行研究にみる若者の自己意識と職業意識

第1節 若者の自己意識と対人関係に関する研究

1 若者の自己意識

現代若者は新自由主義の教育改革のもとで、「個性」が重視されている。「個性」は社会化の過程の中で他者との比較の中から磨かれ形成されていくもので、個人は「個性」を形成するために努力しなければならない。しかし、現在の若者が求めている「個性」は、他者とのかかわりの中から磨かれて形成されたものではなく、自己の内面から生み出されるかのようにとらえられる傾向にあり、閉ざされていると片瀬は指摘する¹⁾。

自己論と地位達成過程の研究の接続という点では、高橋ら(1995)や浅野ら(2006)、辻大介(2004)の研究が若者の自己意識を実証的に分析している。高橋らは、「自分には自分らしさというものがあると思う」という質問文を用いて、「自分らしさ」の意識の実態を明らかにしている(表4-1-1)。全体の約9割という圧倒的多数の若者が「自分らしさ」の存在を肯定した。若者にとって、何らかの自己のイメージをもつことは当然なものとなっているといえる。また、「自分らしさ」という言葉は「個性」につながる言葉であり、「個性」が若者に求められている結果と考えられる。

その中で、芳賀学²⁾は若者の「自分らしさ」がどれだけ生活の中で実現されているのかを理解するため、生活自体への満足度や自分自身への評価との関連を分析している。その結果、「自分らしさ」を肯定する人が現在の生活に満足しており、「自分らしさ」を肯定する人ほど自分自身を肯定的に評価していることを明らかにしている。

表4-1-1 「自分らしさ」の意識

肯定派	994人	積極的肯定	「そう思う」	547人	49.1%
	89.3%	消極的肯定	「まあそう思う」	447人	40.2%
否定派	119人	消極的否定	「あまりそう思わない」	111人	10.0%
	10.7%	積極的否定	「そう思わない」	8人	0.7%

(出所) 芳賀学「1章青年の価値志向—自己評定と自己表出を中心として」高橋勇悦監修『都市青年の意識と行動』恒星社厚生閣1995年 p28

岩田考³⁾は若者の自己意識の変容を明らかにするために、「自分らしさ」「自己の状況性」「自己の喪失感」「自己一貫」「自己肯定感」に

表4-1-2 自己意識と質問項目

自己意識	質問項目
自分らしさ	自分には自分らしさというものがあると思う
自己の状況性	場面によってでてくる自分というものは違う
自己喪失感	自分がどんな人間かわからなくなることがある
自己一貫	どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切である
自己肯定感	今の自分が好きか嫌いか

関する自己評価(表4-1-2)を分析している。この自己意識に関する5項目について、1992

年と 2002 年の比較で変化がみられたのは、「自己一貫」「自己肯定感」「自分らしさ」の 3 項目で、「自己の状況性」と「自己喪失感」の 2 項目では変化がみられなかった (表 4-1-3)。変化があった「自己一貫」、「自分らしさ」は低下し、「自己肯定感」は高まっていた。しかし、「自己一貫」の低下に対して、アイデンティティの未確立状態として指摘されるような「自分がどんな人間かわからなくなることがある」という「自己喪失感」の肯定率が高まっているわけではなかった。

表 4-1-3 自己意識の変容

	1992年 の肯定 率(%)		2002年 の肯定 率(%)	Somers' d
自分には自分らしさというものがあると思う	89.3	↓	85.9	-0.115 **
場面によってでてくる自分というものは違う	75.2		78.4	0.034 n. s.
自分がどんな人間かわからなくなることがある	43.0		45.9	0.039 n. s.
どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切	69.2	↓	55.8	-0.161 **
今の自分が好きか嫌い	66.5	↑	70.5	0.052 *

ソマーズの d は、1992 年に 1、2002 年に 2 の値を与え、自己意識の各項目は肯定的回答から順に 4~1 の値を与え、調査時点を独立変数として算出。

(出所) 岩田考 2006 「若者のアイデンティティはどう変わったか」 浅野智彦『検証・若者の変貌 失われた 10 年の後に』勁草書房

また、岩田は 2002 年と調査の自己意識に関する 10 項目を因子分析し、自己複数性因子、自己拡散因子、自己一貫志向因子の 3 つに分類した。自己拡散因子とは別に自己複数性因子がみられたことは、自己の<同一性-拡散>軸とは別に自己の多元性に関わる軸が存在していることを示唆しており、自己拡散と自己の多元性とは同一視できないと指摘している。また、自己多元や自己拡散の若者はエゴをむき出しにした自己中心性を持っているわけでもなく、問題とされるような規範意識や就労意識を持っているわけでもないと説明している。

これらの結果から、浅野⁴⁾は現代の若者の変化として「自分らしさ志向」「自己の多元化」「開かれた自己準拠」の 3 つを指摘している。「自分らしさ志向」について、現在の若者は「自分らしさ」を求められるため、社会の流動性に対処するために「自分らしさ志向」を持っており、若者の戦略の一つになっている。この戦略を採用しない者もいるが、多くの若者が「自分らしさ」戦略を採用していることから、「自分らしさ」を探し求めるべきであるという圧力に恒常的にさらされていると説明する。

また、「自己の多元化」については、自己というものが必ずしも一貫した同一的なものとしてとらえられなくなりつつあり、このことは誠実さや真摯さの欠如ではなく、むしろ逆に一人一人の若者が自分たちの属するさまざまな関係に対して誠実かつ真摯に対応してきた結果であると説明する。

さらに、「開かれた自己準拠」については、若者が「自分らしさ」を基準として物事を考え、自分らしさを多元的なものとしてみる姿勢を呼ぶ。このスタイルの中に、若者が今日の社会を生き延びていくための有効な手が見出すことができると説明している。

辻大介も現代若者の自己意識の変容を明らかにするために 2003 年に首都圏 30km 内に在住し、親と同居する 16~17 歳を対象に調査を行っている。辻の自己意識に関する調査項目

は、浅野・岩田の質問項目（表 4-1-2）を参考にして表 4-1-4 のとおり設定している。また、便宜的に、3) を肯定回答した場合をアイデンティティ「不定型」、3) を否定・5) を肯定した場合を「多元型」、両者とも否定した場合を「一元型」として、自己意識を 3 つに分類している（表 4-1-5）している。

表 4-1-4 自己意識に関する設問項目と単純集計結果

	(単位%)		
	はい	いいえ	NA
1) 私には自分らしさというものがある	83.5	15.2	1.3
2) どんな場面でも自分らしさをつらぬくことを大切にしている	56.8	41.6	1.6
3) 自分がどんな人間か、はっきりわからない	49.4	49.1	1.6
4) どこかに今の自分とは違う本当の自分があると思う	51.9	46.3	1.8
5) 本当の自分は一つとはかぎらないと思う	72.6	25.6	1.8
6) 話す相手によって本当の自分と偽の自分を使い分けている	46.0	52.5	1.6
7) 話す友だちによって、自分のキャラ(性格)が変わることがよくある	39.0	60.7	0.3

表 4-1-5 自己意識の型

	男子	女子	全体
不定型	44.6	56.1	49.9
多元型	36.3	35.3	35.8
一元型	19.1	8.7	14.3

(出所) 辻大介 「若者の親子・友人関係とアイデンティティ 16～17 歳を対象としたアンケート調査の結果から」『関西大学社会学部紀要』35 巻 2 号 2004 147-159

この 3 つの型と、型を分類するために用いた自己意識の質問 3) と 5) を除いた他の質問項目との関連をみたものが、表 4-1-6 である。「多元型」は、「一元型」と同水準の「自分らしさ」の感覚をもち、むしろ「一元型」よりも高くなっている。この点から、「多元型」は「一元型」と同様の安定した自己意識をもっているとみなすことができ、「不定型」（アイデンティティの未確立）とは区別されるべきものと言えると指摘している。ただし、「多元型」は、4) 「どこかに今の自分とは違う本当の自分があると思う」や、6) 「話す相手によって本当の自分と偽の自分を使い分けている」については、値が「不定型」と「一元型」の中間を示されており、これらの面では「一元型」よりも自己意識の不安定につながるところもあるも指摘している。

表 4-1-6 自己意識の型とその他の自己意識の関連

	不定型	多元型	一元型
1) 私には自分らしさというものがある	74.2	95.6	92.6
2) どんな場面でも自分らしさをつらぬくことを大切にしている	45.0	73.3	63.0
4) どこかに今の自分とは違う本当の自分があると思う	67.7	44.4	22.2
6) 話す相手によって本当の自分と偽の自分を使い分けている	56.8	41.0	25.9
7) 話す友だちによって、自分のキャラ(性格)が変わることがよくある	49.2	31.9	24.1

(出所) 辻大介 「若者の親子・友人関係とアイデンティティ 16～17 歳を対象としたアンケート調査の結果から」『関西大学社会学部紀要』35 巻 2 号 2004 147-159

現代の若者は自己肯定感が低下しているといわれているが、浅野らの16歳から29歳の若者調査では、若者の自己肯定感は、表4-1-7のように1997年よりも2002年が高くなっており、2002年は約7割が自己肯定感を持っていた。

しかし、愛知県総合研究センターが愛知県の小学校、中学校及び高校の児童、生徒を対象として2005年に実施した「体験や行動の実態、規範等に関する意識調査」⁵⁾では自己肯定感は低下している。この調査では、自己肯定感を1)「自分自身のことが好きである」(図4-1-1)、2)「自分自身によいところがある」(図4-1-2)、3)「人の役に立っている」(図4-1-3)からとらえている。それぞれの回答は、小学2年時では6割近くが肯定的回答をしているが、中学3年生まで学年が進むにつれて低下し、以降少しずつ肯定的回答が回復している。特に、小学4年生から小学6年生、小学6年生から中学1年生における低下の割合が大きいという結果になっている。

この愛知県の調査結果から、浅野らの若者調査では年齢層が高く、自己肯定感が回復しているものと考えられる。中学校、高校生の時期にある若者は自己肯定感が低いといえる。

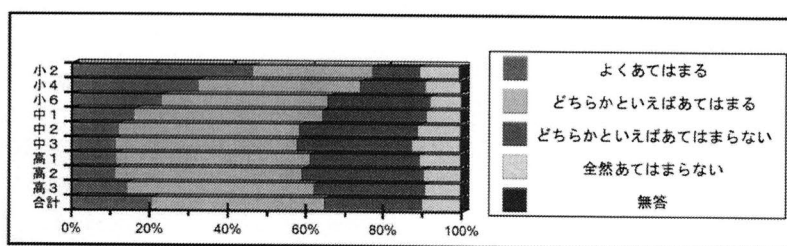


図4-1-1 「自分自身のことが好きである」

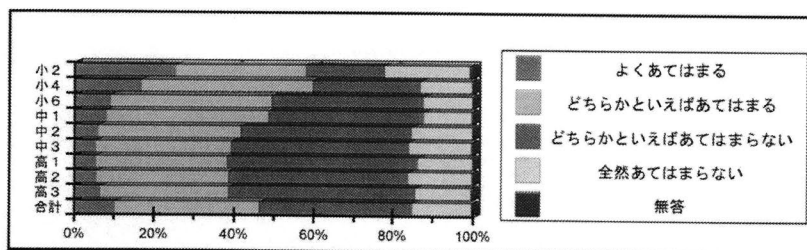


図4-1-2 「自分自身によいところがある」

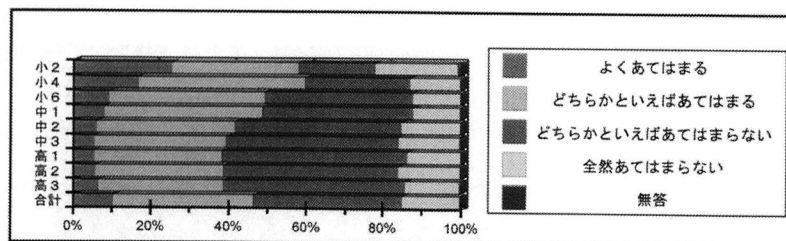


図4-1-3 「人の役に立っている」

(出所) 愛知県総合教育センター小久保清隆他「豊かな心の育成を目指す指導の在り方に関する研究」『愛知県総合教育センター研究紀要 第95集』愛知県総合教育センター 2006年

2 若者の自己意識と対人関係

高橋らの研究において、芳賀は「自分らしさ」は個人がどのような条件のもとにある時に感じられるのかを明らかにするために、自分を見失う経験（挫折経験）と身近な人間関係の2つの条件との関連を分析している⁶⁾。その結果は、挫折経験に多くさらされた人は「自分らしさ」が不確かなものとなっており、挫折した経験が少なければ少ないほど、「自分らしさ」をもっていると認識していた。また、身近な人間関係については、友人数が多く、親友がいる人が「自分らしさ」をもっていると認識していた。

しかし、芳賀はこの2つの条件は、「自分らしさ」をめぐってお互い独立かつ相補いあう性質をもち、「自分らしさ」の確かさとは、個人の持つ情緒的な人間関係のヒーリング効果と否定的な経験の衝撃力とのバランスの上に成り立っていること、また、「自分らしさ」にこだわることは挫折経験を増やすことを指摘している。

つまり、たとえ挫折経験に多くさらされても人間関係のネットワークが緊密につくられていれば、そのダメージはかなり弱められる。逆に、ネットワークが著しく弱ければ、それほど強くない挫折経験でも「自分らしさ」は致命的なダメージを受けることになる。また、「自分らしさ」にこだわり「自分らしさ」を持つことは、多様な生き方をする人々の中で自分と考え方や生き方が異なる人々と生活することになる。そこでは他人から非難されることも多くなる。さらに、さまざまな生き方をする他者の中で暮らすことは、他人の生き方がうらやましく見えたりすることが頻繁に起こる。そのため、挫折経験も増えるという。

また、芳賀は、若者は他者からの承認やそれを受けての安心感が必要だからといって、無防備に友人関係の距離を詰められず、つかず離れずの関係を維持していると指摘する。「自分らしさ」を追求すること自体が、逆に「自分らしさ」の確定を妨げる現象を生じさせており、本音を明かしあう友情や愛情という情緒的な友人関係を手に入れることも困難にしがちであると、若者が「自分らしさ」を追求することのパラドックスを説明している。

土井隆義も若者の自己意識と若者の友人関係の難しさを指摘している⁷⁾。現代若者は同質的な仲間と感覚的な好悪によって閉じた親密圏を作るため、対他的に見出される契機を自分の個性として育てていくことが困難になっているにもかかわらず、社会から「個性」を求められたため、自分の個性を内閉的な自我の内側に発見しなければならなくなり、磨けば光るダイヤモンドの原石のようなものが自分の内部に備わっているはずだと自分探しをしていると指摘している。しかし、若者の個性は自分の内部にはなかなか見つからず、焦燥感がつり、若者は絶えずコミュニケーション不全の感覚に悩まされているという。

また、現代若者は優しい関係への希求が非常に強いので、それを乱す空気が読めない者を憎悪する。しかし、互いの内面に深入りしない外面上の優しい関係の裏で、内心ではこの自分を見てほしいという他者からの承認を強く求めている。このギャップが大きく、若者はコミュニケーションの不全感に悩まされ、孤独と無力の思いを深めると説明

している。さらに、現代の情報化社会ではつねに他者と客観的に比較され、偏差値化・相対化されるため、強い自己肯定感を持つことはできないと説明している⁸⁾。

土井の指摘は「個性」が求められている現代若者の自己意識の形成と、友人関係の在り方を的確に指摘しているが、土井の指摘は実証的なデータに基づく指摘ではない。この指摘を明らかにすることができる実証研究として浅野らの研究がある。

浅野の若者の自己意識や友人関係の変容を明らかにする実証研究の理論的背景には自己論や構築主義の理論がある。浅野は、自らの研究方法を「自己への物語論的アプローチ」⁹⁾と呼んでいる。「自己への物語論的アプローチ」とは、1950年代に誕生した家族療法の物語論を社会学的自己論に書き換える試みである。また、浅野自身はこのアプローチを構築主義とは区別しているが、「自己」が物語を通して生み出されるとみる点で構築主義の考え方と共通している。

浅野は「自己への物語論的アプローチ」をベースにし、高橋らの研究グループの中で、1992年の東京・神戸のアンケート調査データを用いて若者の友人関係の志向を分析¹⁰⁾し、因子分析によって「遠心志向因子」、「求心志向因子」、「状況志向因子」の3つに分類している。「遠心志向因子」とは社交的と呼ばれるようなタイプ、「求心志向因子」とは友人づきあいが少なくどちらかといえば「内向的」な人のことで、「状況志向因子」とはつきあいの程度に応じて異なる顔を見せることができるといった複数の自己を使い分ける能力が相対的に高い、複数の友人関係が相互に重なり合わないよう隔離されているために相手の不信を招くことなく複数の自己の使い分けが可能になる、いつも相手に対してクールに距離をとっているだけではなく、相手との関係に没入し、熱中して話をする機会も相対的に多いという特徴を持つ人である。

この3つの因子のなかで、「状況志向因子」の因子得点は、「場面によってでてくる自分というものは違う」「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切だ」「自分がどんな人間かわからなくなることがある」「自分には自分らしさというものがあると思う」などの自己意識と有意に相関していた。浅野は現代若者の友人関係の特徴はこの「状況志向因子」とし、状況志向型の人にとっての自己は、ひとつの自己イメージによってはとらえきれないものであり、場面ごとに出てくるいくつもの自分のどれもがそれぞれに自分らしいのであるとし、現代若者の自己が「多元的な自己」であることを指摘している。

また、浅野は自ら研究グループをつくり、高橋らが実施した1992年調査と比較できるよう同様の若者調査を2002年に実施している。その研究グループの福重清¹¹⁾は、若者の友人関係は本当に希薄化しているのかについて分析し、結果、現代若者の友人関係は希薄化ではなく、親密な関係を築き、その関係を使い分けていることを明らかにしている。

その分析によると、友人の量の変化では、2002年調査における「親友がない」は6.9%で、1992年調査より10.1%減少していた。友人との付き合い方は「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友達を使い分けている」65.9%が最も多く、友人関係の選択化がうかがえた。友人関係には社会化機能があることに注目して、親友に対して感じることを分析し、「真剣に話が

できる」79.3%、「自分の弱みをさらけ出せる」59.7%「一緒にいると安心する」56.9%と続いていることを示している。心理的安定化の機能が親友関係において担われていると見ることができることから、友人関係の希薄化論が危惧するような友人関係の社会化機能の低下という問題は、親友が一定程度を担っていると指摘している。

若者が親しい友人関係を構築する際にどのような点を重視しているのかについては、友人と親しくなる際に重視するという回答が多く挙げられた項目は「相手の考え方に共感できること」86.4%が最も高く、ついで、「相手と興味や関心が近いこと」82.1%であった。逆に重視するという回答が少なかった項目は、「相手の社会的な立場や地位が高いこと」6.0%、「相手の容姿や顔立ちが自分の好みであること」21.0%、「相手のファッションが自分の好みであること」25.1%であった。

福重はこれらの友人と親しくなる際に重視する項目について因子分析を行い、「内面的要素」「外面的要素」「属性的要素」「信用的要素」「ノリの要素」の5つに分類している¹²⁾(表4-1-7)。この分類結果で、親しい友人関係を構築する際に重視している点を見ると、「相手の考え方に共感できること」「相手と興味や関心が近いこと」は内面的要素の項目であった。逆に重視しない項目は外面的要素や属性的要素であった。

表 4-1-7 友人と親しくなる際に重視する点の因子分析結果

因子の内容	外面的要素	属性的要素	内面的要素	信用的要素	ノリの要素	肯定的回答の割合
相手の容姿や顔立ちが自分の好みであること	0.842	0.108	0.107	0.045	0.113	21.0%
相手のファッション(服装や髪型など)が自分の好みであること	0.766	0.105	0.182	0.080	0.062	25.1%
相手が同性であること	0.102	0.713	0.016	0.162	0.011	25.9%
相手の年齢が自分と近いこと	0.113	0.686	0.062	0.112	0.234	41.5%
相手の社会的な立場や地位が高いこと	0.291	0.262	-0.019	0.229	0.088	6.0%
相手と趣味や関心が近いこと	0.157	0.076	0.597	-0.016	0.133	82.1%
相手の考え方に共感できること	0.044	-0.018	0.581	0.118	0.023	86.4%
相手の本名(フルネーム)を知っていること	0.103	0.235	0.045	0.556	-0.050	48.6%
つきあいが長く続きそうだと思うこと	0.026	0.049	0.108	0.547	0.289	59.7%
その場その場でノリがよいこと	0.118	0.139	0.114	0.099	0.509	48.3%
負荷量平方和(分散の%) [計45.5%]	14.6%	11.5%	7.7%	7.3%	4.4%	

※因子抽出法：主因子法

※回転法：バリマックス法

※「相手の社会的な立場や地位が高いこと」は、第1因子の因子負荷量の方が若干大きいですが、ここでは内容的な観点から第2因子の構成要素として解釈している

※「肯定的回答の割合」は、「重視する」、「どちらかといえば重視する」という回答の割合の合計

(出所) 福重清「4章若者の友人関係はどうなっているのか」浅野智彦『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』2006:p132

友人関係に深入りしたくない人ほど「外面的要素」や「属性的要素」を重視しており、友達と納得いくまで話し合いをするような付き合いを求めている人は「内面的要素」を重視していることを明らかにし、今日の友人関係は、あるところでは人格的な信頼を求め、あるところでは傷つけあわないことを求めるといったそれぞれに居心地の良いさまざまな内容をもつ「親密」な関係を築き、使い分けていること、その「親密さ」がいくつもの多元的な要素の上に成り立っており、「親密さ」は「深い」対「浅い」でははかりえなくなってきたことを指摘している。

以上見てきたように、浅野らの研究では、若者の友人関係のあり方は自己意識の関連項目として質問がなされているが、親子関係についての設問はない。辻大介は、若者の自己意識と親子関係の分析の必要性を指摘し、2002年に首都圏30km内に在住する16～17歳を対象におこなったアンケート調査に親子関係の設問を組み込んで自己意識との関連を分析している¹³⁾。友人、親子のコミュニケーションを把握するために対面的なコミュニケーションだけでなく、電子的コミュニケーションとして携帯電話の電話利用とメール利用についても分析している。その結果、電子的コミュニケーションは友人との間では親和的だが、親子の間は疎遠にするツールであることを明らかにしている。

具体的には、辻は、性別を制御変数として、自己意識7項目(表4-1-8参照)と、親・友人との関係についての質問との偏相関値を算出している(表4-1-8)。「自分らしさ」の感覚がある者は、親・友人に対する被理解感や関係満足度が高い傾向にあるが、その自分らしさが明確な自己像を結ぶかどうかになると、友人関係面では有意な相関があまりみられず、むしろ親とのあいだで被理解感や信頼感が得られるかどうかのポイントになること、また、仮の自分感覚をもつ者や、本当／偽の自分を使い分ける者は、やはり親・友人との関係満足度がいずれも低い傾向がみられることを明らかにしている。

また、自己意識7項目と、親・友人とのコミュニケーション状況の偏相関値を計算している(表4-1-9)。自己像の不明確な者は、親に対して携帯電話にかけてきた相手の表示をみて出るかどうかなを選ぶ番通選択をおこなうことが多く、友人と「対面では話しにくいことでも、電話でなら話しやすい」「メールでなら書きやすい」という電子的コミュニケーションへの親和性が強い傾向にあること、また、携帯電話の効用として、「親が電話をとりつぐことがなくなって、友だちのことが親に知られなくなった」「家族といるときでも、友だちと話すことが増えた」を挙げることが多く、家族を疎隔するツールとして携帯電話を用いていることが明らかになっている。

さらに、辻は自己意識の3類型(表4-1-5の不定型・多元型・一元型)と、親・友人との関係およびコミュニケーション状況の関連を分析し(表4-1-10)、自己意識の「不定型」は、親子関係・友人関係のいずれについても、満足度や被理解感・信頼感などが低いこと、友人に対する場合に対面よりも電子的コミュニケーションに親和的で、携帯電話によって家族(親)を疎隔する傾向がみられること、「多元型」も友人との電子的コミュニケーションには親和的だが、親との関係満足や被理解感・信頼感が高いこと、携帯電話によって家族

(親)を疎隔する傾向も「不定型」よりは弱いことを明らかにしている。

表 4-1-8 自己意識と親・友人との関係の偏相関値 (制御変数：性別)

		1)自分らしさの感覚	2)自分らしさの一貫主義	3)自己像の不透明感	4)仮の自分感覚	5)多元的自己感覚	6)本当/偽の自分使い分け	7)キャラの切り替え志向
母親	関係満足度	0.12	0.15**	-0.19***	-0.21***	-0.12*	-0.15**	-0.08
	共通感	-0.02	0.04	-0.05	-0.09	-0.04	-0.02	0.00
	被理解感	0.09	0.08	-0.15**	-0.04	0.03	-0.05	0.02
	信頼感	0.10*	0.13*	-0.15**	-0.08	0.04	-0.07	-0.01
	「友だち親子」感	0.03	0.05	-0.03	0.01	0.13*	0.04	0.00
父親	関係満足度	0.07	0.09	-0.13*	-0.14**	-0.03	-0.09	-0.06
	共通感	0.07	0.01	0.00	0.08	-0.03	0.03	0.02
	被理解感	0.13*	0.21***	-0.12*	0.00	-0.02	-0.04	-0.10
	信頼感	0.10	0.17**	-0.17**	-0.08	-0.02	-0.17**	-0.09
	「友だち親子」感	0.01	0.07	-0.03	-0.05	0.13*	0.01	-0.03
友人	関係満足度	0.15**	0.14**	-0.17**	-0.16**	-0.05	-0.14**	-0.13**
	共通感	0.17**	0.15**	-0.02	0.07	-0.03	-0.08	-0.07
	被理解感	0.13*	0.21***	-0.04	-0.06	-0.01	-0.03	-0.06
	信頼感	0.00	0.20***	-0.05	-0.05	0.04	-0.19***	-0.14**
	友人数(10人以上/未満)	0.05	0.07	-0.01	-0.01	0.05	-0.11*	-0.04
	関係切り替え志向	-0.02	0.07	-0.02	-0.01	0.08	-0.09	-0.03
	ディスタンシング志向	0.00	0.00	0.03	0.00	-0.04	0.05	-0.06
	マサツ回避志向	-0.12*	-0.11*	0.07	0.03	-0.03	0.17**	0.18***
ノリ志向	-0.03	-0.04	0.06	-0.01	-0.02	0.06	0.08	

(* p<.05, ** p<.01, *** p<.001 の有意性を示す)

表中で、「共通感」に対応する設問文は「ものの考え方や感じ方が似ている」、「被理解感」はその相手が「私の考え方や感じ方をよく把握している」、「信頼感」は「どんな困ったことでも、きっと助けてくれる」、「友だち親子」感は「親というより友だちのような存在だ」、「関係切り替え志向」は「場合に応じて、いろいろな友だちとつきあうことが多い」、「ディスタンシング志向」は「プライベートなことには深入りしたくない」、「マサツ回避志向」は「互いを傷つけないようにできるだけ気を使う」、「ノリ志向」は「重要なのは話の中身よりノリが合うこと」

(出所) 辻大介 「若者の親子・友人関係とアイデンティティ 16~17歳を対象としたアンケート調査の結果から」 2004 『関西大学社会学部紀要』35巻2号, pp.147-159

表 4-1-9 自己意識と親・友人との関係の偏相関値 (制御変数：性別)

		1)自分らしさの感覚	2)自分らしさの一貫主義	3)自己像の不透明感	4)仮の自分感覚	5)多元的自己感覚	6)本当/偽の自分使い分け	7)キャラの切り替え志向
母親	対面会話	-0.04	0.00	-0.06	0.02	-0.04	-0.06	-0.08
	携帯通話	0.06	0.00	-0.03	-0.12*	-0.05	-0.03	-0.01
	メール	-0.03	-0.05	0.02	0.04	0.13*	0.02	0.17**
父親	対面会話	0.01	0.13	-0.07	-0.02	-0.05	-0.09	-0.06
	携帯通話	-0.03	0.00	-0.03	-0.08	-0.10	-0.02	-0.06
	メール	0.01	0.06	0.05	0.04	-0.01	-0.03	0.06
友人	対面会話	-0.05	-0.01	0.02	0.09	0.11*	-0.06	-0.08
	携帯通話	-0.05	0.06	-0.03	-0.06	0.01	-0.01	0.01
	メール	0.01	0.13*	-0.05	0.08	0.07	-0.04	0.00
携帯電話利用の有無		-0.01	0.01	0.00	0.04	0.10*	-0.03	0.00
メール利用の有無		-0.02	-0.02	-0.03	-0.04	-0.03	-0.01	0.00
番通選択(親)		-0.09	-0.01	0.11*	0.17**	0.10	0.17**	0.09
番通選択(友)		-0.10	-0.10	0.03	0.05	0.09	0.12*	-0.03

携帯の束縛感（親）	-0.06	-0.05	0.01	0.13*	0.00	0.11	0.01
携帯の束縛感（友）	0.02	0.13*	0.00	0.15*	0.00	-0.04	-0.09
携帯は話しやすい（親）	-0.11	0.06	-0.02	0.03	-0.13*	-0.07	-0.05
携帯は話しやすい（友）	-0.02	0.03	0.13*	0.21***	0.05	0.09	0.01
メールは書きやすい（親）	-0.01	0.05	0.08	0.07	0.03	0.06	0.07
メールは書きやすい（友）	-0.12*	-0.10	0.16**	0.22***	0.02	0.11*	0.13*
友人が親に知られなくなった	-0.13*	-0.01	0.15**	0.18**	-0.02	0.13*	0.10
外出・外泊しやすくなった	-0.07	-0.04	0.06	0.00	-0.06	0.08	0.00
家族といるときも友人と話す	-0.09	-0.01	0.16**	0.08	-0.06	0.07	-0.03

(* p<.05, ** p<.01, *** p<.001 の有意性を示す)

(出所) 辻大介 「若者の親子・友人関係とアイデンティティ 16~17歳を対象としたアンケート調査の結果から」
2004 『関西大学社会学部紀要』35巻2号, pp.147-159

表 4-1-10 自己意識の類型と親・友人との関係

	不定型	多元型	一元型	
母との関係満足	47.1%	63.2%	69.8%	**
母との被理解感	64.0%	77.4%	77.4%	*
母との信頼感	74.7%	88.7%	79.2%	**
母との「友だち親子」感	26.9%	31.6%	13.2%	*
父との関係満足	35.1%	47.3%	52.8%	*
父との被理解感	34.2%	46.1%	50.9%	*
父との信頼感	64.2%	82.2%	75.5%	**
友との関係満足	39.7%	53.7%	61.1%	*
母とのメール（有）	42.9%	45.2%	23.1%	*
友人とのメール（頻度高）	51.0%	60.9%	38.5%	*
携帯電話利用の有無	84.0%	87.4%	72.2%	*
携帯は話しやすい（友）	42.9%	34.8%	15.4%	**
メールは書きやすい（友）	76.3%	62.6%	53.8%	**
友人が親に知られなくなった	57.3%	44.0%	35.9%	*
家族といるときも友人と話す	34.4%	19.8%	21.1%	*

(χ^2 検定により * p<.05, ** p<.01, *** p<.001 の有意差を示す)

3 若者の自己意識とコミュニケーションツール

以上のように、辻は若者が利用するメディアとして携帯電話の利用に注目しているが、若者が利用しているメディアは携帯電話だけでなくさまざまなものがあげられる。高橋らの1992年調査では、若者のメディア利用を明らかにするために、質問項目はテレビ、ラジカセ、電話、ヘッドホンステレオ、ステレオ、ビデオ、ビデオカメラ、テレビゲーム、パソコン、ワープロ、漫画をあげている。浅野らの2002年調査では、テレビ、テレビゲーム、携帯電話、固定電話、インターネットに絞って質問している¹⁴⁾。

浅野らの調査における若者のメディア利用の実態をみると、テレビの利用率が9割で最も高く、携帯電話の利用率は約8割、インターネットの利用率は約7割と高い。若者のメディア利用は携帯電話やインターネットといった他者との関係を作り出すことの可能なメディア利用が中心となっている¹⁵⁾。

平成 20 年度の情報通信白書では、インターネットの利用状況と携帯電話を用いたインターネットの利用状況を世代別に明らかにしている¹⁶⁾。これをみると、世代別のインターネット利用（図 4-1-4）は 13 歳から 19 歳以下は 9 割以上が利用しており、携帯電話でのインターネット利用（図 4-1-5）も 19 年度には 13 歳以上 19 歳以下でも約 8 割に上っている。

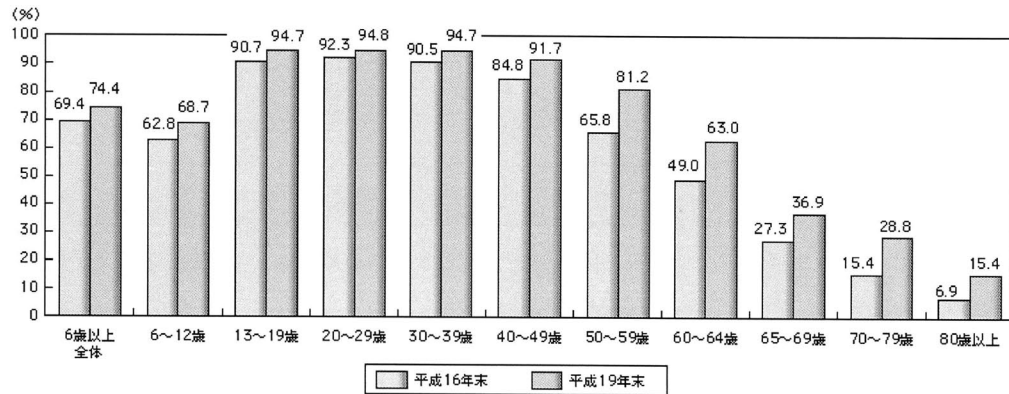


図 4-1-4 世代別インターネットの利用状況
（出所）平成 20 年版 情報通信白書 第 3 章

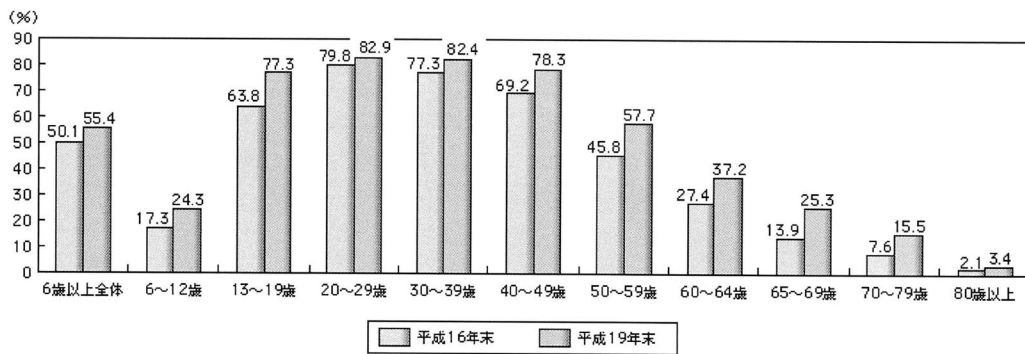


図 4-1-5 世代別携帯電話インターネットの利用状況
（出所）平成 20 年版 情報通信白書 第 3 章

博報堂が 2003 年 11 月に実施した「10～30 代男女の携帯電話利用状況調査」¹⁷⁾によると、高校生は 86.6%が携帯電話を保有している（図 4-1-6）。メール機能と通話機能の 1 日の利用頻度について（図 4-1-7）みると、高校生はメールの利用頻度が通話に比べて高い。また、

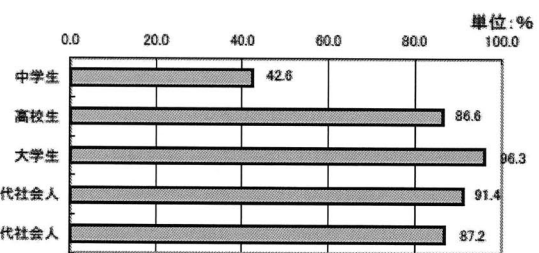


図 4-1-6 携帯電話・PHP いずれかの保有率

1日に10件以上もメールのやり取りをしている高校生が41.0%もいる。高校生にもなると多くの者が携帯電話を保有し、多くの者がメール機能を用いて、他者と頻繁にメールのやり取りをしている状況にある。

若者はさまざまな情報をインターネットや携帯サイトで入手する

ことができるようになった。就職情報、進学情報もインターネット等を利用する時代である。しかし、情報を得るだけでなく、メールを送受信したり、これらのメディアを用いて会話をしたりすることができるため、若者のコミュニケーションツールとして広く浸透している。

浅野らの2002年調査において「親友や仲のよい友達と知り合った場所」を質問したところ、「インターネットや携帯電話のサイトで」と回答した人が多くはないが4.6%存在していた。インターネットや携帯電話は顔見知りではない新たな友人関係を作り出すツールとして重要性を持ってきている。浅野は、現代の若者は友人数という量的な意味で友人が増大しているだけでなく、インターネットや携帯電話のサイトを利用することによって、友人関係が多チャンネル化していると指摘している¹⁸⁾。

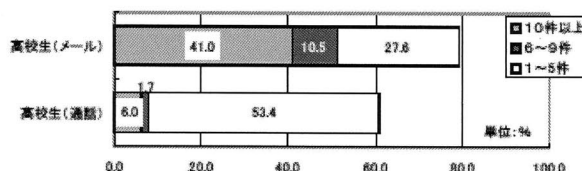


図4-1-7 メール機能と通話機能の1日の利用頻度
(出所) 博報堂「10~30代男女の携帯電話利用状況調査」
2004

第2節 若者の職業意識と対人関係に関する研究

1 若者の職業意識

片瀬は、若者の職業意識が専門職を志向していることを実証研究により明らかにしている¹⁹⁾。将来の職業的地位に向けての志望は、男子の1位は1986年・1994年・1999年調査全て「技術者」、2位は、1986年・1994年は「教員」、1999年は「音楽家・舞台芸術家・職業スポーツ家」(1986年5位6.5%、1994年4位10.0%、1999年20.6%)である。女子の1位は1986年「教員」、1994年・1999年は「医療保健技術者(多くが看護師)」、2位はどの年度も「その他の専門的・技術的職業従事者(多くが保育士)」である。男子も女子も同様に「音楽家・舞台芸術家・職業スポーツ家」の志望者が増大したことから、新たな職業アスピレーションの変動とみなしている。

また、「高い地位につくこと」という地位達成の重視度を初職の希望別に分析し、男女とも時点を追うごとに概ね低下(図4-2-1、図4-2-2)していることを明らかにしている。これに対して、「打ち込めることを持つこと」という自己実現の欲求の重視度は男子の専門職志望者だけが高いわけではないが、女子の専門職志望者は3時点を通じて他の初職希望よりも高くなってきており(図4-2-3、図4-2-4)、特に女子において「自己実現」の欲求が専門職アスピレーションと結びついていることを明らかにしている。

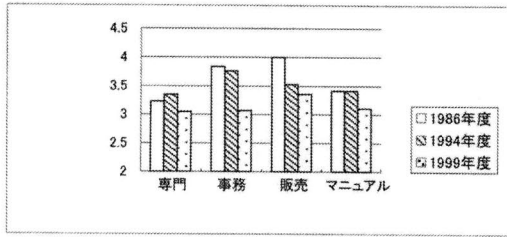


図 4-2-1 男子の初職の希望別地位達成重視度
(出所) 片瀬一男 2005 p150

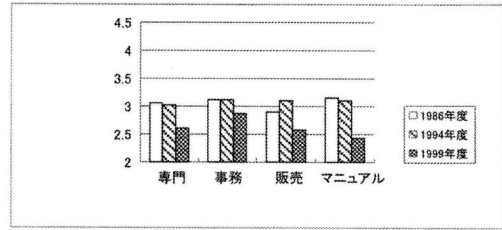


図 4-2-2 女子の初職の希望別地位達成重視度
(出所) 片瀬一男 2005 p151

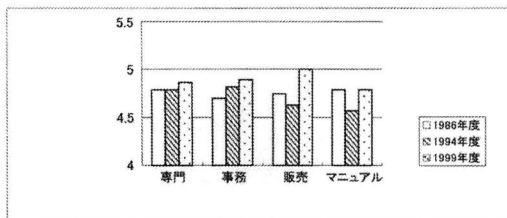


図 4-2-3 男子の初職の希望別「自己実現」の欲求
(出所) 片瀬一男 2005 p152

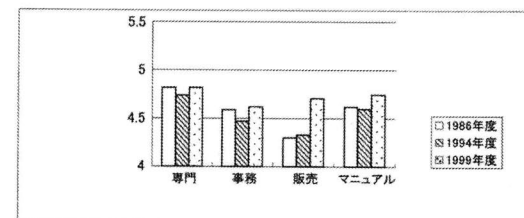


図 4-2-4 女子の初職の希望別「自己実現」の欲求
(出所) 片瀬一男 2005年 p153

尾嶋らの研究においても片瀬と同様に若者の職業希望は自己実現的な要素を内包した専門技術志向、技能志向の傾向にあることを明らかにしている。尾嶋らの研究の中で荒牧草平²⁰⁾は、若者の希望職業を「社会経済的な地位の高低」「専門性の発揮による自己実現の可能性の高低」という2つの概念軸を組み合わせて「専門・技術」「事務・管理」「サービス・技能」「販売・労務」の4

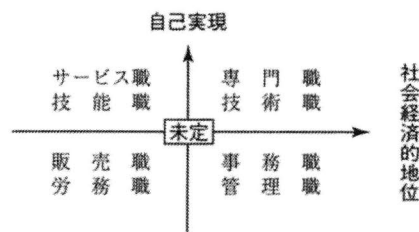


図 4-2-5 希望職種の種類

(出所) 荒牧「高校生にとっての職業希望」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 2001 p85

つに分類している(図 4-2-5)。この分類の「専門・技術」「事務・管理」はホワイトカラー系の職業であり、社会経済的な地位が高く、相対的に高学歴を必要とする。職業を通じた自己実現という観点から若者の職業希望をとらえると、自己実現の欲求の高い若者は、縦軸でプラスに位置する「専門・技術」「サービス・技能」のいずれかを希望する傾向にあると指摘している。

また、山口大学における若者の職業意識に関する調査研究²¹⁾においても、現代の若者は仕事に金銭的な充実を求めるとともに、「楽しさ」や「生きがい」といった精神面での充実を期待をもつという若者の姿を明らかにしている。

この調査研究において、若者の働く理由（図 4-2-6）は、「お金を得るため」の値が最も高く、次いで「生きがいのため」であった。また、仕事への期待（図 4-2-7）は「収入の安定」、次いで「楽しい」が最も高い結果となった。男女で比較すると、「収入の安定」は男女の差はみられないが、「楽しい」「能力を生かす」は女子の回答率が高く、「失業しない」は男子の回答率が高い。男子は女子よりも経済的な安定を仕事に期待していることが多い。

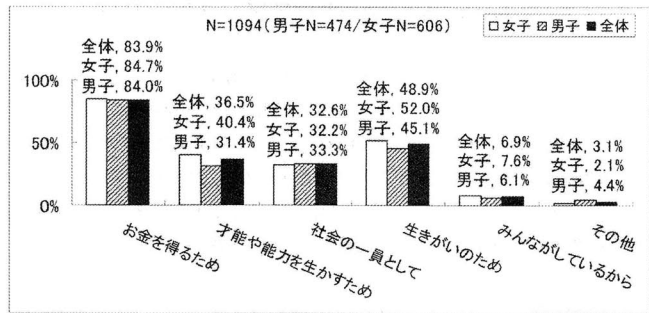


図 4-2-6 働く理由

(出所) 山口大学人文学部社会学研究室編「山口地域社会研究シリーズ 14 若者の職業意識にみる現代的課題—防府市における高校生と保護者調査にもとづいて—」山口大学人文学部社会学研究室 2008 p 14

将来の夢があるかという質問では、「はっきりとある」37.9%、「漠然とある」43.4%、「ない」17.8%、不明 0.9%であった。高校 3 年年の時点で自分の将来の目標を明確にもっているのは 4 割弱であった。「もしも希望する職業に就けなかった場合どのようにするか」という質問に対し、「他の仕事をしつつ希望の職を目指す」51.9%、「他の仕事に就く」39.0%、「仕事に就かず希望の職を目指す」5.7%、「仕事に就かない」1.3%、不明 2.1%であった。9 割の若者が他の仕事に就くと回答し、仕事に就かないとする若者は 1 割に満たなかった。

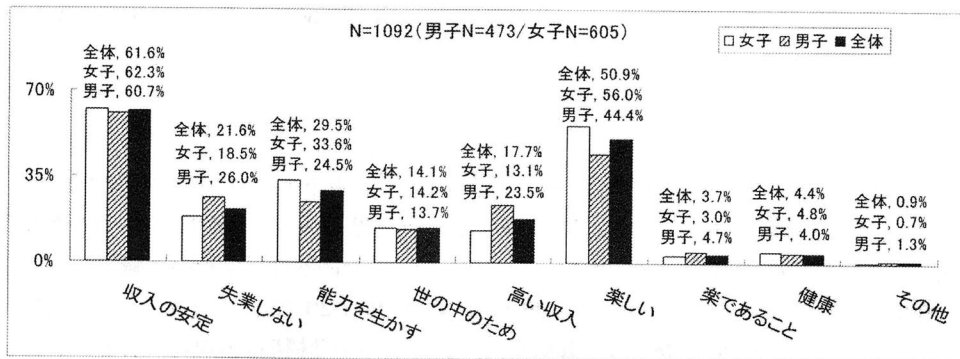


図 4-2-7 仕事への期待

(出所) 山口大学人文学部社会学研究室編「山口地域社会研究シリーズ 14 若者の職業意識にみる現代的課題—防府市における高校生と保護者調査にもとづいて—」山口大学人文学部社会学研究室 2008 p 14

ニートに対する認識(図4-2-8)としては、最も多い回答は「就職努力すべき」44.9%であり、次いで「ただの甘え」25.6%であった。ニートを容認しない考え方が70.5%にのぼり、若者の大半は働かない若者に対して批判的であることが明らかにされた。

つまり、この調査研究では、若者の職業意識として、仕事に金銭的な充実とともに、「楽しさ」や「生きがい」といった精神面

での充実にも期待を持ち、また、夢を大事にしながらも現実を重視している若者の姿、また、親を頼ろうとするよりも自分で事態を切り開こうと考えており、働かない若者に対して批判的な考えをもつ若者の姿を明らかにしている。

以上の若者の職業意識に関する先行研究により、現代の若者の職業希望は専門職の志望が強まっており、専門職志望の若者は「自己実現」の欲求が強く、仕事に金銭的な充実とともに、「楽しさ」や「生きがい」といった精神面での充実を期待する若者の姿が明らかになっている。

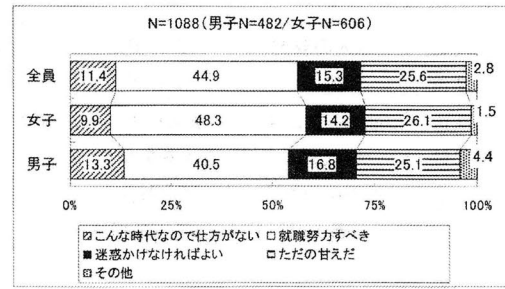


図4-2-8 ニートに対する認識

2 若者の職業意識と対人関係

山口大学人文学部社会情報論コースによる調査研究では、若者のニート状況に関連した要因として、対人関係、特に親子関係に注目している。若者の学校生活における対人関係では、若者は、学校行事への参加が積極的、授業態度がまじめ、友人数が多い人が学校生活を楽しんでいる(図4-2-9、図4-2-10、図4-2-11)。学校を楽しんでいる若者ほど将来の夢を持っている割合が高い(図4-2-12)。さらに、学校を楽しんでいる人は働く意欲の無い若者を否定する傾向に、楽しくないと思う人は肯定する傾向にある(図4-2-13)。そこで、友人に注目をして、友人数と友人との会話の積極性との関連(図4-2-14)をみると、積極的に話しかける「話し役」の人ほど友人数が多い。

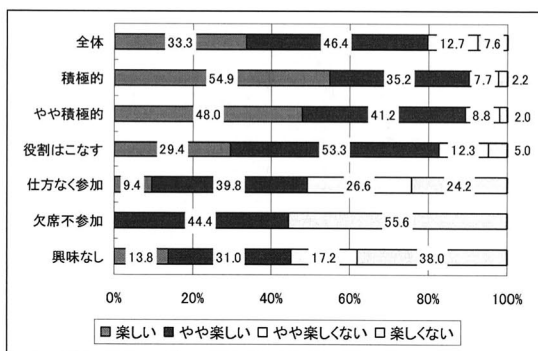


図4-2-9 学校行事参加と学校生活

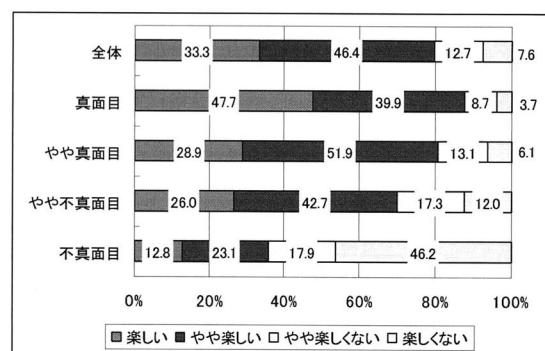


図4-2-10 授業態度と学校生活

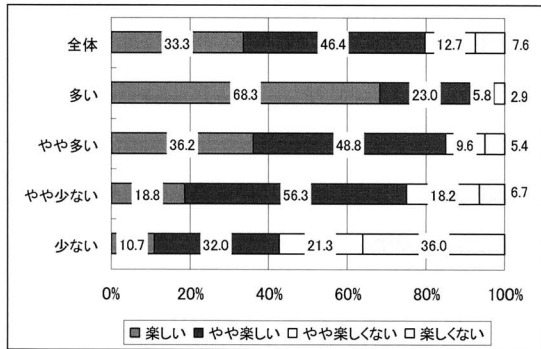


図 4-2-11 友人の数と学校生活

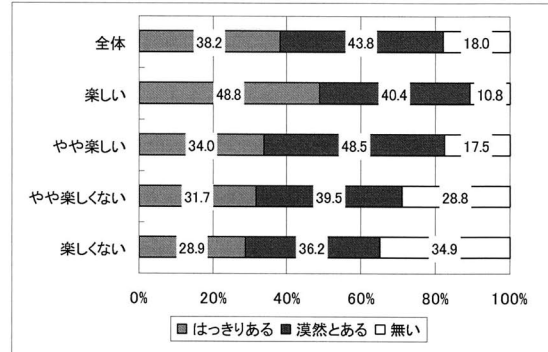


図 4-2-12 学校生活と将来の夢

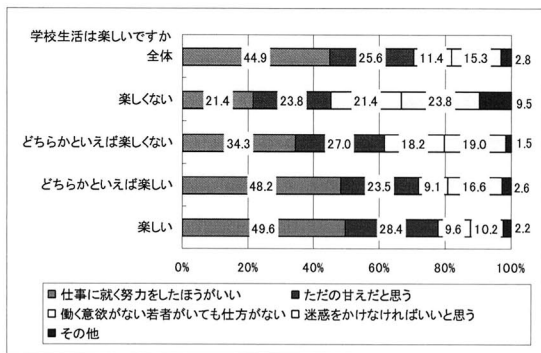


図 4-2-13 学校生活と働く意欲ない若者に対する意識

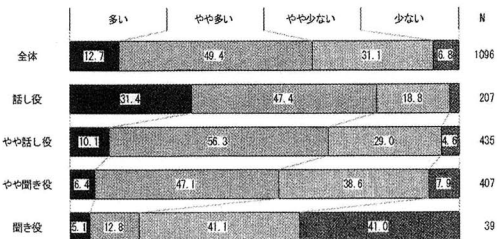


図 4-2-14 会話の積極性と友人数

(出所) 図 4-2-4～図 4-2-8: 林寛子 山口地域社会学会 2007年11月 学会発表資料

図 4-2-9 山口大学人文学部社会学研究室編「山口地域社会研究シリーズ14 若者の職業意識にみる現代的課題—防府市における高校生と保護者調査にもとづいて—」山口大学人文学部社会学研究室 2008 p 37

以上のことから、学校行事への参加や授業への参加といった社会参加、友人関係が積極的に良好に保たれている若者は将来に対して前向きであり、自立や社会性の獲得につながっていること、これに対して、社会参加、友人関係が乏しい若者は学校を楽しくないと思う傾向が強く社会的孤立ややる気の無さがみられること、学校生活の満足度の低さは、職業意識の低さにつながっていることが明らかである。

次に、若者の親の生活程度や子育て、親の職業意識などの調査結果から、親の所得格差やその差による子育ての違い、親子の職業意識の差を明らかにしている。具体的には、親の生活程度は、「中の中」が 58.5%で最も割合が高く、次いで「中の下」21.3%、「中の上」12.8%、「下」6.2%、「上」0.3%、不明 2.2%であった。また、「大学・短大卒業と専門学校卒業の保護者」のほうが「高校卒業・中学卒業の保護者」より生活程度が高く、学歴による所得格差がみられた。

親の教育アスピレーションをはかるものとして、①子どもを塾や習い事に通わせているか、②アルバイトをすることについて学力がおろそかになると考えているかどうか、について生活程度と学歴との関連を分析している。生活程度と子どもの塾や習い事(図 4-2-15)、

親の学歴と子どもの塾や習い事（図 4-2-16）では、親の生活程度が高く、学歴が高い家庭ほど子どもを塾や習い事に通わせている。また、生活程度と子どものアルバイトへの考え方（図 4-2-17）、親の学歴と子どものアルバイトへの考え方（図 4-2-18）では、生活程度が高く、学歴が高い家庭ほど子どもがアルバイトをすることについて「学業がおろそかになる」と考える傾向にあった。

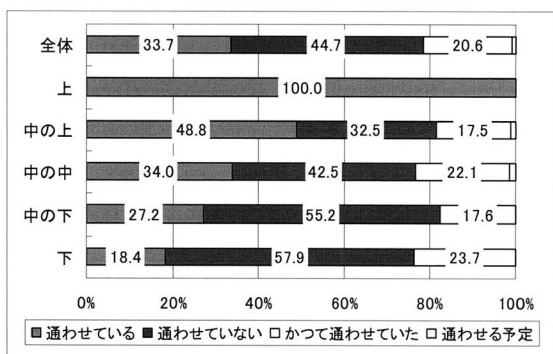


図 4-2-15 生活程度と塾や習い事

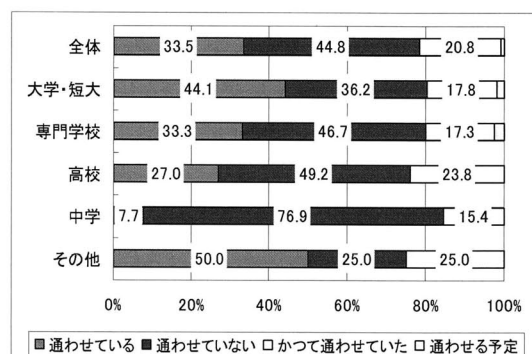


図 4-2-16 親の学歴と塾や習い事

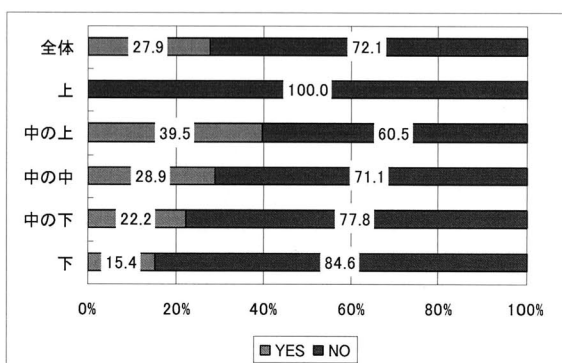


図 4-2-17 生活程度とアルバイトへの考え方
(アルバイトは学業がおろそかになる)

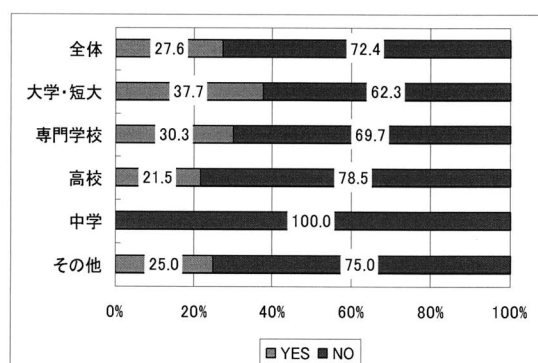


図 4-2-18 親の学歴とアルバイトへの考え方
(アルバイトは学業がおろそかになる)

子どもの塾や習い事の有無と、「アルバイトは学業がおろそかになる」という意識については、高校間の差がみられた。表 4-2-1 は、高校別に子どもの塾や習い事の有無と、「アルバイトは学業がおろそかになる」という意識についての単純集計を示したものである。高校を示す A のみが進学校である。進学校の保護者は子どもを塾や習い事に通わせており、アルバイトについて学業がおろそかになると考えている。

表 4-2-1 高校別 教育アスピレーション

	塾や習い事に通わせている	アルバイトをすれば学業がおろそかになる
A	68.2	44.5
B	28.9	30.8
C	31.8	30.6
D	7.1	10.0
E	18.7	18.3
全体	33.7	27.7

次に、子育ての実態について、子どもが幼少期の頃に商店などで物を欲しがるとわがままを言った時、どのように対処したのかを聞いている。結果は「厳しく叱って我慢させ

ていた」43.2%、「注意するが、あまりにも子どもが聞きわけない場合、あきらめて買い与えていた」36.7%、「買い与えていた」3.0%である。

この幼少期の子育てと子どもの将来についての期待の関連を分析している。その結果は、子どもを厳しくしつけた親ほど子どもが将来働く場所については比較的寛容で、厳しくしつけなかった親ほど防府市、山口県内で就職することを望んでいる傾向にある(図4-2-19)。また、厳しくしつけた親ほど子どもが好きな仕事に就けばよいと思っっているが、逆に厳しくしつけなかった親は、親が希望する職に就いて欲しいと願う傾向にある(図4-2-20)。この、子どもに対するしつけ方の違いは、親の学歴が影響していた。厳しくしつけた親は大学・短大卒が多く、厳しくしつけなかった親は高卒以下の割合が高い(図4-2-21)。

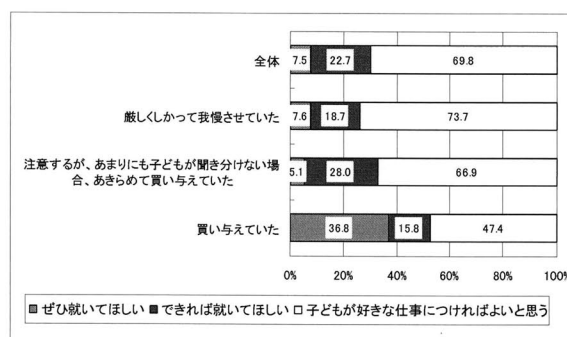
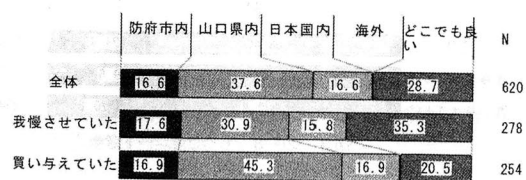


図4-2-19 しつけと子どもが将来働く場所

図4-2-20 しつけと親の希望する仕事

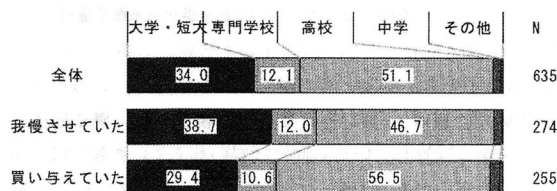


図4-2-21 しつけと親の学歴

その親の子育ての違いは、しつけだけでなく、子どもたちに対しての親の期待の伝達にも違いがあった。親が希望する仕事について欲しいと思う親ほど子どもの将来の仕事について子どもと話をよくしている(図4-2-22)。また、希望する仕事について親の考えを頻繁に伝えている(図4-2-23)。これに対して、子どもの好きな仕事に就ければ良いと思っっている親は、親が希望する仕事について子どもに伝えていない傾向にある。

ちなみに、親の期待を子どもへ伝達しているのはだれか、子どもの将来の仕事の話、親が希望する仕事の伝達の両親の頻度をみると、父親よりも母親のほうが子どもに伝えていることが明らかである(図4-2-24、図4-2-25)。

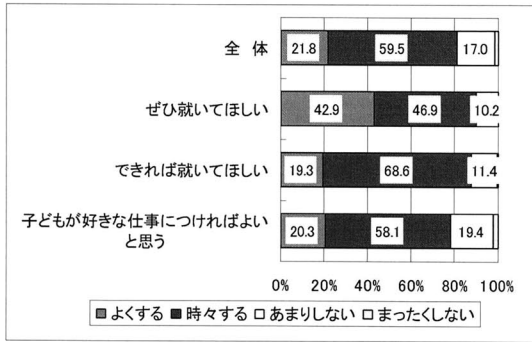


図 4-2-22 親の希望する仕事と子どもとの仕事の話

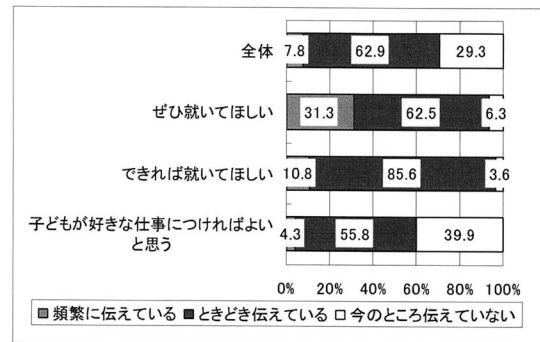


図 4-2-23 親の希望する仕事と希望する仕事の伝達

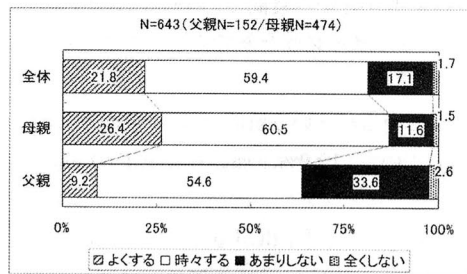


図 4-2-24 子どもの将来の仕事の話

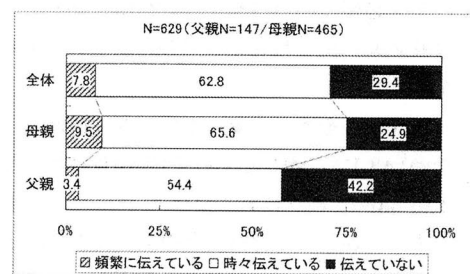


図 4-2-25 親が希望する仕事の伝達

親の職業意識として働く目的 (図 4-2-26) は「お金を得るため」が多い。仕事に期待することは、「収入の安定」68.6%が最も高く、次いで「専門知識や能力が活かせる」42.8%、「自分にとって楽しい」26.3%であった。現在の仕事にやりがいを感じているかについては「強く感じている」21.8%、「まあ感じている」60.3%で、8割以上の親が仕事にやりがいを感じている。収入は高くなくても安定していること、自分の能力を生かすことができ楽しければ、不満はなく、やりがいを感じているといえる。

また、親のニートに対する認識 (図 4-2-27) は、「仕事に就く努力をすべきだ」が最も多く、次いで「ただの甘え」であり、批判的な考えが9割にのぼる。

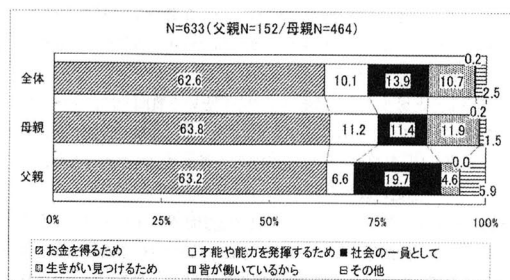


図 4-2-26 働く目的

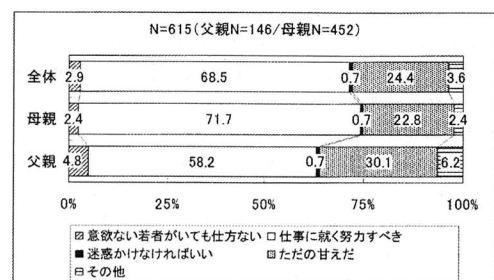


図 4-2-27 ニートに対する認識

仕事に就くために学歴が必要と思うかについては 73.1%が必要と考えている。この学歴に対する意識と親の実際の学歴との関連はみられない。仕事に就くためには学歴が必要とする意識と親が望ましいと思う仕事を分析してみる(図4-2-28)と、学歴が絶対必要だと思う親に高い収入が得られる仕事を望ましいと思う傾向があり、学歴は全く必要ないと思う親は達成感のある仕事を望ましいと思う割合が高かった。

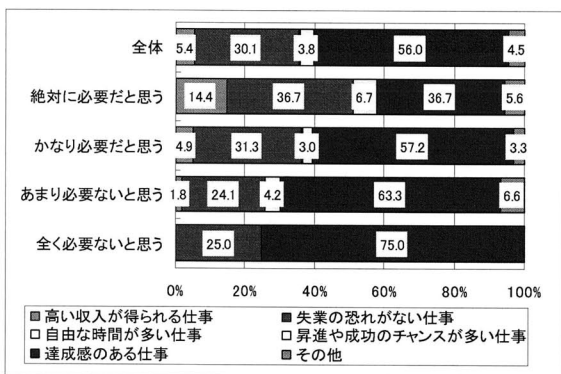


図 4-2-28 仕事に学歴が必要かどうかと親が望ましいと思う仕事

以上が親の子育ての在り方、職業意識である。ここで親の職業意識と若者の職業意識を比較してみると世代間の差が生じている。働く意欲の無い若者に対する意識の世代間の比較をみると(図4-2-29)、若者は保護者よりも働く意欲のない若者に対して肯定的である。また、学歴に対する意識の世代間の比較(図4-2-30)では、若者は職に就くのに学歴は必要と思う若者と、あまりそう思わない若者に二分されており、保護者よりも学歴が必要と思う割合が低くなっている。

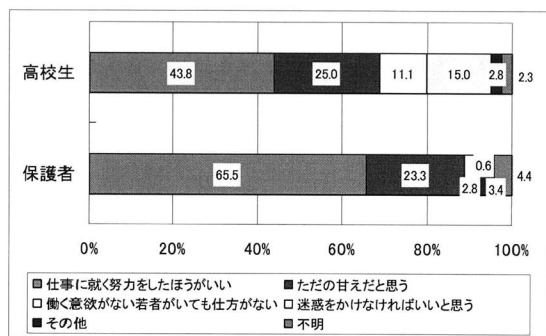


図 4-2-29 働く意欲のない若者に対する意識の世代間比較

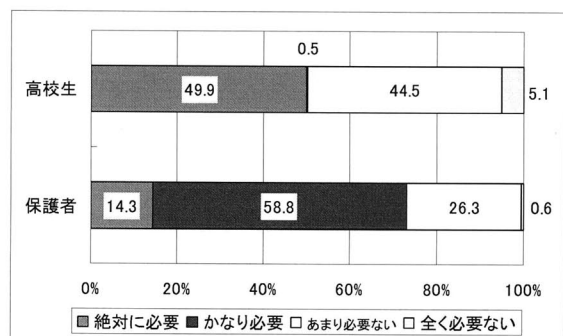


図 4-2-30 学歴に対する意識の世代間比較

仕事に期待することの世代間比較(図4-2-31)では、保護者は「収入が安定」していることや、「専門知識や能力の発揮」を求めるのに対し、若者は保護者よりも「楽しいこと」「高い収入を得ること」を求める傾向にある。

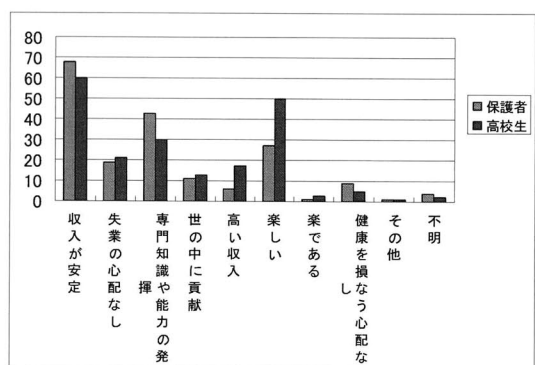


図 4-2-31 仕事に期待することの世代間比較

以上のように、親世代と若者世代には、職業意識の差が生じている。しかし、若者の職業意識は親をはじめとする対人関係か

ら職業意識を形成しているはずである。そこで、「若者の仕事をする理由」と「若者が仕事に期待している」ことについて親子関係の関連（表 4-2-2）をみると、保護者と日頃よく話をしている若者、保護者と仕事の話をよくしている若者ほど、仕事をする理由を「自分の才能や能力を発揮するため」「生きがいを見つけるため」と考える傾向にある。逆に保護者と日頃話をしない若者に「みんながしているから」と考える割合が高い。

表 4-2-2 保護者との会話と仕事をする理由

		お金を得るため		才能や能力を生かすため (*)		社会の一員として		生きがいのため (*)		みんながしているから	
		YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO
あなたは日頃保護者とよく話をしますか。	よく話す	84.1	15.9	43.0	57.0	34.2	65.8	55.7	44.3	6.6	93.4
	まあまあ話す	85.2	14.8	33.1	66.9	34.6	65.4	46.0	54.0	6.7	93.3
	あまり話さない	82.1	17.9	29.8	70.2	23.8	76.2	42.9	57.1	6.0	94.0
	話さない	75.7	24.3	32.4	67.6	29.7	70.3	43.2	56.8	13.5	86.5
	全体	83.8	16.2	36.6	63.4	32.7	67.3	49.0	51.0	6.9	93.1
		お金を得るため		才能や能力を生かすため (**)		社会の一員として (*)		生きがいのため (**)		みんながしているから	
		YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO
あなたは保護者と仕事についての話をしますか。	よくする	83.9	16.1	47.8	52.2	36.0	64.0	61.8	38.2	4.8	95.2
	時々する	83.3	16.7	38.5	61.5	37.2	62.8	49.8	50.2	7.7	92.3
	あまりしない	85.3	14.7	29.5	70.5	26.0	74.0	42.5	57.5	6.4	93.6
	全体	83.9	16.1	36.6	63.4	32.7	67.3	49.1	50.9	6.9	93.1

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 4-2-3 保護者との会話と仕事に期待すること

		収入が安定していること		失業の心配がないこと (*)		自分の専門知識や能力がいけること (*)		世の中のためになること		高い収入が得られること (*)		自分にとって楽しいこと (*)		自分にとって楽なこと (**)		健康を損なう心配がないこと	
		YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO
あなたは日頃保護者とよく話をしますか。	よく話す	58.9	41.1	18.8	81.2	35.2	64.8	15.6	84.4	13.9	86.1	57.0	43.0	1.5	98.5	3.9	96.1
	まあまあ話す	63.8	36.2	20.9	79.1	27.4	72.6	13.1	86.9	18.5	81.5	48.5	51.5	5.2	94.8	4.3	95.7
	あまり話さない	61.3	38.7	26.8	73.2	23.2	76.8	11.9	88.1	23.8	76.2	45.2	54.8	2.4	97.6	4.2	95.8
	話さない	64.9	35.1	29.7	70.3	24.3	75.7	16.2	83.8	24.3	75.7	45.9	54.1	16.2	83.8	10.8	89.2
	全体	61.5	38.5	21.6	78.4	29.6	70.4	14.2	85.8	17.8	82.2	50.9	49.1	3.7	96.3	4.4	95.6
		収入が安定していること		失業の心配がないこと		自分の専門知識や能力がいけること (**)		世の中のためになること		高い収入が得られること		自分にとって楽しいこと		自分にとって楽なこと (**)		健康を損なう心配がないこと	
		YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO	YES	NO
あなたは保護者と仕事についての話をしますか。	よくする	55.9	44.1	18.3	81.7	40.9	59.1	17.7	82.3	18.8	81.2	49.5	50.5	2.2	97.8	3.8	96.2
	時々する	61.5	38.5	22.4	77.6	28.0	72.0	14.2	85.8	14.4	85.6	54.2	45.8	2.5	97.5	4.2	95.8
	あまりしない	63.8	36.2	21.9	78.1	27.1	72.9	12.8	87.2	21.2	78.8	48.5	51.5	5.2	94.8	4.7	95.3
	全体	61.5	38.5	21.7	78.3	29.6	70.4	14.2	85.8	17.8	82.2	50.9	49.1	3.7	96.3	4.4	95.6

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

また、保護者と日頃よく話をしている若者、保護者と仕事の話をよくしている若者ほど、仕事に期待するものは「自分の専門知識や能力が生かせること」を期待する傾向にある。保護者と日頃話をしない、仕事についての話をしない若者は、仕事に「自分にとって楽なこと」を期待している（表4-2-3）。親とよく会話をしている若者は、働く意欲の無い若者に対する意識は否定的な傾向に、話をしない若者は肯定的な傾向にある（図4-2-32）。

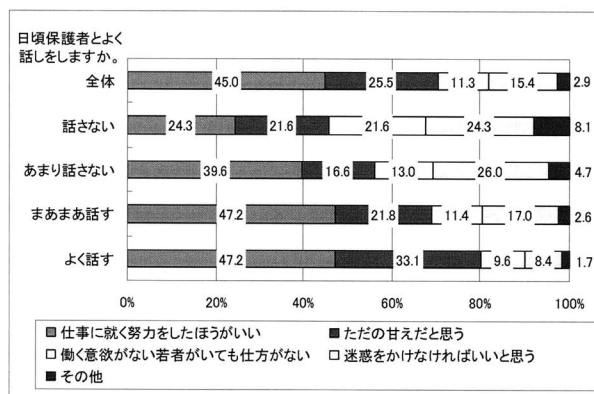


図 4-2-32 保護者との会話と働く意欲のない若者に対する意識

さらに、親子関係は将来の夢の有無にも明確に差を生じさせている。保護者の会話と将来の夢（図4-2-33）をみると、日頃親とよく会話している若者ほど将来の夢がはっきりしている。また、親と将来の仕事についての会話の有無と将来の夢の有無（図4-2-34）をみると、親と将来の仕事についての会話がある若者ほど将来の夢がはっきりしている。親子の会話の不足は、仕事に楽なことを求めたり、やる気の無さをもたらしたり、若者の職業意識の低さにつながっている。

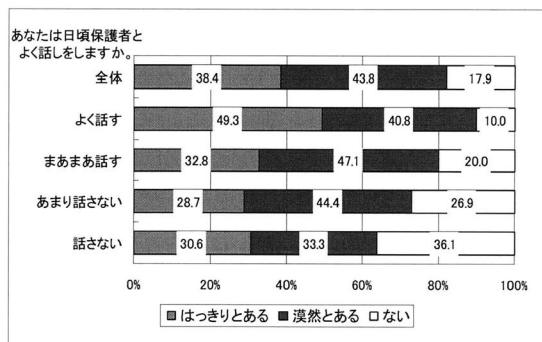


図 4-2-33 保護者との会話と将来の夢

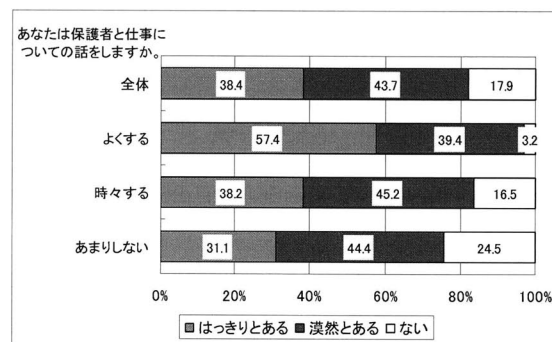


図 4-2-34 親と将来の仕事についての会話と将来の夢

以上のことから、親と日頃から会話をし、将来の仕事について会話して親子のコミュニケーションが保たれている若者は、仕事をする理由や仕事に対する期待は金銭的なものではなく、仕事に「才能や能力を生かすため」や「生きがい」を見出している。また、将来の夢も確実に描いている親子のコミュニケーションが保たれている若者の姿は、ニートになりにくい若者像であり、現時点では良好な若者にみえる。しかし、夢を描くことは自由だが、社会の現実は厳しい。

この社会の厳しさについての若者の理解は乏しいようである。これは、保護者調査と高校生調査における「仕事に就くために学歴が必要か」という意識の世代間差が物語ってい

る。親世代では73.1%が仕事に就くために学歴が必要だと思うのに対して、若者は50.4%であった。若者がどんなに学歴は仕事をする上で必要ないと考えても、社会においては学歴が必要だという意識は根強く残っている。

学校が楽しいと感じる若者、親子のコミュニケーションが良好な若者は、将来に夢を持ち、好ましい姿と考えられがちであるが、夢が何かにもよるが、現実には多くの若者が希望する職に確実に就けるような社会では無い。そのことを若者も理解しているせいか、多くの若者は夢がかなわなかった時には他の仕事に就くことを選ぶとしているが、一部の若者は夢がかなうまで希望の職を求め続ける傾向にあった。

第3節 先行研究の考察と若者の進路選択に関する分析枠組みと方法

1 先行研究の考察

本研究は、先行研究としては第3章で検討した出身階層における若者のアスピレーションや進学状況の変容に関する研究、学校トラッキングにおける若者のアスピレーションや進学状況の格差に関する研究、若者の居場所づくりに関する実践的事例研究、進路指導に関する研究、第4章で検討した若者の対人関係と自己意識に関する研究、若者の職業意識に関する研究から知見を得た。

以上の先行研究から描き出される今日の若者像は、まず、若者は「自己実現」を求めているということである。その「自己実現」は自分の適職を探す取組みとともに他者との差異化を目的とした自分探しが行われている。

この「自己実現」の欲求は高校の進路指導において強化されている。高校には学校トラッキングが存在し、若者は高校進学選択時にすでに将来の進路が方向付けられたトラックに固定される。その学校トラックにおける高校による進路指導は影響力が強く、7割近くの若者が進学する大学や専攻分野など、進路選択における多くの内容に指導の影響が及んでいる。高校教員は学校トラッキングに応じた進路指導を行い、実際の進路決定は高校における学力などをもって決定していながらも、全ての学校ランクにおいて進路指導をとおして生徒達に「自分のやりたいこと、向いていることを探みなさい」「将来のことや職業のことを探みなさい」といったメッセージを伝えている。若者は、自分の夢や自分の趣味、好きなことを基準とした「自己実現」の欲求を強めることになる。

現代社会においては、大学などへの進学率が上昇し、4年制大学への進学者が増えている。進路選択においては学校ランクが下位の高校においても新たな大学入試の制度により大学進学が可能になっている。しかし、学力や学校トラッキングによる格差が明らかに存在し、現代若者の不平等を生じさせている。進路選択は依然として学校ランクが高い者が高い学歴を保有することになる。

また、出身階層による格差も生じている。家庭の経済格差が学力や学校トラッキングの競争への参加を左右する。経済状況が低い家庭の生徒は、競争に参加することなくトラッ

クの低層部に押し入れられ、トラックの壁によって固定されてしまっている状況にある。

現代社会において格差が生じていながらも、若者が「自己実現」など「自己」のあり方を選択することへの圧力が高まっている。現代の若者は自分らしさの認識が必要となっており、自分探しを行わなければならない。若者の自分らしさは他者とのかかわりの中で形成され維持されている。自分らしさは挫折経験が少ない人ほど認識しており、また、友人数が多く、親友がいる人ほど自分らしさを認識している。つまり、自分らしさは、挫折経験と友人関係という 2 つの条件のバランスの上に成り立っているが、自分らしさにこだわることは挫折経験を増やすことになっている。さらに、現代若者は自分らしさを求める圧力がかかるために、自己意識は自己の多元化に陥っており、自己肯定感は低い状況にある。しかし、それは、若者が所属する集団における他者との関係に適応するためにもたらされたものであるといえる。以上のような若者像が第 3 章と第 4 章における先行研究から描き出されている。

1990 年代以降のこれらの若者研究は、1980 年代までの若者と 1990 年代以降の若者を比較し、若者の変容を明らかにしている。これらの先行研究において現代の若者像として共通して明らかにされていることは、「自己実現」や「個性」を実現することが望ましいという規範が大衆的規模で広がってきており、自分らしさを優先するということである。

第 3 章で検討した若者の「自己実現」の欲求に関しては、進路選択は依然として高校ランクが高い高校、出身階層が高いことに規定されているものの、一方で良い成績の高校生が高い学歴を望み、高い地位を望み、高い地位につくという競争からはずれるような意識の揺らぎがでてきていること、若者は何が社会的な成功なのか共有された目標を失っており、そのかわりに「自己実現」など「自己」のあり方を自分で定義し選択していくことへの圧力が高まっていることが明らかになっている。

第 4 章で検討した若者の自己意識に関しては、今日の若者の友人関係は居心地の良い「親密」な関係を築き場面によって使い分けており、友人関係の中で自己意識は自己の多元性が生じていることを明らかになっている。これらの先行研究の多くは、若者の意識調査におけるデータをもとに分析されている。尾嶋や樋田らは出身階層や学校トラッキングによる格差の状況を明らかにしており、若者は「自己実現」など「自己」のあり方を選択することへの圧力が高まっていることから、若者の肯定的自己意識の重要性が指摘されているが、それぞれの自己意識と出身階層や学校トラッキングなどの規定は明らかにしていない。

片瀬は自己論を地位達成過程・階層構造の研究に接続することを試みるウィスコシン・モデルを使って分析を行っているが、若者の自己に関する分析は行っていない。自己論と地位達成に関する研究の接続という点では、浅野や芳賀、土井らの研究をあげることができるが、若者の友人関係の変容や自己意識の変容を明らかにしており、若者の自己意識が進路選択やアスピレーション、自立に関わる分析ではない。それぞれの研究が部分的に行われていて、若者の自立について、自己意識と家庭要因である出身階層や学校要因である学校トラッキングや学校における友人関係、また地域社会における活動状況などを総合的

に研究されたものはない。

これらの先行研究の研究対象である若者は都市や地方都市の若者である。地方と都市はたとえ学校教育が全国ほぼ同様に行われ、社会は情報化しているとはいえ、進学状況や就職状況は大きく異なる。地方の若者は進学時や就職時には都市への移動がある。進路選択可能な私立学校の数も、塾や習い事の環境も地方は乏しい。また、若者がアルバイトをするにしても就職においても、求人数は地方の方が乏しい。地方と都市では教育環境も情報や人的ネットワークにも制限があり、価値観も行動も地方と都市では異なると思われる。しかし、地方と都市の若者の進路選択や「自己実現」の欲求など自立の違いを描き出した研究はみられない。

さらに、若者の居場所づくりに関する実践的事例研究に関しては事例研究が中心である。学校外における自然体験活動や青少年の育成事業の充実がさげばれているが、学校外における諸活動が若者の自立にどのように関連しているのかデータに基づく計量分析は行われていない状況にある。

2 本研究の分析枠組と方法

本研究の目的は、若者の生活の居場所である家庭、学校、その他の地域社会の要因が、若者の自己意識をどのように規定しているのか、出身階層や学校トラッキングなどが規定する自己意識の関連から若者の自立をとらえ、若者の進路選択における自分自身の存在を肯定的にとらえることができる肯定的自己意識の形成を可能にする自立支援のあり方を検討し、自立支援が居場所としての「場」の提供ではなく対面的な他者との関係をつなげる支援であることを示すことである。

日本の学校教育は学習指導要領のもと全国一様に行われ、情報化の進展によって地域間の格差は生じにくいとはいえ、進学状況や就職状況に地域間格差があることは事実である。居住する地域によって若者の価値観や行動様式は異なる。本研究では、山口と東京の高校生を研究対象として、進路選択に焦点をおいて、地方と大都市の若者の自立の違いを実証的に解明するところに大きな特色がある。

本研究の分析枠組みは、図 4-3-1 のとおりである。若者の自立は自己意識が形成されて進路選択が可能になり、自立がもたらされると考える。若者の自己意識や職業意識が形成されなければ進路選択は危うくなる。また逆に、進路選択が思うようにいかなければ自己意識や職業意識の危機がもたらされると予測される。

自己意識や職業意識、進路選択を規定する要因は、若者の居場所における要因が考えられ家庭要因、学校要因、その他の地域社会における要因がある。それぞれの要因において規定する影響が強いのは対人関係だと考える。若者の居場所における対人関係を良好に維持することができる若者が進路選択を可能にし、自立するであろう。自己意識を肯定的に認識し、それを維持するためには、日常生活において安心感をもつことがきる居場所をもつことである。

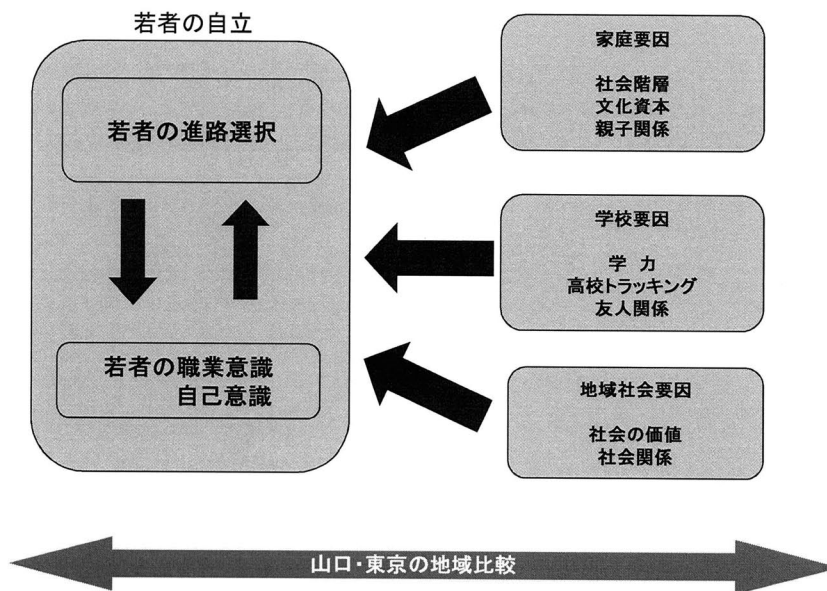


図 4-3-1 分析枠組

若者がライフプランを考える際に、誰もが夢をもつことができその実現に向かって進んでいけるような条件を整備し、支援することは重要であるだろう。しかし、いつの時代においても多くの若者は自立を果たしてきた。いつの時代においても若者が自立することを可能にするものがあるはずである。おそらく、若者が自立を果たすために重要なものは、他者との関係を可能にする居場所の確保である。他者との関係の中から、若者は自らの置かれている状況や役割を認識し、いかに生きるのかを試行錯誤する中で自立を果たしていくものとする。

現在、子どもの居場所づくりがすすめられているが、その多くは場の提供である。重要なのは、安心感を持つことが可能な居場所における他者との対面的な継続可能な関係である。若者の主たる居場所となる家庭・学校において、対人コミュニケーションを良好に保つことのできる若者は、自己意識が高く職業意識も高いであろう。

以上の予測から、①学校教育により若者の「自己実現」の欲求が強められている、②若者の「自己実現」の欲求の強まりは、その欲求そのものに問題はないが対人関係が乏しかった場合は欲求だけが肥大化し自立を妨げるものになる。つまり、対人関係を築くことが、自己意識や職業意識を良好に形成することであり、進路選択を可能にし、若者の自立をもたらす、ということが本研究の仮説である。

この仮説にもとづき、東京と山口の高校生の地域比較から、「自己実現」の欲求が肥大化する環境にある都市の若者の自立の困難さと、「自己実現」のための教育環境や就業環境などが乏しい地方の若者の自立の困難さを明らかにするとともに、それぞれの地域の若者に

有効な自立支援を検討する。

<注>

- 1) 片瀬一男 2005『夢の行方 高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会
- 2) 富田英典・藤村正之は、高橋らの 1992 年から 1993 年にかけて東京と神戸の 16 歳から 29 歳の若者を対象に行われた調査（高橋勇悦『都市青年の意識と行動 若者たちの東京・神戸 90's 分析編』恒星社厚生閣 1995 年）研究を『分析編』と位置づけ、その調査データを計量的に扱って分析した『みんなぼっちの世界』を『展開編』として 1999 年に出版している。その中で、芳賀学は「1 章 自分らしさのパラドックス」を著している。
- 3) 浅野らは、高橋らの調査研究グループが 1992 年に調査を実施したデータと比較できるようにほぼ同様の調査を 2002 年に実施し、16 歳から 29 歳の若者を対象に若者の 10 年の変容を分析し、浅野智彦 2006『検証・若者の変貌失われた 10 年の後に』勁草書房を著している。岩田考は、その中で「第 5 章 若者のアイデンティティはどう変わったのか」を担当している。
岩田考 2006「第 5 章 若者のアイデンティティはどう変わったのか」浅野智彦『検証・若者の変貌失われた 10 年の後に』勁草書房
- 4) 浅野智彦 2006「第 7 章 若者の現在」浅野智彦『検証・若者の変貌 失われた 10 年の後に』勁草書房 p233-260
- 5) 愛知県総合教育センター 小久保清隆他 2006「豊かな心の育成を目指す指導の在り方に関する研究」『愛知県総合教育センター研究紀要 第 95 集』愛知県総合教育センター
http://www.apec.aichi-c.ed.jp/shoko/yutakanakokoro/kiyou_jidoseito.pdf p 5
- 6) 芳賀学 1999「1 章自分らしさのパラドックス」富田英典・藤村正之『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣 p19-34
- 7) 土井隆義 2004『「個性」を煽られる子どもたち 親密圏の変容を考える』岩波書店
- 8) 土井隆義 2008『友だち地獄ー「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房
- 9) 浅野が「自己への物語論的アプローチ」を構築主義と区別する理由として、物語論的アプローチを構築主義と同じものであると考えてしまうと物語論独自の貢献を見落とすことになるという。物語論独自の貢献は 2 つあり、一つは「対他関係は物語を通じて自己を生み出す」ということ、もう一つは「対自関係はパラドックスであり、自己物語はそれを前提にすると同時に隠蔽する」ということと指摘している。「自己への物語論的アプローチ」を構築主義とすると、一つ目の貢献を見通すことができるが、二つ目の貢献は見落とされることになり、そこに物語論の独自性があると指摘する。

「対自関係はパラドックスである」とは、対自関係が自分自身への関係ということであるので、あらかじめ自分がいなければ生じようがない。自分が結果として生み出すはずのものを前提としてしか生じ得ないという奇妙な循環がある。例えば、親から「親から自立しなさい」といわれた子どもがこの命令に従おうとすると、親の言いなりであり親から自立しておらず、命令には従っていないことになる。これに対して、この命令に反抗しようとするれば、命令に反して自立しないことは、反抗は逆に

親に従順になってしまう。従うこともさからうこともできない状態である。

また、「自己物語はそれ（パラドックス）を前提にすると同時に隠蔽する」ということについては、自己の物語というのは、自己が自己自身について語る物語であるから「物語られる自己」と「物語る自己」とは同じ一人の「自己」に属している。自己物語は、それ自身についての判断を含んでしまっているので、物語の信頼性を宙づりにされていると説明する。

浅野は上述した二つ目の貢献における「物語論」の独自性を強調し、構築主義とは独立したものと主張する。しかし、「自己」が物語を通して生み出されるとみる点で構築主義の考え方と共通していること、「物語論」の大きな理論的な流れは歴史学や心理学の臨床分野にあることから筆者は構築主義の一つと考える。

また、浅野は「自分を変えたい」と願う人を例にあげ、社会学的な自己論の考え方をを用いて説明すると自己の変容は社会関係の変容によって可能となるが、住む場所や職場をかえるなど実際に関係を変えても、なぜか今までと同じような関係になっていることが多く、「自分を変えたい」と願っても結局のところなかなか自分を変えることのできない現実をつきつけられることになり、ある種の循環に陥ることになると説明する。この点について心理学の臨床的な領域と接続をはかった自己論を用いて説明すると「自己が変わるためには関係が変わらなければならない、だが関係を変えるためにはまず自己を変えなくてはならない」（浅野 2001）という。浅野は、若者の自己の他者との関係だけでなく、自己自身への関係、自己言及的な関係についての思考の重要性を主張している。

- 10) 浅野智彦 1999 「2章親密性の新しい形へ」 富田英典・藤村正之『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣 p41-57
- 11) 福重清 2006 「4章若者の友人関係はどうなっているのか」 浅野智彦『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房
- 12) 福重清 2006 「4章若者の友人関係はどうなっているのか」 浅野智彦『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房 p132
- 13) 辻大介 2004 「若者の親子・友人関係とアイデンティティ 16～17歳を対象としたアンケート調査の結果から」『関西大学社会学部紀要』35巻2号 p147-159
- 14) 高橋勇悦 1995 『都市青年の意識と行動 若者たちの東京・神戸 90's 分析編』恒星社厚生閣
- 15) 浅野智彦 2006 『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房
- 16) 総務省 2008 「平成20年版 情報通信白書」第3章
<http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h20/index.html>
- 17) 博報堂 2004 「10～30代男女の携帯電話利用状況調査 2004」
- 18) 浅野智彦 2006 『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房 p236
- 19) 片瀬一男 2005 『夢の行方 高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会 p144-152
- 20) 荒牧草平 2001 「第3章高校生にとっての職業希望」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 p81-106
- 21) 山口大学人文学部社会情報論コースは、2007年7月に山口県防府市の高校3年生とその保護者を対象に質問紙法調査を実施している。この調査研究は、若者の生き方や生き様の中にニート状況に関連し

た要因がどのように潜んでいるのかを解明するために行われた。「若者の生活と職業意識に関する調査（高校3年生用）」は高校において実施し（悉皆調査）、「若者の生活と職業意識に関する調査（保護者用）」は、調査票を生徒に家に持ち帰ってもらい、記入済みの調査票を封筒に入れて生徒に持参してもらった（保護者回収率 57.6%）。調査対象者の内訳は、下表のとおり。保護者調査の記入者内訳は、父親 23.6% 母親 73.8% その他 2.0% 不明 0.6%であった。筆者も分析に参加した。

<調査対象>

	防府高校	防府商業高校	防府西高校	高川学園高校	誠英高校	合計
高校生	308	152	220	180	256	1116
保護者	175	119	85	132	132	643

<調査項目>

高校生調査	保護者調査
学校生活と余暇活動	記入者について
パーソナリティ	子どもとの関係
将来について	子どもの将来について
友人関係・対人関係	親の職業意識と職業態度
親子関係	若者の職業意識や職業状況について
職業意識	

山口大学人文学部社会学研究室編「山口地域社会研究シリーズ 14 若者の職業意識にみる現代的課題—防府市における高校生と保護者調査にもとづいて—」山口大学人文学部社会学研究室 2008 山口大学人文学部社会学研究室

林寛子 2008 「若者の職業意識と保護者の期待」山口大学人文学部社会学研究室編 2008 『山口地域社会研究シリーズ 14 若者の職業意識にみる現代的課題—防府市における高校生と保護者調査にもとづいて—』防府市サポートステーションを参照。

第 2 部

第5章 高校生の生活と進路選択

第1節 調査の概要と方法

自立の一過程である進路選択において、若者が将来に向けて夢をもち、その実現に向けて進路を決定していくことができるかどうかを規定する要因として、学校要因、家庭要因、その他の地域社会における要因が考えられる。これらの要因が高校生の進路選択、その基底にある若者の志向性や価値観にどのように影響をおよぼしているのかを考察するために、進路選択と学習経験に関する意識を調査した。この調査の目的は、進路選択への規定要因と若者の基底にある志向性や価値観が地方と都市の若者でどのような点に違いが生じており、どのような点に変わりがないのかを明らかにし、他者との関わりがどのように進路選択における意識と関連しているのか分析することである。

調査は、「高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査」を2006（平成18）年3月から5月にかけて山口と東京の公立高校、私立高校、合わせて27校2914名を対象に行った¹⁾（表5-1-1）。私立高校に関しては、調査依頼をしたが応じてもらえず、山口3校のみのデータとなった。調査実施高校の学科構成の詳細は表5-1-2のとおりである。「高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査」は、質問紙調査、自記式、集合調査法で高校教員の指導の下に実施してもらった。

表5-1-1 調査対象

	全体			公立		私立	
	高校数	生徒数	有効票	高校数	生徒数	高校数	生徒数
山口	15	1467	1458	12	1178	3	289
東京	12	1447	1378	12	1447	0	0
全体	27	2914	2836	24	2625	3	289

表5-1-2 調査対象校の詳細

	普通科	普通・理数科	総合学科	専門学科	合計
山口	8 (2)	4 (1)	3	0	15 (3)
東京	9	0	2	1	12

※（ ）内は私立高校

本論文では、私立高校のデータが山口と東京で比較することができないため、高校間の比較は、教育コストがほぼ同じで、高校教育において職業教育が行われていないことが条件となる、公立高校の普通科(理数科、総合学科を含む)を分析対象として行う(表5-1-3)²⁾。

表 5-1-3 分析対象

	公立（普通科・理数科・総合学科）		
	高校数	生徒数	有効票
山口	12	1178	1157
東京	11	1338	1289
全体	23	2516	2446

また、高校間の比較を行うため、「高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査」と同時に、高校に対して、2 ヶ年（平成 17 年・18 年）の新卒者数、4 年制大学進学者数を把握する質問紙調査「進路状況調査」を実施した。調査の回答者については主として進路指導担当者に記入をお願いした。

2 年連続して 4 年制大学合格者延べ数が各年度の新卒者数よりも上回る高校を「進学校」（4 年制大学への進学傾向の強い学校）、2 年連続して 4 年制大学合格者延べ数が各年度の新卒者数の 3 割を下回る高校を「進路多様校」（4 年制大学、短期大学、専門学校進学や就職等、多様な進路の学校）、どちらでもない高校を「中間校」と区分した（表 5-1-4）。分析対象の男女比は表 5-1-5 のとおりである。

表 5-1-4 分析対象の学校区分

	進学校		進路多様校		中間校		合計
	高校数	生徒数	高校数	生徒数	高校数	生徒数	
山口	3	376	4	348	5	433	1157
東京	4	446	2	202	5	641	1289
合計	7	822	6	550	10	1074	2446

表 5-1-5 分析対象男女比

	男性	女性
全体	43.2 (N=1053)	56.8(N=1386)
東京	44.4	55.6
山口	41.8	58.2
進学校	52.3	47.7
進路多様校	43.2	56.8
中間校	36.1	63.9

調査項目は、A.学校における学習経験や学習に対する意識、B.学校外における生活経験と保護者への意識、C.自分自身に対する意識、D.自分の生き方・価値意識、E.進路についての取組みと考え方、F.進路選択及び高大連携事業への意識、G.就労に対する考え方について、H.フェースシートで構成した。

第2節 高校生の生活

1 家庭生活

まず、高校生の家庭の状況について、「家族の主たる収入者の職業」「保護者の構成」「家事の取組み」「保護者との関係」について把握する³⁾。

家族の主たる収入者の職業を地域別にクロス分析した(図5-2-1)。東京は「管理的職業」が多く、山口は「生産工程・運輸従事者」が多い。

保護者の構成については、調査票の家族構成にある父親と母親に関する質問から、「両親がいる家庭」「母親のみの家庭」「父親のみの家庭」に分類した。保護者の構成の地域別クロス分析(図5-2-2)をみると、9割弱の高校生が両親はともに揃っており、親の欠損状況は東京も山口も変わりはない。

次に、高校生が独立して生活する準備として、家庭においてどの程度家事に参加し、家事のスキルを身につけているのかを把握するために、家庭における家事の取組について分析する。

家庭における家事の取組については、「自分の部屋の掃除」「家・庭の掃除」など10項目についてどの程度取り組んでいるか、4段階の自己評価で回答を得た(図5-2-3)。地域別に細かくみると、山口の高校生は「家の掃除」「自分の部屋の掃除」を東京の高校生よりもやっている。それに対し、東京の高校生は「日用品の買い物」「ごみ出し」を山口の高校生よりもやっている傾向にある。しかし、「自分の部屋の掃除」は東京も山口も「よくする」「ときどきする」を合わせてみると7割を超えているものの、「風呂の掃除」「食後の食器荒い」は5割程度で、それ以外の項目は4割にも満たない。

そこで、家事の取組の10の質問項目について、それぞれ「よくする」1点、「ときどきする」2点、「あまりしない」3点、「ぜんぜんしない」4点とし、合計点(10点~40点)を算出した。これを家事得点として、地域別に平均点を算出した(表5-2-1)。東京も山口も平均値はほぼ同じで27.9点である。25.0点が中央値であり、値が高いほうが家事の取組がないことから、東京も山口も日常生活における家事体験は少ないといえる。

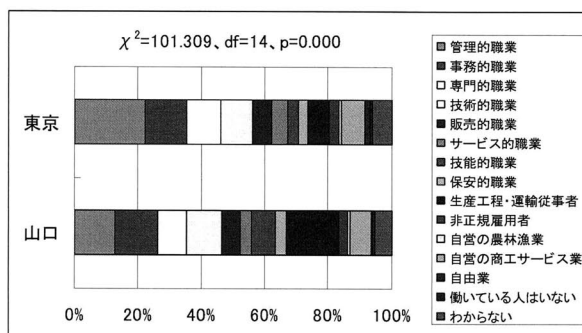


図5-2-1 家族の主たる収入者の職業

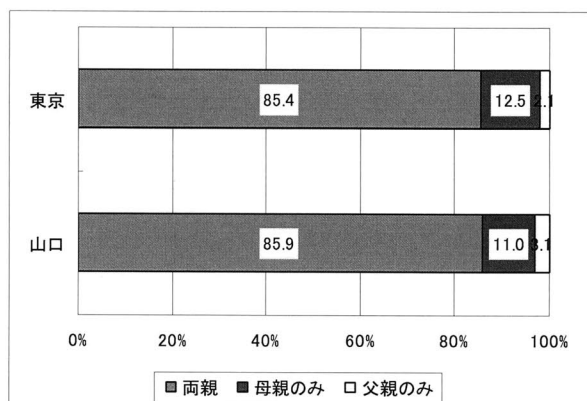
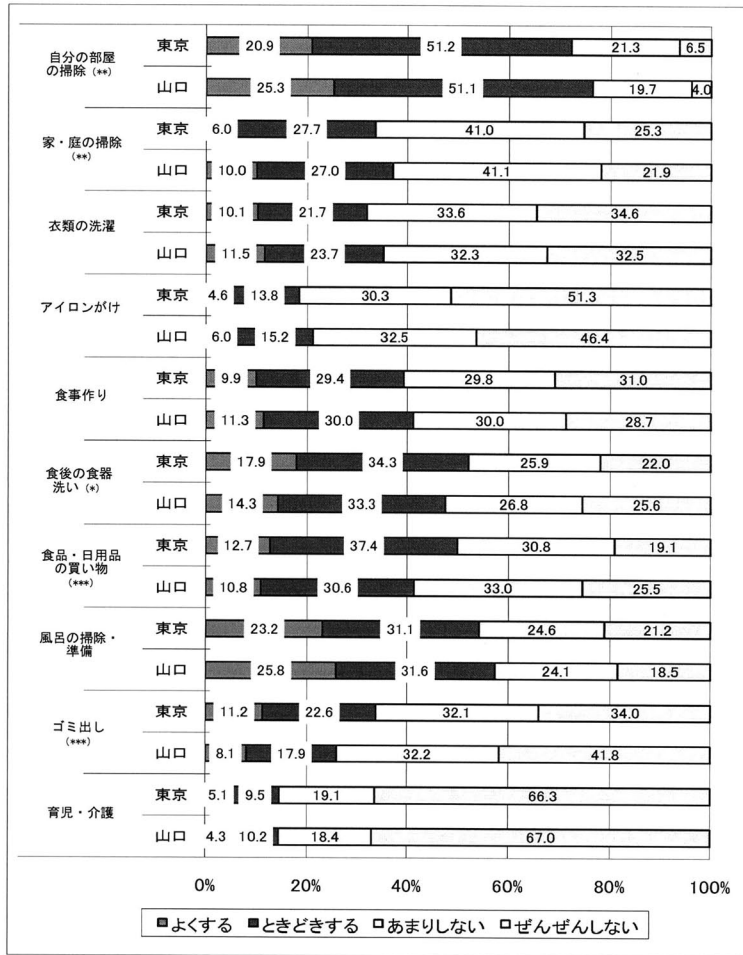


図5-2-2 親の構成



$\chi^2=13.280$

df=3

$\chi^2=15.182$

df=3

$\chi^2=21.913$

df=3

$\chi^2=4.064$

df=3

$\chi^2=1.184$

df=3

図 5-2-3 家事への取組

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 5-2-1 家事得点の地域別平均値

	度数	平均値	標準偏差	F 値
東京	1,257	27.96	5.91	0.070
山口	1,132	27.90	6.07	
合計	2,389	27.93	5.99	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

保護者との関係について、父親との関係、母親との関係を「親の学習への関与」「親の発話」「親の接し方」「親からの受容」についての認識を 4 段階評価で回答を得た。父親との関係 (図 5-2-4)、母親との関係 (図 5-2-5) について、それぞれの項目についての認識はすべて、東京と山口の地域差はみられなかった。父親と母親との関係を比較してみると、父親よりも母親のほうが勉強や成績について子どもにうるさく言っており、「学習への関与」は強いといえる。また、子どもにいろいろなことの話をし、あたたかいと愛情を感じられており、受容されていると認識されているのも母親であり、高校生にとっても家庭における重要な他者は母親といえる。

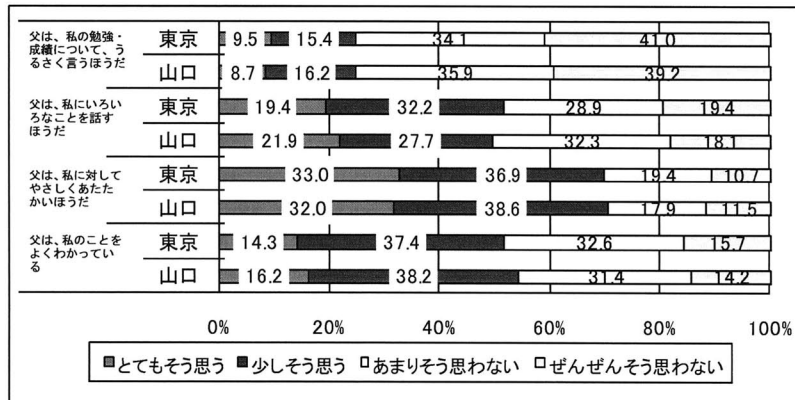


図 5-2-4 父親との関係

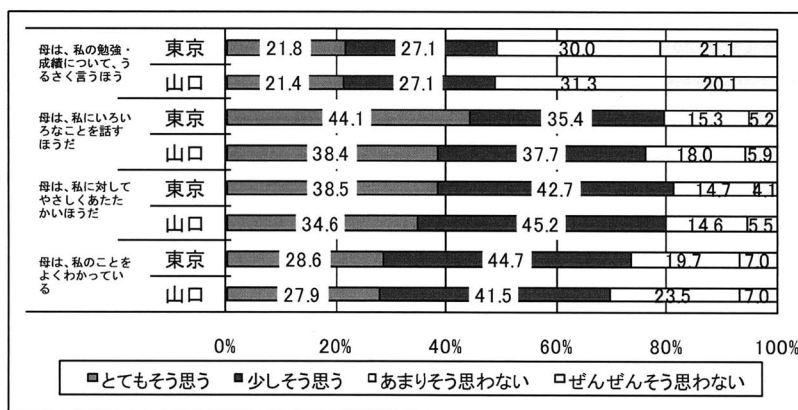


図 5-2-5 母親との関係

両親の仕事についての高校生が認知状況は図 5-2-6 のとおりである。高校生全体では、父親の仕事と母親の仕事と比較してみると、母親の仕事を経験している傾向にある。地域比較では、父親の仕事についても、母親の仕事についても χ^2 検定における有意差はみられない。

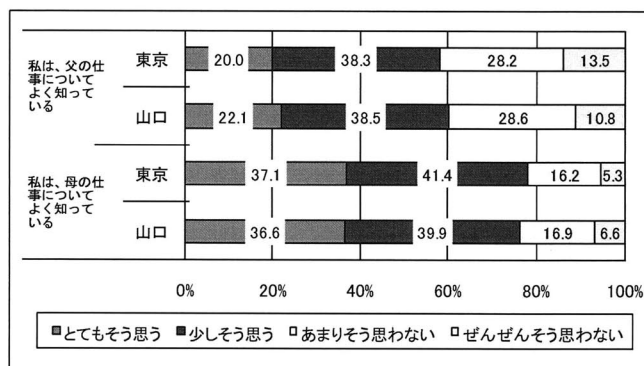


図 5-2-6 両親の仕事についての理解

2 学校生活

高校生の学校生活として、学校における成績、学校の勉強の重視度、規範意識、学習への取組、学校における対人関係（友人関係、教師との関係）を把握する。

学校の成績については、「上位」「中位の上」「中位の中」「中位の下」「下位」の 5 段階で自己評価を求めた。全体では、「中位の中」意識が最も高く、「上位」の評価は最も低い。この学校の成績の自己評価を東京と山口でクロス分析（図 5-2-7）を行ったところ、東京も

山口もほぼ同様の結果で地域差はみられない。

学校の勉強の重視度は、学校の勉強が役に立つと思うかどうかについて4段階評価で回答を得ている。全体では、「かなり役立つと思う」高校生が半数近くを占めている。東京と山口のクロス分析(図5-2-8)では、山口の高校生がどちらかといえば学校の勉強を役に立つと考えている傾向にあるが χ^2 検定の有意差はみられない。

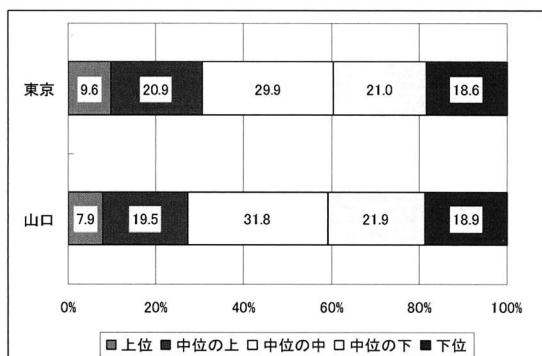


図5-2-7 学校の成績

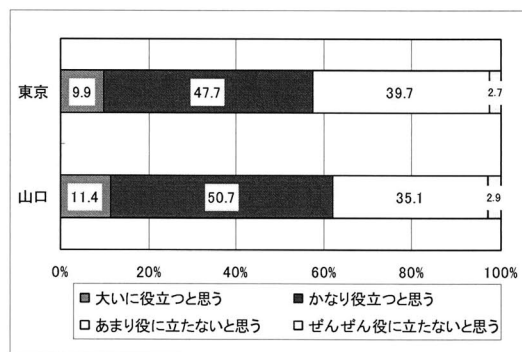
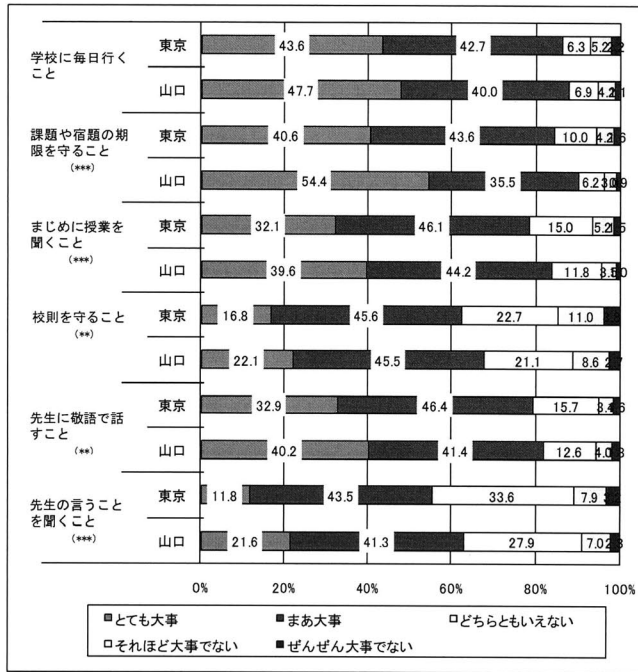


図5-2-8 学校の勉強の重視度

学校における規範意識は、図5-2-9のとおり6項目の質問を5段階評価で回答を得た。「毎日学校に行くこと」は全体では9割近くが学校に行くことを大事なことと考えている。学校に行くことについては χ^2 検定の有意差はみられず、地域差はないといえる。

他の項目では χ^2 検定の有意差があり、東京と山口の地域差がみられる。「課題や宿題の期限を守ること」は山口の肯定率89.9%、東京の肯定率84.2%、「まじめに授業を聞くこと」は山口の肯定率83.8%、東京の肯定率78.2%、「校則を守ること」は山口の肯定率67.6%、東京の肯定率62.4%、「先生に敬語で話すこと」は山口の肯定率81.6%、東京の肯定率79.3%、「先生の言うことを聞くこと」は山口の肯定率62.9%、東京の肯定率55.3%であり、山口の高校生のほうが学校における規範を重んじているといえる。

学習への取組みについて、ひとりで取組む学習とおおぜいで取組む学習についての取組への積極度を4段階評価で求めた(図5-2-10)。ひとり、またはおおぜいで(グループで)問題を解いたり、文章を書いたり、作品を作ったり、インターネットや図書館で調べたりすることに関しては全体で6割程度が積極的であり、東京と山口に有意な差はみられない。しかし、「おおぜいの前で発表する」「おおぜいで討論する」については地方と都市の若者の違いがみられる。「おおぜいの前で発表する」は東京の積極的な者40.2%、山口の積極的な者31.9%、「おおぜいで討論する」は東京の積極的な者40.4%、山口の積極的な者31.0%であり、東京が山口より積極的な状況にある。



$\chi^2=49.735$
df=4

$\chi^2=20.269$
df=4

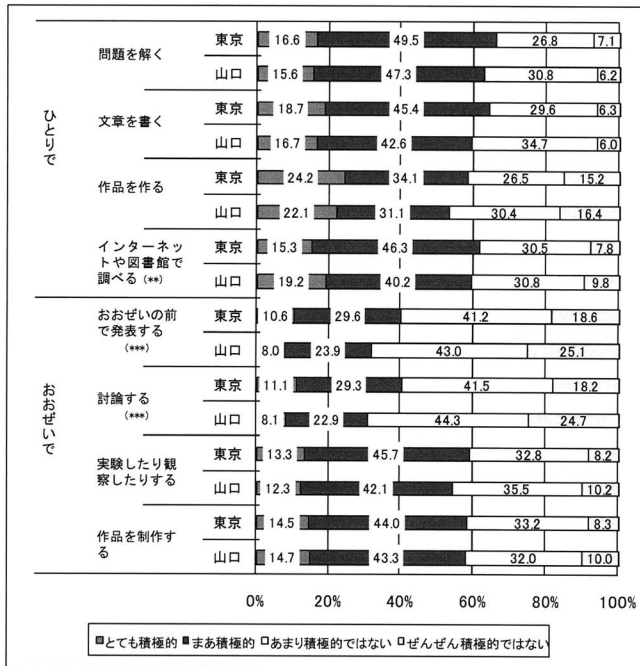
$\chi^2=15.875$
df=4

$\chi^2=17.306$
df=4

$\chi^2=45.379$
df=4

図 5-2-9 学校における規範意識

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)



$\chi^2=13.253$
df=3

$\chi^2=23.940$
df=3

$\chi^2=28.558$
df=3

図 5-2-10 学校における学習への取組み

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

学校における対人関係については、「友達が多い」「みんなから信頼されている」という友人関係と「先生からかわいがられている」という教師との関係について、4段階の自己評価で回答を求めた(図 5-2-11)。「友達が多い」は東京も山口も地域差はないが、「みんなから信頼されている」は東京の肯定率 33.8%、山口の肯定率 28.0%、「先生からかわいがられ

ている」は東京の肯定率 29.1%、山口の肯定率 22.3%である。東京のほうが友人関係も教師との関係も良好と評価する者が多い。

地方と都市の高校生の学校生活を比較してみると、都市の高校生は学校に行くことは重要と考えているが、まじめに授業を聞いたり、校則を守ったり、先生に敬語で話すなど学校における規範をそれほど重んじてはいない。学習面では「おおぜいの前で発表する」「おおぜいで討論する」が都市の若者が積極的な傾向にあり、自己主張の術を身に付けた若者が都市に多いといえる。また、都市の若者が自らの対人関係を好ましいものと評価している。

これに対して、地方の若者は、学校に行くことも、学校における規範も重要であり、先生のいうことを聞くなど学校の価値は都市よりも高い位置づけにある。都市に比べて自己主張は弱く、友人や教師との関係について自信のなさがかえる。

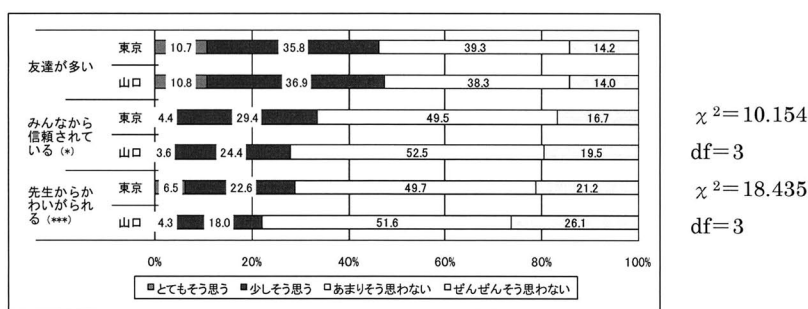


図 5-2-11 学校における他者との関係

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

3 地域社会における生活

地域社会における生活については、学校外での体験活動と進路選択におけるメディア利用について把握する。

まず、学校外での体験活動について、図 5-2-12 の 20 項目について調査時点までの経験の程度を 1「何度もある・かなりある」、2「たまにある・たまにした」、3「あまりない、あまりしなかった」、4「ぜんぜんない」の 4 段階で求めた。高い頻度（「何度もある・かなりした」）で経験している者が多いのはパソコンの活用（東京 53.0%、山口 52.0%）で、次いでスポーツ活動（東京 41.8%、山口 42.2%）である。

地域別（図 5-2-12）を比較してみると、山口の高校生が「農作業体験・漁業体験」「野外キャンプ」を東京の高校生よりも経験しており、東京の高校生は「裁縫・手芸」「文学作品や学問的な専門書を読む」「絵画・書などの芸術的な創作活動」「伝承遊び」「そろばんや書道、外国語などの資格取得」「就業体験（アルバイト）」を山口の高校生よりも経験している。中でも「就業体験（アルバイト）」の地域差は大きい。

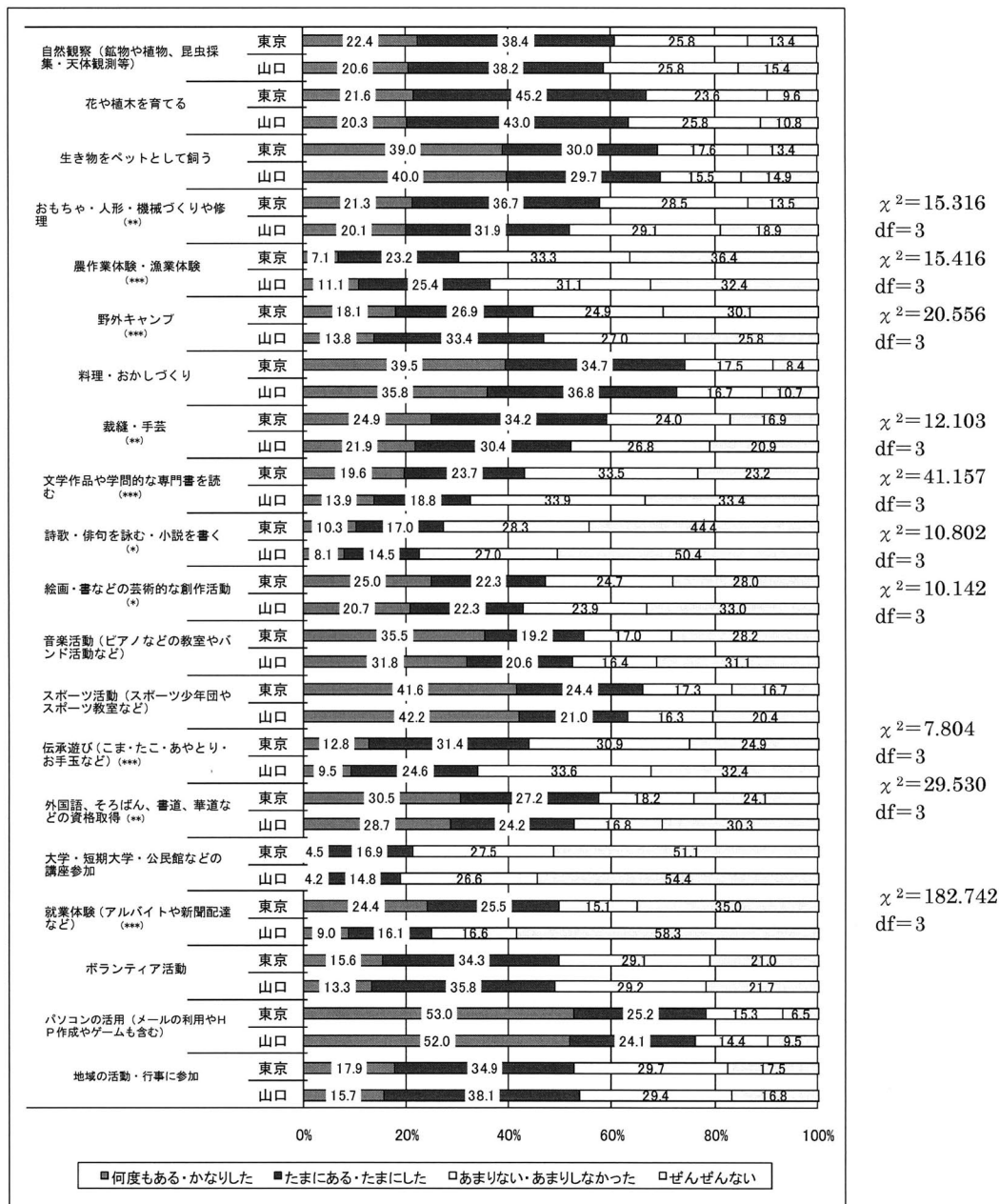


図 5-2-12 学校外での体験活動

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

教育改革などで学校外活動における野外活動や自然体験活動などの重要性が1990年代後半ごろから指摘され、その取り組みが展開されてきているが、野外キャンプや農業体験は3~4割程度、スポーツ少年団は6割程度であり、高校生に政策が浸透しているとは言い難い。

この20項目の学校外での体験活動を分類するため、就業体験を除いた19項目で因子分析を行った。その結果、4つの因子(表5-2-2)が得られた。それぞれの因子の特徴から、第1因子を「実験・観察・飼育活動」、第2因子を「交流活動」、第3因子を「特技鍛錬活

動」、第4因子を「文学・芸術活動」と名づける。

学校外における体験活動の4つの因子間の相関は表5-2-3のとおりである。「交流活動」と「実験・観察・飼育活動」の相関(0.161)が最も高い値であり、すべての相関係数は低いことから、4つの因子間の相関は低いといえる。

次に、4つの因子得点の地域別に平均値を算出した(表5-2-4)。「実験・観察・飼育活動」と「交流活動」において地域差は無く、「特技鍛錬活動」と「文学・芸術活動」は、東京が活動している傾向にある。

表5-2-2 学校外体験活動の因子付加量(回転後の因子パターン)

	因子			
	1	2	3	4
	実験・観察・飼育活動	交流活動	特技鍛錬活動	文学・芸術活動
自然観察(鉱物や植物、昆虫採集・天体観測等)	0.684	0.196	0.034	0.205
花や植木を育てる	0.674	0.153	0.272	0.191
おもちゃ・人形・機械づくりや修理	0.469	0.200	0.152	0.148
生き物をペットとして飼う	0.388	0.123	0.167	0.036
地域の活動・行事に参加	0.138	0.616	0.260	0.096
ボランティア活動	0.165	0.547	0.218	0.144
伝承遊び(こま・たこ・あやとり・お手玉など)	0.247	0.432	0.210	0.195
野外キャンプ	0.284	0.410	0.090	0.050
農作業体験・漁業体験	0.400	0.400	0.058	0.104
スポーツ活動(スポーツ少年団やスポーツ教室など)	0.144	0.374	-0.049	-0.020
大学・短期大学・公民館などの講座参加	0.069	0.346	0.098	0.278
外国語、そろばん、書道、華道などの資格取得	0.005	0.285	0.246	0.194
料理・おかしづくり	0.238	0.139	0.720	0.078
裁縫・手芸	0.253	0.102	0.713	0.236
音楽活動(ピアノなどの教室やバンド活動など)	0.107	0.196	0.326	0.226
パソコンの活用(メールの利用やHP作成やゲームも含む)	0.050	0.189	0.199	0.159
詩歌・俳句を詠む・小説を書く	0.129	0.096	0.110	0.699
文学作品や学問的な専門書を読む	0.135	0.086	0.112	0.614
絵画・書などの芸術的な創作活動	0.246	0.121	0.271	0.529
累積寄与率	9.975	19.383	28.008	36.332

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a. 7 回の反復で回転が収束しました。

表5-2-3 学校外活動の因子間の相関

	実験・観察・飼育活動	交流活動	特技鍛錬活動	文学・芸術活動
実験・観察・飼育活動	1			
交流活動	.161(***)	1		
特技鍛錬活動	.117(***)	.097(***)	1	
文学・芸術活動	.114(***)	.078(***)	.105(***)	1

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 5-2-4 学校外体験活動の因子得点の地域比較

		度数	平均値	標準偏差	F 値
実験・観察・飼育活動	東京	1,246	0.00	0.83	0.022
	山口	1,118	0.00	0.82	
	合計	2,364	0.00	0.82	
交流活動	東京	1,246	0.00	0.80	0.018
	山口	1,118	0.00	0.79	
	合計	2,364	0.00	0.80	
特技鍛錬活動	東京	1,246	-0.04	0.83	5.472
	山口	1,118	0.04	0.84	
	合計	2,364	0.00	0.84	
文学・芸術活動	東京	1,246	-0.09	0.81	29.462
	山口	1,118	0.10	0.81	
	合計	2,364	0.00	0.81	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

将来の進学や就職など進路選択における情報入手方法について、図 5-2-13 の 9 項目の利用の有無をみると、「インターネット」は東京 57.1%、山口 55.7%の者が活用しており最も多い。次いで、「受験や就職の情報誌を読むこと」であり、この 2 項目が進路選択における高校生の情報入手方法の中心といえる。「インターネットを活用する」は、地域差はみられないが、他の項目は、東京の高校生が山口の高校生よりも情報を得るためにその情報源を活用している傾向にある。

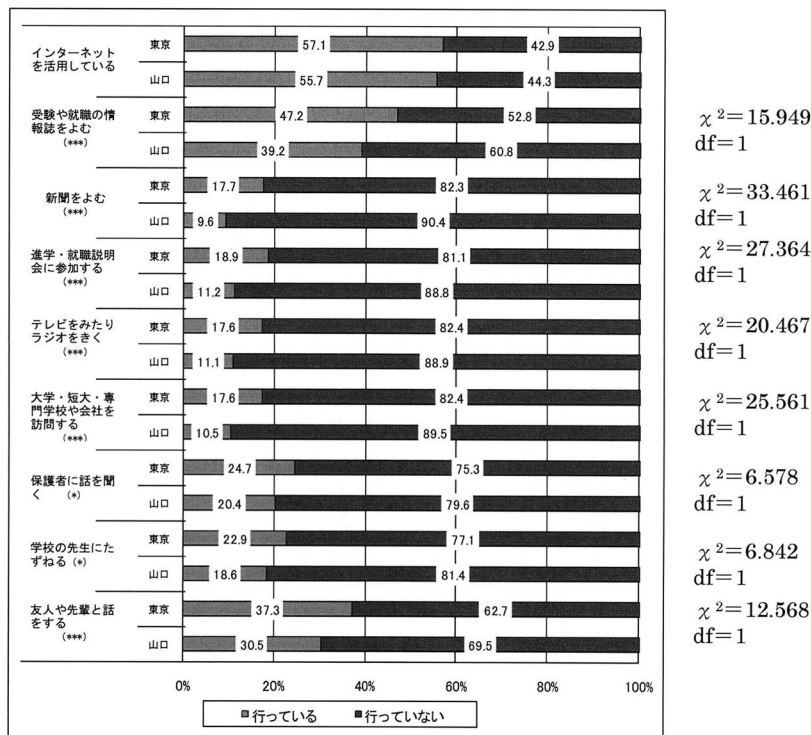


図 5-2-13 進路選択における情報入手方法

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

そこで、この質問 9 項目の情報源のうち、インターネット、情報誌、新聞、テレビ・ラジオの 4 つのメディアについて、高校生の利用数を算出した。利用数「4 つ」は全てのメディアを利用している者であり、「0」は何も利用していない者である。高校生全体では進路選択におけるメディア利用数は少ないものが多く、山口の高校生が東京よりもメディア利用数が少ない傾向にある。

将来に向けての自らの取組み (図 5-2-14) は、全体では「学校や講座などを利用して勉強する」ことが中心であり、他の取組みは 2 割程度である。地域を比較すると、山口の高校生が「資格を習得する」ことに取組んでいる高校生が東京よりも多い。

これに対し、東京の高校生は「学校や講座などを利用して勉強する」、「練習やトレーニングに励む」「資金をためる」「人脈をつくる」ことに取組んでいる高校生が山口よりも多い。

そこで、進路に向けた学校外での取組み 5 項目と進路選択のための情報源 9 項目

の回答数の合計を得点として算出し(0 点から 14 点)、0 点～5 点を「少」、6 点～10 点を「中」、11 点～14 点を「多」の 3 段階に分類し、これを進路にむけての取組度とした(図 5-2-16)。高校生全体の傾向としては進路についての取組度は低く、地域を比較してみると山口の高校生が東京の

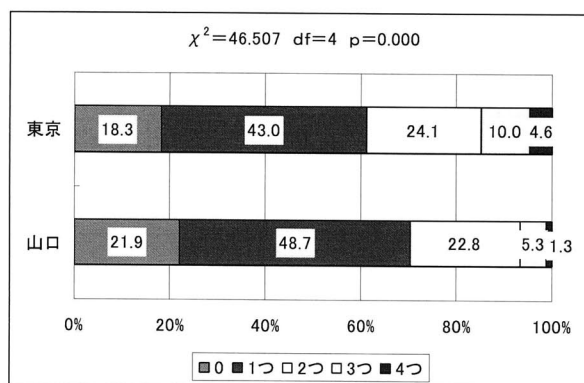


図 5-2-14 メディア利用数

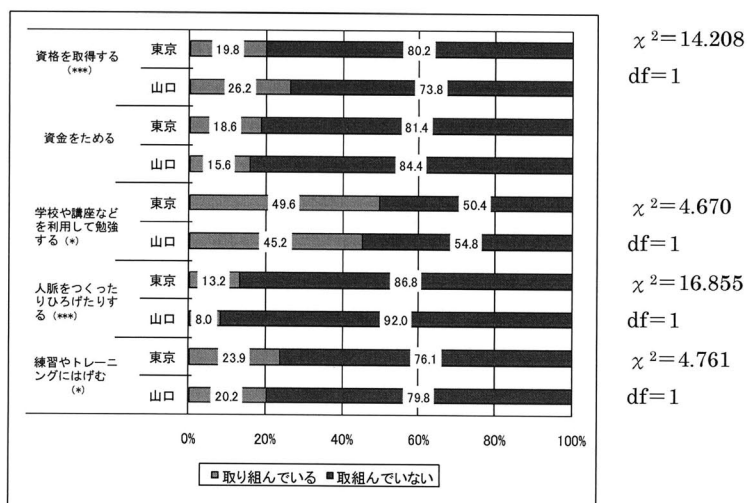


図 5-2-15 進路に向けての学校外での取組み

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

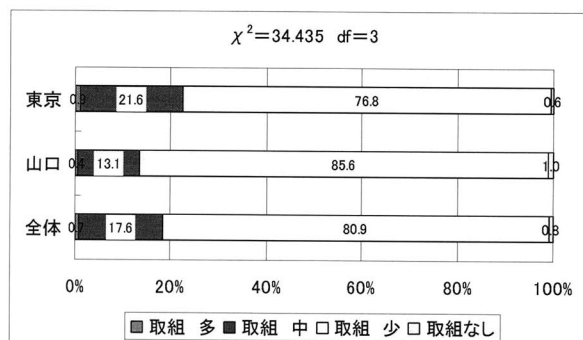


図 5-2-16 進路への取組数

高校生よりも進路選択に向けた学校外での取組度は低い傾向にある。

4 地方と都市の高校生の生活

以上の地域比較から、山口と東京の高校生の生活の違いとして重要な点は、高校生の学校における対人関係や学習のあり方である。東京の高校生は学校に行くことは重要と考えているが、まじめに授業を聞いたり、校則を守ったり、先生に敬語で話すなど学校における規範をそれほど重んじてはいない。学校を重視する度合いは山口よりも低いといえる。学習面では「おおぜいの前で発表する」「おおぜいで討論する」が東京の高校生が積極的な傾向にあり、自己主張の術を身に付けた高校生が東京に多かった。また、東京の高校生は自らの対人関係を好ましいものと評価している。

これに対して、山口の高校生は、学校に行くことも、学校における規範も重要であり、先生のいうことを聞くなど学校の価値は東京よりも高い位置づけにある。東京に比べて自己主張は弱く、友人や教師との関係について自信のなさがうかがえる。

また、山口と東京の高校生の生活の違いとして重要な点は、アルバイト経験である。東京が山口よりもアルバイト経験が多く、東京の高校生は家庭や学校以外にアルバイトを通じた所属する集団がある。つまり、山口の高校生にとって学校が生活の中心であり、比重は高いのに対して、東京の高校生は学校以外にも活動の場があり、学校の生活比重は山口よりも低くなっているといえる。

耳塚は、若者の生活の中で学校生活の比重が小さくなりつつあることを指摘している⁴⁾。本調査において、東京、山口の高校生は、家庭における家事や学校外における体験活動を積極的に行っていたり、自ら将来への取組みをしていたり、情報入手に努めているわけではない。学校における規範は地域比較すれば、東京の高校生が山口の高校生よりも重んじていない傾向にあるが、どちらの地域も「学校に毎日いくこと」を9割が大事なことと認識している。全体的な傾向としては、高校生の生活の中心は学校といえる。どちらかといえば、東京の高校生における学校の生活比重が耳塚のいうように小さくなりつつあるといえるであろう。

第3節 高校生の進路選択と職業意識

1 高校生の進路選択

高校生の進路選択の状況として、まず、「進路について深く考えた経験の有無」、「将来希望する職業の有無」を確認する。「進路について深く考えた経験の有無」については、進路について考えた時期についての質問において、「深く考えた時期がある者」と「考えたことがない者」に分類した(図5-3-1)。全体で9割が「進路について深く考えた」経験をもち、1割がそれまで「進路について深く考えたことがない」という状況にある。地域差はみられず、 χ^2 検定の有意差もみられなかった。

「将来希望する職業の有無」について「とてもあてはまる」「ややあてはまる」と肯定した者は全体で69.2%である(図5-3-2)。山口の高校生の肯定率が若干高いが、 χ^2 検定の有意差もみられなかった。

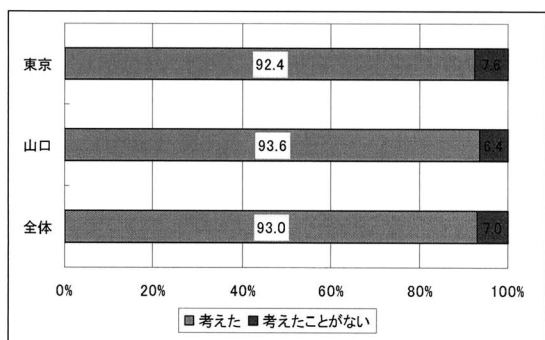


図 5-3-1 進路について深く考えた経験の有無

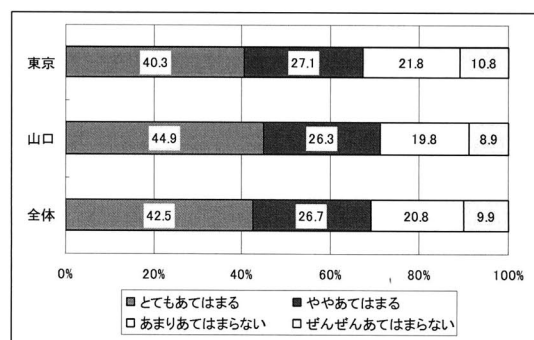


図 5-3-2 将来希望する職業の有無

高校生の進路を考える姿勢や意識について、積極的-消極的、能動的-受動的、柔軟-硬直、建設的-破滅的、自律的-他律的、上昇志向-下降志向の6つの尺度を用いる。この6つの尺度は、高校生が進路について考える段階の自立している姿として、進路選択に対して積極的で、能動的、自律的に取り組み、思考に柔軟性があり、建設的に物事を考え、上昇志向をもっていることを想定し、独自に尺度を設けた。高校生自身が対立項目のどちらの姿に自分が該当すると認識しているか、それぞれの尺度ごとに「とてもA(例:積極的)」「ややA(例:積極的)」「ややB(例:消極的)」「とてもB(例:消極的)」の4段階で回答を求めた。

全体では6割程度の高校生が積極的で、建設的、自律的、上昇志向であり、5割程度の高校生が能動的で柔軟であるという結果が得られた。地域別の有意な差はみられない(東京:図5-3-3、山口:図5-3-4)。

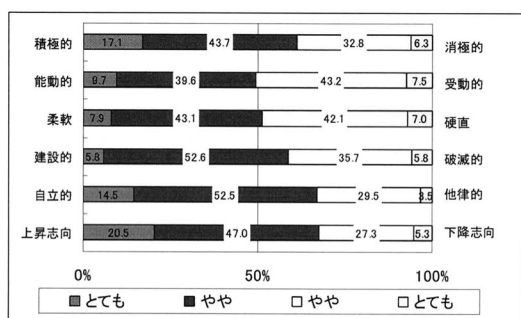


図 5-3-3 東京 進路選択に対する姿勢

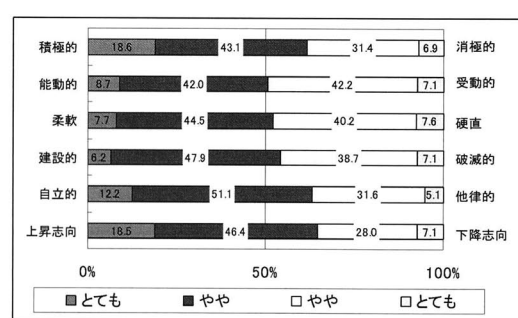


図 5-3-4 山口 進路選択に対する姿勢

この自分の進路選択に対する姿勢や意識の6つの尺度において、それぞれの尺度ごとに「とても A (積極的)」+2、「やや A(積極的)」+1、「やや B(消極的)」-1、「とても B(消極的)」-1 と得点化し(以下の項目も同様)、個人の6項目の総得点(-12点から+12点)を算出した。その総得点を自立度とみなし、-12点~-5点を「下」、-4点~4点を「中」、5点から12点を「高」と3段階に分類した。その自立度の結果が図5-3-5である。全体では自立度が高いのは29.1%、自立度が低いのは14.7%であった。地域差はみられず、 χ^2 検定の有意差もみられなかった。

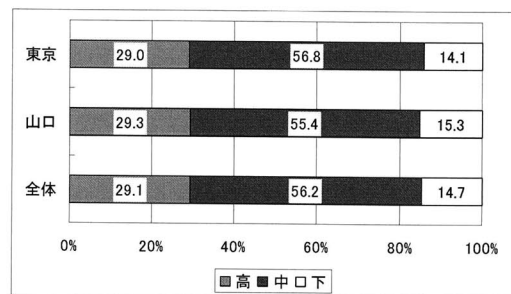
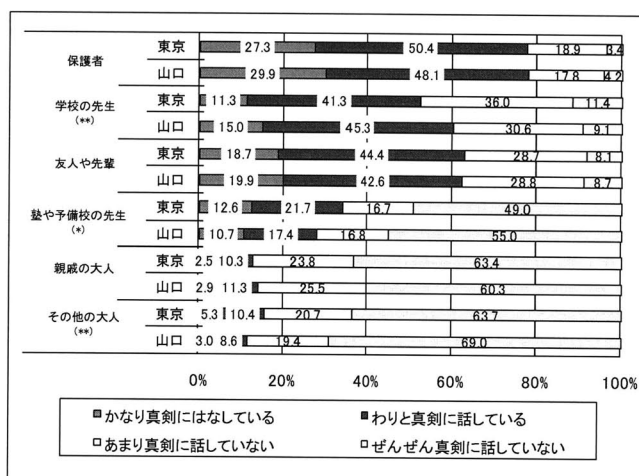


図 5-3-5 進路選択における自立度

進路に関する相談相手(図5-3-6)は、東京も山口も「保護者」が「真剣に話をしている」「わりと真剣に話をしている」を合算して8割で、最も真剣に話をしている相手である。進路に関する相談相手となる他者は、「保護者」、「友人や先輩」、「学校の先生」が中心となっているといえる。「親戚の大人」や「その他の大人」への相談は1割程度である。



$\chi^2=17.182$
df=3

$\chi^2=11.135$
df=3

$\chi^2=12.891$
df=3

図 5-3-6 進路に関する相談相手

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

東京と山口を地域比較すると、山口の高校生が「学校の先生」に真剣に相談する傾向にあるのに対し、東京の高校生は「塾や予備校の先生」に真剣に相談をする傾向にある。

人と話し合っ、生き方や進路、就職についての見方や考え方が変わった経験があるかどうかを調べたところ(図5-3-7)、全体で7割が変わった経験をもつ。地域比較で

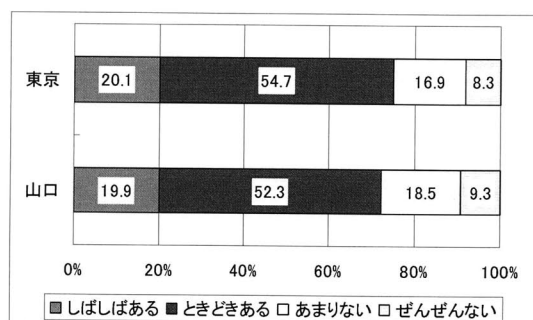


図 5-3-7 人と話をして生き方や考え方が変わった経験

は、東京と山口の有意な差はみられない。

2 高校生の職業意識

次に、高校生の職業意識について把握する。どこに就職したいか（図 5-3-8）については、地域差が生じている。東京の高校生は東京などの「大都市」に就職したいが 59.8%で、「地方」は 1.9%であるのに対し、山口の高校生は「大都市」19.2%、「地方都市（福岡・広島）」34.3%、「地方（山口）」24.9%で、「大都市」への就職を希望するよりも「地方都市」や「地方」への就職を希望する傾向にある。

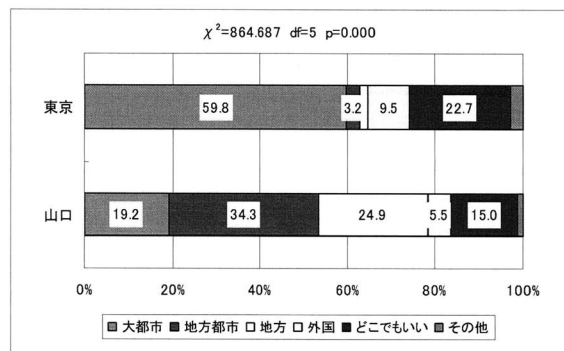


図 5-3-8 どこに就職したいか

仕事をみつけるとき重視するものを明らかにするために、図 5-3-9 のとおり 11 項目について 4 段階評価 1「とても重要」、2「ある程度重要」、3「あまり重要でない」、4「重要でない」で回答を得た。その結果、全体では、「自分に合っているかどうか」を「とても重要」「ある程度重要」とする高校生が 95%近くいる。次いで、「職場の雰囲気」や「給料」が重要視されている。

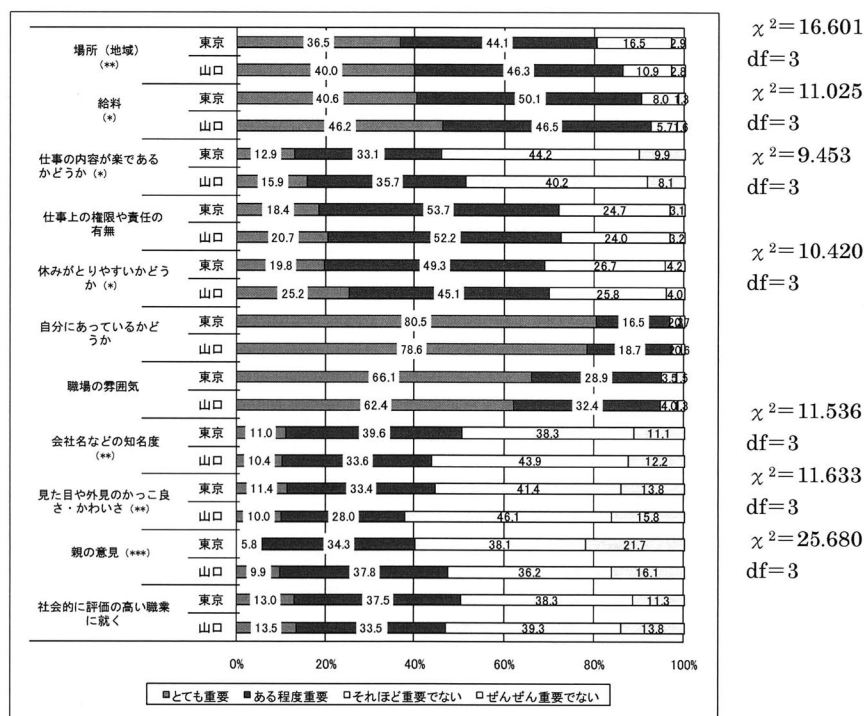


図 5-3-9 仕事をみつける時に重視するもの

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

地域を比較してみると、山口の高校生が「場所・地域」「給料」「仕事の内容が楽であること」「仕事上の権限や責任の有無」「休みが取りやすい」「親の意見」を重要視する傾向にあるのに対し、東京の高校生は、「職場の雰囲気」「見た目のかっこ良さ・かわいさ」「会社の知名度」「社会的に評価が高い職か」を重要視する傾向にある。

また、職に対する意識について、図 5-3-10 の 11 項目について、4 段階評価（1「とてもそう思う」、2「少しそう思う」、3「あまりそう思わない」、4「ぜんぜんそう思わない」）で回答を得た。「好きなことや関心のあることを仕事にしたい」については、東京も山口も突出しており、95%が重視している。

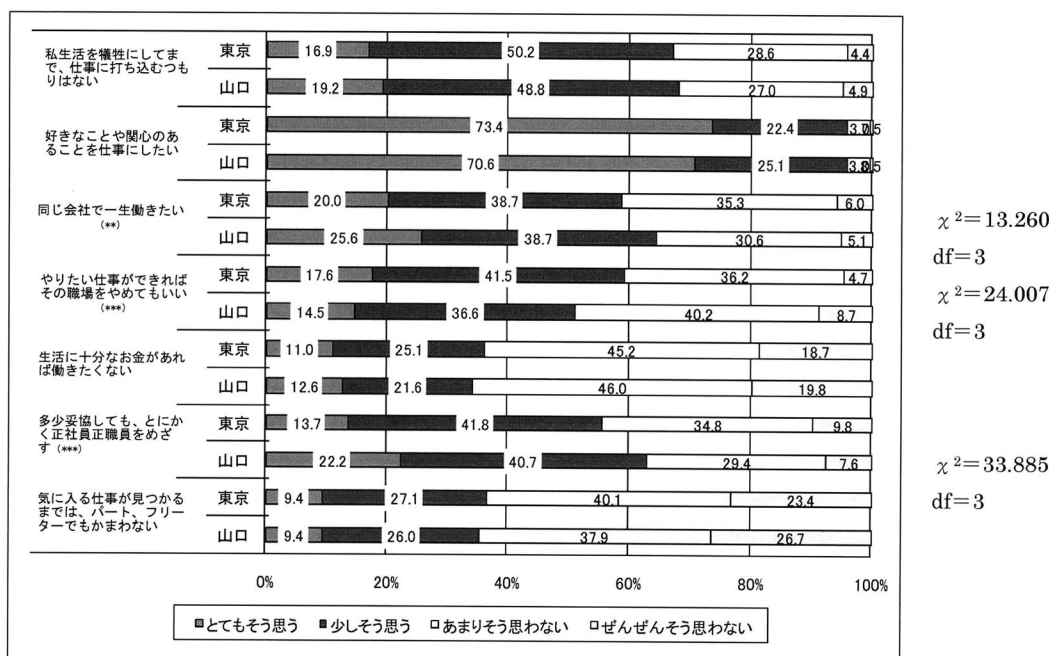


図 5-3-10 職に対する意識

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

次いで、現代高校生が重視していることは、「私生活を犠牲にしてまで仕事に打ち込むつもりはない」であり、東京も山口も 7 割弱である。地域比較でみると、東京の高校生は山口よりも「やりたい仕事ができれば職場をやめてもいい」と考えている傾向にあり、「やりたい仕事」に重きが置かれている。これに対し、山口の高校生は「同じ会社で一生働きたい」「少し妥協しても正社員、正職員を目指す」が東京よりも多い。

そこで、仕事をみつけるときに重視すること、職に対する意識の質問項目を用いて因子分析を行い、高校生の職業意識の分類を行った。その結果、5 つの因子が抽出された(表 5-3-1)。それぞれの因子に所属する質問項目の特徴から第 1 因子は「地位達成型」、第 2 因子は「私生活重視型」、第 3 因子は「興味・関心重視型」、第 4 因子は「フリーター容認型」、第 4 因子は「生活安定型」と名づけた。

表 5-3-1 職業意識の因子付加量（回転後の因子パターン）

	因子				
	1	2	3	4	5
	地位達成型	私生活重視型	興味・関心重視型	フリーター容認型	生活安定型
会社名などの知名度	0.788	0.104	0.050	-0.010	0.070
社会的に評価の高い職業に就く	0.730	0.151	0.002	-0.079	0.139
見た目や外見のかつこ良さ・かわいさ	0.642	0.161	0.069	0.143	0.010
親の意見	0.324	0.075	0.066	0.016	0.184
休みがとりやすいかどうか	0.182	0.684	0.171	-0.039	0.056
仕事の内容が楽であるかどうか	0.211	0.677	-0.014	0.064	0.071
生活に十分なお金があれば働きたくない	0.050	0.453	-0.146	0.262	0.116
給料	0.362	0.448	0.232	-0.163	-0.001
仕事上の権限や責任の有無	0.298	0.420	0.205	-0.055	0.096
私生活を犠牲にしてまで、仕事に打ち込むつもりはない	-0.021	0.402	0.024	0.121	0.078
場所(地域)	0.231	0.324	0.282	-0.095	0.024
自分にあっているかどうか	0.043	0.061	0.754	0.023	0.024
職場の雰囲気	0.128	0.196	0.606	0.006	0.055
好きなことや関心のあることを仕事にしたい	0.004	-0.072	0.601	0.180	0.060
気に入る仕事が見つかるまでは、パート、フリーターでもかまわない	-0.009	0.028	0.033	0.586	-0.062
やりたい仕事ができればその職場をやめてもいい	0.040	0.100	0.132	0.411	-0.172
多少妥協しても、とにかく正社員正職員をめざす	0.153	0.271	-0.029	-0.173	0.510
同じ会社で一生働きたい	0.125	0.054	0.122	-0.088	0.480
累積寄与率	11.573	22.548	31.271	35.364	38.849

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a. 8 回の反復で回転が収束しました。

職業意識の因子間の相関（表 5-3-2）は、「地位達成型」は「私生活重視型」「生活安定型」と相関しており、「私生活重視型」は、「地位達成型」「興味・関心重視型」「生活安定型」と相関している。「フリーター容認型」は「生活安定型」と負の相関である。しかし、相関係数は高くなく、強い相関とは言えない。

この職業意識 5 因子の因子得点について地域別に平均点を算出した(表 5-3-3)。これをみると東京の高校生が「地位達成型」「興味・関心重視型」「フリーター容認型」の傾向に、山口の高校生が「私生活重視型」「生活安定型」の傾向にあることが明らかになった。

表 5-3-2 職業意識の因子間の相関

	地位達成型	私生活重視型	興味・関心重視型	フリーター容認型	生活安定型
地位達成型	1				
私生活重視型	.111(***)	1			
興味・関心重視型	0.03	.052(*)	1		
フリーター容認型	-0.02	0.03	0.04	1	
生活安定型	.097(***)	.112(***)	0.02	-.171(***)	1

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 5-3-3 職業意識 5 因子の地域比較

		度数	平均値	標準偏差	F 値
地位達成型	東京	1,264	-0.041	0.877	5.840 *
	山口	1,137	0.046	0.886	
	合計	2,401	0.000	0.882	
私生活重視型	東京	1,264	0.059	0.853	12.747 ***
	山口	1,137	-0.065	0.847	
	合計	2,401	0.000	0.852	
興味・関心重視型	東京	1,264	-0.014	0.873	0.690
	山口	1,137	0.015	0.840	
	合計	2,401	0.000	0.857	
フリーター容認型	東京	1,264	-0.059	0.690	18.131 ***
	山口	1,137	0.065	0.735	
	合計	2,401	0.000	0.714	
生活安定型	東京	1,264	0.073	0.637	33.922 ***
	山口	1,137	-0.082	0.667	
	合計	2,401	0.000	0.656	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

3 地方と都市の高校生の進路選択

東京の高校生も山口の高校生も職に就くにあたっては「好きなことや関心のあることを仕事にしたい」と職業をとおした「自己実現」を考えていることが明らかになった。職業をとおした「自己実現」を重要しているため、気に入る仕事が見つかるまではフリーターでもかまわないという考え方を東京も山口も 35%程度の高校生がもっており、地域差はない。

しかし、山口の高校生は就職先を福岡や広島などの地方都市や地方である山口に求める傾向にあり、少し妥協しても正社員、正職員を目指し、同じ会社で一生働きたいと考えている。また、仕事を見つける時に親の意見も重視する。つまり、山口の高校生は、私生活を重視しながらも生活の安定を求めている傾向にある。

これに対し、東京の高校生は、「やりたい仕事ができればその職場を辞めてもいい」という意識が山口より強く、仕事を見つける時に重視するものとして、会社の知名度や見た目のかわいさ・かっこよさ、社会的に評価が高い職か山口よりも意識する傾向にあった。東京の高校生は仕事への興味・関心を重視する考えが強く、フリーターという選択も容認する傾向にある。また、興味・関心を基盤とするような地位達成の志向をもっているといえる。

以上のことから、都市の若者が職業をとおした「自己実現」の欲求が強いこと、地方の若者は「自己実現」の欲求をもってはいるものの、職業を通した「自己実現」は親の意見を重視したり自ら住む地方を選んだり、自分もつ生活の諸条件を考慮しより現実的な選択を行おうとしていることが明らかになった。

また、家庭生活における重要な他者は高校生全体でみると母親であった⁵⁾。高校生の進路相談は、保護者によく相談しており、おそらく母親とよく話をしていると考えられる。つまり、母親から親の子どもの将来に対する期待が子どもに伝えられていると考えられる。

第4節 高校生の進路選択における「自己実現」の欲求

高校生の職業意識をみてみると、ほぼ全員が「好きなことや関心のあることを仕事にしたい」と考えていた。これは、自分自身の興味・関心を中心とした職業における「自己実現」の欲求と考える。そこで、高校生の職業意識の背景にある価値観を把握する。

社会階層に関する意識として「どんな家柄か、育ちかで人生が決まってしまう」について4段階評価で回答を求めた(図5-4-1)。全体で、5割強の高校生が家庭の社会階層が人生に影響すると考えている。地域別では東京のほうが家庭の社会階層が人生に影響するという回答が多いが、 χ^2 検定における有意差はみられない。

学歴に関する意識として、「どんな学校を出たかで、人生が決まってしまう」についても4段階評価で回答を求めた(図5-4-2)。全体で4割強の高校生が、学歴が人生に影響すると考えている。学歴に関する意識も χ^2 検定の有意差はみられず、地域差はない。

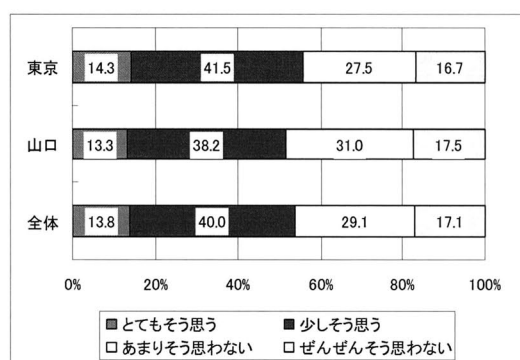


図 5-4-1 社会階層に関する意識

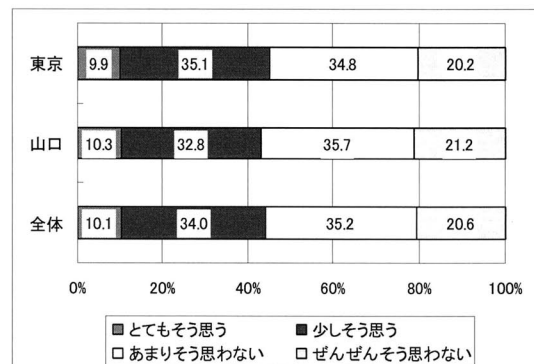


図 5-4-2 学歴に関する意識

地位達成を求める志向に関しては、「高い収入を得ること」「有名になること」「その日その日を楽しく過ごす」「人のために尽くす」の質問に対して4段階評価で回答を求めた⁶⁾。

「高い収入を得ること」(図5-4-3)は全体で7割が重要であるとしており、地域差はみられない。また、「有名になること」(図5-4-4)は全体で3割が重要であるとしており、これも地域差はみられない。「高い収入を得ること」の重要性は高いが、「有名になること」は重視していない結果となった。

これに対し、「その日その日を楽しく過ごす」「人のために尽くす」は、高校生にとって「高い収入を得る」よりも重要という結果になっている。「その日その日を楽しく過ごす」は全体で9割弱、「人のために尽くす」は全体で8割弱が重要としている。これらの2つの項目については山口の高校生が若干重要とする高校生が多い結果になっているが、 χ^2 検定の有意差はみられなかった。

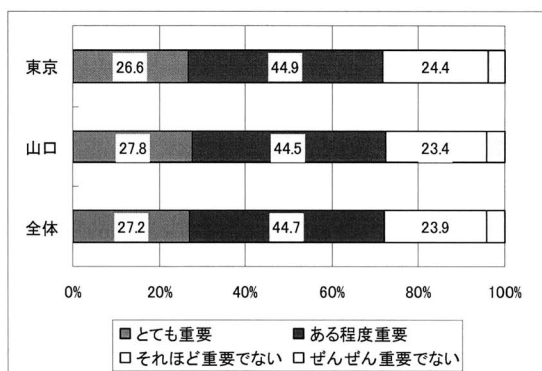


図 5-4-3 「高い収入を得る」の重視度

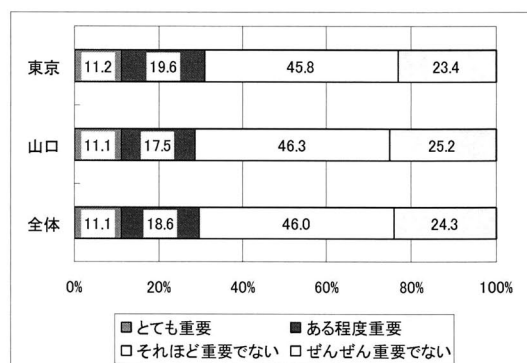


図 5-4-4 「有名になる」の重視度

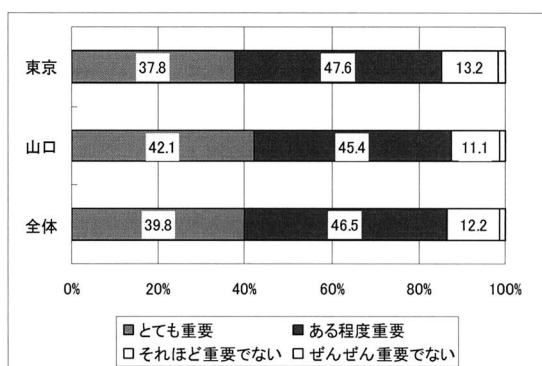


図 5-4-5 「その日その日を自由楽しく過ごす」の重視度

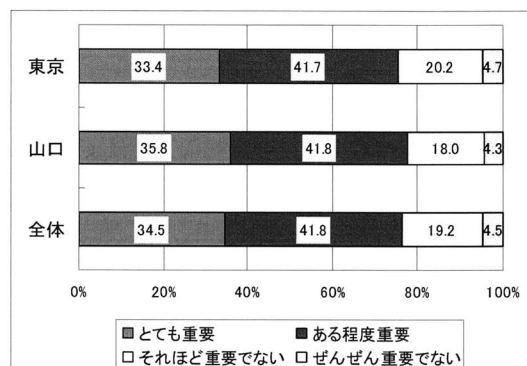


図 5-4-6 「人のために尽くす」の重視度

また、高校生の「自己実現」の欲求を明らかにする項目として、将来に対して「夢を持ってその夢に向かって突き進む」「自分のやりたいことをする」について4段階評価で質問した⁷⁾。結果、全体で9割の高校生が「夢を持ってその夢に向かって突き進む」こと重要と考え（図 5-4-7）、ほぼ全員が「自分のやりたいことをする」ことを重要と考えている（図 5-4-8）。この2つの質問も χ^2 検定の有意差はみられず、地域差はない。

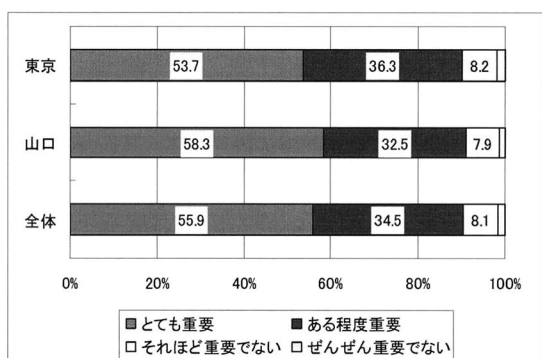


図 5-4-7 「夢を持ってその夢に向かって突き進む」の重視度

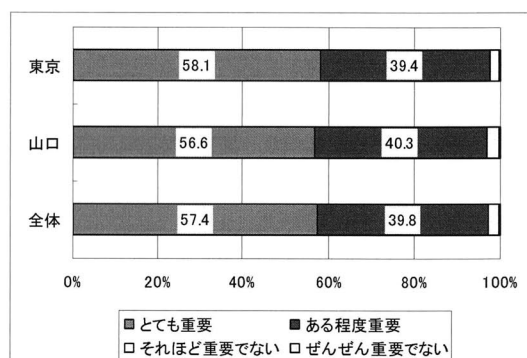


図 5-4-8 「自分のやりたいことをする」の重視度

さらに、仕事をみつける時に「自分にあっているか」を重視するかどうかについて、4段階評価で質問した結果（図 5-4-9）、ほぼ全員が「重視する」と回答している。この質問も χ^2 検定の有意差はみられず、地域差はない。

しかし、「将来希望する職業の有無」において「ある」と肯定した高校生は全体で 69.2% である。3 割の高校生は調査時点で将来希望する職業はない状況にある。つまり、その 3 割の高校生は、将来「自分のやりたいことをする」、仕事をみつける時に「自分

に合っているか」を重視すると考えながらも具体的に希望する職業は見出していない。

以上、「自己実現」の欲求の分析から、現代の高校生は「夢を持ってその夢に向かって突き進む」「自分のやりたいことをする」ことが重要であり、仕事をみつけるときには「自分にあっているか」を重視している。その若者の傾向は地域に関係なく、ほぼ全員が「自己実現」を求める志向をもっているといえる。

また、高校生の社会階層に関する意識、学歴に関する意識、地位達成に関する意識の分析から、現代高校生の志向は、社会階層や学歴が人生に影響すると考えている高校生は半数程度で、地位達成に関しては「高い収入を得ること」を重要としながらも、「その日その日を楽しく過ごす」こと、「人のために尽くす」ことも重要と考えており、多くの高校生が贅沢な生活を望んでいる。

現代高校生は、「自己実現」の欲求が地域に関係なく浸透している。しかし、「自己実現」の欲求は全国の高校生に浸透しているものの高校生の生活実態や職業意識は東京の高校生と山口の高校生には違いがある。その差が学校教育におけるものではないこと、また、高校生の生活実態の家庭生活においては地域差がそれほどみられなかったことを考えると、地域社会の環境の違いにおいて意識の差が生じているといえるであろう。

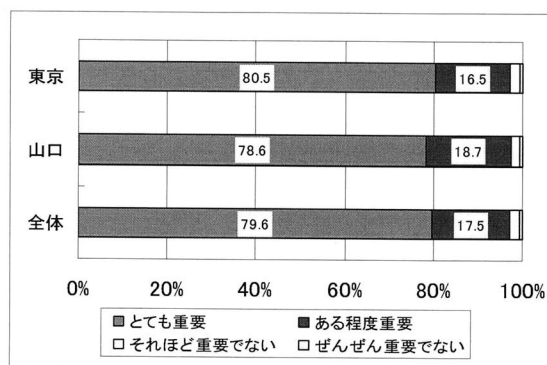


図 5-4-9 仕事をみつける時「自分に合っているか」の重視度

<注>

- 1) 本調査は山口大学田中均先生（現在 島根大学）と共同で調査を企画・設計し、実施したものである。データの利用に関しては同意を得ている。
- 2) 本調査においては、私立高校の高校生の現状を分析に反映させることができなかった。東京の場合、大学などへの進学意欲が高いものは有名私立高校への希望者が多い。有名私立高校はその先の有名大学への進学をより確実にすることから、東京だけでなく近隣の県からも多くの生徒を集めている状況にある。それに対し、山口は有名大学進学志望者が進学するのは公立高校である。東京と山口の公立高校の大学進学における位置づけに違いがあることから一概に比較することはできないが、東京と山

口ともに進学校、進路多様校、中間校をそろえることができたこと、教育コストがほぼ同じで、高校教育において職業教育、宗教教育が行われていないという条件は共通していることから、東京と山口の高校生の実態を十分に明らかにすることができると考える。

- 3) 親の状況についての質問は、高校からの強い反発があり、記入時に記入しない旨の指導を行うということで調査に応じてもらった高校が複数校ある。結果、無回答が多い質問ではあるが、十分な有効票を得られており、傾向は十分にあらわれていると考える。
- 4) 耳塚寛明 2000「4章進路選択の構造と変容」樋田大二郎他編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 5) 山口大学人文学部社会学研究室における調査（「若者の職業意識にみる現代的課題—防府市における高校生と保護者調査にもとづいて—」山口大学人文学部社会学研究室 2008）においては、5割の保護者が子どもに山口での就職を希望していた。親が希望する仕事について欲しいと思う親ほど子どもの将来の仕事について子どもと話をよくしており、親が希望する仕事の伝達は、父親よりも母親が子どもに伝えていた。山口大学人文学部社会学研究室編 2008「山口地域社会研究シリーズ 14 若者の職業意識にみる現代的課題—防府市における高校生と保護者調査にもとづいて—」防府市サポートステーション
- 6) 地位達成を求める志向に関しては、友枝・鈴木らの研究において室井・田中（2003）が地位達成志向として説明した「高い収入を得ること」「有名になること」、地位達成志向ではない志向として分類した「その日その日を楽しく過ごす」「人のために尽くす」について、4段階評価で回答を求めた。室井・田中の研究における若者の地位達成志向の傾向と同様に、「高い収入を得ること」の重要性は高いが、「有名になること」は重視していない結果となった。
室井研二・田中朗 2003「高校生の学歴＝地位達成志向—その現状と展望—」友枝敏雄・鈴木譲編著『現代高校生の規範意識—規範の崩壊か、それとも変容か—』九州大学出版会
- 7) 片瀬らは、高校生の「自己実現」の欲求を明らかにする項目として、将来に対して「夢を持ってその夢に向かって突き進む」「自分のやりたいことをする」について4段階評価で質問している。本調査においても同様の質問を設定した。

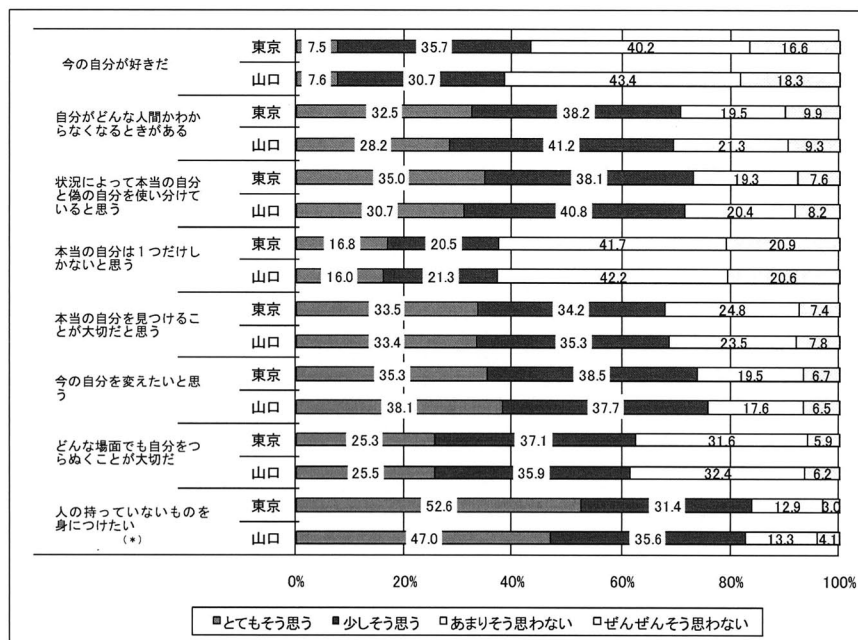
第6章 地方と都市の高校生の自己意識と進路選択

第1節 高校生の自己意識

若者の自立の過程は、進学や就職などの成長の過程におけるイベントを乗り越えるだけでなく、居場所における他者との関係の中で、他者の期待や態度、評価に基づいて自己意識を安定させる過程でもある。本章では、地方と都市の高校生がどのような自己意識を形成しているのか、その自己意識はどのような要因から規定されているのか、自己意識と進路意識の関連を検討する。

現代高校生にとって、自己意識は学業成績、出身階層、生活経験・体験、友人関係、親子関係をとおして自己を評価し、自己意識を形成していると考えられる。そこで、規定要因としては家庭要因、学校要因、その他の地域社会における要因の関連を分析する。自己意識は、他者との比較の中での自己評価が影響してくると考えられることから、同世代の他者との比較が日々繰り返されている学校における関連が強いというのが仮説である。

まず、高校生がどのような自己意識を形成しているのかを分析する。自己意識については¹⁾、高校生の自己に関する一貫性や多元性、拡散などを明らかにするために、8項目の質問を設定し、1「とてもそう思う」、2「少しそう思う」、3「あまりそう思わない」、4「ぜんぜんそう思わない」の4段階評価で回答を求めた。



$\chi^2=9.091$
df=3

図 6-1-1 高校生の自己意識

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

高校生の自己意識（図 6-1-1）は、地方と都市では大きな差はみられない。「人のもっていないものを身につけたい」は東京の高校生が意識している傾向にあるが（東京の肯定率 84.0%、山口の肯定率 82.5%）と考えている傾向にあり、 χ^2 検定の有意差があるが、他の項目では東京と山口の地域差はない。

つづいて、この高校生の自己意識に関する 8 項目について因子分析を行った。自己意識の質問項目は、「とてもそう思う」=1、「少しそう思う」=2、「あまりそう思わない」=3、「ぜんぜんそう思わない」=4 と得点化した。その結果、3 つの因子が抽出された（表 6-1-2）。それぞれの因子について、第 1 因子は本当の自分を見つけること、自分を貫くことが大切で、人の持っていないものを身につけたいと考えており、自己に対して積極的に向き合っているという特徴から「自己肯定」と名づけた。第 2 因子は自分のことを変えたいと思い、自分が好きだと思えないといった否定的な自己への意識から「自己否定」と名づけた。第 3 因子は「自分がどんな人間かわからなくなる時がある」については自己が拡散している状況を示すが、自己の多元状況を示す「状況によって本当の自分と偽りの自分を使い分けられていると思う」のほうがスコアが高いこと、先行研究²⁾において自己多元が若者の特徴としてあげられていることから「自己多元」と名づけた。

自己意識の因子間の相関は、表 6-1-3 のとおりである。全体でみると、「自己肯定」と「自己否定」、「自己否定」と「自己多元」は相関がみられるが、因子間の相関は低い。地域比較でも因子間の相関は低い。地域差が生じたのは「自己肯定」と「自己否定」の相関で、山口の高校生は負の相関である。

次に、自己意識の 3 因子の因子得点の地域別の平均点を算出した（表 6-1-4）。東京の高校生は「自己肯定」「自己多元」の傾向に、山口の高校生は「自己否定」の傾向にあるといえる。

表 6-1-2 自己意識の因子分析（回転後の因子パターン）

	因子		
	1	2	3
	自己肯定	自己否定	自己多元
本当の自分を見つけることが大切だと思う	0.691	0.119	0.061
本当の自分は 1 つだけしかないと思う	0.490	-0.024	-0.236
どんな場面でも自分をつらぬくことが大切だ	0.486	-0.072	0.071
人の持っていないものを身につけたい	0.353	-0.002	0.279
今の自分を変えたいと思う	0.243	0.667	0.244
今の自分が好きだ	0.203	-0.610	-0.012
状況によって本当の自分と偽の自分を使い分けられていると思う	-0.058	0.041	0.659
自分がどんな人間かわからなくなるときがある	0.091	0.282	0.459
累積寄与率	14.890	26.367	36.943

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a. 5 回の反復で回転が収束しました。

表 6-1-3 自己意識の因子間の相関

		自己肯定	自己否定	自己多元
全体	自己肯定	1		
	自己否定	.048(*)	1	
	自己多元	0.036	.168(***)	1
東京	自己肯定	1		
	自己否定	.095(**)	1	
	自己多元	0.048	.160(***)	1
山口	自己肯定	1		
	自己否定	-0.004	1	
	自己多元	0.021	.181(***)	1

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 6-1-4 地域別 自己意識 3 因子の因子得点平均値

		度数	平均値	標準偏差	F 値
自己肯定	東京	1,269	-0.008	0.8113	0.277
	山口	1,137	0.009	0.8139	
	合計	2,406	0.000	0.8124	
自己否定	東京	1,269	0.031	0.7845	4.315 (*)
	山口	1,137	-0.035	0.7871	
	合計	2,406	0.000	0.7863	
自己多元	東京	1,269	-0.033	0.7467	5.332 (*)
	山口	1,137	0.037	0.7422	
	合計	2,406	0.000	0.7452	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

注) 自己意識の質問項目は、とてもそう思う=1、2 少しそう思う=2、3 あまりそう思わない=3、4 ぜんぜんそう思わないの=4 と得点化した。

この自己意識 3 因子が、どのような要因によって規定されているのかを検討する。分析に用いる変数は、表 6-1-5 のとおりである。

表 6-1-5 分析に用いる変数

自己意識	家庭要因	学校要因	地域社会における要因	進路選択・職業意識
自己の認識	親の職業 保護者の仕事理解 保護者からの受容の認識 保護者との会話 保護者への進路相談	学校区分 成績 学校の勉強の重視度 友人の多さ 友人からの信頼 先生への進路相談状況 友人への進路相談状況	学校外体験活動 アルバイト体験 メディア利用度	進路について深く考えた経験 将来希望する職業の有無 進路選択段階における自立度 進路にむけた取組数 職業意識

第 2 節 地方と都市の高校生の自己意識の規定要因

1 自己意識を規定する家庭要因

自己意識を規定する家庭要因について分析する。まず、自己意識の 3 つの因子得点と家庭要因について一元配置分散分析によって高校生全体について分析した (表 6-2-1)。先行研究において家庭における格差が明確になってきていることから、親の職業は高校生の自己意識に強く影響していると考えていたが、「自己肯定」「自己否定」「自己多元」全ての自己意識において規定は弱い。親の職業ごとの有意差はなかった。

「自己肯定」においては、保護者の仕事を理解している高校生、保護者から受容されて

いるという認識がある高校生、保護者が子どもによく会話をしている高校生、保護者に進路について真剣に相談している高校生がこの傾向にある。

「自己否定」は、保護者の仕事を理解していない高校生、保護者から受容されている認識がない高校生、保護者が子どもに会話をしていない高校生、保護者に真剣に進路相談をしていない高校生がこの傾向にある。保護者との関係において、「自己否定」は「自己肯定」と正反対の関係にある。

「自己多元」は、「自己肯定」と似たような水準を示しているが、「父親の仕事の理解」、「父親が子どもによく会話をする」において有意差がみられない。保護者との関係は母親との関係のみ関連しており、母親の仕事の理解がある高校生、母親から受容されている認識がある高校生、母親が子どもによく会話をする高校生、保護者（おそらく母親）と真剣に進路相談をしている高校生がこの傾向にあった。

自己意識と家庭要因の相関（表 6-2-2）をみると、「自己肯定」は家庭要因と正の相関であり、「自己否定」は負の相関であった。自己意識と家庭要因の相関の中で、「自己肯定」と相関係数が最も高かったのは母親からの受容認識（0.194）で、「自己否定」は父親からの受容認識（-0.146）であった。しかし、自己意識と学校要因の友人関係の相関係数の値（表 6-2-10）と比べると相関は低い。「自己多元」はそれぞれ、正負の相関がみられるが、相関係数は低く、家庭要因における規定力も小さい。

表 6-2-1 自己意識と家庭要因

		度数	平均値	標準偏差	F 値	
自己肯定	親の職業	管理的職業	375	0.015	0.802	1.314
		事務的職業	271	-0.032	0.817	
		専門的職業	211	0.090	0.814	
		技術的職業	215	-0.084	0.822	
		販売的職業	124	-0.038	0.814	
		サービスの職業	95	0.072	0.782	
		技能的職業	111	-0.063	0.751	
		保安的職業	68	0.065	0.882	
		生産工程・運輸従事者	229	-0.062	0.749	
		非正規雇用者	57	0.079	0.801	
		自営の農林漁業	17	-0.418	0.624	
		自営の商工サービス業	149	-0.034	0.857	
		自由業	22	0.072	0.685	
		働いている人はいない	12	-0.271	0.800	
		わからない	122	0.119	0.900	
	合計	2,078	-0.006	0.810		
父親の仕事をよく理解している	とてもそう思う	461	-0.171	0.842	17.307 ***	
	少しそう思う	855	-0.039	0.763		
	あまりそう思わない	624	0.067	0.789		
	ぜんぜんそう思わない	270	0.248	0.950		
	合計	2,210	-0.002	0.821		
母親の仕事をよく理解している	とてもそう思う	831	-0.189	0.809	30.281 ***	
	少しそう思う	915	0.059	0.742		
	あまりそう思わない	374	0.117	0.797		
	ぜんぜんそう思わない	134	0.392	1.113		
	合計	2,254	-0.003	0.818		
父親は私のことをよくわかってきている	とてもそう思う	335	-0.269	0.880	24.188 ***	
	少しそう思う	836	-0.061	0.768		
	あまりそう思わない	712	0.095	0.752		
	ぜんぜんそう思わない	331	0.202	0.933		
	合計	2,214	-0.003	0.820		

母親は私のことをよく わかってきている	とてもそう思う	455	-0.227	0.876	19.326
	少しそう思う	670	-0.016	0.780	***
	あまりそう思わない	671	0.058	0.740	
	ぜんぜんそう思わない	415	0.170	0.884	
	合計	2,211	-0.002	0.820	
父は私によく話す	とてもそう思う	635	-0.256	0.806	33.346
	少しそう思う	978	0.048	0.750	***
	あまりそう思わない	480	0.125	0.802	
	ぜんぜんそう思わない	159	0.282	1.042	
	合計	2,252	-0.005	0.818	
母は私によく話す	とてもそう思う	935	-0.128	0.821	19.614
	少しそう思う	818	0.016	0.747	***
	あまりそう思わない	372	0.144	0.785	
	ぜんぜんそう思わない	123	0.350	1.088	
	合計	2,248	-0.004	0.816	
保護者に進路につい て	かなり真剣にはなしている	687	-0.204	0.829	29.542
	わりと真剣に話している	1,181	0.023	0.756	***
	あまり真剣に話していない	441	0.183	0.778	
	ぜんぜん真剣に話していない	92	0.367	1.106	
	合計	2,401	0.000	0.811	
親の職業	管理的職業	375	0.045	0.743	0.760
	事務的職業	271	-0.012	0.841	
	専門的職業	211	0.057	0.775	
	技術的職業	215	0.077	0.742	
	販売的職業	124	-0.032	0.840	
	サービスの職業	95	0.041	0.975	
	技能的職業	111	-0.021	0.745	
	保安的職業	68	-0.165	0.781	
	生産工程・運輸従事者	229	-0.054	0.765	
	非正規雇用者	57	-0.004	0.781	
	自営の農林漁業	17	0.095	0.730	
	自営の商工サービス業	149	-0.021	0.814	
	自由業	22	0.004	0.735	
	働いている人はいない	12	0.196	0.993	
	わからない	122	-0.056	0.750	
	合計	2,078	0.005	0.788	
父親の仕事をよく理解 している	とてもそう思う	461	0.057	0.808	3.059
	少しそう思う	855	0.018	0.762	*
	あまりそう思わない	624	-0.075	0.755	
	ぜんぜんそう思わない	270	-0.042	0.874	
	合計	2,210	-0.007	0.785	
母親の仕事をよく理解 している	とてもそう思う	831	0.046	0.811	4.413
	少しそう思う	915	0.002	0.744	**
	あまりそう思わない	374	-0.062	0.748	
	ぜんぜんそう思わない	134	-0.192	0.930	
	合計	2,254	-0.004	0.784	
父親は私のことをよく わかってきている	とてもそう思う	335	0.199	0.818	16.922
	少しそう思う	836	0.055	0.773	***
	あまりそう思わない	712	-0.105	0.719	
	ぜんぜんそう思わない	331	-0.148	0.861	
	合計	2,214	-0.005	0.786	
母親は私のことをよく わかってきている	とてもそう思う	455	0.045	0.813	4.068
	少しそう思う	670	0.056	0.754	**
	あまりそう思わない	671	-0.057	0.748	
	ぜんぜんそう思わない	415	-0.076	0.855	
	合計	2,211	-0.005	0.786	
父は私によく話す	とてもそう思う	635	0.088	0.762	8.977
	少しそう思う	978	0.020	0.772	***
	あまりそう思わない	480	-0.149	0.747	
	ぜんぜんそう思わない	159	-0.051	0.969	
	合計	2,252	-0.002	0.783	
母は私によく話す	とてもそう思う	935	0.059	0.813	5.131
	少しそう思う	818	-0.015	0.745	**
	あまりそう思わない	372	-0.108	0.739	
	ぜんぜんそう思わない	123	-0.114	0.867	
	合計	2,248	-0.005	0.782	
保護者に進路につい て	かなり真剣にはなしている	687	0.053	0.787	2.763
	わりと真剣に話している	1,181	0.001	0.772	*

		あまり真剣に話していない	441	-0.085	0.765	
		ぜんぜん真剣に話していない	92	-0.016	1.001	
		合計	2,401	-0.001	0.786	
自己多元	親の職業	管理的職業	375	0.030	0.751	0.869
		事務的職業	271	0.007	0.740	
		専門的職業	211	-0.022	0.748	
		技術的職業	215	-0.049	0.742	
		販売的職業	124	0.039	0.710	
		サービスの職業	95	-0.013	0.691	
		技能的職業	111	0.137	0.755	
		保安的職業	68	-0.175	0.759	
		生産工程・運輸従事者	229	-0.012	0.739	
		非正規雇用者	57	-0.068	0.815	
		自営の農林漁業	17	0.121	0.633	
		自営の商工サービス業	149	-0.059	0.745	
		自由業	22	-0.077	0.667	
		働いている人はいない	12	-0.089	0.771	
		わからない	122	-0.043	0.794	
	合計	2,078	-0.008	0.744		
	父親の仕事をよく理解している	とてもそう思う	461	-0.023	0.804	0.836
		少しそう思う	855	0.010	0.703	
		あまりそう思わない	624	0.023	0.722	
		ぜんぜんそう思わない	270	-0.052	0.832	
		合計	2,210	-0.001	0.747	
	母親の仕事をよく理解している	とてもそう思う	831	-0.063	0.780	3.861
		少しそう思う	915	0.022	0.687	**
		あまりそう思わない	374	0.073	0.728	
		ぜんぜんそう思わない	134	0.069	0.945	
		合計	2,254	0.002	0.747	
	父親は私のことをよくわかってきている	とてもそう思う	335	-0.040	0.764	3.588
		少しそう思う	836	0.063	0.725	*
あまりそう思わない		712	-0.020	0.711		
ぜんぜんそう思わない		331	-0.075	0.843		
合計		2,214	0.000	0.747		
母親は私のことをよくわかってきている	とてもそう思う	455	-0.106	0.789	4.956	
	少しそう思う	670	0.024	0.708	**	
	あまりそう思わない	671	0.062	0.684		
	ぜんぜんそう思わない	415	-0.019	0.841		
	合計	2,211	0.001	0.747		
父は私によく話す	とてもそう思う	635	0.010	0.760	0.065	
	少しそう思う	978	0.005	0.692		
	あまりそう思わない	480	-0.009	0.757		
	ぜんぜんそう思わない	159	-0.001	0.966		
	合計	2,252	0.003	0.747		
母は私によく話す	とてもそう思う	935	-0.052	0.757	3.514	
	少しそう思う	818	0.017	0.706	*	
	あまりそう思わない	372	0.074	0.725		
	ぜんぜんそう思わない	123	0.096	0.949		
	合計	2,248	0.002	0.747		
保護者に進路について	かなり真剣にはなしている	687	-0.060	0.768	4.553	
	わりと真剣に話している	1,181	-0.009	0.711	**	
	あまり真剣に話していない	441	0.093	0.748		
	ぜんぜん真剣に話していない	92	0.110	0.929		
	合計	2,401	0.000	0.745		

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 6-2-2 自己意識と家庭要因の相関

	親の職業	父親の仕事の理解	母親の仕事の理解	父親からの受容認識	母親からの受容認識	父親との会話	母親との会話	保護者への進路相談
自己肯定	0.002	.150(***)	.189(***)	.176(***)	.194(***)	.155(***)	.159(***)	.188(***)
自己否定	-0.036	-.056(***)	-.073(***)	-.146(***)	-.092(***)	-.066(***)	-.081(***)	-.051(*)
自己多元	-0.028	-0.002	.067(**)	-0.033	-0.008	.044(*)	.067(**)	.073(***)

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

つづいて、自己意識と家庭要因の地域比較(表 6-2-3)をみると、「自己肯定」「自己否定」「自己多元」とも東京と山口に大きな違いはみられない。高校生全体の傾向と同様の傾向

が地域に関わらず生じている。また、自己意識と家庭要因の地域別の相関（表 6-2-4）をみると、明確な地域差はみられず、これも全体と同様の傾向であった。

表 6-2-3 自己意識と家庭要因の地域比較

		東京				山口				
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
自己肯定	親の職業	管理的職業	256	0.04	0.79	0.913	119	-0.03	0.84	1.178
		事務的職業	151	-0.02	0.82		120	-0.04	0.81	
		専門的職業	123	0.10	0.83		88	0.08	0.80	
		技術的職業	115	-0.04	0.79		100	-0.13	0.85	
		販売的職業	70	-0.02	0.80		54	-0.06	0.84	
		サービスの職業	62	0.07	0.74		33	0.07	0.87	
		技能的職業	41	-0.22	0.77		70	0.03	0.73	
		保安的職業	33	-0.03	0.89		35	0.15	0.88	
		生産工程・運輸従事者	78	-0.15	0.77		151	-0.02	0.74	
		非正規雇用者	34	0.02	0.85		23	0.17	0.73	
		自営の農林漁業	8	-0.46	0.76		9	-0.38	0.51	
		自営の商工サービス業	89	0.05	0.89		60	-0.15	0.80	
		自由業	18	0.03	0.68		4	0.28	0.76	
		働いている人はいない	6	-0.26	0.70		6	-0.28	0.96	
	わからない	73	0.04	0.88		49	0.24	0.92		
	合計	1,157	0.00	0.81		921	-0.01	0.81		
	父親の仕事をよく理解している	とてもそう思う	246	-0.19	0.85	10.636	215	-0.15	0.83	6.910
		少しそう思う	477	-0.05	0.77	***	378	-0.02	0.76	***
		あまりそう思わない	347	0.07	0.78		277	0.06	0.81	
ぜんぜんそう思わない		167	0.23	0.89		103	0.28	1.04		
合計	1,237	-0.01	0.81		973	0.00	0.83			
母親の仕事をよく理解している	とてもそう思う	468	-0.21	0.82	16.719	363	-0.17	0.79	14.857	
	少しそう思う	523	0.09	0.74	***	392	0.02	0.74	***	
	あまりそう思わない	204	0.11	0.78		170	0.12	0.82		
	ぜんぜんそう思わない	68	0.29	1.03		66	0.50	1.20		
合計	1,263	-0.01	0.81		991	0.00	0.83			
父親は私のことをよくわかってきている	とてもそう思う	177	-0.30	0.86	13.642	158	-0.24	0.90	10.776	
	少しそう思う	462	-0.06	0.77	***	374	-0.07	0.76	***	
	あまりそう思わない	404	0.08	0.75		308	0.11	0.75		
	ぜんぜんそう思わない	194	0.19	0.90		137	0.22	0.98		
合計	1,237	-0.01	0.81		977	0.00	0.83			
母親は私のことをよくわかってきている	とてもそう思う	360	-0.28	0.80	20.999	275	-0.23	0.82	12.719	
	少しそう思う	563	0.06	0.74	***	415	0.03	0.77	***	
	あまりそう思わない	248	0.13	0.83		232	0.12	0.77		
	ぜんぜんそう思わない	89	0.26	0.98		70	0.30	1.12		
合計	1,260	-0.01	0.81		992	0.00	0.83			
父は私によく話す	とてもそう思う	242	-0.21	0.87	9.793	213	-0.24	0.88	9.925	
	少しそう思う	398	-0.02	0.80	***	272	-0.01	0.76	***	
	あまりそう思わない	356	0.03	0.74		315	0.09	0.74		
	ぜんぜんそう思わない	241	0.18	0.83		174	0.16	0.95		
合計	1,237	-0.01	0.81		974	0.00	0.83			
母は私によく話す	とてもそう思う	555	-0.11	0.81	10.841	380	-0.15	0.84	9.491	
	少しそう思う	443	-0.01	0.76	***	375	0.05	0.73	***	
	あまりそう思わない	195	0.18	0.81		177	0.11	0.76		
	ぜんぜんそう思わない	65	0.34	0.97		58	0.36	1.21		
合計	1,258	-0.01	0.81		990	0.00	0.82			
保護者に進路について	かなり真剣にはなしている	346	-0.20	0.85	11.924	341	-0.20	0.81	18.543	
	わりと真剣に話している	637	0.03	0.76	***	544	0.02	0.75	***	
	あまり真剣に話していない	239	0.13	0.78		202	0.25	0.77		
	ぜんぜん真剣に話していない	44	0.30	0.97		48	0.43	1.22		
合計	1,266	-0.01	0.81		1,135	0.01	0.81			
自己肯定	親の職業	管理的職業	256	0.12	0.73	1.081	119	-0.12	0.74	1.194
		事務的職業	151	-0.02	0.84		120	0.00	0.85	
		専門的職業	123	0.10	0.79		88	0.00	0.75	
		技術的職業	115	0.11	0.75		100	0.04	0.73	
		販売的職業	70	-0.01	0.86		54	-0.07	0.82	
		サービスの職業	62	0.14	0.94		33	-0.15	1.02	
		技能的職業	41	-0.06	0.82		70	0.00	0.70	
		保安的職業	33	-0.19	0.86		35	-0.14	0.71	

	生産工程・運輸従事者	78	0.08	0.76		151	-0.12	0.76		
	非正規雇用者	34	-0.03	0.83		23	0.04	0.72		
	自営の農林漁業	8	0.00	0.59		9	0.18	0.87		
	自営の商工サービス業	89	0.02	0.75		60	-0.08	0.91		
	自由業	18	0.02	0.78		4	-0.08	0.55		
	働いている人はいない	6	-0.56	0.63		6	0.96	0.62		
	わからない	73	-0.04	0.71		49	-0.08	0.82		
	合計	1,157	0.05	0.79		921	-0.05	0.79		
父親の仕事 をよく理解し ている	とてもそう思う	246	0.11	0.81	2.349	215	0.00	0.80	0.950	
	少しそう思う	477	0.07	0.76		378	-0.04	0.77		
	あまりそう思わない	347	-0.05	0.74		277	-0.11	0.77		
	ぜんぜんそう思わない	167	-0.01	0.91		103	-0.10	0.81		
	合計	1,237	0.03	0.79		973	-0.06	0.78		
母親の仕事 をよく理解し ている	とてもそう思う	468	0.06	0.82	0.790	363	0.03	0.80	4.772	
	少しそう思う	523	0.04	0.74		392	-0.06	0.75	**	
	あまりそう思わない	204	-0.03	0.73		170	-0.11	0.77		
	ぜんぜんそう思わない	68	-0.05	1.05		66	-0.34	0.77		
	合計	1,263	0.03	0.79		991	-0.05	0.78		
父親は私の ことをよくわ かってくれて いる	とてもそう思う	177	0.27	0.85	12.954	158	0.12	0.77	5.108	
	少しそう思う	462	0.11	0.77	***	374	-0.02	0.77	**	
	あまりそう思わない	404	-0.07	0.72		308	-0.15	0.72		
	ぜんぜんそう思わない	194	-0.14	0.82		137	-0.16	0.92		
	合計	1,237	0.04	0.79		977	-0.06	0.78		
母親は私の ことをよくわ かってくれて いる	とてもそう思う	360	0.10	0.79	4.332	275	0.08	0.73	5.203	
	少しそう思う	563	0.07	0.76	**	415	-0.05	0.78	**	
	あまりそう思わない	248	-0.10	0.75		232	-0.20	0.74		
	ぜんぜんそう思わない	89	-0.07	0.96		70	-0.03	0.98		
	合計	1,260	0.03	0.78		992	-0.05	0.78		
父は私によく 話す	とてもそう思う	242	0.11	0.85	3.502	213	-0.03	0.77	1.088	
	少しそう思う	398	0.09	0.74	*	272	0.00	0.77		
	あまりそう思わない	356	-0.01	0.73		315	-0.11	0.76		
	ぜんぜんそう思わない	241	-0.07	0.85		174	-0.08	0.86		
	合計	1,237	0.03	0.79		974	-0.06	0.78		
母は私によく 話す	とてもそう思う	555	0.06	0.81	0.751	380	0.06	0.81	6.104	
	少しそう思う	443	0.02	0.75		375	-0.06	0.74	***	
	あまりそう思わない	195	0.00	0.70		177	-0.23	0.76		
	ぜんぜんそう思わない	65	-0.08	1.01		58	-0.15	0.68		
	合計	1,258	0.03	0.78		990	-0.05	0.78		
保護者に進 路について	かなり真剣にはなしている	346	0.05	0.79	3.366	341	0.06	0.79	2.466	
	わりと真剣に話している	637	0.08	0.78	*	544	-0.09	0.75		
	あまり真剣に話していない	239	-0.11	0.73		202	-0.05	0.81		
	ぜんぜん真剣に話してい ない	44	0.03	0.98		48	-0.05	1.03		
	合計	1,266	0.03	0.78		1,135	-0.04	0.79		
親の職業	管理的職業	256	0.02	0.75	0.709	119	0.05	0.75	1.001	
	事務的職業	151	-0.03	0.75		120	0.06	0.73		
	専門的職業	123	0.00	0.78		88	-0.05	0.70		
	技術的職業	115	-0.05	0.74		100	-0.05	0.75		
	販売的職業	70	-0.02	0.71		54	0.12	0.70		
	サービスの職業	62	-0.09	0.71		33	0.14	0.64		
	技能的職業	41	0.01	0.72		70	0.21	0.77		
	保安的職業	33	-0.18	0.67		35	-0.17	0.84		
	生産工程・運輸従事者	78	-0.02	0.80		151	-0.01	0.71		
	非正規雇用者	34	-0.27	0.73		23	0.23	0.87		
	自営の農林漁業	8	0.21	0.63		9	0.04	0.66		
	自営の商工サービス業	89	-0.13	0.73		60	0.05	0.76		
	自由業	18	-0.11	0.68		4	0.07	0.67		
	働いている人はいない	6	-0.28	0.62		6	0.10	0.92		
	わからない	73	-0.01	0.81		49	-0.09	0.77		
	合計	1,157	-0.04	0.75		921	0.03	0.74		
	父親の仕事 をよく理解し ている	とてもそう思う	246	-0.04	0.79	0.093	215	-0.01	0.82	1.271
		少しそう思う	477	-0.03	0.71		378	0.06	0.69	
		あまりそう思わない	347	-0.01	0.73		277	0.06	0.71	
		ぜんぜんそう思わない	167	-0.04	0.83		103	-0.08	0.84	
合計		1,237	-0.03	0.75		973	0.03	0.74		
母親の仕事 をよく理解し ている	とてもそう思う	468	-0.10	0.78	2.377	363	-0.02	0.78	1.795	
	少しそう思う	523	0.00	0.70		392	0.05	0.67		
	あまりそう思わない	204	0.04	0.74		170	0.11	0.71		
	ぜんぜんそう思わない	68	-0.02	0.85		66	0.17	1.04		
	合計	1,263	-0.02	0.79		991	0.03	0.78		

	合計	1,263	-0.03	0.75		991	0.04	0.75	
父親は私のことをよくわかってきている	とてもそう思う	177	-0.09	0.78	2.165	158	0.01	0.75	1.521
	少しそう思う	462	0.04	0.72		374	0.09	0.73	
	あまりそう思わない	404	-0.05	0.72		308	0.02	0.70	
	ぜんぜんそう思わない	194	-0.09	0.83		137	-0.06	0.86	
	合計	1,237	-0.03	0.75		977	0.03	0.74	
母親は私のことをよくわかってきている	とてもそう思う	360	-0.03	0.76	0.075	275	0.07	0.76	0.488
	少しそう思う	563	-0.03	0.69		415	0.06	0.69	
	あまりそう思わない	248	-0.02	0.76		232	0.00	0.75	
	ぜんぜんそう思わない	89	0.00	0.97		70	0.00	0.97	
	合計	1,260	-0.03	0.75		992	0.04	0.75	
父は私によく話す	とてもそう思う	242	-0.11	0.80	2.204	213	-0.10	0.78	3.453
	少しそう思う	398	0.01	0.72		272	0.04	0.69	*
	あまりそう思わない	356	0.02	0.67		315	0.11	0.69	
	ぜんぜんそう思わない	241	-0.07	0.84		174	0.06	0.85	
	合計	1,237	-0.02	0.75		974	0.03	0.74	
母は私によく話す	とてもそう思う	555	-0.10	0.74	2.714	380	0.01	0.77	1.295
	少しそう思う	443	0.01	0.72	*	375	0.02	0.69	
	あまりそう思わない	195	0.05	0.73		177	0.10	0.72	
	ぜんぜんそう思わない	65	0.02	0.95		58	0.18	0.95	
	合計	1,258	-0.03	0.75		990	0.04	0.75	
保護者に進路について	かなり真剣にはなしている	346	-0.09	0.78	3.742	341	-0.03	0.76	1.726
	わりと真剣に話している	637	-0.06	0.71	*	544	0.05	0.70	
	あまり真剣に話していない	239	0.10	0.74		202	0.09	0.76	
	ぜんぜん真剣に話していない	44	0.09	0.95		48	0.13	0.92	
	合計	1,266	-0.03	0.75		1,135	0.04	0.74	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 6-2-4 自己意識と家庭要因の地域別相関

		家事得点	家族で中心 となって働 いている人 の主な職業	私は、父の仕 事についてよ く知っている	私は、母の仕 事についてよ く知っている	父は、私の ことをよく わかってい る	母は、私 のことをよ くわかつ ている	父は、私 にいろい ろなことを 話すほう だ	母は、私に いろいろな ことを話す ほうだ	保護者
東京	自己肯定	.105(***)	-0.020	.159(***)	.180(***)	.175(***)	.200(***)	.148(***)	.157(***)	.161(***)
	自己否定	-0.051	-0.054	-.065(*)	-0.040	-.171(***)	-.087(**)	-.089(**)	-0.041	-0.052
	自己多元	.070(*)	-0.044	0.006	.060(*)	-0.025	0.012	0.016	.071(*)	.082(**)
山口	自己肯定	.110(***)	0.032	.141(***)	.201(***)	.178(***)	.186(***)	.164(***)	.162(***)	.216(***)
	自己否定	-0.025	-0.002	-0.050	-.113(***)	-.118(***)	-.097(**)	-0.037	-.125(***)	-0.053
	自己多元	.078(**)	-0.014	-0.009	.074(*)	-0.041	-0.035	.081(*)	0.057	.065(*)

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

以上の分析から、自己意識に対する家庭要因の規定は、親の職業よりも親子関係の在り方が強く自己意識に影響をしていることが明らかである。親子関係が十分に保たれている高校生は「自己肯定」に、親子関係が希薄な高校生は「自己否定」の自己意識にある。「自己多元」は一見すると「自己肯定」と同様の親子関係が保たれているように見えるが、母親との良好な関係であり、父親とは希薄な関係が見出された。東京と山口の地域差はなく、高校生全体の傾向といえる。

2 自己意識を規定する学校要因

自己意識を規定する学校要因を明らかにするため、学校トラッキング、成績、学校の勉強の重視度、友人の多さや友人からの信頼などの友人関係といった学校要因が高校生の自己意識にどのように規定しているのか、自己意識の因子得点を用いて一元配置分散分析を行った。高校生全体の自己意識ごとの学校要因と分析結果は表 6-2-5 のとおりである。

「自己肯定」は、進路多様校・中間校の高校生、成績が上位・中位の高校生、学校の勉

強の重視度が高い高校生、友人が多い高校生、友人から信頼をされている高校生、友人に真剣に進路相談をしている高校生がこの傾向にある。

「自己否定」は、進路多様校・中間校の高校生、成績が中位・下位の高校生、学校の勉強をそれほど重視していない高校生、友人が少ない高校生、みんなから信頼されていないと思っている高校生がこの傾向にある。

「自己多元」は、学校区分、成績、学校の勉強の重視度、友人の多さとの有意差はみられなかった。学校における対人関係では、みんなから信頼されている高校生、友人に進路について話を真剣にしている高校生がこの傾向にある。

表 6-2-5 自己意識と学校要因

		度数	平均値	標準偏差	F 値	
自己肯定	学校区分	進学校	810	0.104	0.803	10.396
		進路多様校	535	-0.078	0.806	***
		中間校	1,061	-0.040	0.816	
		合計	2,406	0.000	0.812	
	成績	上位	205	-0.055	0.861	3.568
		中位の上	469	0.004	0.796	**
		中位の中	718	-0.006	0.791	
		中位の下	501	-0.094	0.755	
		下位	440	0.100	0.885	
	合計	2,333	-0.007	0.811		
	学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	206	-0.217	0.864	9.181
		かなり役立つと思う	945	-0.040	0.752	***
		あまり役に立たないと思う	726	0.050	0.797	
		ぜんぜん役に立たないと思う	53	0.294	0.951	
合計		1,930	-0.016	0.792		
友人が多い	とてもそう思う	258	-0.311	0.874	40.114	
	少しそう思う	873	-0.119	0.738	***	
	あまりそう思わない	933	0.089	0.759		
	ぜんぜんそう思わない	335	0.305	0.950		
	合計	2,399	0.001	0.813		
みんなから信頼されている	とてもそう思う	97	-0.346	0.974	33.300	
	少しそう思う	650	-0.147	0.745	***	
	あまりそう思わない	1,223	0.002	0.757		
	ぜんぜんそう思わない	428	0.297	0.931		
	合計	2,398	0.000	0.813		
友人に進路について真剣に	かなり真剣にはなしている	464	-0.180	0.830	19.130	
	わりと真剣に話している	1,054	-0.044	0.778	***	
	あまり真剣に話していない	684	0.135	0.761		
	ぜんぜん真剣に話していない	200	0.192	0.989		
	合計	2,402	0.000	0.812		
自己否定	学校区分	進学校	810	0.059	0.800	4.082
		進路多様校	535	-0.061	0.757	*
		中間校	1,061	-0.014	0.788	
		合計	2,406	0.000	0.786	
	成績	上位	205	0.179	0.799	8.484
		中位の上	469	0.106	0.789	***
		中位の中	718	-0.003	0.754	
		中位の下	501	-0.123	0.736	
		下位	440	-0.055	0.862	
	合計	2,333	-0.001	0.788		
	学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	206	0.159	0.822	6.011
		かなり役立つと思う	945	0.000	0.750	***
		あまり役に立たないと思う	726	-0.094	0.799	
		ぜんぜん役に立たないと思う	53	0.006	0.926	
合計		1,930	-0.018	0.785		
友人が多い	とてもそう思う	258	0.331	0.842	37.447	
	少しそう思う	873	0.085	0.721	***	
	あまりそう思わない	933	-0.067	0.742		
	ぜんぜんそう思わない	335	-0.287	0.894		
	合計	2,399	0.001	0.813		

	合計	2,399	0.000	0.786	
	とともそう思う	97	0.511	0.736	56.928
みんなから信頼されている	少しそう思う	650	0.213	0.738	***
	あまりそう思わない	1,223	-0.044	0.729	
	ぜんぜんそう思わない	428	-0.311	0.875	
	合計	2,398	0.000	0.786	
友人に進路について真剣に	かなり真剣にはなしている	464	0.032	0.863	1.609
	わりと真剣に話している	1,054	-0.034	0.719	
	あまり真剣に話していない	684	0.039	0.785	
	ぜんぜん真剣に話していない	200	-0.037	0.927	
	合計	2,402	-0.001	0.786	
学校区分	進学校	810	-0.002	0.737	0.026
	進路多様	535	0.006	0.749	
	中間校	1,061	-0.002	0.750	
	合計	2,406	0.000	0.745	
成績	上位	205	-0.043	0.778	1.313
	中位の上	469	-0.046	0.676	
	中位の中	718	0.040	0.745	
	中位の下	501	-0.031	0.738	
	下位	440	-0.001	0.787	
合計	2,333	-0.007	0.742		
学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	206	-0.061	0.727	1.983
	かなり役立つと思う	945	0.024	0.732	
	あまり役に立たないと思う	726	-0.036	0.729	
	ぜんぜん役に立たないと思う	53	0.141	0.989	
	合計	1,930	-0.005	0.739	
友人が多い	とともそう思う	258	-0.068	0.795	2.197
	少しそう思う	873	0.047	0.711	
	あまりそう思わない	933	-0.020	0.702	
	ぜんぜんそう思わない	335	-0.020	0.889	
	合計	2,399	-0.001	0.745	
みんなから信頼されている	とともそう思う	97	-0.255	0.791	4.140
	少しそう思う	650	0.014	0.707	**
	あまりそう思わない	1,223	0.016	0.710	
	ぜんぜんそう思わない	428	-0.019	0.869	
	合計	2,398	-0.002	0.745	
友人に進路について真剣に	かなり真剣にはなしている	464	-0.100	0.784	5.820
	わりと真剣に話している	1,054	0.005	0.713	**
	あまり真剣に話していない	684	0.078	0.736	
	ぜんぜん真剣に話していない	200	-0.063	0.822	
	合計	2,402	0.000	0.745	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

自己意識と学校要因の相関（表 6-2-6）をみると、「自己肯定」は成績、学校の勉強の重視度、友人関係と正の相関であり、「自己否定」は成績、学校の勉強の重視度、友人関係が負の相関であった。中でも友人関係の量（「友達が多い」：-0.210）と友人関係の質（「みんなから信頼されている」：-0.258）は相関が高い。「自己多元」は学校要因との相関は「友人や先輩に真剣に進路相関をする」に有意差があるだけであり、また、相関も極めて低いものとなった。

表 6-2-6 自己意識と学校要因の相関

	学校区分	成績はクラス 中でどれくら いか	学校で勉強し ていることはど の程度役立つ か	友だちが多い	みんなから信 頼されている	友人や先輩
自己肯定	-.074(***)	0.028	.114(***)	.219(***)	.195(***)	.150(***)
自己否定	-0.038	-.104(***)	-.084(***)	-.210(***)	-.258(***)	-0.001
自己多元	0.000	0.013	0.004	-0.009	0.023	.049(*)

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

そこで、地域別の自己意識の規定状況を明らかにするために地域比較を行った(表6-2-7)。「自己肯定」と「自己否定」は東京と山口の高校生の地域差は認められず、全体の傾向と同様である。しかし、「自己多元」は、東京と山口の高校生に地域差がみられる。山口では、「自己多元」と学校要因との関連がみられない。これに対し、東京は「自己多元」は「自己肯定」と同様に、学校の勉強の重視度が高く、友達が多く、みんなから信頼され、友達に進路相談をする高校生である。検定による有意差は「自己肯定」よりも明確ではないが、東京の「自己多元」の高校生は「自己肯定」の高校生と同様の自己意識の水準をもっているといえる。

自己意識と学校要因の地域別の相関(表6-2-8)をみると、東京も山口も「自己肯定」は全体の傾向と同様、学校要因と正の相関であり、「自己否定」は負の相関である。友人関係の相関が高く、東京の「自己否定」は特に友人の質「友人からの信頼」と相関が高い(-0.268)。「自己多元」は山口が学校区分において相関があるが、相関は低く、東京も山口も相関はみられない。

表 6-2-7 自己意識と学校要因の地域比較

		東京				山口				
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
自己肯定	学校区分	進学校	438	0.10	0.77	6.842	372	0.10	0.85	3.921
		進路多様	198	-0.11	0.84	**	337	-0.06	0.78	*
		中間校	633	-0.05	0.82		428	-0.02	0.81	
		合計	1,269	-0.01	0.81		1,137	0.01	0.81	
	成績	上位	118	-0.04	0.86	1.217	87	-0.08	0.87	3.307
		中位の上	256	0.00	0.73		213	0.01	0.87	*
		中位の中	369	0.02	0.84		349	-0.03	0.74	
		中位の下	262	-0.10	0.73		239	-0.09	0.79	
		下位	232	0.04	0.90		208	0.17	0.86	
	合計	1,237	-0.01	0.81		1,096	0.00	0.81		
	学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	103	-0.17	0.86	2.635	103	-0.27	0.87	7.907
		かなり役立つと思う	493	-0.03	0.75	*	452	-0.05	0.76	***
		あまり役に立たないと思う	411	0.01	0.82		315	0.11	0.76	
		ぜんぜん役に立たないと思う	28	0.27	0.95		25	0.32	0.97	
		合計	1,035	-0.02	0.80		895	-0.01	0.79	
	友人が多い	とてもそう思う	135	-0.38	0.89	20.307	123	-0.24	0.85	21.190
		少しそう思う	456	-0.09	0.73	***	417	-0.15	0.74	***
		あまりそう思わない	499	0.07	0.76		434	0.11	0.75	
		ぜんぜんそう思わない	177	0.26	0.93		158	0.35	0.97	
		合計	1,267	-0.01	0.81		1,132	0.01	0.82	
	みんなから信頼されている	とてもそう思う	56	-0.38	0.98	14.842	41	-0.30	0.98	18.931
少しそう思う		373	-0.12	0.76	***	277	-0.18	0.72	***	
あまりそう思わない		628	0.00	0.75		595	0.01	0.77		
ぜんぜんそう思わない		210	0.27	0.94		218	0.33	0.92		
合計		1,267	-0.01	0.81		1,131	0.01	0.82		
高校の先生に進路について真剣に	かなり真剣にはなしている	143	-0.26	0.92	7.883	170	-0.28	0.84	12.841	
	わりと真剣に話している	524	-0.05	0.77	***	514	-0.02	0.74	***	
	あまり真剣に話していない	457	0.06	0.77		348	0.13	0.76		
	ぜんぜん真剣に話していない	142	0.15	0.91		104	0.22	1.09		
	合計	1,266	-0.01	0.81		1,136	0.01	0.81		
友人に進路について真剣に	かなり真剣にはなしている	237	-0.17	0.87	10.549	227	-0.19	0.78	10.371	
	わりと真剣に話している	567	-0.06	0.78	***	487	-0.03	0.78	***	
	あまり真剣に話していない	360	0.09	0.74		324	0.18	0.78		
	ぜんぜん真剣に話していない	103	0.29	0.95		97	0.09	1.03		
	合計	1,267	-0.01	0.81		1,135	0.01	0.81		
自己否定	学校区分	進学校	438	0.09	0.77	1.902	372	0.02	0.84	2.197
		進路多様	198	0.01	0.80		337	-0.10	0.73	
		中間校	633	0.00	0.79		428	-0.03	0.78	

	合計	1,269	0.03	0.78		1,137	-0.04	0.79	
成績	上位	118	0.20	0.77	5.448	87	0.16	0.84	3.178
	中位の上	256	0.14	0.78	***	213	0.06	0.80	*
	中位の中	369	0.04	0.76		349	-0.05	0.75	
	中位の下	262	-0.13	0.75		239	-0.12	0.72	
	下位	232	-0.02	0.86		208	-0.09	0.87	
	合計	1,237	0.03	0.79		1,096	-0.03	0.79	
学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	103	0.11	0.80	2.264	103	0.21	0.84	6.114
	かなり役立つと思う	493	0.05	0.76		452	-0.05	0.74	***
	あまり役に立たないと思う	411	-0.05	0.80		315	-0.15	0.79	
	ぜんぜん役に立たないと思う	28	0.22	1.04		25	-0.23	0.73	
	合計	1,035	0.02	0.79		895	-0.06	0.78	
友人が多い	とてもそう思う	135	0.41	0.85	22.889	123	0.24	0.83	15.591
	少しそう思う	456	0.10	0.71	***	417	0.07	0.73	***
	あまりそう思わない	499	-0.02	0.73		434	-0.12	0.76	
	ぜんぜんそう思わない	177	-0.28	0.92		158	-0.29	0.87	
	合計	1,267	0.03	0.78		1,132	-0.03	0.79	
みんなから信頼されている	とてもそう思う	56	0.56	0.77	33.084	41	0.45	0.69	23.675
	少しそう思う	373	0.22	0.74	***	277	0.21	0.74	***
	あまりそう思わない	628	-0.01	0.72		595	-0.08	0.74	
	ぜんぜんそう思わない	210	-0.33	0.88		218	-0.30	0.87	
	合計	1,267	0.03	0.78		1,131	-0.03	0.79	
高校の先生に進路について真剣に	かなり真剣にはなしている	143	-0.07	0.82	2.848	170	0.06	0.86	1.382
	わりと真剣に話している	524	0.10	0.77	*	514	-0.03	0.74	
	あまり真剣に話していない	457	0.00	0.72		348	-0.09	0.77	
	ぜんぜん真剣に話していない	142	-0.04	0.94		104	-0.06	0.90	
	合計	1,266	0.03	0.78		1,136	-0.04	0.79	
友人に進路について真剣に	かなり真剣にはなしている	237	0.04	0.89	0.467	227	0.02	0.84	1.433
	わりと真剣に話している	567	0.00	0.72		487	-0.08	0.71	
	あまり真剣に話していない	360	0.06	0.76		324	0.01	0.81	
	ぜんぜん真剣に話していない	103	0.03	0.92		97	-0.10	0.94	
	合計	1,267	0.03	0.78		1,135	-0.04	0.79	
学校区分	進学校	438	0.00	0.74	2.266	372	-0.01	0.73	3.255
	進路多様	198	0.03	0.78		337	-0.01	0.73	*
	中間校	633	-0.08	0.74		428	0.11	0.75	
	合計	1,269	-0.03	0.75		1,137	0.04	0.74	
	成績	上位	118	-0.06	0.75	0.740	87	-0.03	0.82
中位の上		256	-0.04	0.70		213	-0.05	0.65	
中位の中		369	0.00	0.76		349	0.08	0.73	
中位の下		262	-0.10	0.73		239	0.04	0.74	
下位		232	-0.03	0.78		208	0.03	0.80	
合計		1,237	-0.04	0.74		1,096	0.03	0.74	
学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	103	-0.14	0.69	2.830	103	0.02	0.76	1.252
	かなり役立つと思う	493	-0.04	0.72	*	452	0.09	0.74	
	あまり役に立たないと思う	411	-0.06	0.75		315	-0.01	0.70	
	ぜんぜん役に立たないと思う	28	0.31	1.00		25	-0.05	0.96	
	合計	1,035	-0.05	0.74		895	0.04	0.74	
友人が多い	とてもそう思う	135	-0.16	0.80	1.754	123	0.04	0.78	1.808
	少しそう思う	456	0.00	0.72		417	0.10	0.70	
	あまりそう思わない	499	-0.02	0.69		434	-0.02	0.71	
	ぜんぜんそう思わない	177	-0.05	0.89		158	0.02	0.89	
	合計	1,267	-0.03	0.75		1,132	0.04	0.74	
みんなから信頼されている	とてもそう思う	56	-0.28	0.76	3.254	41	-0.23	0.84	2.030
	少しそう思う	373	-0.03	0.72	*	277	0.07	0.68	
	あまりそう思わない	628	0.01	0.72		595	0.03	0.70	
	ぜんぜんそう思わない	210	-0.11	0.84		218	0.06	0.89	
	合計	1,267	-0.03	0.75		1,131	0.04	0.74	
高校の先生に進路について真剣に	かなり真剣にはなしている	143	-0.22	0.71	3.695	170	-0.09	0.73	2.663
	わりと真剣に話している	524	-0.02	0.73	*	514	0.06	0.70	*
	あまり真剣に話していない	457	0.01	0.73		348	0.09	0.77	
	ぜんぜん真剣に話していない	142	-0.05	0.89		104	-0.03	0.83	
	合計	1,266	-0.03	0.75		1,136	0.04	0.74	
友人に進路について真剣に	かなり真剣にはなしている	237	-0.15	0.79	3.033	227	-0.05	0.77	3.414
	わりと真剣に話している	567	-0.01	0.74	*	487	0.02	0.68	*
	あまり真剣に話していない	360	0.02	0.71		324	0.14	0.76	
	ぜんぜん真剣に話していない	103	-0.09	0.76		97	-0.04	0.88	
	合計	1,267	-0.03	0.75		1,135	0.04	0.74	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 6-2-8 自己意識と学校要因の地域別の相関

		学校区分	成績はクラスの中でどれくらいか	学校で勉強していることほどの程度役立つか	友だちが多い	みんなから信頼されている	学校の先生	友人や先輩
東京	自己肯定	-.083(**)	0.002	.076(*)	.212(***)	.179(***)	.131(***)	.155(***)
	自己否定	-0.052	-.110(***)	-0.046	-.221(***)	-.268(***)	-0.022	0.009
	自己多元	-0.051	-0.005	0.046	0.021	0.013	0.054	0.046
山口	自己肯定	-.062(*)	0.058	.160(***)	.226(***)	.213(***)	.174(***)	.145(***)
	自己否定	-0.027	-.096(**)	-.133(***)	-.199(***)	-.242(***)	-0.053	-0.013
	自己多元	.067(*)	0.031	-0.038	-0.041	0.029	0.038	0.052

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

以上のことから、高校生全体の傾向としては、学校という集団において学校を重視し、学力的な位置づけや、対人関係における位置づけを高いと評価する高校生が「自己肯定」の意識をもち、学校を重視せず、自らの位置づけを低く評価する高校生が「自己否定」の意識をもっている。この点については、東京も山口も同様であった。つまり、成績、学校の勉強の重視度、友人関係の量と質の差が、自己の肯定—否定を規定しているといえる。学校要因の中でも特に友人関係の規定力が強いといえる。

家庭要因においては親子関係の規定と学校要因の友人関係の規定を比較してみると、友人関係の規定力が強い。学校においても家庭においてもその所属する集団における対人関係が自己意識を強く規定しており、対人関係の重要性が明らかになった。

東京と山口で異なるのは、「自己多元」の意識である。東京の「自己多元」は、学校の勉強の重視度が高く、友達が多く、みんなから信頼され、友達に進路相談をする「自己肯定」の高校生と同様の自己意識である。これに対し、山口の「自己多元」は「自己肯定」とも「自己否定」とも異なる自己意識である。

3 自己意識を規定する地域社会における要因

次に、自己意識と地域社会における要因について分析する。地域社会における要因としては、学校外体験活動とアルバイト体験、メディア利用度との関連を分析する。まず、学校外体験活動については第 5 章で学校外体験活動についての因子分析によって得られた 4 つ因子を用いる。自己意識と学校外体験活動の 4 つの因子と高校生全体の相関 (表 6-2-9) では、「自己肯定」の高校生は「交流活動」(0.131) を経験している傾向にあり、「自己多元」は「文学・芸術活動」(0.144)、「特技鍛錬活動」(0.141) を経験してきている。さらに「自己否定」は「文学・芸術活動」と負の相関にあるという特長を示している。

自己意識と学校外体験活動の地域比較 (表 6-2-9) では、東京の「自己肯定」の意識をもつ高校生は「交流活動」(0.146) 経験が山口よりも多い。山口の「自己肯定」の意識をもつ高校生は「交流活動」(0.114) よりも「実験・観察・飼育活動」(0.124) の経験を多くもつ。「自己多元」の意識をもつ東京の高校生は「特技鍛錬活動」(0.140) の経験が多いが、「自己多元」の意識をもつ山口の高校生は「特技鍛錬活動」(0.138) だけでなく「文学・芸術活動」(0.186) 「実験・観察・飼育活動」(0.123) の経験ももつ。「自己否定」は、東京の高校生よりも山口の高校生が「文学・芸術活動」負の相関が強い。

「自己多元」については、学校要因による規定、家庭要因による規定が小さく、それ以外の要因によって規定されていると考えられた。高校生全体では「自己多元」と学校外体験活動との相関は、「文学・芸術活動」(0.144)、「特技鍛錬活動」(0.141)と相関が高かった。「自己多元」は家庭や地域社会における活動において規定されるといえる。

しかし、全体でも、地域比較においても「自己肯定」「自己多元」「自己否定」は学校要因における友人関係、家庭要因の保護者との関係との相関と比較すると相関係数値は低く、強い相関はみられない。学校外体験活動の規定力は学校要因の友人や家庭要因の保護者との関係と比較すると弱いといえる。

表 6-2-9 自己意識と学校外体験活動

		実験・観察・飼育活動	交流活動	特技鍛錬活動	文学・芸術活動
全体	自己肯定	.110(***)	.131(***)	.092(***)	-0.007
	自己否定	-.048(*)	-0.012	.077(***)	-.089(***)
	自己多元	.100(***)	0.030	.141(***)	.144(***)
東京	自己肯定	.099(**)	.146(***)	.081(**)	-0.032
	自己否定	-0.042	0.015	.080(**)	-.062(*)
	自己多元	.080(**)	0.022	.140(***)	.098(**)
山口	自己肯定	.124(***)	.114(***)	.104(**)	0.019
	自己否定	-0.054	-0.043	.078(**)	-.109(***)
	自己多元	.123(***)	0.039	.138(***)	.186(***)

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

次に、自己意識の因子得点とアルバイト経験、メディア利用について一元配置分散分析を行った。高校生全体(表 6-2-10)では、「自己肯定」と「自己多元」はアルバイト経験がある高校生、メディア利用が多い高校生がこの傾向にある。「自己否定」はアルバイト経験もメディア利用も有意差がみられない。「自己否定」を規定するものはアルバイトやメディア利用ではないといえる。

自己意識の因子得点とアルバイト経験、メディア利用について、地域別に一元配置分散分析を行った(表 6-2-11)。「自己肯定」「自己否定」では地域差はみられないが、「自己多元」は東京の高校生が山口の高校生よりもアルバイト体験のある高校生がこの傾向にある。

表 6-2-10 自己意識とアルバイト経験・メディア利用

		度数	平均値	標準偏差	F 値	
自己肯定	アルバイト経験	何度もある・かなりした	411	-0.187	0.850	8.983 ***
		たまにある・たまにした	508	0.020	0.769	
		あまりない・あまりしなかった	381	0.051	0.788	
		ぜんぜんない	1,105	0.043	0.817	
		合計	2,405	0.000	0.813	
	メディア利用数	0	482	0.046	0.866	2.225
1	1,091	0.018	0.800			
2	571	-0.015	0.768			
3	189	-0.125	0.841			
4	73	-0.138	0.873			
合計	2,406	0.000	0.812			
自己否定	アルバイト経験	何度もある・かなりした	411	-0.019	0.809	0.916
		たまにある・たまにした	508	-0.043	0.745	
		あまりない・あまりしなかった	381	0.017	0.751	
		ぜんぜんない	1,105	0.021	0.808	
		合計	2,406	0.000	0.812	

		合計	2,405	0.000	0.786	
	メディア利用数	0	482	-0.024	0.771	1.036
		1	1,091	-0.002	0.766	
		2	571	-0.012	0.805	
		3	189	0.108	0.856	
		4	73	0.004	0.839	
		合計	2,406	0.000	0.786	
自己肯定 元	アルバイト経験	何度もある・かなりした	411	-0.141	0.776	7.145
		たまにある・たまにした	508	-0.022	0.698	***
		あまりない・あまりしなかった	381	0.067	0.711	
		ぜんぜんない	1,105	0.039	0.760	
		合計	2,405	0.000	0.745	
	メディア利用数	0	482	0.056	0.763	2.658
		1	1,091	0.021	0.716	*
		2	571	-0.043	0.765	
		3	189	-0.078	0.766	
		4	73	-0.151	0.814	
合計		2,406	0.000	0.745		

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 6-2-11 自己意識とアルバイト経験・メディア利用の地域比較

			東京				山口			
			度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値
自己肯定	アルバイト経験	何度もある・かなりした	309	-0.18	0.85	6.897	102	-0.21	0.85	3.005
		たまにある・たまにした	326	0.00	0.77	***	182	0.06	0.76	*
		あまりない・あまりしなかった	190	0.11	0.75		191	0.00	0.83	
		ぜんぜんない	444	0.06	0.82		661	0.03	0.82	
		合計	1,269	-0.01	0.81		1,136	0.01	0.81	
	メディア利用数	0	234	0.04	0.86	0.949	248	0.05	0.88	2.151
		1	542	-0.01	0.81		549	0.05	0.79	
		2	307	0.02	0.74		264	-0.05	0.80	
		3	128	-0.11	0.91		61	-0.15	0.68	
		4	58	-0.08	0.80		15	-0.36	1.12	
合計		1,269	-0.01	0.81		1,137	0.01	0.81		
自己否定	アルバイト経験	何度もある・かなりした	309	-0.02	0.81	2.118	102	-0.03	0.80	0.260
		たまにある・たまにした	326	-0.03	0.72		182	-0.07	0.78	
		あまりない・あまりしなかった	190	0.10	0.76		191	-0.06	0.73	
		ぜんぜんない	444	0.08	0.81		661	-0.02	0.80	
		合計	1,269	0.03	0.78		1,136	-0.04	0.79	
	メディア利用数	0	234	0.05	0.82	0.624	248	-0.09	0.72	1.673
		1	542	0.02	0.76		549	-0.03	0.78	
		2	307	-0.01	0.78		264	-0.02	0.83	
		3	128	0.10	0.82		61	0.12	0.94	
		4	58	0.11	0.84		15	-0.39	0.74	
合計		1,269	0.03	0.78		1,137	-0.04	0.79		
自己多元	アルバイト経験	何度もある・かなりした	309	-0.16	0.77	4.433	102	-0.09	0.78	1.599
		たまにある・たまにした	326	-0.04	0.71	**	182	0.01	0.68	
		あまりない・あまりしなかった	190	0.03	0.70		191	0.10	0.73	
		ぜんぜんない	444	0.03	0.77		661	0.05	0.76	
		合計	1,269	-0.03	0.75		1,136	0.04	0.74	
	メディア利用数	0	234	0.05	0.75	1.747	248	0.06	0.77	0.735
		1	542	-0.01	0.72		549	0.06	0.71	
		2	307	-0.09	0.76		264	0.01	0.77	
		3	128	-0.09	0.78		61	-0.06	0.74	
		4	58	-0.16	0.80		15	-0.13	0.89	
合計		1,269	-0.03	0.75		1,137	0.04	0.74		

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

自己意識とアルバイト経験とメディア利用についての相関（表 6-2-12）では、全て相関は低く、自己意識への関連は弱いといえる。地域別にみると、東京の高校生は山口の高校生よりもアルバイト経験が自己意識を規定している。相関は弱いだが、東京の高校生は学校や家庭以外にアルバイトという所属集団をもっているからこそ、このような規定の状況が現れてきているといえる。

表 6-2-12 自己意識とアルバイト・メディア利用の相関

		就業体験(アルバイトや新聞配達など)	メディア利用数
全体	自己肯定	.084(***)	-.057(**)
	自己否定	0.028	0.025
	自己多元	.082(***)	-.066(**)
東京	自己肯定	.108(***)	-.041
	自己否定	.061(*)	0.015
	自己多元	.094(**)	-.071(*)
山口	自己肯定	0.054	-.077(**)
	自己否定	0.015	0.027
	自己多元	0.043	-.046

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

以上の分析結果から、高校生の自己意識を規定する要因としては、家庭要因、学校要因、その他の地域社会における要因の中で、学校要因が強いことが明らかになった。学校における成績、学校の勉強の重視度、友人関係の量と質の差が、「自己肯定」－「自己否定」を規定している。その中でも特に友人関係の規定が強い。具体的には、学校における成績が良く、学校の勉強の重視度が高く、友人数が多く、友人から信頼されている関係を持つ高校生が自己肯定の自己意識を持ち、その反対が自己否定の自己意識をもっている。

次に、高校生の自己意識を規定している要因は家庭要因で、親の職業よりも親子関係の在り方の規定が強い。親子関係が十分に保たれているか否かが「自己肯定」－「自己否定」のを規定している。つまり、親子関係が保たれている高校生は「自己肯定」の自己意識をもち、親子関係が保たれていない高校生は「自己否定」の自己意識をもつ。学校要因、家庭要因において「自己肯定」－「自己否定」のを規定状況の地域差はない。

「自己多元」は、東京の高校生に多い傾向の意識であり、東京の「自己多元」の意識をもつ高校生は、「自己肯定」の高校生と同様の自己意識である。しかし、東京の「自己多元」は「自己肯定」とほぼ同様の自己意識とはいえ、「自己肯定」を強く規定する学校要因や家庭要因の規定は弱い。かといって、地域社会における規定が強いわけではないが、地域社会における要因との規定には地域差がみられた。東京の高校生は山口の高校生よりも学校や家庭以外にアルバイトという所属集団をもっているため、山口の高校生よりもアルバイト経験が自己意識を規定していた。

4 地方と都市の高校生の自己意識と進路選択

つづいて、自己意識が進路選択にどのような差異をもたらしているのかを検討する。自己意識の因子得点と進路選択について一元配置分散分析を行った。進路選択については、

「進路について深く考えた経験」「将来希望する職業の有無」「進路選択段階における自立度」「進路にむけた取組数」「職業意識」を用いる。高校生全体の分析表 6-3-1 では、「自己肯定」は進路について深く考え、将来の就きたい職があり、自立度が高く、進路への取組が多い高校生である。これに対して「自己否定」は、進路について深く考えたことがなく、将来就きたい職もなく、自立度が低く、進路への取組みも少ない高校生の意識といえる。「自己多元」は、進路選択との関連においても「自己肯定」と類似していており、「自己肯定」との違いは自立度のみで、自立度が低くも高くもないという結果である。自己意識が「自己肯定」の高校生が進路選択への取組みは積極的といえ、「自己否定」の高校生は進路選択への取組みが消極的だといえる。

自己意識と進路選択の関連を地域比較してみると（表 6-3-2）、「自己肯定」は東京も山口も進路選択に積極的である高校生が「自己肯定」の傾向にあり、地域差はみられない。しかし、「自己否定」と「自己多元」は東京と山口で地域差がみられる。「自己否定」は、山口では進路選択に消極的な高校生がこの意識をもつ傾向にあるが、東京の「自己否定」は進路選択との有意な差はなく、自立度が低い高校生がこの意識をもっている。「自己多元」は、東京は進路について深く考え、進路や将来への取組みが多い高校生が「自己多元」の傾向にあり、山口は進路選択との有意な差はみられない。

表 6-3-1 自己意識と進路選択

		度数	平均値	標準偏差	F 値	
自己肯定	進路について深く考えた	考えた	2,203	-0.021	0.801	21.951 (***)
		考えたことがない	167	0.282	0.865	
		合計	2,370	0.000	0.810	
	将来就きたい職業がある	とてもあてはまる	1,024	-0.151	0.804	24.070 (***)
		ややあてはまる	636	0.067	0.787	
		あまりあてはまらない	505	0.099	0.729	
		ぜんぜんあてはまらない	237	0.252	0.945	
		合計	2,402	-0.001	0.811	
	自立度	高	682	-0.198	0.820	42.508 (***)
		中	1,323	0.032	0.770	
下		346	0.274	0.853		
合計		2,351	0.001	0.811		
取組み	取組 多	17	-0.340	0.929	6.511 (***)	
	取組 中	424	-0.122	0.822		
	取組 少	1,947	0.026	0.805		
	取組なし	18	0.424	0.953		
	合計	2,406	0.000	0.812		
自己否定	進路について深く考えた	考えた	2,203	-0.002	0.784	0.002
		考えたことがない	167	-0.005	0.822	
		合計	2,370	-0.002	0.786	
	将来就きたい職業がある	とてもあてはまる	1,024	0.074	0.838	7.544 (***)
		ややあてはまる	636	-0.025	0.733	
		あまりあてはまらない	505	-0.041	0.698	
		ぜんぜんあてはまらない	237	-0.172	0.823	
		合計	2,402	-0.001	0.785	
	自立度	高	682	0.271	0.824	69.696 (***)
		中	1,323	-0.067	0.743	
		下	346	-0.271	0.721	
		合計	2,351	0.001	0.787	
	取組み	取組 多	17	0.086	0.776	1.508
		取組 中	424	0.069	0.820	
		取組 少	1,947	-0.017	0.777	
		取組なし	18	0.078	0.920	
合計		2,406	0.000	0.786		

自己多元	進路について深く	考えた	2,203	-0.012	0.736	9.976
		考えたことがない	167	0.176	0.834	(**)
		合計	2,370	0.001	0.745	
	将来就きたい職業がある	とてもあてはまる	1,024	-0.047	0.778	2.743
		ややあてはまる	636	0.022	0.675	(*)
		あまりあてはまらない	505	0.063	0.726	
		ぜんぜんあてはまらない	237	0.003	0.808	
	合計	2,402	-0.001	0.745		
	自立度	高	682	0.042	0.791	3.860
		中	1,323	-0.037	0.701	(*)
		下	346	0.060	0.814	
		合計	2,351	0.000	0.746	
	取組み	取組 多	17	-0.344	0.872	5.759
		取組 中	424	-0.105	0.754	(**)
		取組 少	1,947	0.023	0.739	
		取組なし	18	0.322	0.746	
合計		2,406	0.000	0.745		

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 6-3-2 地域別 自己意識と進路選択

		東京				山口				
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
自己肯定	進路について深く	考えた	1,151	-0.02	0.81	8.668	1,052	-0.02	0.80	14.152
		考えたことがない	95	0.23	0.84	**	72	0.35	0.90	***
		合計	1,246	0.00	0.81		1,124	0.01	0.81	
	将来就きたい職業がある	とてもあてはまる	513	-0.15	0.83	10.029	511	-0.15	0.78	14.925
		ややあてはまる	341	0.06	0.78	***	295	0.08	0.79	***
		あまりあてはまらない	277	0.08	0.71		228	0.12	0.75	
		ぜんぜんあてはまらない	136	0.18	0.92		101	0.35	0.98	
	合計	1,267	-0.01	0.81		1,135	0.01	0.81		
	自立度	高	358	-0.18	0.86	24.248	324	-0.21	0.77	20.005
		中	707	0.00	0.76	***	616	0.06	0.78	***
		下	177	0.32	0.78		169	0.22	0.92	
		合計	1,242	0.00	0.81		1,109	0.01	0.81	
	取組み	取組 多	12	-0.34	0.97	3.962	5	-0.35	0.92	3.291
		取組 中	274	-0.14	0.80	**	150	-0.09	0.85	*
		取組 少	975	0.03	0.81		972	0.02	0.80	
		取組なし	8	0.12	0.90		10	0.67	0.97	
合計		1,269	-0.01	0.81		1,137	0.01	0.81		
自己否定	進路について深く	考えた	1,151	0.02	0.78	3.429	1,052	-0.02	0.79	5.057
		考えたことがない	95	0.17	0.86		72	-0.24	0.72	*
		合計	1,246	0.03	0.78		1,124	-0.03	0.79	
	将来就きたい職業がある	とてもあてはまる	513	0.08	0.83	1.960	511	0.07	0.84	8.819
		ややあてはまる	341	0.04	0.74		295	-0.10	0.71	***
		あまりあてはまらない	277	-0.04	0.67		228	-0.04	0.74	
		ぜんぜんあてはまらない	136	-0.04	0.88		101	-0.34	0.71	
	合計	1,267	0.03	0.78		1,135	-0.03	0.79		
	自立度	高	358	0.27	0.83	29.318	324	0.27	0.82	41.248
		中	707	-0.03	0.74	***	616	-0.11	0.75	***
		下	177	-0.22	0.74		169	-0.33	0.69	
		合計	1,242	0.03	0.78		1,109	-0.03	0.79	
	取組み	取組 多	12	0.33	0.67	1.437	5	-0.49	0.75	1.033
		取組 中	274	0.09	0.79		150	0.04	0.88	
		取組 少	975	0.01	0.78		972	-0.04	0.77	
		取組なし	8	0.24	0.95		10	-0.05	0.93	
合計		1,269	0.03	0.78		1,137	-0.04	0.79		
自己多元	進路について深く	考えた	1,151	-0.05	0.74	13.805	1,052	0.03	0.73	0.414
		考えたことがない	95	0.24	0.80	***	72	0.09	0.88	
		合計	1,246	-0.03	0.75		1,124	0.04	0.74	
	将来就きたい職業がある	とてもあてはまる	513	-0.09	0.79	1.476	511	-0.01	0.76	1.864
		ややあてはまる	341	-0.02	0.68		295	0.06	0.67	
		あまりあてはまらない	277	0.02	0.71		228	0.12	0.74	
		ぜんぜんあてはまらない	136	0.01	0.78		101	-0.01	0.84	
	合計	1,267	-0.03	0.75		1,135	0.04	0.74		

自立度	高	358	0.00	0.81	1.660	324	0.09	0.77	2.166
	中	707	-0.07	0.70		616	0.00	0.71	
	下	177	0.03	0.81		169	0.09	0.82	
	合計	1,242	-0.03	0.75		1,109	0.04	0.74	
取組み	取組 多	12	-0.39	0.91	3.636	5	-0.23	0.85	1.980
	取組 中	274	-0.14	0.75	*	150	-0.04	0.75	
	取組 少	975	0.00	0.74		972	0.05	0.74	
	取組なし	8	0.12	0.82		10	0.49	0.68	
	合計	1,269	-0.03	0.75		1,137	0.04	0.74	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

自己意識と職業意識の相関（表 6-3-3）をみると、「自己肯定」は、「興味・関心重視型」(0.257)が最も相関が高く、次いで、「生活安定型」(0.123)、「地位達成型」(0.117)となっている。「自己否定」はどの職業意識の因子とも相関は低く、「自己多元」は「興味・関心重視型」と相関が高い。

地域別に自己意識と職業意識の相関をみると、「自己肯定」は、東京では「興味・関心重視型」の次に「フリーター容認型」との相関が高い。これに対して山口では、「興味・関心重視型」の次に相関が高いのは「生活安定型」「地位達成型」である。

「自己否定」は山口の高校生は「私生活重視型」(0.124)の高校生が「自己否定」の傾向にあるが、東京では職業意識との相関は低い。「自己多元」は山口の高校生のほうが「興味・関心重視型」と相関が高い。

表 6-3-3 自己意識と職業意識の相関

		地位達成型	私生活重視型	興味・関心重視型	フリーター容認型	生活安定型
全体	自己肯定	.117(***)	-0.007	.257(***)	.077(***)	.123(***)
	自己否定	-0.005	.064(**)	.075(***)	-0.034	.049(*)
	自己多元	.061(**)	.048(*)	.195(***)	0.031	0.025
東京	自己肯定	.081(**)	-0.017	.269(***)	.118(***)	.083(**)
	自己否定	-0.024	0.004	.096(**)	-0.021	.086(**)
	自己多元	.089(**)	0.026	.186(***)	0.023	0.021
山口	自己肯定	.156(***)	0.005	.244(***)	0.032	.170(***)
	自己否定	0.021	.124(***)	0.053	-0.040	-0.001
	自己多元	0.025	.081(**)	.204(***)	0.030	0.040

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

以上の結果から、自己意識と進路選択、職業意識との関連は、「自己肯定」の高校生は自立度が高く、進路選択に積極的に挑んでおり、職業意識をもっている。その職業意識は現代若者の「自己実現」の欲求が作り上げている「興味・関心重視型」の意識である。

これに対し、「自己否定」の高校生は、自立度が低く、自ら進路選択の道を降りているような状況にあり、職業意識が形成されていない状況にある。つまり、「興味・関心重視型」の職業意識をもつ高校生は「自己肯定」の自己意識をもつことができるが、「興味・関心重視型」の職業意識をもたない、何をしたいのか、何に関心があるのかに悩む高校生は「自己肯定」の意識をもてずに「自己否定」の意識をもつことになる。「自己多元」は、進路選択に積極的に挑むわけでも、その道から降りるわけでもなく、ある程度「自己肯定」に近いかたちで進路選択を行っている。

この自己意識を地域別にみて、「自己否定」と「自己多元」の在り方が、東京と山口の若者を象徴しているといえるであろう。第5章でみたように、東京の高校生が「自己実現」の欲求が強いこと、東京の高校生の進路に向けたメディアの利用数が多いことなどを含めて考えると、東京の高校生は、「自己実現」や自分探しが強調される中で、自らもそれに価値を見出し、アルバイト経験など交流範囲も広く、さまざまな情報を入手し、進路に向けての可能な限りの取組みを行っている。

これに対し、山口の高校生は「自己実現」の欲求を価値としてもっているが、山口においては多元的に人と交流をしたり、情報を得たりする環境にない。学校が強い影響力をもつことになる。学校において自己を肯定できなければ、進路選択の道から降りていくことになると考えられる。

<注>

- 1) 浅野らは、高橋らの調査研究グループが1992年に調査を実施したデータと比較できるようにほぼ同様の調査を2002年に実施し、東京都杉並区と神戸市灘区・東灘区に住む16歳から29歳の若者を対象に質問紙法による調査を実施している。浅野らの調査結果（浅野・岩田2006）と本研究における調査の同様の質問項目を比較したものが表6-1である。本調査結果は、浅野らの1992年、2002年調査結果よりも「今の自分が好きだ」という自己肯定感が低く、「自分がどんな人間かわからなくなるときがある」という項目の肯定率が高いという結果になった。（岩田考「第5章若者のアイデンティティはどう変わったか」浅野智彦『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房2006）

表 先行研究と本調査の肯定率比較

	本調査 (2006年) の肯定率	2002年の 肯定率	1992年の 肯定率
今の自分が好きだ	40.9	70.5	66.5
自分がどんな人間かわからなくなるときがある	70.1	45.9	43.0
状況によって本当の自分と偽の自分を使い分けていると思う(場面によって出てくる自分というものは違う)	72.3	78.4	75.2
どんな場面でも自分をつらぬくことが大切だ	61.9	55.8	69.2

※1992年、2002年の肯定率は浅野・岩田（2006）らによるもの。

浅野らの調査対象者は16歳から29歳であることから、単純に比較することはできないが、高校生の段階においては、自己肯定感が低く、自己が確立されていない状態にある若者が多いといえる。この結果は、愛知県総合研究センターが愛知県の小学校、中学校及び高校の児童、生徒を対象として2005年に実施した「体験や行動の実態、規範等に関する意識調査」の結果において、小学2年時では6割近くが肯定的回答をしているが、中学3年生まで学年が進むにつれて低下し、以降少しずつ肯定的回答が回復しているという結果から考えると、高校3年生になる直前の高校生はまだ自己肯定感の回復段階にあると十分に考えられる。（愛知県総合教育センター 小久保清隆他2006「豊かな心の育成を目指す指導の在り方に関する研究」『愛知県総合教育センター研究紀要 第95集』愛知県総合教育センター）

2) 浅野智彦 2006 「第 7 章 若者の現在」 浅野智彦『検証・若者の変貌 失われた 10 年の後に』勁草書房 p233-260

辻大介 2004 「若者の親子・友人関係とアイデンティティ 16～17 歳を対象としたアンケート調査の結果から」『関西大学社会学部紀要』35 卷 2 号 p147-159

第7章 高校生の進路選択の規定要因

第1節 高校生の進路選択を規定する家庭要因

高校生が進路選択をするための規定要因は何かについて分析する。高校生の好ましい進路選択のあり方を第5章でみたとおり、「進路について深く考えた経験」があり、「将来希望する職」があり、「進路選択段階の自立度」が高く、「進路にむけての取組数」が多く、職業意識が「フリーター容認型」ではない状態として設定する。この進路選択・職業意識を学校要因、家庭要因、その他の地域社会における要因がどのように規定するのかについて分析する。分析に用いる変数の概略は表7-1-1のとおりである。

表7-1-1 分析に用いる変数

進路選択・職業意識	家庭要因	学校要因	地域社会における要因
進路について深く考えた経験 将来希望する職業の有無 進路選択段階における自立度 進路にむけた取組数 職業意識	親の職業 保護者の仕事理解 保護者からの受容の認識 保護者との会話 保護者への進路相談	学校区分 成績 学校の勉強の重視度 友人の多さ 友人からの信頼 教師への進路相談 友人への進路相談	学校外体験活動 アルバイト体験 メディア利用度

まず、家庭要因について分析をする。家庭要因については、家事の経験度、親の職、父親の仕事の理解、母親の仕事の理解、父親からの受容認識、父親との会話、母親からの受容認識、母親との会話、保護者への進路相談を分析する。

進路について深く考えた経験の有無（考えた=1、考えたことがない=0と得点化）について、高校生全体を家庭要因ごとに分析した。家事の経験度については家事得点として得点化しているため平均値を算出した（表7-1-2）。家事の経験度以外の家庭要因は図7-1-1のとおりクロス集計を示した。

表7-1-2 進路について深く考えた経験と家庭要因（家事の経験度）

	度数	平均値	標準偏差	F 値
考えた	2,193	27.938	5.916	0.302
考えたことがない	161	28.205	6.334	
合計	2,354	27.956	5.945	

注) 家事の経験についての質問 (B1) の10項目について、それぞれ「よくする」1点、「ときどきする」2点、「あまりしない」3点、「ぜんぜんしない」4点とし、合計点 (10点~40点) を算出した。家事経験が高いのは10点。

表7-1-2をみると、進路について深く考えた有無と家事の経験度に関連はない。図7-1-1をみると、親の職業も関連はなく、母親の仕事について理解をしている高校生、母親から受容されていると認識している高校生、母親とよく話をしている高校生、保護者と真剣に進路について話をしている高校生が進路を真剣に考えている傾向にあり、特に母親との関係が進路選択に影響している。

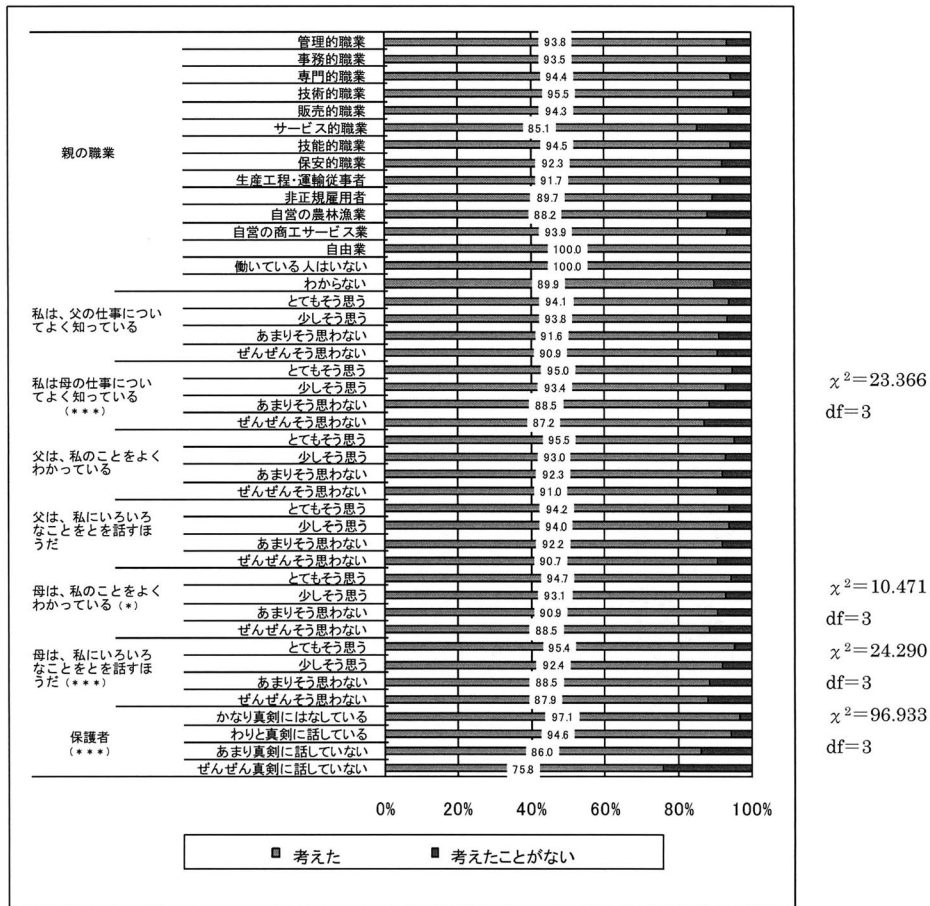


図 7-1-1 進路について深く考えた経験と家庭要因

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

地域別に家庭要因ごとに進路について深く考えた経験の平均値をみると (表 7-1-3)、東京も山口も親の職業に有意な差はみられない。どちらの地域でも全体と同様の結果であり、母親の仕事の理解がある高校生、母親とよく会話をする高校生が進路について深く考えている。

表 7-1-3 地域別 進路について深く考えた経験と家庭要因

親の職業		東京				山口			
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値
親の職業	管理的職業	255	0.94	0.24	1.440	118	0.94	0.24	1.090
	事務的職業	154	0.94	0.25					
	専門的職業	125	0.95	0.21					
	技術的職業	118	0.97	0.18					
	販売的職業	69	0.90	0.30					
	サービスの職業	61	0.87	0.34					
	技能的職業	41	0.93	0.26					
	保安的職業	31	0.94	0.25					
	生産工程・運輸従事者	77	0.92	0.27					
	非正規雇用者	34	0.85	0.36					
	自営の農林漁業	8	0.75	0.46					
	自営の商工サービス業	87	0.93	0.25					
	自由業	18	1.00	0.00					
	働いている人はいない	6	1.00	0.00					
わからない	69	0.87	0.34	50	0.94	0.24			

	合計	1,153	0.93	0.26		925	0.94	0.24	
父親の仕事理解	とてもそう思う	241	0.94	0.23	1.237	217	0.94	0.24	0.567
	少しそう思う	475	0.93	0.25		375	0.94	0.23	
	あまりそう思わない	350	0.91	0.29		279	0.92	0.26	
	ぜんぜんそう思わない	167	0.90	0.30		107	0.92	0.28	
	合計	1,233	0.92	0.27		978	0.93	0.25	
母親の仕事理解	とてもそう思う	463	0.95	0.21	4.384	365	0.95	0.23	5.023
	少しそう思う	521	0.92	0.28	**	397	0.95	0.21	**
	あまりそう思わない	206	0.88	0.32		167	0.89	0.32	
	ぜんぜんそう思わない	67	0.88	0.33		66	0.86	0.35	
	合計	1,257	0.92	0.27		995	0.93	0.25	
父親からの受容認識	とてもそう思う	175	0.95	0.22	0.942	159	0.96	0.19	1.083
	少しそう思う	460	0.92	0.27		374	0.94	0.24	
	あまりそう思わない	403	0.92	0.27		309	0.92	0.27	
	ぜんぜんそう思わない	194	0.90	0.30		140	0.92	0.27	
	合計	1,232	0.92	0.27		982	0.93	0.25	
母親からの受容認識	とてもそう思う	361	0.94	0.24	1.762	278	0.96	0.20	2.149
	少しそう思う	560	0.93	0.25		414	0.93	0.25	
	あまりそう思わない	246	0.91	0.29		235	0.91	0.29	
	ぜんぜんそう思わない	87	0.87	0.33		70	0.90	0.30	
	合計	1,254	0.92	0.27		997	0.93	0.25	
父親との会話	とてもそう思う	235	0.95	0.22	1.455	214	0.93	0.25	1.053
	少しそう思う	396	0.93	0.26		269	0.96	0.21	
	あまりそう思わない	359	0.92	0.28		317	0.93	0.26	
	ぜんぜんそう思わない	242	0.90	0.30		179	0.92	0.28	
	合計	1,232	0.92	0.27		979	0.93	0.25	
母親との会話	とてもそう思う	553	0.95	0.22	5.819	382	0.96	0.20	2.881
	少しそう思う	442	0.92	0.27	**	373	0.93	0.26	*
	あまりそう思わない	193	0.87	0.34		181	0.91	0.29	
	ぜんぜんそう思わない	65	0.88	0.33		59	0.88	0.33	
	合計	1,253	0.92	0.27		995	0.93	0.25	
保護者への進路相談	かなり真剣にはなしている	343	0.97	0.18	15.656	340	0.98	0.15	18.322
	わりと真剣に話している	637	0.94	0.24	***	552	0.95	0.21	***
	あまり真剣に話していない	241	0.86	0.35		202	0.86	0.35	
	ぜんぜん真剣に話していない	43	0.74	0.44		48	0.77	0.42	
	合計	1,264	0.92	0.26		1,142	0.94	0.24	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

次に、高校生全体の将来希望する職業の有無（とてもあてはまる＝1、ややあてはまる＝2、あまりあてはまらない＝3、ぜんぜんあてはまらない＝4と得点化）について高校生全体を家庭要因ごとに分析した。家事の経験度については家事得点として得点化しているため表7-1-4のとおり平均値を算出した。家事の経験度以外の家庭要因についてはクロス集計を図7-1-2に示した。

表7-1-4をみると、将来希望する職業がある高校生は家事の経験度が高い。図7-1-2をみると親の職業と父親との会話において検定における有意差はみられなかった。保護者の仕事について理解している高校生、保護者から受容されていると認識している高校生、母親とよく会話している高校生、保護者と真剣に進路について話をしている高校生が将来希望する職業がある。

表7-1-4 将来希望する職業の有無と家庭要因（家事の経験度）

	度数	平均値	標準偏差	F 値
とてもあてはまる	1,020	26.929	6.216	24.107
ややあてはまる	630	28.032	5.741	***
あまりあてはまらない	499	28.860	5.523	
ぜんぜんあてはまらない	237	30.046	5.722	
合計	2,386	27.934	5.989	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

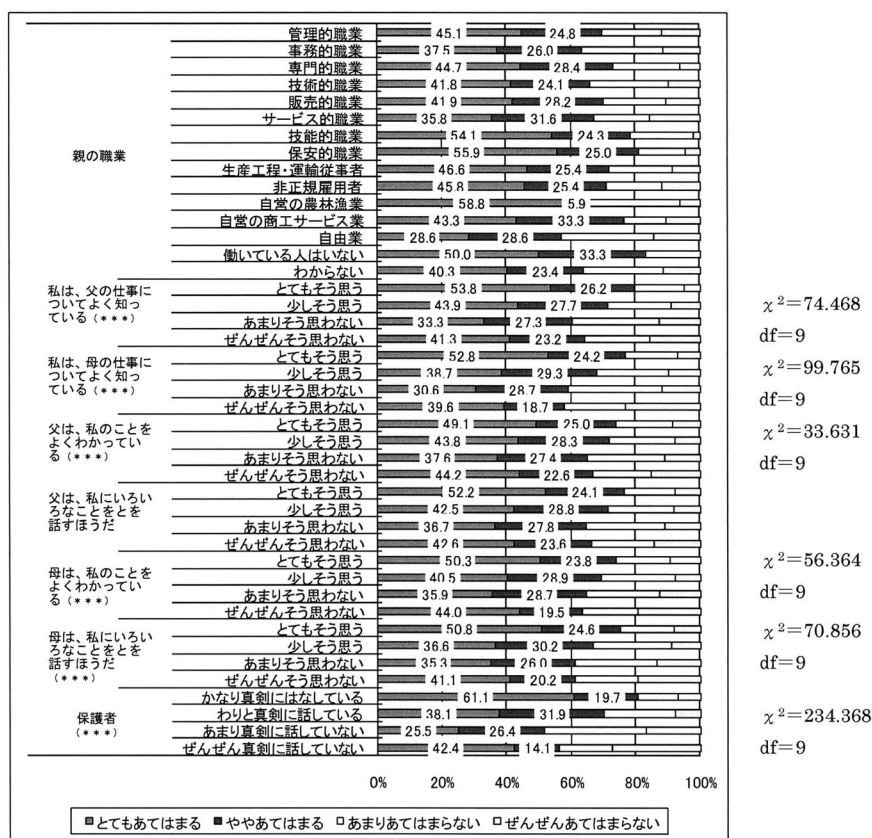


図 7-1-2 将来希望する職業の有無と家庭要因

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

地域別に将来希望する職業の有無の平均値をみると (表 7-1-5)、東京も山口もともに父親の仕事の理解、母親の仕事の理解がある高校生、父親や母親から受容されていると認識のある高校生、父親や母親と会話のある高校生、保護者へ進路相談をしている高校生が将来希望する職業があることが一致している。地域差がみられるのは親の職業で、東京は親の職業における差がみられる。これに対して山口では親の職業による有意な差がみられない。東京は山口よりも出身階層により将来の職業アスピレーションが規定されているといえる。

表 7-1-5 地域別 将来希望する職業の有無と家庭要因

親の職業	東京				山口			
	度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値
管理的職業	259	2.01	1.05	1.710	120	1.88	1.06	1.432
事務的職業	154	2.22	1.06	*	123	1.95	0.99	
専門的職業	126	1.81	0.90		89	1.99	0.99	
技術的職業	118	2.02	1.01		102	2.02	1.04	
販売的職業	70	1.99	1.01		54	1.98	1.04	
サービスの職業	62	2.13	1.06		33	2.12	1.11	
技能的職業	41	1.66	0.91		70	1.71	0.82	
保安的職業	33	1.85	1.00		35	1.51	0.74	
生産工程・運輸従事者	78	2.10	1.11		154	1.80	0.92	
非正規雇用者	35	2.20	1.08		24	1.58	0.93	
自営の農林漁業	8	1.63	1.19		9	2.00	1.00	
自営の商工サービス業	90	1.89	0.98		60	1.93	1.02	
自由業	17	2.29	0.99		4	2.25	1.50	
働いている人はいない	6	2.00	0.89		6	1.33	0.52	

	わからない 合計	73 1,170	2.11 2.02	1.10 1.03		51 934	2.02 1.89	0.99 0.99	
父親の仕事理解	とてもそう思う	251	1.73	0.91	15.121	219	1.69	0.88	7.365
	少しそう思う	480	1.98	1.01	***	379	1.88	0.98	***
	あまりそう思わない	354	2.27	1.04		283	2.08	1.02	
	ぜんぜんそう思わない	169	2.13	1.10		107	2.05	1.13	
	合計	1,254	2.03	1.03		988	1.91	1.00	
母親の仕事理解	とてもそう思う	474	1.79	0.97	15.060	369	1.74	0.94	10.341
	少しそう思う	529	2.13	1.02	***	402	1.90	0.96	***
	あまりそう思わない	208	2.25	1.00		168	2.18	1.03	
	ぜんぜんそう思わない	68	2.26	1.23		66	2.24	1.19	
	合計	1,279	2.03	1.03		1,005	1.91	0.99	
父親からの受容認識	とてもそう思う	179	1.91	1.00	3.917	161	1.80	0.98	2.517
	少しそう思う	468	1.96	0.98	**	380	1.86	0.95	
	あまりそう思わない	409	2.16	1.04		311	1.98	1.00	
	ぜんぜんそう思わない	197	2.03	1.11		140	2.06	1.12	
	合計	1,253	2.03	1.03		992	1.92	1.00	
母親からの受容認識	とてもそう思う	366	1.92	1.04	4.696	282	1.75	0.95	4.001
	少しそう思う	569	2.01	0.97	**	419	1.93	0.96	**
	あまりそう思わない	252	2.19	1.03		236	2.04	1.04	
	ぜんぜんそう思わない	89	2.22	1.20		70	1.99	1.14	
	合計	1,276	2.04	1.03		1,007	1.91	0.99	
父親との会話	とてもそう思う	243	1.87	1.01	4.891	217	1.70	0.93	5.103
	少しそう思う	403	1.97	0.98	**	273	1.90	0.97	**
	あまりそう思わない	363	2.17	1.03		320	2.01	1.00	
	ぜんぜんそう思わない	244	2.08	1.09		179	2.02	1.10	
	合計	1,253	2.03	1.03		989	1.92	1.00	
母親との会話	とてもそう思う	562	1.90	1.01	6.347	387	1.71	0.92	11.161
	少しそう思う	451	2.12	1.00	***	379	1.98	0.96	***
	あまりそう思わない	196	2.19	1.04		181	2.14	1.08	
	ぜんぜんそう思わない	66	2.15	1.17		58	2.19	1.18	
	合計	1,275	2.03	1.03		1,005	1.91	1.00	
保護者への進路相談	かなり真剣にはなしている	351	1.71	0.97	24.097	345	1.59	0.91	31.801
	わりと真剣に話している	647	2.04	0.97	***	555	1.94	0.93	***
	あまり真剣に話していない	242	2.40	1.05		205	2.39	1.04	
	ぜんぜん真剣に話していない	44	2.30	1.27		48	2.27	1.28	
	合計	1,284	2.03	1.02		1,153	1.93	1.00	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

つづいて、自立度（自立度高=1、自立度中=2、自立度下=3と得点化）について高校生全体を家庭要因ごとに分析する。家事の経験度は家事得点として得点化しているため表7-1-6のとおり平均値を算出した。家事の経験度以外の家庭要因についてはクロス集計を図7-1-3のとおり示した。表7-1-6をみると、家事の経験度が高い高校生は自立度が高い。また、図7-1-4をみると、父親、母親の仕事を理解している高校生、父親や母親から受容されていると認識している高校生、父親、母親とよく会話をする高校生、保護者と進路について真剣に話をする高校生の自立度が高い。

地域別に家庭要因ごとに自立度の平均値を比較したところ、東京と山口の変わりはなく、全体と同様の傾向にある（表7-1-7）。

表 7-1-6 自立度と家庭要因（家事の経験度）

	度数	平均値	標準偏差	F 値
自立度 高	682	26.969	6.479	20.304
自立度 中	1,312	28.081	5.635	***
自立度 下	341	29.440	5.993	
合計	2,335	27.955	5.994	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

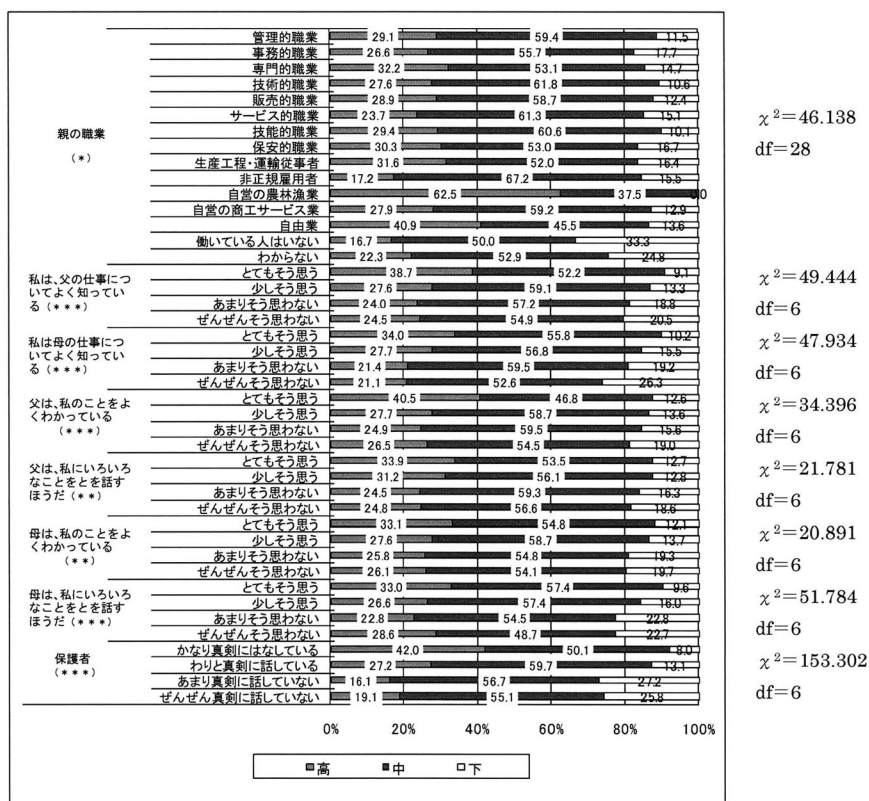


図 7-1-3 自立度と家庭要因

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 7-1-7 地域別 進路選択段階における自立度と家庭要因

		東京				山口			
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値
親の職業	管理的職業	256	1.79	0.62	2.044	118	1.89	0.60	1.624
	事務的職業	150	1.95	0.66	*	121	1.87	0.66	
	専門的職業	123	1.80	0.66		88	1.86	0.66	
	技術的職業	117	1.82	0.58		100	1.84	0.61	
	販売的職業	68	1.85	0.63		53	1.81	0.62	
	サービスの職業	60	1.90	0.63		33	1.94	0.61	
	技能的職業	41	1.76	0.54		68	1.84	0.64	
	保安的職業	32	1.97	0.59		34	1.76	0.74	
	生産工程・運輸従事者	77	1.73	0.68		148	1.91	0.67	
	非正規雇用者	34	1.94	0.60		24	2.04	0.55	
	自営の農林漁業	7	1.43	0.53		9	1.33	0.50	
	自営の商工サービス業	88	1.89	0.60		59	1.80	0.66	
	自由業	18	1.56	0.62		4	2.50	0.58	
	働いている人はいない	6	2.50	0.55		6	1.83	0.75	
わからない	72	1.96	0.68		49	2.12	0.70		
合計	1,149	1.84	0.63		914	1.88	0.65		
父親の仕事理解	とてもそう思う	239	1.72	0.61	6.972	213	1.68	0.65	9.370
	少しそう思う	474	1.82	0.61	***	375	1.90	0.64	***
	あまりそう思わない	351	1.94	0.66		271	1.96	0.65	
	ぜんぜんそう思わない	166	1.95	0.69		107	1.98	0.64	
合計	1,230	1.85	0.64		966	1.88	0.65		
父親からの受容認識	とてもそう思う	175	1.71	0.65	3.458	158	1.73	0.70	4.754
	少しそう思う	460	1.86	0.63	*	370	1.86	0.63	**
	あまりそう思わない	400	1.87	0.63		304	1.95	0.62	
	ぜんぜんそう思わない	194	1.91	0.65		138	1.94	0.70	

	合計	1,229	1.85	0.64		970	1.88	0.65	
母親の仕事理解	とてもそう思う	462	1.74	0.61	9.411	362	1.79	0.63	5.916
	少しそう思う	520	1.88	0.66	***	387	1.88	0.63	**
	あまりそう思わない	203	1.98	0.60		167	1.98	0.69	
	ぜんぜんそう思わない	67	2.01	0.69		66	2.09	0.70	
	合計	1,252	1.85	0.64		982	1.88	0.65	
母親からの受容認識	とてもそう思う	356	1.80	0.63	1.720	273	1.78	0.66	4.534
	少しそう思う	563	1.86	0.62		407	1.87	0.64	**
	あまりそう思わない	243	1.88	0.68		233	1.99	0.65	
	ぜんぜんそう思わない	87	1.95	0.71		70	1.91	0.63	
	合計	1,249	1.85	0.64		983	1.87	0.65	
父親との会話	とてもそう思う	237	1.79	0.63	2.527	212	1.78	0.67	4.469
	少しそう思う	394	1.81	0.62		264	1.83	0.67	**
	あまりそう思わない	357	1.90	0.65		313	1.94	0.62	
	ぜんぜんそう思わない	241	1.90	0.66		178	1.98	0.65	
	合計	1,229	1.85	0.64		967	1.88	0.65	
母親との会話	とてもそう思う	550	1.77	0.61	6.372	374	1.76	0.61	8.783
	少しそう思う	443	1.89	0.64	***	374	1.90	0.65	***
	あまりそう思わない	193	1.98	0.67		176	2.02	0.68	
	ぜんぜんそう思わない	62	1.82	0.74		57	2.07	0.68	
	合計	1,248	1.85	0.64		981	1.88	0.65	
保護者への進路相談	かなり真剣にはなしている	344	1.67	0.63	20.895	335	1.65	0.61	29.657
	わりと真剣に話している	632	1.85	0.61	***	543	1.86	0.63	***
	あまり真剣に話していない	237	2.08	0.64		204	2.15	0.66	
	ぜんぜん真剣に話していない	44	2.00	0.72		45	2.13	0.63	
	合計	1,257	1.85	0.64		1,127	1.86	0.65	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

つづいて、進路に向けての取組数（取組多＝1、取組中＝2、取組少＝3、取組なし＝4と得点化）について高校生全体を家庭要因ごとに分析する。家事の経験度については得点化しているため表 7-1-8 のとおり平均値を算出した。家事の経験度以外の家庭要因は図 7-1-4 のとおりクロス集計を示した。表 7-1-8 をみると、進路に向けての取組数が多い高校生ほど家事の経験度が高い。図 7-1-4 をみると、父親や母親の仕事をよく理解している高校生、父親、母親から受容されていると認識している高校生、母親とよく会話をしている高校生、保護者と進路について真剣に話をしている高校生が進路への取組数が多い。

地域別に家庭要因ごとの進路に向けての取組みの平均点を算出し比較すると(表 7-1-9)、東京は母親の仕事理解、母親からの受容認識など母親の影響が進路に向けての取組数を高めているのに対し、山口は父親からの受容認識や父親との会話など父親の影響が進路に向けての取組数を高めている。進路にむけての取組みのキーパーソンは、東京は母親、山口は父親といえる。

表 7-1-8 進路に向けての取組数と家庭要因（家事の経験度）

		度数	平均値	標準偏差	F 値
進路にむけての取組数	取組 多	17	23.000	8.062	14.066
	取組 中	415	26.511	6.163	***
	取組 少	1,941	28.275	5.849	
	取組なし	16	28.625	8.024	
	合計	2,389	27.933	5.986	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

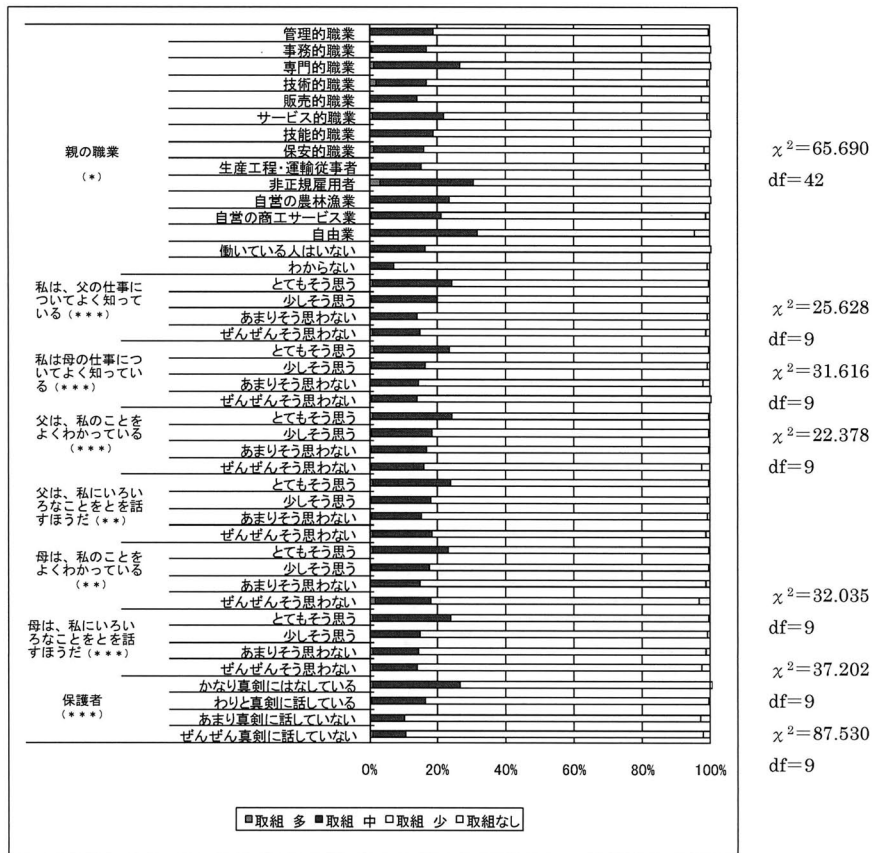


図 7-1-4 進路に向けての取組数と家庭要因

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 7-1-9 地域別 進路に向けての取組数と家庭要因

		東京				山口			
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値
親の職業	管理的職業	260	2.78	0.42	2.382 **	120	2.89	0.38	0.894
	事務的職業	154	2.79	0.42					
	専門的職業	126	2.64	0.53					
	技術的職業	118	2.82	0.48					
	販売的職業	70	2.83	0.38					
	サービスの職業	62	2.73	0.48					
	技能的職業	41	2.71	0.46					
	保安的職業	33	2.79	0.42					
	生産工程・運輸従事者	78	2.82	0.45					
	非正規雇用者	35	2.57	0.61					
	自営の農林漁業	8	2.75	0.46					
	自営の商工サービス業	90	2.77	0.50					
	自由業	18	2.78	0.55					
	働いている人はいない	6	2.83	0.41					
わからない	73	2.95	0.28						
合計	1,172	2.77	0.46	935	2.86	0.39			
父親の仕事理解	とてもそう思う	251	2.71	0.50	5.215 **	219	2.79	0.43	4.224 **
	少しそう思う	481	2.74	0.47					
	あまりそう思わない	354	2.82	0.40					
	ぜんぜんそう思わない	170	2.85	0.42					
合計	1,256	2.77	0.45	990	2.87	0.38			
母親の仕事理解	とてもそう思う	475	2.69	0.50	7.071 ***	369	2.83	0.40	2.576
	少しそう思う	530	2.81	0.43					
	あまりそう思わない	208	2.82	0.40					
	ぜんぜんそう思わない	68	2.82	0.42					
合計	1,281	2.77	0.46	1,007	2.87	0.38			
父親からの受容認	とてもそう思う	180	2.71	0.51	2.287	161	2.80	0.42	3.017 *
	少しそう思う	469	2.77	0.44		380	2.86	0.38	

識	あまりそう思わない	409	2.77	0.44		312	2.90	0.35	
	ぜんぜんそう思わない	197	2.83	0.43		141	2.89	0.43	
	合計	1,255	2.77	0.45		994	2.87	0.38	
母親からの受容認識	とてもそう思う	366	2.72	0.48	2.972	282	2.82	0.42	2.413
	少しそう思う	571	2.78	0.44	*	419	2.88	0.36	
	あまりそう思わない	252	2.82	0.42		237	2.91	0.34	
	ぜんぜんそう思わない	89	2.81	0.52		71	2.86	0.46	
	合計	1,278	2.77	0.46		1,009	2.87	0.38	
父親との会話	とてもそう思う	244	2.73	0.49	1.619	217	2.78	0.43	4.822
	少しそう思う	404	2.76	0.45		275	2.91	0.35	**
	あまりそう思わない	363	2.81	0.42		320	2.89	0.35	
	ぜんぜんそう思わない	244	2.77	0.46		179	2.87	0.41	
	合計	1,255	2.77	0.45		991	2.87	0.38	
母親との会話	とてもそう思う	563	2.71	0.50	6.529	387	2.82	0.41	4.245
	少しそう思う	452	2.81	0.43	***	380	2.91	0.33	**
	あまりそう思わない	196	2.84	0.38		181	2.87	0.42	
	ぜんぜんそう思わない	66	2.83	0.45		59	2.92	0.38	
	合計	1,277	2.77	0.46		1,007	2.87	0.38	
保護者への進路相談	かなり真剣にはなしている	351	2.65	0.51	15.720	345	2.80	0.42	10.149
	わりと真剣に話している	648	2.79	0.44	***	556	2.88	0.34	***
	あまり真剣に話していない	243	2.88	0.39		206	2.98	0.32	
	ぜんぜん真剣に話していない	44	2.93	0.33		48	2.88	0.44	
	合計	1,286	2.77	0.46		1,155	2.87	0.37	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

次に、職業意識に対する家庭要因の規定状況を分析する。まず、高校生全体の職業意識の5因子と家事経験度の相関をもとめた(表7-1-10)。これをみると、「興味・関心重視型」、「フリーター容認型」は有意差がみられるが、相関は高くない。職業意識と家事経験は関連が弱いといえる。

表 7-1-10 職業意識と家事経験度の相関

	相関係数
地位達成型	0.024
私生活重視型	-0.030
興味・関心重視型	.073(***)
フリーター容認型	.046(*)
生活安定型	0.018

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

また、高校生全体の職業意識と親の職業(表7-1-11)について、職業意識の因子得点の一元配置分散分析を行った。「地位達成型」は親の職業が自由業、管理的職業の家庭の高校生、「私生活重視型」は親の職業が自営の農林漁業、販売的職業の家庭の高校生、「興味・関心重視型」は親の職業がサービスの職業の家庭の高校生、「フリーター容認型」は親の職業が自営の商工サービス業の家庭の高校生、「生活安定型」は親の職業が保安的職業、自営の農林漁業、自由業の家庭の高校生が求める傾向にある。

地域別にみると(表7-1-12)、東京において「地位達成型」は親の職業が管理的職業の家庭の高校生が突出して求めている傾向にあり、他の職業意識は親の職業による関連は認められない。また、山口においては職業意識と親の職業の関連は認められない。

表 7-1-11 職業意識と親の職業の一元配置分散分析

	度数	平均値	標準偏差	F 値
地位達成型	管理的職業	368	-0.138	0.885
	事務的職業	275	0.022	0.824
	専門的職業	213	0.024	0.885
	技術的職業	217	0.062	0.911
	販売的職業	123	-0.046	0.918
	サービスの職業	94	-0.025	0.865
	技能的職業	110	0.058	0.785
	保安的職業	65	-0.076	0.837
	生産工程・運輸従事者	232	0.044	0.840
	非正規雇用者	59	0.307	0.881
	自営の農林漁業	17	0.142	1.004
	自営の商工サービス業	148	0.130	0.864
	自由業	22	-0.243	0.817
	働いている人はいない	12	0.423	0.803

	わからない	120	0.091	0.893	
	合計	2,075	0.013	0.871	
私生活重視型	管理的職業	368	0.067	0.816	1.832 *
	事務的職業	275	-0.088	0.810	
	専門的職業	213	0.092	0.890	
	技術的職業	217	-0.014	0.864	
	販売的職業	123	-0.187	0.822	
	サービスの職業	94	-0.039	0.827	
	技能的職業	110	-0.005	0.769	
	保安的職業	65	-0.039	0.927	
	生産工程・運輸従事者	232	0.011	0.816	
	非正規雇用者	59	0.203	0.850	
	自営の農林漁業	17	-0.453	0.894	
	自営の商工サービス業	148	0.113	0.849	
	自由業	22	-0.071	0.889	
	働いている人はいない	12	-0.110	0.830	
わからない	120	-0.025	0.975		
	合計	2,075	0.002	0.847	
興味・関心重視型	管理的職業	368	-0.042	0.786	1.129
	事務的職業	275	-0.005	0.774	
	専門的職業	213	0.052	0.900	
	技術的職業	217	0.017	0.828	
	販売的職業	123	-0.001	0.918	
	サービスの職業	94	-0.109	0.793	
	技能的職業	110	-0.096	0.700	
	保安的職業	65	0.059	0.951	
	生産工程・運輸従事者	232	-0.062	0.791	
	非正規雇用者	59	-0.016	0.820	
	自営の農林漁業	17	0.198	0.873	
	自営の商工サービス業	148	-0.098	0.764	
	自由業	22	-0.006	0.900	
	働いている人はいない	12	-0.347	0.723	
わからない	120	0.172	1.223		
	合計	2,075	-0.014	0.844	
フリーター容認型	管理的職業	368	-0.008	0.709	0.951
	事務的職業	275	0.020	0.741	
	専門的職業	213	0.021	0.712	
	技術的職業	217	-0.034	0.719	
	販売的職業	123	0.011	0.714	
	サービスの職業	94	-0.037	0.669	
	技能的職業	110	0.001	0.736	
	保安的職業	65	0.110	0.739	
	生産工程・運輸従事者	232	0.115	0.727	
	非正規雇用者	59	-0.023	0.715	
	自営の農林漁業	17	0.161	0.619	
	自営の商工サービス業	148	-0.094	0.642	
	自由業	22	0.097	0.703	
	働いている人はいない	12	0.135	0.691	
わからない	120	-0.041	0.664		
	合計	2,075	0.009	0.710	
生活安定型	管理的職業	368	0.041	0.636	3.778 ***
	事務的職業	275	-0.050	0.647	
	専門的職業	213	0.070	0.678	
	技術的職業	217	-0.075	0.658	
	販売的職業	123	0.031	0.595	
	サービスの職業	94	0.102	0.615	
	技能的職業	110	-0.026	0.697	
	保安的職業	65	-0.339	0.683	
	生産工程・運輸従事者	232	-0.045	0.653	
	非正規雇用者	59	-0.047	0.681	
	自営の農林漁業	17	-0.289	0.698	
	自営の商工サービス業	148	0.175	0.624	
	自由業	22	-0.252	0.562	
	働いている人はいない	12	0.175	0.671	
わからない	120	0.114	0.593		
	合計	2,075	0.003	0.652	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 7-1-12 地域別 職業意識と親の職業の一元配置分散分析

	東京				山口				
	度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
地位達成型	管理的職業	254	-0.21	0.86	2.287	114	0.03	0.93	0.364
	事務的職業	152	0.04	0.74	**	123	0.00	0.92	
	専門的職業	125	-0.04	0.94		88	0.11	0.80	
	技術的職業	115	0.04	0.88		102	0.09	0.95	
	販売的職業	69	-0.10	0.94		54	0.02	0.89	
	サービスの職業	61	-0.05	0.85		33	0.02	0.91	
	技能的職業	41	-0.08	0.72		69	0.14	0.81	
	保安的職業	32	-0.15	0.81		33	-0.01	0.87	
	生産工程・運輸従事者	78	-0.09	0.87		154	0.11	0.82	
	非正規雇用者	35	0.34	0.95		24	0.26	0.79	

	自営業	116	0.10	0.88		71	0.06	0.88	
	働いている人はいない	6	0.63	0.85		6	0.21	0.77	
	わからない	71	0.04	0.94		49	0.16	0.82	
	合計	1,155	-0.04	0.87		920	0.08	0.87	
私生活重視型	管理的職業	254	0.11	0.81	1.058	114	-0.04	0.82	0.895
	事務的職業	152	-0.09	0.80		123	-0.09	0.82	
	専門的職業	125	0.16	0.90		88	0.00	0.88	
	技術的職業	115	0.09	0.82		102	-0.12	0.90	
	販売的職業	69	-0.10	0.85		54	-0.30	0.77	
	サービスの職業	61	0.02	0.85		33	-0.15	0.78	
	技能的職業	41	0.14	0.82		69	-0.09	0.73	
	保安的職業	32	0.00	0.92		33	-0.07	0.94	
	生産工程・運輸従事者	78	0.08	0.80		154	-0.03	0.82	
	非正規雇用者	35	0.18	0.91		24	0.24	0.78	
	自営業	116	0.15	0.87		71	-0.13	0.85	
	働いている人はいない	6	-0.14	1.14		6	-0.08	0.45	
	わからない	71	0.09	0.95		49	-0.19	0.99	
合計	1,155	0.07	0.85		920	-0.08	0.84		
興味・関心重視型	管理的職業	254	-0.03	0.81	0.840	114	-0.08	0.72	1.095
	事務的職業	152	0.00	0.79		123	-0.01	0.75	
	専門的職業	125	0.02	0.98		88	0.10	0.77	
	技術的職業	115	-0.04	0.76		102	0.08	0.89	
	販売的職業	69	-0.07	0.92		54	0.09	0.92	
	サービスの職業	61	-0.16	0.74		33	-0.02	0.88	
	技能的職業	41	-0.22	0.67		69	-0.02	0.71	
	保安的職業	32	0.04	0.78		33	0.08	1.11	
	生産工程・運輸従事者	78	-0.13	0.67		154	-0.02	0.85	
	非正規雇用者	35	-0.16	0.76		24	0.19	0.88	
	自営業	116	0.01	0.84		71	-0.17	0.69	
	働いている人はいない	6	-0.36	0.84		6	-0.33	0.66	
	わからない	71	0.13	1.21		49	0.24	1.26	
合計	1,155	-0.03	0.84		920	0.01	0.84		
フリーター容認型	管理的職業	254	-0.08	0.69	1.103	114	0.15	0.73	1.578
	事務的職業	152	0.00	0.72		123	0.05	0.77	
	専門的職業	125	0.12	0.67		88	-0.13	0.75	
	技術的職業	115	-0.11	0.69		102	0.05	0.74	
	販売的職業	69	-0.02	0.64		54	0.06	0.80	
	サービスの職業	61	-0.14	0.65		33	0.16	0.67	
	技能的職業	41	0.06	0.66		69	-0.03	0.78	
	保安的職業	32	0.04	0.82		33	0.18	0.65	
	生産工程・運輸従事者	78	-0.07	0.72		154	0.21	0.71	
	非正規雇用者	35	-0.10	0.68		24	0.10	0.76	
	自営業	116	-0.08	0.66		71	0.00	0.64	
	働いている人はいない	6	-0.20	0.78		6	0.47	0.42	
	わからない	71	-0.06	0.68		49	-0.01	0.64	
合計	1,155	-0.04	0.69		920	0.07	0.73		
生活安定型	管理的職業	254	0.09	0.62	1.728	114	-0.08	0.66	1.671
	事務的職業	152	0.03	0.61		123	-0.15	0.67	
	専門的職業	125	0.10	0.70		88	0.03	0.64	
	技術的職業	115	0.05	0.61		102	-0.22	0.69	
	販売的職業	69	0.07	0.56		54	-0.02	0.65	
	サービスの職業	61	0.16	0.62		33	-0.01	0.60	
	技能的職業	41	0.09	0.75		69	-0.09	0.66	
	保安的職業	32	-0.32	0.66		33	-0.36	0.72	
	生産工程・運輸従事者	78	0.05	0.69		154	-0.09	0.63	
	非正規雇用者	35	0.05	0.64		24	-0.19	0.72	
	自営業	116	0.12	0.64		71	0.03	0.65	
	働いている人はいない	6	0.60	0.53		6	-0.25	0.52	
	わからない	71	0.16	0.58		49	0.04	0.61	
合計	1,155	0.08	0.64		920	-0.09	0.66		

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

職業意識の因子得点と保護者との関係について一元配置分散分析をした結果(表 7-1-13)では、「地位達成型」「興味・関心重視型」「生活安定型」は父親や母親の仕事を理解している高校生、父親、母親がよく話をしている高校生、父親、母親から受容されていると感じている高校生、保護者に真剣に進路相談をしている高校生が求めている。「私生活重視型」は、保護者の仕事を理解している高校生、保護者が良く話をしている高校生、保護者から受容されていると感じていない高校生、保護者に真剣に進路相談をしていない高校生が求める傾向にある。「フリーター容認型」は、母親の仕事について理解はしており、母親が良く話をしているものの母親から受容されていると認識していない高校生、父親との関係は仕事についての理解はなく、話をしておらず、受容されていると認識も無い高校生で、保護者に真剣に進路について話をしていない高校生が求める傾向にある。

表 7-1-13 職業意識と保護者との関係の一元配置分散分析

		度数	平均値	標準偏差	F 値	
地位達成型	父の仕事について知っている	とてもそう思う	461	-0.062	0.970	9.350 ***
		少しそう思う	846	-0.093	0.859	
		あまりそう思わない	626	0.078	0.806	
		ぜんぜんそう思わない	271	0.181	0.951	
		合計	2,204	-0.004	0.886	
	母の仕事について知っている	とてもそう思う	827	-0.078	0.947	4.733 **
		少しそう思う	916	-0.005	0.836	
		あまりそう思わない	369	0.104	0.806	
		ぜんぜんそう思わない	133	0.128	0.986	
		合計	2,245	-0.006	0.886	
	父は私によく話をする	とてもそう思う	454	-0.042	0.967	2.141
		少しそう思う	663	-0.034	0.867	
		あまりそう思わない	668	-0.010	0.780	
		ぜんぜんそう思わない	418	0.091	0.970	
合計		2,203	-0.004	0.885		
母は私によく話をする	とてもそう思う	932	-0.034	0.921	5.597 **	
	少しそう思う	818	-0.058	0.828		
	あまりそう思わない	369	0.114	0.843		
	ぜんぜんそう思わない	123	0.193	1.052		
	合計	2,242	-0.006	0.886		
父は私のことをよくわかっている	とてもそう思う	332	-0.221	1.025	10.747 ***	
	少しそう思う	835	-0.003	0.825		
	あまりそう思わない	707	0.013	0.820		
	ぜんぜんそう思わない	332	0.162	0.973		
	合計	2,206	-0.006	0.885		
母は私のことをよくわかっている	とてもそう思う	632	-0.115	0.947	9.521 ***	
	少しそう思う	973	-0.006	0.833		
	あまりそう思わない	482	0.056	0.839		
	ぜんぜんそう思わない	157	0.279	1.010		
	合計	2,244	-0.003	0.886		
保護者に進路について	かなり真剣にはなしている	681	-0.082	0.964	5.469 **	
	わりと真剣に話している	1,187	0.000	0.825		
	あまり真剣に話していない	438	0.080	0.812		
	ぜんぜん真剣に話していない	91	0.243	1.149		
	合計	2,397	0.001	0.881		
私生活重視型	父の仕事について知っている	とてもそう思う	461	-0.006	0.933	2.755 *
		少しそう思う	846	-0.004	0.823	
		あまりそう思わない	626	0.038	0.805	
		ぜんぜんそう思わない	271	-0.140	0.930	
		合計	2,204	-0.009	0.857	
	母の仕事について知っている	とてもそう思う	827	0.032	0.893	2.297
		少しそう思う	916	-0.008	0.815	
		あまりそう思わない	369	-0.033	0.796	
		ぜんぜんそう思わない	133	-0.169	0.994	
		合計	2,245	-0.007	0.853	
	父は私によく話をする	とてもそう思う	454	-0.008	0.892	0.495
		少しそう思う	663	0.011	0.807	
		あまりそう思わない	668	-0.002	0.816	
		ぜんぜんそう思わない	418	-0.053	0.951	
合計		2,203	-0.009	0.856		
母は私によく話をする	とてもそう思う	932	0.069	0.854	4.606 **	
	少しそう思う	818	-0.059	0.808		
	あまりそう思わない	369	-0.088	0.822		
	ぜんぜんそう思わない	123	-0.021	1.146		
	合計	2,242	-0.009	0.853		
父は私のことをよくわかっている	とてもそう思う	332	-0.103	0.891	3.031 *	
	少しそう思う	835	0.004	0.814		
	あまりそう思わない	707	0.048	0.821		
	ぜんぜんそう思わない	332	-0.070	0.983		
	合計	2,206	-0.009	0.856		
母は私のことをよくわかっている	とてもそう思う	632	-0.002	0.885	0.445	
	少しそう思う	973	0.006	0.809		
	あまりそう思わない	482	-0.037	0.832		
	ぜんぜんそう思わない	157	-0.056	1.039		
	合計	2,244	-0.010	0.853		
保護者に進路について	かなり真剣にはなしている	681	0.093	0.892	5.616	

		わりと真剣に話している	1,187	-0.006	0.811	**
		あまり真剣に話していない	438	-0.114	0.831	
		ぜんぜん真剣に話していない	91	-0.072	1.053	
		合計	2,397	0.000	0.851	
興味・関心重視型	父の仕事について知っている	とてもそう思う	461	-0.091	0.803	5.048
		少しそう思う	846	-0.008	0.813	**
		あまりそう思わない	626	0.111	0.930	
		ぜんぜんそう思わない	271	0.003	0.967	
		合計	2,204	0.010	0.868	
	母の仕事について知っている	とてもそう思う	827	-0.167	0.721	21.732
		少しそう思う	916	0.055	0.839	***
		あまりそう思わない	369	0.205	0.999	
		ぜんぜんそう思わない	133	0.216	1.207	
		合計	2,245	0.007	0.866	
	父は私によく話をする	とてもそう思う	454	-0.200	0.641	12.663
		少しそう思う	663	0.054	0.947	***
		あまりそう思わない	668	0.112	0.867	
		ぜんぜんそう思わない	418	0.008	0.920	
合計		2,203	0.011	0.869		
母は私によく話をする	とてもそう思う	932	-0.176	0.710	25.037	
	少しそう思う	818	0.111	0.897	***	
	あまりそう思わない	369	0.194	0.958		
	ぜんぜんそう思わない	123	0.119	1.138		
	合計	2,242	0.006	0.865		
父は私のことをよくわかっている	とてもそう思う	332	-0.199	0.741	8.715	
	少しそう思う	835	0.033	0.831	***	
	あまりそう思わない	707	0.090	0.908		
	ぜんぜんそう思わない	332	-0.007	0.960		
	合計	2,206	0.010	0.869		
母は私のことをよくわかっている	とてもそう思う	632	-0.183	0.708	15.748	
	少しそう思う	973	0.058	0.861	***	
	あまりそう思わない	482	0.144	0.953		
	ぜんぜんそう思わない	157	0.051	1.057		
	合計	2,244	0.008	0.866		
保護者に進路について	かなり真剣にはなしている	681	-0.210	0.680	24.786	
	わりと真剣に話している	1,187	0.031	0.830	***	
	あまり真剣に話していない	438	0.212	1.008		
	ぜんぜん真剣に話していない	91	0.155	1.216		
	合計	2,397	0.000	0.857		
フリーター容認型	父の仕事について知っている	とてもそう思う	461	0.018	0.762	1.141
		少しそう思う	846	-0.013	0.689	
		あまりそう思わない	626	0.017	0.677	
		ぜんぜんそう思わない	271	-0.071	0.808	
		合計	2,204	-0.005	0.717	
	母の仕事について知っている	とてもそう思う	827	0.009	0.742	0.921
		少しそう思う	916	-0.037	0.670	
		あまりそう思わない	369	0.014	0.706	
		ぜんぜんそう思わない	133	0.034	0.864	
		合計	2,245	-0.008	0.716	
	父は私によく話をする	とてもそう思う	454	0.029	0.772	0.751
		少しそう思う	663	0.002	0.657	
		あまりそう思わない	668	-0.016	0.673	
		ぜんぜんそう思わない	418	-0.040	0.807	
合計		2,203	-0.006	0.717		
母は私によく話をする	とてもそう思う	932	0.002	0.722	1.486	
	少しそう思う	818	-0.027	0.689		
	あまりそう思わない	369	-0.029	0.705		
	ぜんぜんそう思わない	123	0.110	0.850		
	合計	2,242	-0.008	0.715		
父は私のことをよくわかっている	とてもそう思う	332	0.054	0.763	1.770	
	少しそう思う	835	-0.025	0.666		
	あまりそう思わない	707	0.015	0.703		
	ぜんぜんそう思わない	332	-0.058	0.812		
	合計	2,206	-0.006	0.717		
母は私のことをよくわかっている	とてもそう思う	632	0.029	0.736	0.831	
	少しそう思う	973	-0.025	0.652		
	あまりそう思わない	482	-0.014	0.741		
	ぜんぜんそう思わない	157	-0.031	0.888		
	合計	2,244	-0.008	0.714		

	保護者に進路について	かなり真剣にはなしている わりと真剣に話している あまり真剣に話していない ぜんぜん真剣に話していない 合計	681 1,187 438 91 2,397	0.067 -0.033 0.020 -0.169 0.000	0.734 0.688 0.682 0.968 0.715	4.662 **
生活安定型	父の仕事について知っている	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	461 846 626 271 2,204	-0.034 -0.029 0.020 0.085 -0.002	0.732 0.627 0.604 0.704 0.655	2.665 *
	母の仕事について知っている	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	827 916 369 133 2,245	-0.026 0.001 0.004 0.111 -0.002	0.685 0.620 0.604 0.787 0.653	1.707
	父は私によく話をする	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	454 663 668 418 2,203	-0.055 0.006 0.002 0.049 0.000	0.717 0.627 0.608 0.697 0.655	1.873
	母は私によく話をする	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	932 818 369 123 2,242	-0.004 0.007 -0.021 0.034 -0.001	0.667 0.618 0.649 0.753 0.651	0.274
	父は私のことをよくわかっている	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	332 835 707 332 2,206	-0.068 -0.028 0.019 0.099 0.000	0.746 0.614 0.631 0.696 0.655	4.460 **
	母は私のことをよくわかっている	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	632 973 482 157 2,244	-0.061 0.000 0.024 0.148 -0.002	0.674 0.617 0.633 0.800 0.652	4.767 **
	保護者に進路について	かなり真剣にはなしている わりと真剣に話している あまり真剣に話していない ぜんぜん真剣に話していない 合計	681 1,187 438 91 2,397	-0.053 0.007 0.040 0.085 -0.001	0.694 0.645 0.592 0.746 0.655	2.591

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

地域別に、家庭要因と職業意識の因子得点の一元配置分散分析を(表 7-1-14)みると、「地位達成型」「興味・関心重視型」は東京も山口も同様の傾向にあり、父親や母親の仕事を理解している高校生、父親、母親がよく話をしている高校生、父親、母親から受容されていると感じている高校生、保護者に真剣に進路相談をしている高校生が求めている。しかし、東京のほうが親の職業、親の仕事の理解、親から受容されているという認知、親との会話がある高校生が「地位達成型」「興味・関心重視型」の因子得点の平均値は高い。東京のほうが「地位達成型」「興味・関心重視型」の志向には家庭要因が強く働いているといえる。「私生活重視型」と「フリーター容認型」は東京も山口も家庭要因における有意な差はみられない。「生活安定型」は、東京も山口も家庭要因による有意な差がみられる項目もあるが、明確な家庭要因との関連を描けるような結果ではない。

以上の結果から、家庭要因による進路選択や職業意識についての規定は、親との関係が特に職業意識の形成に影響を及ぼしている。親との関係が好ましい状況にある高校生は、「地位達成型」「興味・関心重視型」の傾向にある。「地位達成」「興味・関心重視型」は東京において家庭要因が強く影響している。

表 7-1-14 地域別 職業意識の因子得点と家庭要因の一元配置分散分析

		東京				山口				
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
地位達成型	親の職業	管理的職業	254	-0.21	0.86	2.317	114	0.03	0.93	0.619
		事務的職業	152	0.04	0.74	**	123	0.00	0.92	
		専門的職業	125	-0.04	0.94		88	0.11	0.80	
		技術的職業	115	0.04	0.88		102	0.09	0.95	
		販売的職業	69	-0.10	0.94		54	0.02	0.89	
		サービスの職業	61	-0.05	0.85		33	0.02	0.91	
		技能的職業	41	-0.08	0.72		69	0.14	0.81	
		保安的職業	32	-0.15	0.81		33	-0.01	0.87	
		生産工程・運輸従事者	78	-0.09	0.87		154	0.11	0.82	
		非正規雇用者	35	0.34	0.95		24	0.26	0.79	
		自営の農林漁業	8	0.64	0.73		9	-0.30	1.04	
		自営の商工サービス業	90	0.11	0.87		58	0.16	0.86	
		自由業	18	-0.17	0.89		4	-0.56	0.16	
		働いている人はいない	6	0.63	0.85		6	0.21	0.77	
	わからない	71	0.04	0.94		49	0.16	0.82		
	合計	1,155	-0.04	0.87		920	0.08	0.87		
	父親の事理解	とてもそう思う	244	-0.06	0.98	4.108	217	-0.07	0.96	6.774
		少しそう思う	472	-0.14	0.86	**	374	-0.03	0.85	
		あまりそう思わない	348	0.03	0.78		278	0.14	0.84	
		ぜんぜんそう思わない	167	0.09	0.95		104	0.33	0.94	
合計	1,231	-0.05	0.88		973	0.05	0.89			
母親の事理解	とてもそう思う	464	-0.12	0.96	2.933	363	-0.03	0.93	2.724	
	少しそう思う	522	-0.03	0.82	*	394	0.03	0.86		
	あまりそう思わない	202	0.10	0.76		167	0.11	0.87		
	ぜんぜんそう思わない	68	-0.03	1.05		65	0.29	0.90		
合計	1,256	-0.04	0.88		989	0.04	0.89			
父親からの受容認識	とてもそう思う	176	-0.26	1.07	4.526	156	-0.18	0.98	7.619	
	少しそう思う	460	-0.02	0.83	**	375	0.02	0.82		
	あまりそう思わない	402	-0.04	0.79		305	0.08	0.85		
	ぜんぜんそう思わない	192	0.06	0.94		140	0.30	1.00		
合計	1,230	-0.05	0.88		976	0.05	0.89			
母親からの受容認識	とてもそう思う	358	-0.13	0.96	2.710	274	-0.09	0.94	8.025	
	少しそう思う	563	-0.02	0.82	*	410	0.02	0.85		
	あまりそう思わない	245	0.00	0.82		237	0.12	0.85		
	ぜんぜんそう思わない	87	0.13	1.02		70	0.46	0.97		
合計	1,253	-0.04	0.88		991	0.04	0.89			
父親との会話	とてもそう思う	241	-0.09	0.98	0.648	213	0.02	0.95	2.035	
	少しそう思う	391	-0.06	0.89		272	0.01	0.83		
	あまりそう思わない	357	-0.04	0.75		311	0.02	0.82		
	ぜんぜんそう思わない	241	0.01	0.92		177	0.20	1.02		
合計	1,230	-0.05	0.88		973	0.05	0.89			
母親との会話	とてもそう思う	554	-0.09	0.93	4.104	378	0.04	0.91	2.463	
	少しそう思う	444	-0.09	0.82	**	374	-0.02	0.84		
	あまりそう思わない	190	0.14	0.78		179	0.09	0.90		
	ぜんぜんそう思わない	64	0.09	1.07		59	0.30	1.03		
合計	1,252	-0.04	0.88		990	0.04	0.89			
保護者への進路相談	かなり真剣にはなしている	344	-0.09	1.00	2.025	337	-0.07	0.92	3.990	
	わりと真剣に話している	639	-0.05	0.79		548	0.06	0.87		
	あまり真剣に話していない	236	0.01	0.84		202	0.16	0.77		
	ぜんぜん真剣に話していない	43	0.22	1.12		48	0.26	1.18		
合計	1,262	-0.04	0.87		1,135	0.05	0.89			
私生活重視型	親の職業	管理的職業	254	0.11	0.81	1.006	114	-0.04	0.82	1.326
		事務的職業	152	-0.09	0.80		123	-0.09	0.82	
		専門的職業	125	0.16	0.90		88	0.00	0.88	
		技術的職業	115	0.09	0.82		102	-0.12	0.90	
		販売的職業	69	-0.10	0.85		54	-0.30	0.77	
		サービスの職業	61	0.02	0.85		33	-0.15	0.78	
		技能的職業	41	0.14	0.82		69	-0.09	0.73	
		保安的職業	32	0.00	0.92		33	-0.07	0.94	
		生産工程・運輸従事者	78	0.08	0.80		154	-0.03	0.82	
		非正規雇用者	35	0.18	0.91		24	0.24	0.78	
		自営の農林漁業	8	-0.16	1.03		9	-0.71	0.72	
		自営の商工サービス業	90	0.19	0.86		58	0.00	0.83	
		自由業	18	0.08	0.88		4	-0.73	0.67	
		働いている人はいない	6	-0.14	1.14		6	-0.08	0.45	
	わからない	71	0.09	0.95		49	-0.19	0.99		
	合計	1,155	0.07	0.85		920	-0.08	0.84		
	父親の事理解	とてもそう思う	244	0.07	0.93	2.300	217	-0.09	0.93	0.976
		少しそう思う	472	0.07	0.83		374	-0.10	0.81	
		あまりそう思わない	348	0.09	0.80		278	-0.03	0.80	
		ぜんぜんそう思わない	167	-0.10	0.92		104	-0.20	0.94	
合計	1,231	0.05	0.86		973	-0.09	0.85			
母親	とてもそう思う	464	0.10	0.89	1.862	363	-0.06	0.89	0.486	

興味・関心重視型	の仕事理解	少しそう思う	522	0.05	0.80		394	-0.09	0.83	
		あまりそう思わない	202	0.03	0.82		167	-0.10	0.76	
		ぜんぜんそう思わない	68	-0.14	1.01		65	-0.20	0.98	
		合計	1,256	0.06	0.85		989	-0.09	0.85	
	父親との会話	とてもそう思う	241	0.04	0.85	0.756	213	-0.06	0.93	0.120
		少しそう思う	391	0.09	0.81		272	-0.10	0.79	
		あまりそう思わない	357	0.07	0.84		311	-0.08	0.78	
		ぜんぜんそう思わない	241	-0.01	0.95		177	-0.11	0.96	
		合計	1,230	0.05	0.86		973	-0.09	0.85	
	母親との会話	とてもそう思う	554	0.12	0.86	3.118	378	0.00	0.85	2.613
		少しそう思う	444	0.00	0.82	*	374	-0.13	0.79	
		あまりそう思わない	190	-0.05	0.79		179	-0.13	0.85	
		ぜんぜんそう思わない	64	0.20	1.11		59	-0.26	1.14	
		合計	1,252	0.05	0.85		990	-0.09	0.85	
	父親からの受容認識	とてもそう思う	176	-0.02	0.88	1.225	156	-0.20	0.90	1.977
		少しそう思う	460	0.07	0.84		375	-0.08	0.78	
		あまりそう思わない	402	0.09	0.84		305	-0.01	0.79	
		ぜんぜんそう思わない	192	-0.02	0.91		140	-0.14	1.07	
		合計	1,230	0.05	0.86		976	-0.09	0.85	
	母親からの受容認識	とてもそう思う	358	0.10	0.90	0.479	274	-0.13	0.85	0.785
	少しそう思う	563	0.04	0.81		410	-0.04	0.81		
	あまりそう思わない	245	0.04	0.83		237	-0.12	0.82		
	ぜんぜんそう思わない	87	0.00	1.00		70	-0.13	1.09		
	合計	1,253	0.05	0.85		991	-0.09	0.85		
保護者への進路相談	かなり真剣にはなしている	344	0.17	0.91	3.600	337	0.01	0.87	2.460	
	わりと真剣に話している	639	0.04	0.80	*	548	-0.06	0.82		
	あまり真剣に話していない	236	-0.06	0.83		202	-0.18	0.83		
	ぜんぜん真剣に話していない	43	0.04	1.07		48	-0.17	1.04		
	合計	1,262	0.06	0.85		1,135	-0.07	0.85		
親の職業	管理的職業	254	-0.03	0.81	0.815	114	-0.08	0.72	1.002	
	事務的職業	152	0.00	0.79		123	-0.01	0.75		
	専門的職業	125	0.02	0.98		88	0.10	0.77		
	技術的職業	115	-0.04	0.76		102	0.08	0.89		
	販売的職業	69	-0.07	0.92		54	0.09	0.92		
	サービスの職業	61	-0.16	0.74		33	-0.02	0.88		
	技能的職業	41	-0.22	0.67		69	-0.02	0.71		
	保安的職業	32	0.04	0.78		33	0.08	1.11		
	生産工程・運輸従事者	78	-0.13	0.67		154	-0.02	0.85		
	非正規雇用者	35	-0.16	0.76		24	0.19	0.88		
	自営の農林漁業	8	0.34	0.86		9	0.08	0.92		
	自営の商工サービス業	90	-0.03	0.81		58	-0.21	0.67		
	自由業	18	0.03	0.99		4	-0.15	0.24		
	働いている人はいない	6	-0.36	0.84		6	-0.33	0.66		
	わからない	71	0.13	1.21		49	0.24	1.26		
	合計	1,155	-0.03	0.84		920	0.01	0.84		
父親の仕事理解	とてもそう思う	244	-0.10	0.86	4.618	217	-0.08	0.74	1.771	
	少しそう思う	472	-0.05	0.79	**	374	0.04	0.84		
	あまりそう思わない	348	0.14	0.99		278	0.07	0.85		
	ぜんぜんそう思わない	167	-0.06	0.86		104	0.10	1.11		
	合計	1,231	0.00	0.88		973	0.03	0.85		
母親の仕事理解	とてもそう思う	464	-0.19	0.74	11.206	363	-0.14	0.69	11.315	
	少しそう思う	522	0.05	0.86	***	394	0.06	0.81	***	
	あまりそう思わない	202	0.19	1.03		167	0.23	0.97		
	ぜんぜんそう思わない	68	0.10	1.09		65	0.34	1.31		
	合計	1,256	-0.01	0.87		989	0.03	0.85		
父親からの受容認識	とてもそう思う	176	-0.28	0.71	8.436	156	-0.11	0.76	1.662	
	少しそう思う	460	0.03	0.85	***	375	0.04	0.81		
	あまりそう思わない	402	0.10	0.94		305	0.07	0.86		
	ぜんぜんそう思わない	192	-0.06	0.91		140	0.07	1.02		
	合計	1,230	0.00	0.88		976	0.03	0.85		
母親からの受容認識	とてもそう思う	358	-0.22	0.71	11.254	274	-0.14	0.71	5.178	
	少しそう思う	563	0.03	0.86	***	410	0.10	0.87	**	
	あまりそう思わない	245	0.17	1.02		237	0.11	0.88		
	ぜんぜんそう思わない	87	0.07	1.01		70	0.03	1.12		
	合計	1,253	-0.01	0.87		991	0.03	0.85		
父親との会話	とてもそう思う	241	-0.25	0.59	8.443	213	-0.15	0.69	4.459	
	少しそう思う	391	0.04	0.98	***	272	0.07	0.90	**	
	あまりそう思わない	357	0.10	0.88		311	0.12	0.85		
	ぜんぜんそう思わない	241	0.00	0.90		177	0.02	0.95		
	合計	1,230	0.00	0.88		973	0.03	0.86		
母親との会話	とてもそう思う	554	-0.20	0.75	15.798	378	-0.15	0.65	9.379	
	少しそう思う	444	0.09	0.89	***	374	0.14	0.91	***	
	あまりそう思わない	190	0.22	0.99		179	0.17	0.92		
	ぜんぜんそう思わない	64	0.16	1.08		59	0.07	1.21		
	合計	1,252	-0.01	0.87		990	0.03	0.85		
保護者へ	かなり真剣にはなしている	344	-0.21	0.73	10.835	337	-0.21	0.63	14.423	
	わりと真剣に話している	639	0.01	0.82	***	548	0.06	0.84	***	

	の進路相談	あまり真剣に話していない ぜんぜん真剣に話していない 合計	236 43 1,262	0.19 0.15 -0.01	1.05 1.24 0.87		202 48 1,135	0.24 0.16 0.01	0.96 1.21 0.84		
フリーター 容認型	親の職業	管理的職業 事務的職業 専門的職業 技術的職業 販売的職業 サービスの職業 技能的職業 保安的職業 生産工程・運輸従事者 非正規雇用者 自営の農林漁業 自営の商工サービス業 自由業 働いている人はいない わからない 合計	254 152 125 115 69 61 41 32 78 35 8 90 18 6 71 1,155	-0.08 0.00 0.12 -0.11 -0.02 -0.14 0.06 0.04 -0.07 -0.10 0.11 -0.11 -0.01 -0.20 -0.06 -0.04	0.69 0.72 0.67 0.69 0.64 0.65 0.66 0.82 0.72 0.68 0.57 0.66 0.69 0.78 0.68 0.69	1.012	114 123 88 102 54 33 69 33 154 24 9 58 4 6 49 920	0.15 0.05 -0.13 0.05 0.06 0.16 -0.03 0.18 0.21 0.10 0.21 -0.07 0.56 0.47 -0.01 0.07	0.73 0.77 0.75 0.74 0.80 0.67 0.78 0.65 0.71 0.76 0.69 0.62 0.63 0.42 0.64 0.73	1.619	
	父親の仕事理解	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	244 472 348 167 1,231	-0.06 -0.06 -0.02 -0.11 -0.06	0.75 0.66 0.67 0.75 0.69	0.576	217 374 278 104 973	0.11 0.05 0.07 -0.01 0.06	0.77 0.72 0.69 0.89 0.74	0.673	
	母親の仕事理解	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	464 522 202 68 1,256	-0.06 -0.06 -0.07 -0.04 -0.06	0.69 0.67 0.69 0.83 0.69	0.044	363 394 167 65 989	0.09 -0.01 0.11 0.11 0.05	0.79 0.67 0.72 0.90 0.74	1.793	
	父親からの受容認識	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	176 460 402 192 1,230	-0.06 -0.11 -0.01 -0.02 -0.06	0.70 0.66 0.67 0.79 0.69	1.500	156 375 305 140 976	0.18 0.07 0.05 -0.11 0.06	0.82 0.66 0.75 0.84 0.74	3.796 *	
	母親からの受容認識	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	358 563 245 87 1,253	-0.04 -0.09 -0.05 0.02 -0.06	0.70 0.63 0.74 0.83 0.69	1.020	274 410 237 70 991	0.11 0.07 0.02 -0.10 0.06	0.77 0.68 0.74 0.96 0.74	1.766	
	父親との会話	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	241 391 357 241 1,230	-0.07 -0.05 -0.06 -0.05 -0.06	0.70 0.66 0.64 0.79 0.69	0.058	213 272 311 177 973	0.14 0.08 0.03 -0.02 0.06	0.83 0.64 0.71 0.83 0.74	1.888	
	母親との会話	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	554 444 190 64 1,252	-0.06 -0.07 -0.07 0.05 -0.06	0.67 0.70 0.67 0.84 0.69	0.647	378 374 179 59 990	0.09 0.02 0.02 0.17 0.06	0.78 0.68 0.74 0.86 0.74	1.156	
	保護者への進路相談	かなり真剣にはなしている わりと真剣に話している あまり真剣に話していない ぜんぜん真剣に話していない 合計	344 639 236 43 1,262	-0.03 -0.08 -0.01 -0.21 -0.06	0.72 0.67 0.67 0.90 0.69	1.625	337 548 202 48 1,135	0.16 0.03 0.05 -0.13 0.07	0.74 0.71 0.70 1.04 0.74	3.716 *	
	生活安定型	親の職業	管理的職業 事務的職業 専門的職業 技術的職業 販売的職業 サービスの職業 技能的職業 保安的職業 生産工程・運輸従事者 非正規雇用者 自営の農林漁業 自営の商工サービス業 自由業 働いている人はいない わからない 合計	254 152 125 115 69 61 41 32 78 35 8 90 18 6 71 1,155	0.09 0.03 0.10 0.05 0.07 0.16 0.09 -0.32 0.05 0.05 -0.28 0.21 -0.15 0.60 0.16 0.08	0.62 0.61 0.70 0.61 0.56 0.62 0.75 0.66 0.69 0.64 0.70 0.64 0.53 0.53 0.58 0.64	2.067 *	114 123 88 102 54 33 69 33 154 24 9 58 4 6 49 920	-0.08 -0.15 0.03 -0.22 -0.02 -0.01 -0.09 -0.36 -0.09 -0.19 -0.30 0.13 -0.71 -0.25 0.04 -0.09	0.66 0.67 0.64 0.69 0.65 0.60 0.66 0.72 0.63 0.72 0.74 0.61 0.54 0.52 0.61 0.66	2.067 *
		父親の仕事理解	とてもそう思う 少しそう思う あまりそう思わない ぜんぜんそう思わない 合計	244 472 348 167 1,231	0.04 0.03 0.10 0.17 0.07	0.73 0.63 0.57 0.64 0.64	2.327	217 374 278 104 973	-0.12 -0.11 -0.08 -0.06 -0.10	0.73 0.62 0.63 0.77 0.66	0.343
		母親の仕事理解	とてもそう思う 少しそう思う	464 522	0.03 0.09	0.66 0.62	2.956 *	363 394	-0.10 -0.11	0.70 0.61	0.333

事理解	あまりそう思わない	202	0.06	0.57		167	-0.06	0.64	
	ぜんぜんそう思わない	68	0.27	0.76		65	-0.06	0.79	
	合計	1,256	0.07	0.64		989	-0.10	0.66	
父親からの受容認識	とてもそう思う	176	0.10	0.75	1.082	156	-0.26	0.70	6.339
	少しそう思う	460	0.04	0.61		375	-0.12	0.61	***
	あまりそう思わない	402	0.07	0.60		305	-0.04	0.66	
	ぜんぜんそう思わない	192	0.14	0.67		140	0.05	0.73	
	合計	1,230	0.07	0.64		976	-0.09	0.66	
母親からの受容認識	とてもそう思う	358	0.02	0.68	4.120	274	-0.17	0.65	2.112
	少しそう思う	563	0.07	0.59	**	410	-0.10	0.63	
	あまりそう思わない	245	0.08	0.60		237	-0.03	0.67	
	ぜんぜんそう思わない	87	0.29	0.78		70	-0.02	0.80	
	合計	1,253	0.07	0.64		991	-0.10	0.66	
父親との会話	とてもそう思う	241	0.07	0.69	1.452	213	-0.20	0.72	2.457
	少しそう思う	391	0.05	0.63		272	-0.06	0.63	
	あまりそう思わない	357	0.05	0.58		311	-0.05	0.63	
	ぜんぜんそう思わない	241	0.15	0.68		177	-0.09	0.70	
	合計	1,230	0.07	0.64		973	-0.09	0.66	
母親との会話	とてもそう思う	554	0.07	0.64	0.375	378	-0.11	0.69	0.619
	少しそう思う	444	0.06	0.60		374	-0.06	0.63	
	あまりそう思わない	190	0.08	0.64		179	-0.13	0.64	
	ぜんぜんそう思わない	64	0.15	0.74		59	-0.09	0.75	
	合計	1,252	0.07	0.63		990	-0.09	0.66	
保護者への進路相談	かなり真剣にはなしている	344	0.05	0.70	0.459	337	-0.16	0.67	2.888
	わりと真剣に話している	639	0.08	0.61		548	-0.08	0.67	*
	あまり真剣に話していない	236	0.07	0.58		202	0.00	0.61	
	ぜんぜん真剣に話していない	43	0.16	0.76		48	0.02	0.74	
	合計	1,262	0.07	0.64		1,135	-0.08	0.67	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

進路選択・職業意識と家庭要因の相関を分析したところ、高校生全体で最も相関が高かったのは、「自分は将来就きたい職業がある」と「保護者に真剣に進路相談をしている」：0.242 で、次いで「自立度」と「保護者に真剣に進路相談をしている」：0.234 である。進路選択・職業意識の形成においては、家庭において相談できる環境が重要であることがうかがえる。

「保護者に真剣に進路相談をしている」について、父親と母親のかかわりを相関分析で求めたところ、母親との関係（「母は私のことをよくわかっている」：0.408、「母は私にいろいろなことを話す」：0.385、「母の仕事についてよく知っている」：0.303）が父親よりも強く相関していた。母親は父親よりも進路選択や職業意識において重要な存在といえる。

地域別相関をみると東京も山口も「自分は将来就きたい職業がある」と「保護者に真剣に進路相談をしている」の相関が最も高く、相関係数は東京：0.221^(***)、山口：0.264^(***)で、山口の相関が強い。次いで「保護者に真剣に進路相談をしている」と相関が高かった「自立度」は東京：0.207^(***)、山口：0.263^(***)で、やはり山口の相関が高い。

第2節 高校生の進路選択を規定する学校要因

次に、高校生の生活の中心となる学校要因の規定について分析する。進路について深く考えた経験の有無（進路について深く考えた＝1、考えたことがない＝0と得点化）について高校生全体を学校要因ごとに分析した結果が図7-2-1である。その図をみると、学校区分別では、進学校、中間校で進路について真剣に考えた経験がある高校生が多い。成績がよく、友人が多く、みんなから信頼されており、友人や先輩に真剣に進路相談をしている高校生が進路について深く考えている。

地域別に学校要因ごとの進路について深く考えた経験の有無を明らかにするために、学校要因ごとに平均値を算出した（表 7-2-1）。進路について深く考えた経験は、東京では進学校、中間校の高校生、成績が中位の中以上の高校生が進路について深く考えた経験をもつものに対し、山口では学校区分や成績による進路について深く考える経験の有無は検定における有意な差はみられない。

友人関係では、東京も山口も友人から信頼されていると感じている高校生が進路について考えている。教師や友人への進路相談でも、東京と山口に地域差はなく、教師にも友人にも真剣に相談している高校生が進路について考えている。

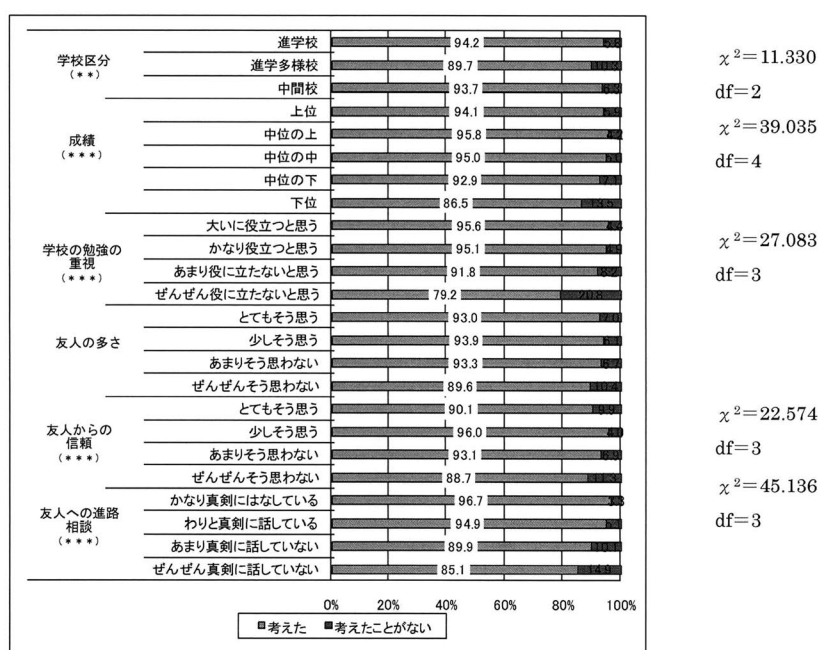


図 7-2-1 進路について深く考えた経験と学校要因
(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 7-2-1 地域別 進路について深く考えた経験と学校要因

学校要因	東京				山口			
	度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値
学校区分								
進学校	439	0.95	0.23	10.536	373	0.94	0.24	0.371
進路多様校	194	0.85	0.36	***	342	0.93	0.26	
中間校	632	0.93	0.25		429	0.94	0.23	
合計	1,265	0.92	0.26		1,144	0.94	0.24	
成績								
上位	118	0.94	0.24	9.842	87	0.94	0.23	1.887
中位の上	255	0.95	0.21	***	217	0.96	0.19	
中位の中	371	0.96	0.19		354	0.94	0.24	
中位の下	259	0.92	0.27		236	0.94	0.24	
下位	229	0.83	0.37		209	0.90	0.30	
合計	1,232	0.93	0.26		1,103	0.94	0.24	
学校の勉強の重視度								
大いに役立つと思う	102	0.95	0.22	5.376	104	0.96	0.19	3.806
かなり役立つと思う	490	0.95	0.21	**	458	0.95	0.22	*
あまり役に立たないと思う	412	0.91	0.28		316	0.92	0.27	
ぜんぜん役に立たないと思う	28	0.79	0.42		25	0.80	0.41	
合計	1,032	0.93	0.25		903	0.94	0.24	
友人の多さ								
とてもそう思う	135	0.93	0.25	1.268	121	0.93	0.26	1.443
少しそう思う	449	0.93	0.26		422	0.95	0.22	
あまりそう思わない	499	0.93	0.26		439	0.94	0.24	

	ぜんぜんそう思わない	179	0.89	0.32		156	0.90	0.30	
	合計	1,262	0.92	0.27		1,138	0.94	0.25	
友人からの信頼	とてもそう思う	52	0.92	0.27	5.533	39	0.87	0.34	4.037
	少しそう思う	371	0.95	0.22	**	280	0.98	0.16	**
	あまりそう思わない	625	0.93	0.25		599	0.93	0.26	
	ぜんぜんそう思わない	213	0.86	0.35		219	0.91	0.28	
	合計	1,261	0.92	0.27		1,137	0.94	0.25	
教師への進路相談	かなり真剣にはなしている	142	0.94	0.23	7.881	171	0.98	0.13	16.568
	わりと真剣に話している	519	0.96	0.20	***	520	0.96	0.21	***
	あまり真剣に話していない	458	0.91	0.29		348	0.93	0.26	
	ぜんぜん真剣に話していない	145	0.85	0.36		104	0.79	0.41	
	合計	1,264	0.92	0.26		1,143	0.94	0.24	
友人への進路相談	かなり真剣にはなしている	235	0.96	0.20	4.716	226	0.98	0.15	13.275
	わりと真剣に話している	562	0.94	0.24	**	490	0.96	0.20	***
	あまり真剣に話していない	364	0.89	0.31		328	0.91	0.29	
	ぜんぜん真剣に話していない	103	0.88	0.32		98	0.82	0.39	
	合計	1,264	0.92	0.27		1,142	0.94	0.24	

※考えた=1、考えたことがない=0と得点化 (* P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001)

次に、将来希望する職業の有無(「自分には将来就きたい職業がある」という質問に対し、とてもあてはまる=1、ややあてはまる=2、あまりあてはまらない=3、ぜんぜんあてはまらない=4と得点化)について、高校生全体を学校要因ごとに分析した(図7-2-2)。その結果は、進路多様校で将来希望する職業をもっている高校生が多い。成績は中位の上、学校の勉強を重視しており、友達が多く、みんなから信頼されている高校生、友人や先輩に真剣に進路相談をしている高校生が将来希望する職業をもっている。

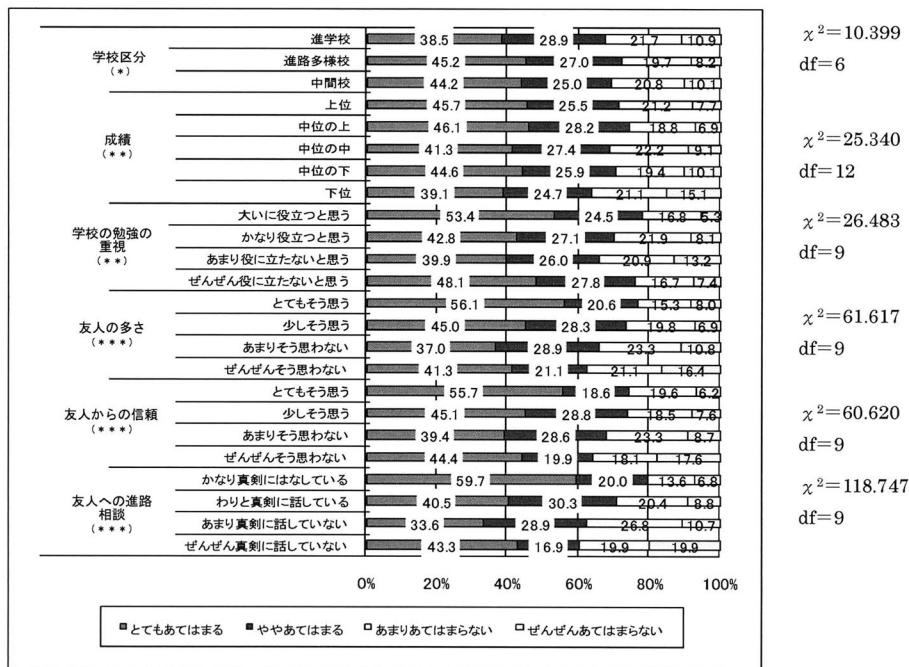


図7-2-2 将来希望する職業の有無と学校要因

(* P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001)

地域別に学校要因ごとの将来希望職業の有無をみるために、学校要因ごとに将来希望する職業の有無の平均値を算出した(表7-2-2)。東京は学校区分、成績は検定における有意な差がない。学校の勉強の重視度が高い高校生だけでなく、重視しない高校生も将来希望する職業をもっている。また、友人の数が多く、信頼されている高校生、教師や友人に進

路相談をしている高校生が将来希望する職業をもっている。

これに対し、山口は進路多様校、成績上位の高校生で、学校の勉強の重視度が高い高校生が将来希望する職業をもっている。東京と同様に友人の数が多く、信頼されている高校生、教師や友人に進路相談をしている高校生が将来希望する職業をもっている結果となった。

表 7-2-2 地域別 将来希望する職業の有無と学校要因

		東京				山口				
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
学校 区分	進学校	445	2.08	1.01	1.294	375	2.01	1.03	3.422	
	進路多様校	202	2.06	1.02		347	1.82	0.96		*
	中間校	640	1.98	1.04		433	1.94	1.01		
	合計	1,287	2.03	1.03		1,155	1.93	1.00		
成績	上位	120	2.01	1.01	1.768	88	1.77	0.94	2.842	
	中位の上	262	1.93	0.97		217	1.79	0.93		*
	中位の中	375	2.04	1.03		354	1.94	0.96		
	中位の下	262	1.97	1.01		243	1.93	1.03		
	下位	234	2.16	1.10		211	2.08	1.09		
合計	1,253	2.02	1.03	1,113	1.92	1.00				
学校 の勉強の 重視度	大いに役立つと思う	104	1.74	0.93	5.580	104	1.74	0.91	3.351	
	かなり役立つと思う	502	2.05	1.01		460	1.85	0.94		*
	あまり役に立たないと思う	417	2.11	1.05		319	2.03	1.08		
	ぜんぜん役に立たないと思う	28	1.57	0.88		26	2.12	0.99		
合計	1,051	2.03	1.03	909	1.91	0.99				
友人 の多さ	とてもそう思う	138	1.77	1.01	6.806	124	1.73	0.97	7.161	
	少しそう思う	461	1.96	0.96		425	1.80	0.94		***
	あまりそう思わない	504	2.09	1.02		440	2.07	1.01		
	ぜんぜんそう思わない	181	2.24	1.14		160	2.00	1.10		
	合計	1,284	2.03	1.02		1,149	1.93	1.00		
友人 からの 信頼	とてもそう思う	56	1.79	0.95	3.768	41	1.73	1.03	3.762	
	少しそう思う	378	1.97	0.99		281	1.78	0.92		*
	あまりそう思わない	634	2.03	0.99		604	2.00	0.99		
	ぜんぜんそう思わない	215	2.21	1.18		222	1.97	1.11		
合計	1,283	2.03	1.03	1,148	1.93	1.00				
教師 への 進路 相談	かなり真剣にはなしている	145	1.81	1.03	7.907	173	1.50	0.82	25.493	
	わりと真剣に話している	530	1.92	0.98		523	1.83	0.95		***
	あまり真剣に話していない	463	2.17	1.00		353	2.20	0.98		
	ぜんぜん真剣に話していない	146	2.18	1.16		105	2.23	1.22		
合計	1,284	2.03	1.02	1,154	1.93	1.00				
友人 への 進路 相談 状況	かなり真剣にはなしている	241	1.75	1.01	8.764	230	1.60	0.88	15.728	
	わりと真剣に話している	572	2.05	1.00		492	1.89	0.96		***
	あまり真剣に話していない	370	2.14	1.00		332	2.15	1.02		
	ぜんぜん真剣に話していない	102	2.21	1.20		99	2.12	1.18		
合計	1,285	2.03	1.02	1,153	1.93	1.00				

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

次に、自立度（自立度高=1、自立度中=2、自立度下=3と得点化）について高校生全体の学校要因ごとの分析が図 7-2-3 である。学校区分では、進学校、中間校の高校生の自立度が高い。成績は中位の上、学校の勉強の重視度が高く、友達が多く、みんなから信頼され、友人や先輩に真剣に進路相談をしている高校生の自立度が高い。

地域別に学校要因ごとの自立度との関連をみるために、学校要因ごとに自立度の平均値を算出した（表 7-2-3）。自立度は東京も山口も学校区分における検定上の有意差はみられない。全体の傾向と同様、成績が良く、学校の勉強の重視度が高く、友達が多く、みんなから信頼され、教師や友人や先輩に真剣に進路相談をしている高校生が自立度が高い。

進路にむけた取組数（取組多=1、取組中=2、取組少=3、取組なし=4と得点化）についての高校生全体の学校要因ごとの分析（図 7-2-4）では、学校区分における検定上の有意

差はみられない。成績は中位の上、学校の勉強の重視度が高く、友達が多く、みんなから信頼され、友人や先輩に真剣に進路相談をしている高校生が、取組数が多いという結果であった。

地域別に進路にむけた取組数の学校要因ごとの分析をみるため、学校要因ごとに進路にむけた取組数の平均値を算出した（表 7-2-4）。東京と山口の違いは、成績、学校の勉強の重視度において生じた。山口は成績が良い高校生が進路にむけた取組みが多く、東京は学校の勉強の重視度が高い高校生が進路にむけた取組みが多いという結果となった。それ以外は、全体の傾向と同様に、学校区分の差はなく、友達が多く、みんなから信頼され、教師や友人や先輩に真剣に進路相談をしている高校生が進路についての取組みが多い。

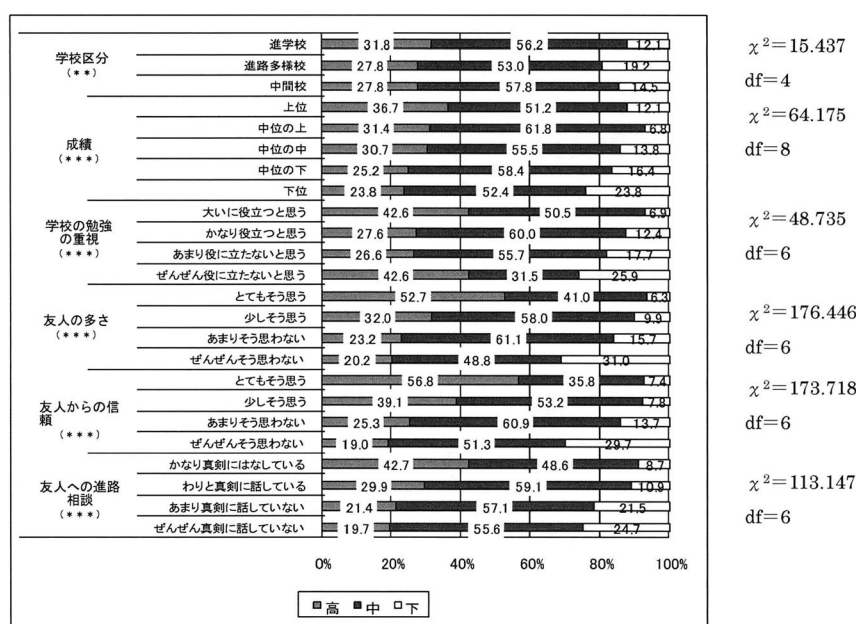


図 7-2-3 自立度と学校要因

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 7-2-3 地域別 自立度と学校要因

学校区分	進学校	東京				山口				
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
学校区分	進路多様校	440	1.80	0.61	2.256	372	1.80	0.66	2.687	
	進路多様校	199	1.91	0.69		333	1.91	0.68		
	中間校	621	1.86	0.64		423	1.87	0.63		
	合計	1,260	1.85	0.64		1,128	1.86	0.65		
成績	上位	120	1.85	0.64	5.517	87	1.62	0.65	7.385	
	中位の上	256	1.73	0.56		215	1.78	0.58		***
	中位の中	370	1.82	0.64		347	1.84	0.65		
	中位の下	256	1.90	0.63		237	1.93	0.65		
	下位	227	1.99	0.70		202	2.01	0.68		
合計	1,229	1.85	0.64	1,088	1.86	0.65				
学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	100	1.70	0.61	3.157	102	1.59	0.60	6.918	
	かなり役立つと思う	490	1.84	0.60		447	1.85	0.63		***
	あまり役に立たないと思う	411	1.91	0.66		311	1.92	0.65		
	ぜんぜん役に立たないと思う	28	1.75	0.80		26	1.92	0.84		
	合計	1,029	1.85	0.63		886	1.85	0.65		
友人の多さ	とてもそう思う	134	1.50	0.57	35.009	122	1.57	0.65	17.663	
	少しそう思う	450	1.78	0.60		415	1.78	0.62		***
	あまりそう思わない	494	1.89	0.62		429	1.97	0.61		

	ぜんぜんそう思わない	180	2.19	0.67		156	2.01	0.74	
	合計	1,258	1.85	0.64		1,122	1.86	0.65	
友人からの信頼	とてもそう思う	54	1.52	0.64	27.532	41	1.49	0.64	22.242
	少しそう思う	369	1.70	0.60	***	276	1.67	0.62	***
	あまりそう思わない	623	1.87	0.62		585	1.90	0.61	
	合計	1,258	1.85	0.64		1,121	1.86	0.66	
教師への進路相談	かなり真剣にはなしている	140	1.68	0.64	11.101	171	1.67	0.63	11.568
	わりと真剣に話している	524	1.78	0.61	***	509	1.82	0.62	***
	あまり真剣に話していない	452	1.96	0.62		346	1.97	0.65	
	ぜんぜん真剣に話していない	141	1.96	0.74		101	2.05	0.74	
	合計	1,257	1.85	0.64		1,127	1.86	0.65	
友人への進路相談状況	かなり真剣にはなしている	236	1.61	0.61	23.989	225	1.72	0.65	12.555
	わりと真剣に話している	554	1.82	0.61	***	479	1.80	0.62	***
	あまり真剣に話していない	366	2.01	0.64		326	2.00	0.67	
	ぜんぜん真剣に話していない	102	2.06	0.67		96	2.04	0.66	
	合計	1,258	1.85	0.64		1,126	1.86	0.65	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

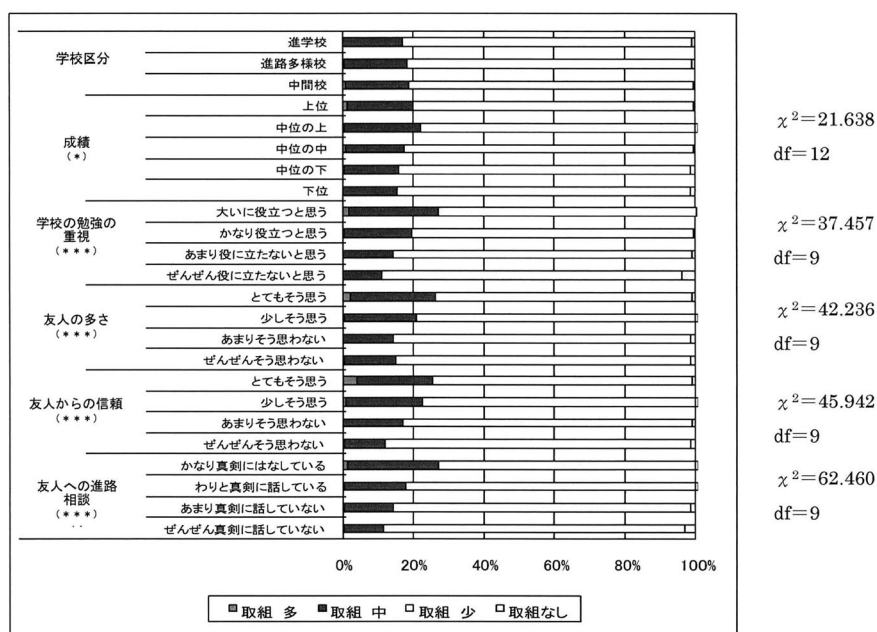


図 7-2-4 進路にむけた取組数と学校要因

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 7-2-4 地域別 進路にむけた取組数と学校要因

学校区分	進路	東京				山口				
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
学校区分	進学校	446	2.79	0.43	0.809	376	2.88	0.36	1.156	
	進路多様校	202	2.78	0.46		348	2.84	0.40		
	中間校	641	2.76	0.47		433	2.88	0.36		
	合計	1,289	2.77	0.46		1,157	2.87	0.37		
成績	上位	120	2.76	0.50	1.376	88	2.83	0.38	2.924	
	中位の上	262	2.74	0.45		217	2.81	0.42		
	中位の中	375	2.74	0.48		355	2.89	0.35		
	中位の下	264	2.81	0.43		244	2.88	0.38		
	下位	234	2.80	0.42		211	2.91	0.34		
	合計	1,255	2.77	0.46		1,115	2.87	0.37		
学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	104	2.63	0.54	5.821	104	2.78	0.44	4.818	
	かなり役立つと思う	502	2.75	0.45		**	461	2.85		0.39
	あまり役に立たないと思う	418	2.82	0.42		319	2.91	0.30		
	ぜんぜん役に立たないと思う	28	2.86	0.36		26	3.00	0.40		
	合計	1,052	2.77	0.45		910	2.87	0.37		
友人の多さ	とてもそう思う	138	2.62	0.56	9.410	124	2.83	0.44	3.541	
	少しそう思う	461	2.73	0.46		***	425	2.84		0.39

	あまりそう思わない	505	2.82	0.42		441	2.91	0.33	
	ぜんぜんそう思わない	182	2.84	0.41		161	2.87	0.39	
	合計	1,286	2.77	0.46		1,151	2.87	0.37	
友人からの信頼	とてもそう思う	56	2.66	0.58	5.201	41	2.78	0.52	5.017
	少しそう思う	378	2.73	0.48	**	281	2.81	0.41	**
	あまりそう思わない	636	2.77	0.45		604	2.89	0.35	
	ぜんぜんそう思わない	215	2.87	0.39		224	2.91	0.34	
	合計	1,285	2.77	0.46		1,150	2.87	0.37	
教師への進路相談	かなり真剣にはなしている	145	2.66	0.49	4.986	173	2.79	0.43	4.391
	わりと真剣に話している	531	2.75	0.46	**	524	2.87	0.36	**
	あまり真剣に話していない	463	2.81	0.45		354	2.90	0.36	
	ぜんぜん真剣に話していない	147	2.84	0.41		105	2.91	0.40	
	合計	1,286	2.77	0.46		1,156	2.87	0.38	
友人への進路相談状況	かなり真剣にはなしている	241	2.68	0.51	7.763	230	2.75	0.45	11.013
	わりと真剣に話している	572	2.75	0.46	***	492	2.89	0.34	***
	あまり真剣に話していない	370	2.83	0.42		333	2.91	0.35	
	ぜんぜん真剣に話していない	104	2.89	0.39		100	2.93	0.38	
	合計	1,287	2.77	0.46		1,155	2.87	0.38	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

以上の進路選択に関する 4 つの変数と学校要因の分析から、友人関係、進路相談に関しては、東京と山口に差はみられず、友人が多く、みんなから信頼されていて、教師にも友人にも進路相談をする高校生が進路選択に積極的に挑んでいる。

しかし、東京と山口の違いは学校区分、成績、学校の勉強の重視度に現れ、山口は成績上位の高校生が将来希望する職業があり、自立しており、進路にむけた取組みが多い。これに対し、東京は成績上位者が将来希望する職業があり、進路にむけた取組みが多いわけではない。山口の高校生は、成績が良いことが進路選択に積極的に参加することを可能にするといえる。

次に、学校要因ごとに職業意識の 5 因子の因子得点について一元配置分散分析を行った。高校生全体の結果は表 7-2-5 である。「地位達成型」は、進学校の高校生が求める傾向にある。成績が良く、学校で学ぶ勉強を重視し、友人が多く、みんなから信頼され、友達や先輩に真剣に進路相談をしている。「私生活重視型」は、進路多様校の高校生が求める傾向にある。成績は上位の高校生と下位の高校生が求める傾向にあり、学校で学ぶ勉強は重視していない高校生が求める傾向にある。友人との関係に関しては、友人が多く、みんなから信頼されている人が求める傾向にある。しかし、友人や先輩に真剣に進路相談をしていない。「興味・関心重視型」は、進路多様校の高校生が求める傾向にある。成績が良く、学校の勉強を重視していて、友達が多く、みんなから信頼されており、友人や先輩に真剣に進路相談をしている。「フリーター容認型」は、中間校の高校生が求める傾向にある。成績が悪く、学校で学ぶ勉強を重視していない高校生が求める傾向にある。友人関係は、友達が多く、みんなから信頼されていると感じているが、友人や先輩に真剣に進路相談をしていない。「生活安定型」は、進路多様校の高校生が求めている。成績が良く、学校で学ぶ勉強を重視し、友人が多く、みんなから信頼され、友達や先輩にわりと真剣に進路相談をしている。

地域別に学校要因について職業意識の 5 因子の因子得点の平均値を算出した (表 7-2-6)。「地位達成型」は、山口は学校区分の有意な差はなく、成績が良く、学校の重視度が高い高校生、友人関係も良好で、友人へ進路相談をする高校生が求めている。東京は進学校が

地位達成の傾向にある。友人関係と進路相談は山口と同様である。成績と学校の重視度は有意な差がみられない。「私生活重視型」は、東京も山口も学校区分、学校の勉強の重視度、友人からの信頼が有意な差があるだけである。学校の勉強を重視しない高校生がこの傾向にある。「興味・関心重視型」は、東京も山口も友人関係が良好で、教師、友人へ進路相談をしている高校生がこの傾向にあり、山口だけが学校の勉強の重視度が高い高校生がこの傾向にあった。「フリーター容認型」は、東京は進路多様校、山口は進学校の高校生で、成績が下位、学校の勉強の重視度が低い高校生にこの傾向がある。「生活安定型」は山口も東京も学校の勉強を重視しており、教師に進路相談を真剣にしている高校生にこの傾向がみられる。

表 7-2-5 職業意識の 5 因子と学校要因

		度数	平均値	標準偏差	F 値	
地位達成型	高校ランク	進学校	810	-0.096	0.905	7.659 ***
		進路多様校	537	0.024	0.904	
		中間校	1,054	0.062	0.847	
		合計	2,401	0.000	0.882	
	成績	上位	204	-0.113	0.982	5.277 ***
		中位の上	471	-0.035	0.852	
		中位の中	718	-0.042	0.812	
		中位の下	503	0.037	0.861	
		下位	429	0.162	0.964	
	合計	2,325	0.008	0.879		
	学校で学ぶ勉強の重視度	大いに役立つ	205	-0.046	1.009	3.273 *
		かなり役立つ	953	-0.014	0.808	
		あまり役に立たない	720	0.032	0.870	
		ぜんぜん役に立たない	54	0.337	1.117	
合計	1,932	0.009	0.865			
友人が多い	とてもそう思う	259	-0.233	1.074	22.324 ***	
	少しそう思う	867	-0.098	0.836		
	あまりそう思わない	929	0.061	0.794		
	ぜんぜんそう思わない	337	0.272	0.976		
	合計	2,392	0.001	0.882		
友人から信頼されている	とてもそう思う	97	-0.564	1.059	33.679 ***	
	少しそう思う	648	-0.146	0.819		
	あまりそう思わない	1,215	0.031	0.823		
	ぜんぜんそう思わない	431	0.262	0.983		
合計	2,391	0.000	0.881			
友人に進路相談	かなり真剣に話している	466	-0.069	1.005	6.386 ***	
	わりと真剣に話している	1,051	-0.010	0.813		
	あまり真剣に話していない	684	-0.010	0.845		
	ぜんぜん真剣に話していない	197	0.251	1.008		
合計	2,398	0.000	0.882			
私生活重視型	高校ランク	進学校	810	0.095	0.832	20.867 ***
		進路多様校	537	-0.201	0.853	
		中間校	1,054	0.029	0.851	
		合計	2,401	0.000	0.852	
	成績	上位	204	-0.076	0.916	2.561 *
		中位の上	471	0.072	0.811	
		中位の中	718	0.043	0.831	
		中位の下	503	-0.021	0.822	
		下位	429	-0.072	0.921	
	合計	2,325	0.003	0.852		
	学校で学ぶ勉強の重視度	大いに役立つ	205	0.257	0.943	10.347 ***
		かなり役立つ	953	0.047	0.780	
		あまり役に立たない	720	-0.072	0.841	
		ぜんぜん役に立たない	54	-0.231	1.196	
合計	1,932	0.017	0.841			
友人が多い	とてもそう思う	259	-0.117	0.985	3.652 *	
	少しそう思う	867	0.017	0.793		
	あまりそう思わない	929	0.046	0.789		
	ぜんぜんそう思わない	337	-0.079	1.027		
	合計	2,392	0.000	0.852		
友人から信頼されている	とてもそう思う	97	-0.361	0.957	10.450 ***	
	少しそう思う	648	0.062	0.794		
	あまりそう思わない	1,215	0.035	0.817		

		ぜんぜんそう思わない	431	-0.117	0.974	
		合計	2,391	-0.001	0.853	
	友人に進路相談	かなり真剣に話している	466	0.071	0.916	2.504
		わりと真剣に話している	1,051	-0.002	0.806	
		あまり真剣に話していない	684	-0.015	0.822	
		ぜんぜん真剣に話していない	197	-0.122	1.010	
		合計	2,398	-0.001	0.852	
興味・関心重視型	高校ランク	進学校	810	0.014	0.861	0.323
		進路多様校	537	-0.024	0.817	
		中間校	1,054	0.001	0.875	
		合計	2,401	0.000	0.857	
	成績	上位	204	-0.101	0.714	0.869
		中位の上	471	-0.014	0.796	
		中位の中	718	-0.026	0.852	
		中位の下	503	0.022	0.870	
		下位	429	0.006	0.892	
		合計	2,325	-0.014	0.841	
	学校で学ぶ勉強の重視度	大いに役立つ	205	-0.182	0.783	4.999
		かなり役立つ	953	-0.031	0.766	**
		あまり役に立たない	720	-0.054	0.791	
		ぜんぜん役に立たない	54	0.272	1.278	
		合計	1,932	-0.047	0.798	
	友人が多い	とてもそう思う	259	-0.293	0.547	19.652
		少しそう思う	867	-0.069	0.758	***
		あまりそう思わない	929	0.092	0.902	
		ぜんぜんそう思わない	337	0.156	1.075	
		合計	2,392	0.001	0.858	
	友人から信頼されている	とてもそう思う	97	-0.232	0.571	10.086
		少しそう思う	648	-0.123	0.719	***
		あまりそう思わない	1,215	0.050	0.852	
		ぜんぜんそう思わない	431	0.096	1.064	
合計		2,391	0.000	0.857		
友人に進路相談	かなり真剣に話している	466	-0.281	0.621	30.920	
	わりと真剣に話している	1,051	-0.022	0.787	***	
	あまり真剣に話していない	684	0.198	0.957		
	ぜんぜん真剣に話していない	197	0.083	1.093		
	合計	2,398	-0.001	0.856		
フリーター・容認型	高校ランク	進学校	810	0.014	0.712	0.474
		進路多様校	537	0.009	0.782	
		中間校	1,054	-0.016	0.679	
		合計	2,401	0.000	0.714	
	成績	上位	204	0.078	0.803	4.820
		中位の上	471	0.047	0.667	**
		中位の中	718	0.028	0.707	
		中位の下	503	-0.006	0.659	
		下位	429	-0.127	0.774	
		合計	2,325	0.000	0.713	
	学校で学ぶ勉強の重視度	大いに役立つ	205	0.174	0.743	13.008
		かなり役立つ	953	0.068	0.638	***
		あまり役に立たない	720	-0.098	0.735	
		ぜんぜん役に立たない	54	-0.175	0.931	
		合計	1,932	0.011	0.703	
	友人が多い	とてもそう思う	259	-0.074	0.792	1.622
		少しそう思う	867	-0.012	0.651	
		あまりそう思わない	929	0.010	0.680	
		ぜんぜんそう思わない	337	0.050	0.880	
		合計	2,392	-0.001	0.715	
	友人から信頼されている	とてもそう思う	97	-0.171	0.891	3.015
		少しそう思う	648	-0.009	0.667	*
		あまりそう思わない	1,215	-0.008	0.677	
		ぜんぜんそう思わない	431	0.062	0.824	
合計		2,391	-0.002	0.714		
友人に進路相談	かなり真剣に話している	466	-0.039	0.773	1.004	
	わりと真剣に話している	1,051	-0.001	0.676		
	あまり真剣に話していない	684	0.011	0.678		
	ぜんぜん真剣に話していない	197	0.061	0.876		
	合計	2,398	0.000	0.715		
生活安定型	高校ランク	進学校	810	0.091	0.673	13.285
		進路多様校	537	-0.085	0.664	***
中間校		1,054	-0.026	0.630		
合計		2,401	0.000	0.656		
成績	上位	204	-0.030	0.734	1.944	
	中位の上	471	-0.034	0.613		
	中位の中	718	-0.020	0.630		
	中位の下	503	0.010	0.637		
	下位	429	0.073	0.717		
	合計	2,325	0.000	0.655		

学校で学ぶ勉強の重視度	大いに役立つ	205	-0.146	0.776	12.317
	かなり役立つ	953	-0.030	0.606	***
	あまり役に立たない	720	0.087	0.651	
	ぜんぜん役に立たない	54	0.307	0.817	
	合計	1,932	0.011	0.655	
友人が多い	とてもそう思う	259	-0.041	0.778	1.462
	少しそう思う	867	-0.026	0.604	
	あまりそう思わない	929	0.026	0.627	
	ぜんぜんそう思わない	337	0.025	0.750	
	合計	2,392	0.000	0.656	
友人から信頼されている	とてもそう思う	97	-0.128	0.759	2.374
	少しそう思う	648	-0.030	0.647	
	あまりそう思わない	1,215	0.013	0.621	
	ぜんぜんそう思わない	431	0.040	0.733	
	合計	2,391	0.001	0.656	
友人に進路相談	かなり真剣に話している	466	0.056	0.744	2.486
	わりと真剣に話している	1,051	-0.039	0.615	
	あまり真剣に話していない	684	0.015	0.618	
	ぜんぜん真剣に話していない	197	0.007	0.747	
	合計	2,398	-0.001	0.655	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 7-2-6 地域別に職業意識の5因の因子得点と学校要因

		東京				山口				
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
地位達成型	学校区分	進学校	441	-0.21	0.86	16.321	369	0.04	0.94	0.621
		進路多様校	194	-0.09	0.91	***	343	0.09	0.89	
		中間校	629	0.09	0.86		425	0.02	0.83	
		合計	1,264	-0.04	0.88		1,137	0.05	0.89	
	成績	上位	116	-0.07	0.90	1.913	88	-0.17	1.08	4.771
		中位の上	258	-0.12	0.82		213	0.07	0.88	**
		中位の中	367	-0.05	0.82		351	-0.03	0.81	
		中位の下	263	0.02	0.89		240	0.06	0.83	
		下位	226	0.08	0.97		203	0.25	0.95	
	合計	1,230	-0.03	0.87		1,095	0.05	0.88		
	学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	102	-0.07	0.96	1.081	103	-0.02	1.06	3.149
		かなり役立つと思う	496	-0.04	0.80		457	0.01	0.82	*
		あまり役に立たないと思う	410	-0.05	0.89		310	0.13	0.84	
		ぜんぜん役に立たないと思う	28	0.25	1.06		26	0.44	1.19	
		合計	1,036	-0.04	0.86		896	0.06	0.87	
	友人の多さ	とてもそう思う	136	-0.33	1.07	19.372	123	-0.13	1.08	5.233
		少しそう思う	451	-0.18	0.82	***	416	-0.01	0.85	**
		あまりそう思わない	497	0.04	0.80		432	0.08	0.79	
ぜんぜんそう思わない		177	0.29	0.95		160	0.25	1.00		
合計		1,261	-0.04	0.88		1,131	0.05	0.88		
友人からの信頼	とてもそう思う	56	-0.61	0.95	17.514	41	-0.51	1.20	15.369	
	少しそう思う	374	-0.16	0.83	***	274	-0.12	0.81	***	
	あまりそう思わない	623	0.00	0.83		592	0.06	0.82		
	ぜんぜんそう思わない	208	0.22	0.98		223	0.30	0.98		
	合計	1,261	-0.04	0.88		1,130	0.04	0.88		
教師への進路相談	かなり真剣にはなしている	140	-0.16	0.96	2.135	167	-0.08	0.91	1.939	
	わりと真剣に話している	525	-0.02	0.85		517	0.04	0.84		
	あまり真剣に話していない	454	-0.06	0.82		348	0.07	0.85		
	ぜんぜん真剣に話していない	143	0.09	1.01		104	0.17	1.14		
	合計	1,262	-0.04	0.87		1,136	0.05	0.89		
友人への進路相談状況	かなり真剣にはなしている	239	-0.05	1.00	1.606	227	-0.09	1.01	6.022	
	わりと真剣に話している	565	-0.06	0.81		486	0.05	0.81	***	
	あまり真剣に話していない	359	-0.06	0.85		325	0.05	0.84		
	ぜんぜん真剣に話していない	100	0.14	0.99		97	0.36	1.01		
	合計	1,263	-0.04	0.88		1,135	0.05	0.89		
私生活重視型	学校区分	進学校	441	0.17	0.78	11.305	369	0.01	0.88	7.644
		進路多様校	194	-0.18	0.87	***	343	-0.21	0.85	**
		中間校	629	0.05	0.88		425	-0.01	0.81	
		合計	1,264	0.06	0.85		1,137	-0.07	0.85	
	成績	上位	116	0.00	0.87	1.207	88	-0.17	0.96	2.011
		中位の上	258	0.16	0.80		213	-0.03	0.81	
		中位の中	367	0.07	0.81		351	0.01	0.85	
		中位の下	263	0.03	0.85		240	-0.08	0.79	
		下位	226	0.02	0.96		203	-0.17	0.87	
	合計	1,230	0.06	0.85		1,095	-0.06	0.84		
学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	102	0.36	0.86	7.789	103	0.15	1.01	3.555	
	かなり役立つと思う	496	0.13	0.78	***	457	-0.04	0.78	*	

		あまり役に立たないと思う	410	-0.03	0.86		310	-0.13	0.81	
		ぜんぜん役に立たないと思う	28	-0.20	1.22		26	-0.26	1.20	
		合計	1,036	0.08	0.84		896	-0.05	0.84	
	友人の多さ	とてもそう思う	136	-0.02	0.99	1.825	123	-0.23	0.97	2.406
		少しそう思う	451	0.05	0.80		416	-0.02	0.79	
		あまりそう思わない	497	0.12	0.79		432	-0.04	0.79	
		ぜんぜんそう思わない	177	-0.03	1.04		160	-0.13	1.02	
		合計	1,261	0.06	0.85		1,131	-0.07	0.85	
	友人からの信頼	とてもそう思う	56	-0.25	1.00	8.817	41	-0.51	0.88	4.413
		少しそう思う	374	0.11	0.77	***	274	0.00	0.83	**
		あまりそう思わない	623	0.13	0.83		592	-0.06	0.79	
		ぜんぜんそう思わない	208	-0.16	0.98		223	-0.08	0.97	
		合計	1,261	0.06	0.85		1,130	-0.07	0.85	
	教師への進路相談	かなり真剣にはなしている	140	0.01	0.92	0.970	167	-0.01	0.87	1.270
		わりと真剣に話している	525	0.11	0.80		517	-0.04	0.80	
		あまり真剣に話していない	454	0.03	0.82		348	-0.08	0.83	
		ぜんぜん真剣に話していない	143	0.03	1.04		104	-0.20	1.08	
		合計	1,262	0.06	0.85		1,136	-0.06	0.85	
	友人への進路相談状況	かなり真剣にはなしている	239	0.10	0.94	1.014	227	0.04	0.89	2.193
		わりと真剣に話している	565	0.08	0.81		486	-0.10	0.79	
		あまり真剣に話していない	359	0.03	0.82		325	-0.06	0.83	
		ぜんぜん真剣に話していない	100	-0.05	0.99		97	-0.19	1.03	
		合計	1,263	0.06	0.85		1,135	-0.07	0.85	
興味・関心重視型	学校区分	進学校	441	0.01	0.89	0.498	369	0.02	0.83	1.524
		進路多様校	194	0.02	0.87		343	-0.05	0.79	
		中間校	629	-0.04	0.86		425	0.06	0.89	
		合計	1,264	-0.01	0.87		1,137	0.02	0.84	
	成績	上位	116	-0.02	0.80	0.366	88	-0.21	0.57	1.987
		中位の上	258	-0.08	0.76		213	0.06	0.84	
		中位の中	367	-0.04	0.93		351	-0.02	0.77	
		中位の下	263	0.00	0.87		240	0.04	0.87	
		下位	226	0.00	0.88		203	0.01	0.90	
		合計	1,230	-0.03	0.86		1,095	0.00	0.82	
	学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	102	-0.19	0.85	1.193	103	-0.17	0.71	5.668
		かなり役立つと思う	496	-0.06	0.78		457	0.00	0.75	**
		あまり役に立たないと思う	410	-0.04	0.80		310	-0.07	0.78	
		ぜんぜん役に立たないと思う	28	0.05	0.90		26	0.51	1.57	
		合計	1,036	-0.06	0.80		896	-0.03	0.80	
	友人の多さ	とてもそう思う	136	-0.35	0.50	11.489	123	-0.23	0.59	8.483
	少しそう思う	451	-0.07	0.77	***	416	-0.07	0.74	***	
	あまりそう思わない	497	0.07	0.92		432	0.12	0.88		
	ぜんぜんそう思わない	177	0.16	1.08		160	0.16	1.07		
	合計	1,261	-0.01	0.87		1,131	0.02	0.84		
友人からの信頼	とてもそう思う	56	-0.28	0.57	6.387	41	-0.17	0.57	3.597	
	少しそう思う	374	-0.14	0.74	***	274	-0.10	0.69	*	
	あまりそう思わない	623	0.05	0.87		592	0.05	0.83		
	ぜんぜんそう思わない	208	0.09	1.10		223	0.10	1.03		
	合計	1,261	-0.01	0.87		1,130	0.02	0.84		
教師への進路相談	かなり真剣にはなしている	140	-0.16	0.87	5.250	167	-0.20	0.71	7.263	
	わりと真剣に話している	525	-0.08	0.73	**	517	-0.02	0.75	***	
	あまり真剣に話していない	454	0.10	0.96		348	0.11	0.87		
	ぜんぜん真剣に話していない	143	0.05	1.03		104	0.20	1.19		
	合計	1,262	-0.01	0.87		1,136	0.01	0.84		
友人への進路相談状況	かなり真剣にはなしている	239	-0.29	0.63	14.149	227	-0.28	0.62	17.357	
	わりと真剣に話している	565	-0.04	0.80	***	486	0.00	0.77	***	
	あまり真剣に話していない	359	0.17	0.98		325	0.23	0.93		
	ぜんぜん真剣に話していない	100	0.12	1.15		97	0.05	1.03		
	合計	1,263	-0.01	0.87		1,135	0.01	0.84		
フリーター容認型	学校区分	進学校	441	0.04	0.67	8.126	369	-0.01	0.76	3.297
		進路多様校	194	-0.18	0.77	***	343	0.12	0.77	*
		中間校	629	-0.09	0.67		425	0.09	0.68	
		合計	1,264	-0.06	0.69		1,137	0.07	0.74	
	成績	上位	116	-0.03	0.73	2.553	88	0.22	0.87	2.790
		中位の上	258	-0.01	0.62	*	213	0.12	0.71	*
		中位の中	367	-0.02	0.71		351	0.08	0.70	
		中位の下	263	-0.07	0.66		240	0.06	0.65	
	下位	226	-0.18	0.72		203	-0.06	0.82		
	合計	1,230	-0.06	0.69		1,095	0.07	0.74		
学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	102	0.07	0.70	4.920	103	0.28	0.77	7.624	
	かなり役立つと思う	496	0.00	0.63	**	457	0.14	0.64	***	
	あまり役に立たないと思う	410	-0.14	0.72		310	-0.04	0.75		

	ぜんぜん役に立たないと思う	28	-0.21	1.04		26	-0.14	0.82	
	合計	1,036	-0.06	0.69		896	0.09	0.71	
友人の多さ	とてもそう思う	136	-0.18	0.75	2.673	123	0.04	0.82	0.807
	少しそう思う	451	-0.09	0.63	*	416	0.07	0.66	
	あまりそう思わない	497	-0.01	0.66		432	0.03	0.71	
	ぜんぜんそう思わない	177	-0.03	0.85		160	0.13	0.91	
	合計	1,261	-0.06	0.69		1,131	0.06	0.74	
友人からの信頼	とてもそう思う	56	-0.25	0.81	2.247	41	-0.06	1.00	2.474
	少しそう思う	374	-0.10	0.65		274	0.11	0.67	
	あまりそう思わない	623	-0.03	0.66		592	0.02	0.69	
	ぜんぜんそう思わない	208	-0.03	0.80		223	0.15	0.84	
	合計	1,261	-0.06	0.69		1,130	0.06	0.73	
教師への進路相談	かなり真剣にはなしている	140	-0.11	0.71	0.388	167	0.25	0.72	5.122
	わりと真剣に話している	525	-0.06	0.65		517	0.06	0.71	**
	あまり真剣に話していない	454	-0.04	0.65		348	-0.01	0.72	
	ぜんぜん真剣に話していない	143	-0.05	0.90		104	0.07	0.89	
	合計	1,262	-0.06	0.69		1,136	0.07	0.74	
友人への進路相談状況	かなり真剣にはなしている	239	-0.11	0.75	1.586	227	0.03	0.80	0.211
	わりと真剣に話している	565	-0.06	0.66		486	0.07	0.69	
	あまり真剣に話していない	359	-0.05	0.66		325	0.08	0.69	
	ぜんぜん真剣に話していない	100	0.07	0.81		97	0.05	0.95	
	合計	1,263	-0.06	0.69		1,135	0.07	0.74	
学校区分	進学校	441	0.18	0.64	9.634	369	-0.02	0.70	2.955
	進路多様校	194	0.00	0.66	***	343	-0.13	0.66	
	中間校	629	0.02	0.62		425	-0.10	0.64	
	合計	1,264	0.07	0.64		1,137	-0.08	0.67	
成績	上位	116	0.06	0.73	2.023	88	-0.15	0.73	0.782
	中位の上	258	0.00	0.59		213	-0.08	0.64	
	中位の中	367	0.07	0.60		351	-0.11	0.65	
	中位の下	263	0.09	0.62		240	-0.08	0.65	
	下位	226	0.16	0.69		203	-0.03	0.73	
	合計	1,230	0.08	0.63		1,095	-0.09	0.67	
学校の勉強の重視度	大いに役立つと思う	102	0.02	0.74	6.613	103	-0.31	0.78	6.904
	かなり役立つと思う	496	0.04	0.59	***	457	-0.10	0.62	***
	あまり役に立たないと思う	410	0.14	0.63		310	0.01	0.68	
	ぜんぜん役に立たないと思う	28	0.49	0.78		26	0.11	0.82	
	合計	1,036	0.09	0.63		896	-0.08	0.67	
友人の多さ	とてもそう思う	136	0.05	0.78	0.269	123	-0.14	0.76	1.567
	少しそう思う	451	0.06	0.59		416	-0.12	0.60	
	あまりそう思わない	497	0.08	0.62		432	-0.03	0.63	
	ぜんぜんそう思わない	177	0.10	0.67		160	-0.06	0.82	
	合計	1,261	0.07	0.64		1,131	-0.08	0.67	
友人からの信頼	とてもそう思う	56	-0.10	0.79	2.332	41	-0.16	0.73	2.153
	少しそう思う	374	0.07	0.62		274	-0.16	0.65	
	あまりそう思わない	623	0.07	0.61		592	-0.05	0.63	
	ぜんぜんそう思わない	208	0.14	0.69		223	-0.06	0.76	
	合計	1,261	0.07	0.64		1,130	-0.08	0.67	
教師への進路相談	かなり真剣にはなしている	140	-0.09	0.66	5.028	167	-0.26	0.68	4.784
	わりと真剣に話している	525	0.07	0.65	**	517	-0.05	0.65	**
	あまり真剣に話していない	454	0.08	0.58		348	-0.06	0.63	
	ぜんぜん真剣に話していない	143	0.20	0.71		104	-0.04	0.78	
	合計	1,262	0.07	0.64		1,136	-0.08	0.67	
友人への進路相談状況	かなり真剣にはなしている	239	0.18	0.73	3.894	227	-0.08	0.73	0.406
	わりと真剣に話している	565	0.02	0.61	**	486	-0.11	0.62	
	あまり真剣に話していない	359	0.10	0.58		325	-0.07	0.65	
	ぜんぜん真剣に話していない	100	0.04	0.73		97	-0.03	0.77	
	合計	1,263	0.07	0.64		1,135	-0.08	0.66	

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

以上の結果から、進路選択に関して、成績が良く、学校の勉強を重視していて、友達が多く、みんなから信頼されており、友人や先輩に真剣に進路相談をしている高校生が、好ましい進路選択をしているという結果が得られた。特に、学校区分、成績は進路選択のあり方に強く規定するものである。成績については、山口のほうが東京よりも進路選択を規定するものとなっていた。

そこで、学校区分別の成績の認識と職業意識の相関分析を地域別に行った(表 7-2-7)。

その結果、山口の進学校で成績の認識と地位達成型の相関が最も高く（0.194）、成績が良いと認識している高校生が地位達成型の職業意識にある。山口の進学校の成績上位者が最も地位達成を求めているといえる。これに対して、東京の中間校の成績が低い高校生、山口の進路多様校の成績が低い高校生がフリーター容認型の職業意識を形成している。

表 7-2-7 学校区分による成績の認識と職業意識の相関

	東京			山口		
	進学校	進路多様校	中間校	進学校	進路多様校	中間校
	クラスにおける成績			クラスにおける成績		
地位達成型	.104(*)	0.046	0.055	.194(***)	0.043	0.052
私生活重視型	0.001	-.165(*)	-0.017	-0.036	0.013	-0.065
興味・関心重視型	0.022	0.021	0.028	-0.001	0.012	0.093
フリーター容認型	-0.037	-0.039	-.120(**)	-0.092	-.125(*)	-0.074
生活安定型	0.056	0.071	0.077	-0.001	-0.011	.136(**)

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

第3節 高校生の進路選択を規定する地域社会における要因

最後に地域社会における要因について分析する。地域社会における要因としては、学校外活動経験、アルバイト経験、メディア利用数を用いる。学校外活動経験は、学校外での体験活動の20項目について因子分析を行った結果得られた4因子（「実験・観察・飼育活動」「交流活動」「特技鍛錬活動」「文学・芸術活動」）を用いる。

まず、進路選択と学校外体験活動の相関を求めた（表7-3-1）。これをみると、「交流活動」と自立度の相関が0.174で最も高い。学校外における体験活動がある高校生ほど進路について考えた経験があり、将来就きたい職業があり、自立度が高く、取組数が多い結果になっているが、相関係数の値は小さく全て相関が低い。地域別に進路選択と学校外活動をみると、交流活動と自立度の相関が強いのは山口である。

表 7-3-1 進路選択と学校外活動の相関

		考えた経験	将来つきたい職業の有無	自立度	取組数
全 体	実験・観察・飼育活動	-.046(*)	.093(***)	.138(***)	.073(***)
	交流活動	-.094(***)	.127(***)	.174(***)	.121(***)
	特技鍛錬活動	-.111(***)	.132(***)	.127(***)	.102(***)
	文学・芸術活動	-0.019	.123(***)	.105(***)	.164(***)
東 京	実験・観察・飼育活動	-0.007	0.054	.121(***)	.064(*)
	交流活動	-.091(**)	.101(***)	.156(***)	.160(***)
	特技鍛錬活動	-.130(**)	.091(**)	.142(***)	.092(**)
	文学・芸術活動	0.001	.130(***)	.110(***)	.186(***)
山 口	実験・観察・飼育活動	-.093(**)	.138(***)	.156(***)	.086(**)
	交流活動	-.099(**)	.159(***)	.194(***)	.070(*)
	特技鍛錬活動	-.091(**)	.186(***)	.111(***)	.106(***)
	文学・芸術活動	-0.048	.132(***)	.100(**)	.110(***)

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

(注)

・考えた経験は、考えた=1、考えなかった=0と得点化。

・将来就きたい職業の有無は、とてもあてはまる=1、ややあてはまる=2、あまりあてはまらない=3、ぜんぜんあてはまらない=4と得点化。

・自立度は、自立度高=1、自立度中=2、自立度下=3と得点化。

取組数は、取組多=1、取組中=2、取組少=3

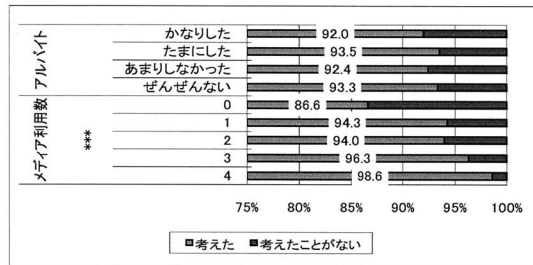
次に、進路選択とアルバイト体験、メディア利用に関して分析した。進路について深く考えた経験とアルバイト体験、メディア利用(図7-3-1)では、アルバイトは検定上の有意差はない。メディア利用は利用が多い高校生ほど進路について深く考えている。

将来希望する職業の有無(図7-3-2)、自立度(図7-3-3)、進路に向けての取組数(図7-3-4)とアルバイト体験、メディア利用では、アルバイトをした高校生、メディア利用数が多い高校生が進路選択に積極的に取り組んでいる傾向にある。

つづいて、地域別に、進路選択状況ごとにアルバイト経験、メディア利用の平均点を算出した(表7-3-2)。

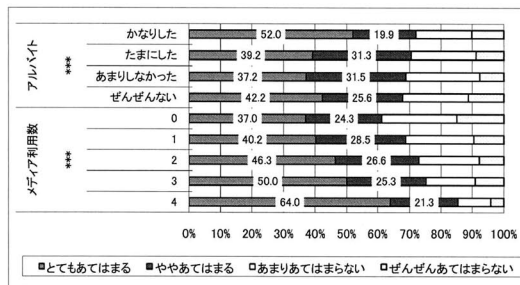
東京も山口もメディア利用が多い高校生が進路選択に積極的に取り組んでおり、平均値もほぼ同様の値である。山口は、アルバイト経験が東京よりも少ないが、アルバイト経験がある高校生がアルバイト経験のない高校生よりも自立し、進路への取組数も多い。

次に、職業意識と学校外活動について相関を求めた(表7-3-3)。高校生全体では、「興味・関心重視型」と「特技鍛錬活動」の相関(0.224)が最も高い。「私生活重視型」と学校



$\chi^2=40.039$
df=4

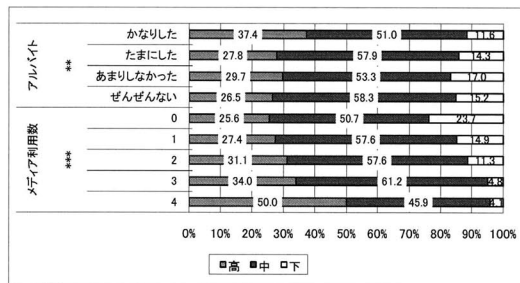
図7-3-1 進路について深く考えた経験とアルバイト経験・メディア利用
(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)



$\chi^2=36.105$
df=9

$\chi^2=48.559$
df=12

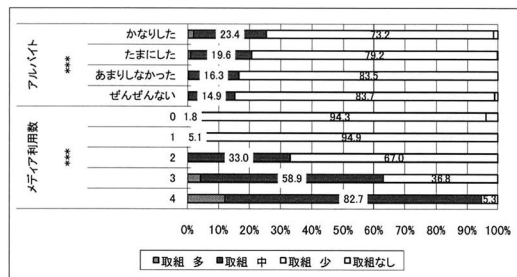
図7-3-2 将来希望する職業の有無とアルバイト経験・メディア利用
(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)



$\chi^2=20.234$
df=6

$\chi^2=70.338$
df=8

図7-3-3 進路選択段階の自立度とアルバイト経験・メディア利用
(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)



$\chi^2=41.232$
df=9

$\chi^2=1024.733$
df=12

図7-3-4 進路に向けての取組数とアルバイト経験・メディア利用
(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

外活動体験の4つの因子は負の相関にあった。「趣味・関心重視型」の高校生は趣味や関心のあることに対して学校外でも練習など研鑽に励んでおり、「私生活重視型」の高校生は家庭や学校外での活動が乏しいといえる。

地域別に職業意識と学校外活動体験の相関をみると、東京と山口において、職業意識と学校外活動体験の相関の違いはみられない。やはり「私生活重視型」は東京でも山口でも全ての学校外活動と負の相関になっている。

表 7-3-2 地域別 進路選択とアルバイト経験・メディア利用

			東京				山口				
			度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
考えた 経験	アルバ イト体 験	何度もある・かなりした	307	0.93	0.26	1.015	103	0.90	0.30	1.203	
		たまにある・たまにした	325	0.93	0.26		183	0.95	0.22		
		あまりない・あまりしなかった	190	0.89	0.31		191	0.95	0.21		
		ぜんぜんない	443	0.93	0.25		666	0.93	0.25		
		合計	1,265	0.92	0.26		1,143	0.94	0.24		
	メディ ア	0	231	0.86	0.35	5.214	248	0.88	0.33	5.662	
		1	544	0.93	0.26		557	0.96	0.21		***
		2	305	0.94	0.24		262	0.94	0.24		
		3	128	0.95	0.21		61	0.98	0.13		
		4	57	0.98	0.13		16	1.00	0.00		
合計	1,265	0.92	0.26	1,144	0.94	0.24					
自分には将来 つきたい職業 がある	アルバ イト体 験	何度もある・かなりした	313	1.91	1.05	2.082	104	1.70	0.99	2.010	
		たまにある・たまにした	329	2.02	0.97		186	1.93	0.99		
		あまりない・あまりしなかった	195	2.09	0.97		192	1.94	0.94		
		ぜんぜんない	450	2.09	1.07		672	1.96	1.02		
		合計	1,287	2.03	1.03		1,154	1.93	1.00		
	メディ ア	0	235	2.25	1.10	6.770	251	2.09	1.07	5.161	
		1	553	2.04	1.00		563	1.97	1.00		***
		2	311	1.99	1.01		264	1.76	0.92		
		3	129	1.91	1.03		61	1.69	0.92		
		4	59	1.54	0.84		16	1.56	0.89		
合計	1,287	2.03	1.03	1,155	1.93	1.00					
自立度	アルバ イト体 験	何度もある・かなりした	305	1.77	0.63	2.553	99	1.67	0.70	3.693	
		たまにある・たまにした	321	1.86	0.62		182	1.87	0.67		*
		あまりない・あまりしなかった	191	1.91	0.68		186	1.83	0.67		
		ぜんぜんない	443	1.88	0.64		660	1.90	0.64		
		合計	1,260	1.85	0.64		1,127	1.86	0.65		
	メディ ア	0	230	1.97	0.72	9.269	243	1.99	0.69	4.116	
		1	543	1.90	0.63		554	1.86	0.65		**
		2	300	1.80	0.60		256	1.80	0.64		
		3	129	1.71	0.56		59	1.69	0.53		
		4	58	1.50	0.54		16	1.69	0.70		
合計	1,260	1.85	0.64	1,128	1.86	0.65					
取組数 3段階	アルバ イト体 験	何度もある・かなりした	314	2.74	0.52	1.479	104	2.75	0.48	5.056	
		たまにある・たまにした	329	2.75	0.46		186	2.85	0.39		**
		あまりない・あまりしなかった	195	2.81	0.40		192	2.86	0.36		
		ぜんぜんない	451	2.79	0.43		674	2.90	0.35		
		合計	1,289	2.77	0.46		1,156	2.87	0.38		
	メディ ア	0	236	3.01	0.24	192.285	253	3.03	0.23	133.299	
		1	554	2.94	0.24		563	2.96	0.20		***
		2	311	2.63	0.48		264	2.71	0.45		
		3	129	2.33	0.55		61	2.33	0.57		
		4	59	1.95	0.43		16	1.88	0.34		
合計	1,289	2.77	0.46	1,157	2.87	0.37					

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 7-3-3 職業意識と学校外活動体験

		実験・観察・飼育活動	交流活動	特技鍛錬活動	文学・芸術活動
全体	地位達成型	-0.002	.064(***)	0.024	0.016
	私生活重視型	-.050(*)	-0.040	-.078(**)	-.114(***)
	興味・関心重視型	.120(***)	.078(***)	.224(***)	0.019
	フリーター容認型	.066(**)	0.017	.059(**)	.047(*)
	生活安定型	-0.030	.061(**)	-0.030	-.050(*)
東京	地位達成型	-0.008	.094(**)	0.047	0.029
	私生活重視型	-0.001	-0.037	-.077(**)	-.131(***)
	興味・関心重視型	.129(***)	.071(*)	.201(***)	-0.025
	フリーター容認型	.083(**)	0.024	.065(*)	0.027
	生活安定型	-0.027	0.049	-0.027	-.069(*)
山口	地位達成型	0.005	0.029	-0.006	-0.008
	私生活重視型	-.105(**)	-0.042	-.071(*)	-.080(**)
	興味・関心重視型	.109(***)	.087(**)	.249(***)	.067(*)
	フリーター容認型	0.049	0.010	0.044	0.050
	生活安定型	-0.032	.076(*)	-0.022	-0.005

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

つづいて、職業意識の因子得点の平均点を地域社会における要因（アルバイト経験・メディア利用）ごとに算出した。高校生全体では（表 7-3-4）、「地位達成型」はアルバイトをたまにしたことがあり、メディア利用が多い高校生が求める傾向にある。「私生活重視型」はアルバイト経験とメディア利用数に検定における有意差はみられなかった。「興味・関心重視型」は、アルバイトをかなりしたことがある高校生、メディア利用が多い高校生が求めている。「フリーター容認型」は、アルバイトをかなりした高校生で、メディア利用における有意差はなかった。「生活安定型」は、アルバイト経験において有意差は無いが、アルバイト経験が少なく、メディア利用が少ない高校生が求める傾向にあった。

地域別にアルバイト経験、メディア利用ごとに職業意識の因子得点の平均値を比較したところ（表 7-3-5）、「生活安定型」は山口も東京もアルバイト経験・メディア利用との有意な差はない。「興味・関心重視型」が最もアルバイト経験・メディア利用がある高校生がその傾向にあり、山口の平均値が高い。

表 7-3-4 職業意識と地域社会における要因（アルバイト経験・メディア利用）

		度数	平均値	標準偏差	F 値	
地位達成型	アルバイト経験	かなりした	410	0.021	0.972	3.291 **
		たまにした	504	-0.101	0.856	
		あまりしなかった	381	-0.018	0.848	
		ぜんぜんない	1,105	0.045	0.868	
		合計	2,400	0.000	0.882	
	メディア利用数	0	480	0.060	0.942	2.381
		1	1,095	0.024	0.842	
		2	565	-0.044	0.879	
		3	186	-0.089	0.924	
		4	75	-0.183	0.936	
合計	2,401	0.000	0.882			
私生活重視型	アルバイト経験	かなりした	410	-0.033	0.969	0.770
		たまにした	504	0.007	0.776	
		あまりしなかった	381	-0.042	0.835	
		ぜんぜんない	1,105	0.022	0.844	
		合計	2,400	-0.001	0.852	
	メディア利用数	0	480	-0.079	0.897	2.055
		1	1,095	0.003	0.841	
		2	565	0.024	0.856	
		3	186	0.043	0.761	
		合計	2,401	0.000	0.882	

		4	75	0.173	0.882	
		合計	2,401	0.000	0.852	
興味・関心重視型	アルバイト経験	かなりした	410	-0.184	0.737	9.888
		たまにした	504	0.019	0.881	***
		あまりしなかった	381	0.140	0.957	
		ぜんぜんない	1,105	0.011	0.842	
		合計	2,400	0.000	0.858	
	メディア利用数	0	480	0.148	1.000	12.566
		1	1,095	0.058	0.876	***
		2	565	-0.156	0.699	
		3	186	-0.177	0.724	
		4	75	-0.179	0.714	
合計	2,401	0.000	0.857			
フリーター・容認型	アルバイト経験	かなりした	410	-0.126	0.757	11.432
		たまにした	504	-0.070	0.667	***
		あまりしなかった	381	-0.016	0.732	
		ぜんぜんない	1,105	0.086	0.701	
		合計	2,400	0.001	0.714	
	メディア利用数	0	480	-0.021	0.756	0.960
		1	1,095	-0.007	0.708	
		2	565	0.007	0.683	
		3	186	0.091	0.691	
		4	75	-0.039	0.811	
合計	2,401	0.000	0.714			
生活安定型	アルバイト経験	かなりした	410	0.047	0.671	2.540
		たまにした	504	0.032	0.608	
		あまりしなかった	381	0.022	0.626	
		ぜんぜんない	1,105	-0.039	0.679	
		合計	2,400	0.000	0.655	
	メディア利用数	0	480	-0.001	0.670	2.503
		1	1,095	-0.028	0.637	*
		2	565	0.018	0.657	
		3	186	0.035	0.684	
		4	75	0.201	0.716	
合計	2,401	0.000	0.656			

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

表 7-3-5 地域別 職業意識とアルバイト経験・メディア利用

		東京				山口				
		度数	平均値	標準偏差	F 値	度数	平均値	標準偏差	F 値	
地位達成型	アルバイト 体験	何度もある・かなりした	307	0.00	0.95	3.292	103	0.09	1.05	0.625
		たまにある・たまにした	322	-0.17	0.86	*	182	0.03	0.83	
		あまりない・あまりしなかった	192	-0.01	0.82		189	-0.02	0.87	
		ぜんぜんない	443	0.02	0.85		662	0.06	0.88	
		合計	1,264	-0.04	0.88		1,136	0.05	0.89	
	メディア	0	232	-0.05	0.95	0.843	248	0.16	0.93	2.542
		1	541	0.00	0.83		554	0.05	0.85	*
		2	306	-0.07	0.87		259	-0.02	0.89	
		3	126	-0.04	0.93		60	-0.19	0.91	
		4	59	-0.21	0.91		16	-0.08	1.05	
合計	1,264	-0.04	0.88		1,137	0.05	0.89			
私生活重視型	アルバイト 体験	何度もある・かなりした	307	0.03	0.96	0.287	103	-0.22	0.98	2.770
		たまにある・たまにした	322	0.04	0.77		182	-0.06	0.79	*
		あまりない・あまりしなかった	192	0.08	0.78		189	-0.16	0.87	
		ぜんぜんない	443	0.08	0.87		662	-0.02	0.83	
		合計	1,264	0.06	0.85		1,136	-0.07	0.85	
	メディア	0	232	0.00	0.92	1.262	248	-0.15	0.87	1.122
		1	541	0.06	0.85		554	-0.05	0.83	
		2	306	0.07	0.84		259	-0.03	0.88	
		3	126	0.05	0.76		60	0.03	0.76	
		4	59	0.28	0.81		16	-0.21	1.06	
合計	1,264	0.06	0.85		1,137	-0.07	0.85			
興味・関心重視型	アルバイト 体験	何度もある・かなりした	307	-0.14	0.75	8.073	103	-0.30	0.68	5.561
		たまにある・たまにした	322	-0.02	0.89	***	182	0.08	0.87	**
		あまりない・あまりしなかった	192	0.24	1.07		189	0.03	0.82	
		ぜんぜんない	443	-0.03	0.82		662	0.04	0.85	
		合計	1,264	-0.01	0.87		1,136	0.01	0.84	
	メディア	0	232	0.13	1.06	6.887	248	0.17	0.94	5.612

		1	541	0.07	0.91	***	554	0.05	0.84	***
		2	306	-0.16	0.67		259	-0.15	0.73	
		3	126	-0.18	0.76		60	-0.17	0.65	
		4	59	-0.19	0.71		16	-0.13	0.75	
		合計	1,264	-0.01	0.87		1,137	0.02	0.84	
フリーター容認型	アルバイト体験	何度もある・かなりした	307	-0.16	0.72	4.172	103	-0.04	0.86	5.153
		たまにある・たまにした	322	-0.09	0.66	**	182	-0.03	0.69	**
		あまりない・あまりしなかった	192	0.00	0.70		189	-0.04	0.76	
		ぜんぜんない	443	0.01	0.68		662	0.14	0.71	
		合計	1,264	-0.06	0.69		1,136	0.07	0.73	
	メディア	0	232	-0.15	0.72	2.149	248	0.10	0.77	0.359
		1	541	-0.06	0.68		554	0.04	0.73	
		2	306	-0.04	0.67		259	0.06	0.70	
		3	126	0.07	0.66		60	0.13	0.75	
		4	59	-0.08	0.79		16	0.10	0.88	
合計	1,264	-0.06	0.69		1,137	0.07	0.74			
生活安定型	アルバイト体験	何度もある・かなりした	307	0.11	0.65	0.795	103	-0.13	0.70	0.485
		たまにある・たまにした	322	0.08	0.60		182	-0.05	0.62	
		あまりない・あまりしなかった	192	0.10	0.61		189	-0.05	0.64	
		ぜんぜんない	443	0.04	0.67		662	-0.09	0.68	
		合計	1,264	0.07	0.64		1,136	-0.08	0.67	
	メディア	0	232	0.12	0.63	2.114	248	-0.11	0.69	0.810
		1	541	0.05	0.63		554	-0.10	0.64	
		2	306	0.05	0.62		259	-0.02	0.70	
		3	126	0.07	0.67		60	-0.04	0.72	
		4	59	0.28	0.74		16	-0.08	0.57	
合計	1,264	0.07	0.64		1,137	-0.08	0.67			

(* P<.05 ** P<.01 *** P<.001)

以上の結果から、地域社会における要因が進路選択や就職意識を強く規定しているとは言い難い結果となった。また、東京と山口において、アルバイト経験の有無やメディア利用そのものは東京が多いが、そのことが進路選択や職業意識の規定に影響しているとは言えない。

第4節 地方と都市の高校生の進路選択にみる自立

進路選択・職業意識と学校要因、家庭要因、その他の地域社会における要因との分析から、高校生全体では、学校要因の学校区分や成績、友人関係、家庭要因である保護者とのかかわり、特に母親とのかかわりが進路選択や職業意識の形成を規定するところが強いことが明らかになった。

先行研究などで指摘されている若者の格差の問題に関して、高校間格差や学力による進路選択の差は明確に存在した。しかし、出身階層を示す親の職業が進路選択・職業意識の形成に強く規定していると思われたが、親の職業による差は明確に描けるものではなかった。親の職業は、進路選択へはそれほどの規定力はみられないが、職業意識の形成には影響を及ぼしている。親の職業が管理的職業の家庭の高校生は「地位達成型」を求めている。親の職業が保安的職業、自営の農林漁業、自由業の家庭の高校生は「生活安定型」を求めている。親の職業が自営の商工サービス業の家庭の高校生が「フリーター容認型」を求めており、親の職業による職業意識の差が生じていた。

学校要因、家庭要因、その他の地域社会における要因との分析から明らかになったことは、進路選択や職業意識は、出身階層や学力や学校トラッキングによる規定よりも、学校

や家庭における対人関係、つまり友人関係、親子関係が強く規定しているということである。近年、教育改革の流れの中で主張されてきた体験活動も、学校における友人関係、家庭における親子関係の規定力には及ばない。

高校生の進路決定、職業意識の形成を規定する対人関係は、具体的には、友人関係では、友人が多く、みんなから信頼されており、友人や先輩に真剣に進路相談をしている高校生が主体的に進路選択をしている傾向にあった。親子関係では、保護者の仕事の理解、保護者からの受容の認識、保護者との会話、保護者への進路相談がある高校生が主体的に進路選択をしている傾向にあった。親との関係が保たれている高校生は「地位達成型」、「興味・関心重視型」の傾向にあるが、親との関係が保たれていない状況の高校生は「私生活重視型」、「フリーター容認型」を志向している。この結果は、進路選択における若者の自立が、家庭や学校を居場所としてその中における他者との関係によってもたらされるものであることが明確になったといえる。

高校生の職業意識は、「地位達成型」、「興味・関心重視型」、「生活安定型」は成績が良く、学校の勉強を重視し、友人関係が良好な高校生が求めている傾向にある。これに対し、「私生活重視型」、「フリーター容認型」は、成績が低く、学校の勉強を重視しない高校生が求める傾向にある共通点があり、進路選択においては好ましい職業意識とは言い難い。

本研究の分析の中心となる地域比較では、東京と山口の高校生は一致する部分が数多くみられた。しかし、地域差は明確に生じていた。日本の学校教育は学習指導要領に則って一様の教育を行っており、情報化の進展によってどこにいてもある程度地域に関わらず情報を入手できるが、進路選択や職業意識の形成の規定要因の地域差は学校要因と家庭要因において生じていた。

まず、学校要因における地域差が明確なものは学校区分と成績に関する点である。東京の高校生は、進路について深く考えた経験は進学校・中間校の高校生が多くもつ。これに対し、山口は学校区分による差はみられない。山口は全ての学校区分において東京の進学校・中間校と同水準の進路について深く考えた経験をもっている。このことから、東京の進路多様校の高校生が進路について深く考えた経験が少ないといえる。また、将来希望する職業の有無については、東京は学校区分、成績とは有意な差がなく、山口は、進路多様校、成績上位の高校生が将来希望する職業をもっていた。

この学校区分や成績が規定する進路について深く考えた経験と将来希望する職業の有無の地域差は職業意識の地域差につながっているようである。東京は、進学校の生徒が地位達成型にあり、進路多様校の生徒はフリーター容認型の傾向にある。山口は職業意識における学校区分の有意差はみられなかった中で、「フリーター容認型」は進学校で、成績が下位の生徒に多い傾向がみられた。

東京における進路選択や職業意識の形成が困難な立場にある高校生は進路多様校の生徒であり、山口における進路選択や職業意識の形成が困難な立場にある高校生は進学校における成績下位の高校生といえる。東京においては、学校トラッキングは明確に進路選択や

職業意識の差を生じさせていた。山口においては、進路に関する意識の上では学校トラッキングによる差はない。学校トラッキングは弛緩しているようにみえるが学校区分ごとの進学実績は明確な差があり、しかも学校区分の中にある成績による序列は明確に存在している。あくまで意識上の弛緩といえる。

次に、家庭要因において地域差がみられるのは、親とのかかわりである。親とのかかわりに関して、東京も山口も父親や母親の仕事を理解している高校生、父親、母親がよく話をしていて、父親、母親から受容されていると感じている高校生、保護者に真剣に進路相談をしている高校生が求めているが、「地位達成型」「興味・関心重視型」の因子得点の平均値からは東京が山口よりも家庭要因が強く働いていた。それ以外の職業意識では、明確に家庭要因との関連を描けるような結果はなく地域差もみられない。東京は山口よりも家庭における親子関係が将来の職業アスピレーションを規定している。

進路に向けての取組みにおいて、東京は母親の仕事理解、母親からの受容認識など母親の影響が進路に向けての取組数を高めているのに対し、山口は父親からの受容認識や父親との会話など父親の影響が進路に向けての取組数を高めている。親とのかかわりの中でも、進路にむけての取組みのキーパーソンは、東京は母親、山口は父親である。山口の高校生は学校を重視し、進路にむけての取組において父親がキーパーソンとなっていることから、権威的な関係が存在しているといえる。

以上の分析から、学校トラッキングや成績、親の職業、親子関係による進路選択や職業意識の地域差は明確に生じており、現在、先行研究で指摘されているような出身階層による格差が強く生じているのは東京といえる。

終章 進路選択にみる若者の自立の問題と課題

1 進路選択にみる若者の自立の問題

本研究における分析から、現代の高校生はやりたいことや将来の夢に重きを置いており、職業をとおした「自己実現」の欲求が強いことが明らかである。やりたいことや将来の夢、自分らしさを見出すために「自分探し」を行っている。

また、現代の高校生の進路選択は、家庭要因、学校要因、その他の地域社会における要因の中で、学校要因の学校区分や成績、友人関係、家庭要因である保護者とのかかわり、特に母親とのかかわりが進路選択や職業意識の形成を規定するところが強いことが明らかになった。

本研究でみたように「自己実現」の欲求は誰もが実現できるわけではない。小学生の頃から既に始まっている学力による序列付けは、高校に入る前の段階で若者を明確に序列づけしている。その序列づけは学校トラッキングとなり、若者はその高校集団の中で学力や友人関係における位置づけを日々確認しながら自己意識、職業意識を形成し、進路選択に挑んでいる。

学力という競争の結果は、どのような位置に自分がいるのかを比較的明確に若者自身の意識に上らせる。その学力の認識は自己意識や職業意識を形成し維持させる。本研究の分析結果は成績が良くない若者は進路選択を積極的に行っておらず、フリーターを容認する職業意識を形成していることが明らかになった。学力が高いという認識によって進路選択を積極的に行い、地位達成を望むことができるのである。

しかし、出身階層や学力や学校トラッキングによる規定よりも、学校や家庭における対人関係、つまり友人関係、親子関係が強く規定していた。高校生の進路選択にみる自立から、高校生が自立するためには対人関係が重要であることが明らかになった。他者と進路について真剣に話し合ったりすることができる関係を維持している高校生が積極的に進路選択に取り組んでいた。

地域別の分析からは、山口の高校生の進路選択は学校要因の規定が強く、家庭における親子関係では父親がキーパーソンとなっていた。これに対して、東京の高校生の進路選択は山口ほど学校の規定は強くなく、家庭における親子関係では母親がキーパーソンであった。以上のことから、地方には権威的な関係や価値が存在しているといえる。

東京の高校生は、環境に恵まれているゆえにアルバイト経験も豊富であり、交流範囲も広く、さまざまな情報を入手している。しかし、ネットワークを数多く持つことが可能でも、対人関係が自己と向かい合わせてくれるだけの深いつながりではなく表面的な関係になっているようである。表面的な他者との関係の中で形成される自己意識は自己が多角化する状況が生じている。また、東京の高校生は、出身階層や学校トラッキングが明確に進

路選択や職業意識の差を生じさせており、山口よりも格差が明確になりつつある。

これに対し、山口の高校生は、多元的に人と交流をしたり、情報を得たりする環境にはない。学校が強い影響力を持つことになる。学校は学力に関する評価だけでなく、教師との関わり、友人との関わりが高校生の生活の中心を占め、これらの関わりなどにより自己意識の形成がもたらされる。学校において自己を肯定できなければ、自己否定がもたらされ、進路選択は消極的になると考えられる。山口の高校生においては出身階層や学校トラッキングによる差はほとんどなく、進路選択や職業意識の形成が困難な立場にある高校生は進学校における成績下位の高校生であった。以上のことから、都市の高校生が地方の高校生よりも「自己実現」の欲求が強く、「自分探し」に固執し、自立が困難になる高校生が多いといえる。

以上、若者の自立を進路選択からとらえて検討した結果、若者の自立を困難にしている問題として、①教育改革による高校の多様化と社会の一元的評価の矛盾、②高校における進路指導における問題、③他者不在の自己意識の形成による問題があるといえる。

①教育改革による高校の多様化と社会の一元的評価の矛盾

現在の若者の進路選択は、教育改革により高校の学校教育制度が多様化され、さまざまな種類の高校が登場している。この高校の多様化はトラッキングを更に明確にし、現代の若者を地位達成の競争に参加する者と競争に参加しない者の2極に分けるものである。しかし、若者が就職したくても若年労働市場の受け入れはほとんどないという状況もあり、また社会は大学卒を求めるといった一元的な路線が強化されている。また、少子化による大学全入時代とも相まって、高校卒業後の進路はどの学校トラッキングにおいても多くの若者が進学を目指す状況にある。しかし、学校トラッキングが明確であり、全ての学校種の高校生が同じ入試の土俵では競争できない。そのため、大学入試は高校の要望や社会の流れを反映して新しい多様な入試が行われるようになっていく。特別選抜は主に進学校以外の高校生のための入試機会となっている。

この高校教育の多様化と若者の一元的評価という矛盾こそが若者の自立において問題である。いつの時代にあっても競争はある。しかし、その競争の中で、全ての若者が認められない状況にある。教育の多様化が叫ばれ、実際に形式上は多様化が進んでいるが、若者に向けられる評価は、いまだに学力を基準とした一元的なものである。どんなにコミュニケーション能力や協調性の重要性が主張されても、その背景には最低限の学力確保が求められている。現代社会の若者は、経済的に豊かな者、親子関係や友人関係など社会関係が豊かな者が、学力が高くなり、ますます経済的に豊かで社会関係も豊かになる。経済的にも社会関係も貧しい者は社会に認められないまま排除されていく状況にある。

つまり、この高校教育の多様化と若者の一元的評価という矛盾こそが、若者の格差を強めている大きな原因であり、若者の格差は自立できない若者をますます排除することになる。

②高校における進路指導における問題

また若者の自立を困難にしているのは、高校教育の制度的側面だけでなく、高校における進路指導にも問題がある。現代の若者の「自己実現」の欲求や「自分らしさ」を求める価値はバブル崩壊後の日本社会の変化の中で若者に広く浸透してきたが、その価値をほぼ全ての若者に浸透させた中心的役割を担ったのは学校教育の進路指導である。

高校の進路指導は若者に「生き方、在り方」指導を行い、「自己実現」を求める指導を行う一方で、高校卒業後の進路決定段階では高校時代の成績やセンター試験などの試験結果が重視され、それに基づいた大学進学指導、就職指導を行っている。こうした進路指導の矛盾があるにもかかわらず、若者の主体的な選択と称して若者に「自己実現」を求める。これこそが現代若者を終わりのない「自分探し」へと迷い込ませる大きな原因といえるであろう。

現代若者にとって「自己実現」という理念は、彼らにとって都合よく美しくとらえられている。現代若者は自分のやりたいことのためにフリーターの道を選ぶことも良しとする。「自己実現」を求めるがあまり、とりあえずフリーターといった職業選択段階での停滞が生じている。日本の社会における就業支援はこれまで学校を中心に行われており、学校を卒業した者、学校を中退した者など学校を離れてしまった若者は、自ら仕事を探し求めなければならない。高校卒業時の職業選択段階での停滞は、その後の就業をますます困難なものにする。

③他者不在の自己意識の形成による問題

最後に、若者の自立を困難にしているのは、他者不在の自己意識の形成の問題がある。現代若者にとって、自立過程において他者が存在することが当たり前ではなくなったと言える。もちろん親の離婚や仕事などによる親の不在もそうであるが、きょうだいの数の減少により、学校を中心とした限られた関係しか持たない。もちろん、電子媒体によるコミュニケーションが発達して友人関係を広げているとは考えられるが、高校生においては電子媒体における友人関係はそれほど開かれてはいない。

2007年に朝日新聞と株式会社 VIBE が高校生の携帯電話の相手を調査した結果¹⁾（複数回答）によれば、「いつもあっている友達」83%、「メールだけでつながっている友達」32%、「一度もあつたことのない友達」36%という結果であった。高校生の携帯メールの相手のほとんどは学校を中心とする友達といえる。携帯電話のコミュニケーションは匿名的なコミュニケーションとして拡大しているようにいわれるが、高校生に限って言えば、携帯電話のメールのみの関係はそれほど多くないのである。

教育問題として不登校の子どもたちへの注目が集まって以降、現代の若者には居場所がないという指摘がなされ、文部科学省をはじめ青少年に関わる行政は、施策として子どもの居場所づくりをすすめた。その居場所づくりの中で、子どもたちの体験活動や交流活動が重視をされ、学校教育や地域において体験活動が取り組まれた。

体験活動や交流活動などの学校外活動の価値は、それらの活動にも他者が存在することから重要なものである。しかし、地域社会における活動は、活動に取り組むことができる若者がますます積極的に活動することになる。対人関係が乏しい若者は、学校や家庭といった居場所を中心として、その他の地域社会への居場所を広げていくことはない。

本研究における調査分析結果では、体験活動や交流活動などの地域社会における居場所の活動は、若者の進路や職業意識、自己の認識の形成に強く影響を及ぼしてはいなかった。それよりも、学校における友人関係や家庭における親子関係が強く影響を及ぼしていた。現代の若者には居場所がないと指摘されるが、多くの若者にとって、学校や家庭における対人関係が良好に保たれ、自己を肯定できる場所であることが明らかになった。

つまり、学校は若者にとって競争の場であるが、自己を認識し、自分の将来について教員だけでなく友人とも検討できる自立過程の居場所として機能を果たしているといえる。また、家庭も多くの若者が親と会話をし、親から受容されていると認識をしており、学校と同様自立過程の居場所として機能が果たされている。しかし、一部の若者が学校において、または家庭において対人関係を築けない状況にある。

対人関係の乏しさは、否定的な自己の認識をもたらしている。自己否定は、フリーターを容認する傾向にあり、進路選択は消極的なものである。しかし、自分らしさを重視しており、他者不在の自分探しがさらに夢を膨らませ、夢物語を求めていくことになる。こうした負のスパイラルが若者を終わりのない自分探しへと迷い込ませることになる。

以上、進路選択における若者の自立を困難にしている問題は、教育改革による高校の多様化と社会の一元的評価の矛盾、高校における進路指導における問題、他者不在の自己意識の形成による3つの問題があるといえる。

2 若者の自立の課題

1980年代までの学校教育は管理教育が行われ、不登校が増加し、若者にとって自立が困難な時代であった。しかし、現在のように管理教育からゆとり教育へと転換され、偏差値輪切りの受験競争が緩和された現在であっても、若者には自立の困難さがある。いつの時代であっても若者が自分の力で身を立てることは難しいといえる。しかし、いつの時代も若者の自立を支援してきたのは、家族や地域、学校集団といった基礎的な居場所である。現代社会において、基礎的な居場所における他者との関わりの欠乏が、自立できない若者をもたらしている問題といえる。

人間の発達において所属する集団が多いほど自己実現がもたらされる。若者においてもネットワークを数多く持ち、地域社会に居場所をもつことが好ましいことは間違いない。しかし、高校生の段階においてはまだ家庭や学校における居場所において、安定した対人関係をもつことが自立のための前提といえるであろう。

近年、家庭、学校にかわる第三の居場所といわれるフリースクールなどが広く認知されてきた。また、若者の就労に関する支援はこれまで学校を中心に行われてきたが、各地方

自治体は、若者支援の一環として学校を離れてしまった若者の就労支援の専門機関を設けている。実際に、不登校の若者や学校から離れてしまった若者には第三の居場所は重要であるが、どんなに第三の居場所づくりに取組んでもそこに継続した関係性が形成されなければ単なる「場」の提供にしか過ぎない。

本研究でみてきたとおり、現代の若者は、現代社会の状況に適応しながら学校や家庭を中心として生活し、その居場所における対人関係によって自己を形成している。若者の自立のための居場所づくりは、この基本的な「場」における対人関係にかわる居場所として環境を構築しなければならない。

地域における人間関係が希薄化している現代社会にあっては、若者の生活の基礎となる家族、学校における対人関係の重要性を再認識し、家庭、学校という居場所の対人関係を有効に機能させなければならない。対人関係を重視する取り組みは、すべての若者にとって、自分の価値を明確にする機会となる。また、進路選択だけでなくあらゆる自立の過程において、自分自身の価値や社会状況などを検討し、自分の生き方の選択に納得をもたらすであろう。

現在、若者研究において指摘されている出身階層や学校トラッキングがつくり出す若者が自立できない状況は都市部の若者の傾向としてあらわれている。都市の若者は、地方の若者以上に対人関係を築き、さまざまな危機をのりこえられる力を身につけなければならない。学校教育においては、対人関係を築くための支援こそがまさに「生き方、在り方」支援といえるだろう。

地方の若者は、学校を中心とした限られた環境の中で「自己実現」の欲求をもち、自分もつ諸条件を考慮してより現実的な進路選択を行おうとしていた。今後、都市部と同様に出身階層による格差が強まってくると予想される。しかし、教育や情報などの環境が限られる地方において、すぐに学校に対する重視度が低下するとは考えられない。地方の若者は学校における学力、対人関係をもとに自己意識を形成し自立していく。若者の「自己実現」を可能にするための教育や情報に関する環境を整えることも若者の自立支援かもしれないが、都市部にないものを地方につくりだしていくことが必要だと考える。若者が自らもつ生活の諸条件を考慮し、地方にとどまり生活していくことは地方の若者の重要な役割でもある。地方の若者の生き方が評価されるような多元的価値の構築が必要である。

また、教育改革は、若者に「個性」や「自立」「自己責任」を求め、高校教育を多様化させ、学校教育においては若者の主体的選択による進路選択を行わせる「生き方・在り方」進路指導を展開している。新自由主義の教育改革に対抗する路線を主張するつもりはないが、高校教育の多様化と若者の一元的評価という矛盾に関して、改善のため経済界に高校卒業者の多様な進路確保を求めるのか、多様な高校教育の先の大学教育を多様化させるのか検討と実施が急務であると考えられる。

<注>

1) <http://aspara.asahi.com/club/user/member/contentsDetail.do?oid=-37761&contentOid=220896>

朝日新聞・株式会社 VIBE 2007

携帯電話サイト「GAMOW」(VIBE社運営、会員約26万人)の中高校生会員を対象に7月20、21日の2回に分けて実施。メールを携帯電話に送って呼びかけ、サイト上で携帯電話のボタン操作で回答。47都道府県の延べ2,891人分が集まった。男性23%、女性77%で、中学生28%、高校生72%。

高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査

平成18年2月

山口大学アドミッションセンター

田 中 均

林 寛 子

この調査は、高校生の進路形成意識が学校における活動や経験、生活経験といかに関連しているのかを明らかにし、今後の高大接続のあり方を模索するために実施するものです。調査項目は、学校での活動や経験、生活経験、生き方・価値意識、進路意識・職業観・フェースシートとなっています。

この調査そのものは学問的研究で実施するもので、結果は統計的に処理します。あなたのお答えが直接他人の目に触れたり、他の目的に使われたりすることはありません。決してご迷惑をおかけすることはありませんので、ご協力をよろしくお願いいたします。

【 記入にあたってのお願い 】

- ・名前を記入することはありませんが、あなた自身のことをお答えください。
- ・回答は、解答欄から当てはまる番号を選び、○で囲んでください。
- ・○をつける数は「いくつでも」とか「5つ」といった指示がない限り、1つだけ○をつけてください。

【 お問合せ先 】

国立大学法人山口大学 田中研究室

〒753-8511 山口市吉田 1677-1

TEL 083-933-5048

あなたの学校での活動や経験についてお聞きします。

1 今、学校で勉強していることは、あなたにとって将来、どの程度役に立つと思いますか。

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. 大いに役に立つと思う | 2. かなり役に立つと思う |
| 3. あまり役に立たないと思う | 4. ぜんぜん役に立たないと思う |

2 あなたは今、次のことをどのくらい大事に思っていますか。

		とても 大事		まあ 大事		どちらとも いえない		それほど 大事でない		ぜんぜん 大事でない
1) 学校に毎日行くこと	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
2) 課題や宿題の期限を守ること	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
3) 授業中に発言をすること	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
4) まじめに授業を聞くこと	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
5) 校則を守ること	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
6) 受験勉強をすること	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
7) 部活動を一生懸命すること	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
8) 誰にでも必ずあいさつをすること	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
9) 先生に敬語で話すこと	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
10) 先生の言うことを聞くこと	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	
11) 親の言うことを聞くこと	1	_____	2	_____	3	_____	4	_____	5	

3 あなたは学校の授業のなかで、次のようなことに取り組むとき、どの程度積極的に取り組みますか。

		とても 積極的		まあ 積極的		あまり 積極的ではない		ぜんぜん 積極的ではない
1) ひとりで公式や定理を使用して問題を解く	1	_____	2	_____	3	_____	4	
2) ひとりで文章を書く	1	_____	2	_____	3	_____	4	
3) ひとりで美術や音楽の作品を作る	1	_____	2	_____	3	_____	4	
4) おおぜいで演劇をしたり演奏したりする	1	_____	2	_____	3	_____	4	
5) おおぜいの前で発表する	1	_____	2	_____	3	_____	4	
6) おおぜいと討論する	1	_____	2	_____	3	_____	4	
7) グループで実験したり観察したりする	1	_____	2	_____	3	_____	4	
8) インターネットや図書館で調べる	1	_____	2	_____	3	_____	4	
9) グループで作品を制作する	1	_____	2	_____	3	_____	4	
10) 先生に質問して教えてもらう	1	_____	2	_____	3	_____	4	

4 あなたの成績はクラスの中でどれくらいだと思いますか。

1. 上位 2. 中位の上 3. 中位の中 4. 中位の下 5. 下位

次に あなたの生活経験についてお聞きします。

1 ふだん、どの程度家事をして（手伝って）いますか。

	よく する	ときどき する	あまり しない	ぜんぜん しない
1) 自分の部屋の掃除	1	2	3	4
2) 家・庭の掃除	1	2	3	4
3) 衣類の洗濯	1	2	3	4
4) アイロンがけ	1	2	3	4
5) 食事作り	1	2	3	4
6) 食後の食器洗い	1	2	3	4
7) 食品・日用品の買い物	1	2	3	4
8) 風呂の掃除・準備	1	2	3	4
9) ゴミ出し	1	2	3	4
10) 育児・介護	1	2	3	4

2 子どもの頃から今までに学校外で次のようなことをどの程度したことがありますか。

	何度もある かなりした	たまにある たまにした	あまりない あまりしなかった	ぜんぜんない
1) 自然観察（鉱物や植物、昆虫採集・天体観測等）	1	2	3	4
2) 花や植木を育てる	1	2	3	4
3) 生き物をペットとして飼う	1	2	3	4
4) おもちゃ・人形・機械づくりや修理	1	2	3	4
5) 農作業体験・漁業体験	1	2	3	4
6) 野外キャンプ	1	2	3	4
7) 料理・おかしづくり	1	2	3	4
8) 裁縫・手芸	1	2	3	4
9) 文学作品や学問的な専門書を読む	1	2	3	4
10) 詩歌・俳句を詠む・小説を書く	1	2	3	4
11) 絵画・書などの芸術的な創作活動	1	2	3	4
12) 音楽活動（ピアノなどの教室やバンド活動など）	1	2	3	4
13) スポーツ活動（スポーツ少年団やスポーツ教室など）	1	2	3	4
14) 伝承遊び（こま・たこ・あやとり・お手玉など）	1	2	3	4
15) 外国語、そろばん、書道、華道などの資格取得	1	2	3	4
16) 大学・短期大学・公民館などの講座参加	1	2	3	4
17) 就業体験（アルバイトや新聞配達など）	1	2	3	4

- | | 何度もある
かなりした | たまにある
たまにした | あまりない
あまりなかった | ぜんぜん
ない |
|---|----------------|----------------|------------------|------------|
| 18) ボランティア活動・・・・・・・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19) パソコンの活用
(メールの利用やHP作成やゲームも含む)・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20) 地域の活動・行事に参加・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |

3 あなたはあなたのご両親をどのようにとらえていますか。

- | | とても
そう思う | 少し
そう思う | あまり
そう思わない | ぜんぜん
そう思わない |
|---------------------------------|-------------|------------|---------------|----------------|
| 1) 父は、私のことをよくわかっている・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2) 父は、私の勉強・成績について、うるさく言うほうだ・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3) 父は、私にいろいろなことを話すほうだ・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4) 父は、私に対してやさしくあたたかいほうだ・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5) 私は、父の仕事についてよく知っている・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6) 母は、私のことをよくわかっている・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7) 母は、私の勉強・成績について、うるさく言うほうだ・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8) 母は、私にいろいろなことを話すほうだ・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 9) 母は、私に対してやさしくあたたかいほうだ・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10) 私は、母の仕事についてよく知っている・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |

次に あなた自身のことについてお聞きします。

1 あなたは今、「自分」について、次のようなことがあてはまりますか。

- | | とても
そう思う | 少し
そう思う | あまり
そう思わない | ぜんぜん
そう思わない |
|--|-------------|------------|---------------|----------------|
| 1) 今の自分が好きだ・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2) 自分がどんな人間かわからなくなるときがある・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3) 状況によって本当の自分と偽(にせ)の自分を使い
分けていると思う・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4) 本当の自分は1つだけしかないと思う・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5) 本当の自分を見つけることが大切だと思う・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6) 今の自分を愛えたいと思う・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7) どんな場面でも自分をつらぬくことが大切だ・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8) 人の持っていないものを身につけたい・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |

2 あなたは、同じ学年の友だちと比べて、自分自身をどう思いますか。

	とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1) 運動神経がいい	1	2	3	4
2) 勉強がよくできる	1	2	3	4
3) 心がやさしい	1	2	3	4
4) みんなから信頼されている	1	2	3	4
5) 友だちが多い	1	2	3	4
6) 先生からかわいがられる	1	2	3	4
7) 髪型やファッションに気がつかっている	1	2	3	4
8) 行動力がある	1	2	3	4
9) 決断力がある	1	2	3	4
10) 努力型である	1	2	3	4

次に あなたの生き方・考え方についてお聞きします。

1 あなたの生き方にとって次のことはどの程度重要ですか。

	とても 重要	ある程度 重要	それほど 重要でない	ぜんぜん 重要でない
1) 自分のしたいことをする	1	2	3	4
2) その日その日を自由に楽しく過ごす	1	2	3	4
3) しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く	1	2	3	4
4) 夢をもってその夢に向かって突き進む	1	2	3	4
5) 自分で決めたことに対して努力する	1	2	3	4
6) 自分の将来について考える	1	2	3	4
7) 高い収入を得る	1	2	3	4
8) 有名になる	1	2	3	4
9) 自分に誠実に生きる	1	2	3	4
10) 信仰心を持つ	1	2	3	4
11) 道徳心を持つ	1	2	3	4
12) 正義感を持つ	1	2	3	4
13) 幸せな家庭を築く	1	2	3	4
14) 身近な人と良い関係を築く	1	2	3	4
15) 社会に役立つ人間になる	1	2	3	4
16) 人のために尽くす	1	2	3	4
17) みんなと力を合わせて世の中をよくする	1	2	3	4

2 あなたは次のような意見をどう思いますか。

	とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1) どんな家柄か育ちかで人生が決まってしまう・・・・・・・・	1	2	3	4
2) どんな学校を出たかで人生が決まってしまう・・・・・・・・	1	2	3	4
3) 学歴は本人の実力をかなり反映している・・・・・・・・	1	2	3	4
4) お金持ちや地位の高い人が得をする社会だ・・・・・・・・	1	2	3	4
5) 定職についていないと信用されない社会だ・・・・・・・・	1	2	3	4
6) 成功は運やチャンスによって決まる・・・・・・・・	1	2	3	4
7) まじめに努力をすればむくわれる社会だ・・・・・・・・	1	2	3	4
8) 才能があれば十分に活躍できる社会だ・・・・・・・・	1	2	3	4
9) 成功するためには人脈が大切だ・・・・・・・・	1	2	3	4
10) 物質的に豊かな社会だ・・・・・・・・	1	2	3	4
11) 自分のことしか考えていない人が多い社会だ・・・・・・・・	1	2	3	4
12) 日本社会の将来に希望が持てない・・・・・・・・	1	2	3	4

3 あなたは将来結婚したいですか。

- | | |
|--------------|----------------|
| 1. 10代で結婚したい | 2. 20代で結婚したい |
| 3. 30代で結婚したい | 4. 40代以降に結婚したい |
| 5. いつでも良い | 6. 結婚したくない |

4 結婚した場合、夫と妻で家事をどのように分担したいと思いますか。

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. 妻がほとんど行う | 2. 妻が主に行い、夫が手伝う |
| 3. 妻と夫が半々に分担する | 4. 夫が主に行い、妻が手伝う |
| 5. 夫がほとんど行う | |

次に 進路についてのあなたの見方や考え方についてお聞きします。

1 あなたは、次のことについてどの程度あてはまると思えますか。

- | | とても
あてはまる | やや
あてはまる | あまり
あてはまらない | ぜんぜん
あてはまらない |
|-----------------------------------|--------------|-------------|----------------|-----------------|
| 1) 自分の能力・適性をきちんと理解している・・・・・・・・ | 1 _____ | 2 _____ | 3 _____ | 4 _____ |
| 2) 自分の将来について、はっきりした目標がある・・・・・・・・ | 1 _____ | 2 _____ | 3 _____ | 4 _____ |
| 3) 進路を選ぶうえで重視することがはっきりしている・・・ | 1 _____ | 2 _____ | 3 _____ | 4 _____ |
| 4) 自分には将来つきたい職業がある・・・・・・・・・・・・ | 1 _____ | 2 _____ | 3 _____ | 4 _____ |
| 5) 自分の希望する職業について十分知識をもっている・・・ | 1 _____ | 2 _____ | 3 _____ | 4 _____ |
| 6) 最近の産業・職業について知識をもっている・・・・・・・・ | 1 _____ | 2 _____ | 3 _____ | 4 _____ |
| 7) 受験がうまくいくか心配・・・・・・・・・・・・・・・・ | 1 _____ | 2 _____ | 3 _____ | 4 _____ |
| 8) 将来の就職がうまくいくか心配・・・・・・・・・・・・・・・・ | 1 _____ | 2 _____ | 3 _____ | 4 _____ |
| 9) 進路のことで、親と意見が食い違う・・・・・・・・・・・・ | 1 _____ | 2 _____ | 3 _____ | 4 _____ |

2 あなたは、自分の進路をかなえるために、現在どんなことに取り組んでいますか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1. 資格を取得する | 2. 資金をためる |
| 3. 学校や講座などを利用して勉強する | 4. 人脈をつったりひろげたりする |
| 5. 練習やトレーニングにはげむ | 6. 特に何もしていない |

3 あなたは、自分の進路をかなえるための情報をどのようにして入手していますか。

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. インターネットを活用している | 2. 受験や就職の情報雑誌をよむ |
| 3. 新聞をよむ | 4. 進学説明会や就職説明会などに参加する |
| 5. テレビをみたりラジオをきいたりする | 6. 大学・短大・専門学校や会社を訪問する |
| 7. 保護者に話を聞く | 8. 学校の先生にたずねる |
| 9. 友人や先輩と話をする | |
| 10. その他 () | |

4 あなたは、進路について次の人と真剣に話したことがありますか。

	かなり真剣に話している	わりと真剣に話している	あまり真剣に話していない	ぜんぜん真剣に話していない
1) 保護者	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
2) 学校の先生	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
3) 友人や先輩	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
4) 塾や予備校の先生	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
5) 親戚の大人	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____
6) その他の大人	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____

5 あなたは、人と話し合っ、これからの生き方や進学、就職についての見方や考え方が変わったことがありますか。

- | | |
|-----------|-----------|
| 1. しばしばある | 2. ときどきある |
| 3. あまりない | 4. ぜんぜんない |

6 あなたが進路について深く考えた時期はいつごろですか。あてはまる時期を5つ以内で選んでください。

中学3年	高校1年 1学期	高校1年 夏休み	高校1年 2学期	高校1年 3学期	高校1年 春休み	高校2年 1学期	高校2年 夏休み	高校2年 2学期	高校2年 3学期	高校2年 春休み
1. _____	2. _____	3. _____	4. _____	5. _____	6. _____	7. _____	8. _____	9. _____	10. _____	11. _____
12. この期間に考えたことはない										
13. 今まで深く考えたことはない										

7 進路を考える自分自身の様子を表すとしたら、A・Bどちらの言葉がふさわしいですか。

	A				B			
	とても A	やや A	やや B	とても B				
1) 積極的	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____	消極的		
2) 能動的	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____	受動的		
3) 柔軟	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____	硬直		
4) 建設的	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____	破滅的		
5) 自律的	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____	他律的		
6) 上昇志向	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____	下降志向		
7) 挑戦志向	1 _____	2 _____	3 _____	4 _____	安定志向		

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	ぜんぜん あてはまらない
8) むずかしいことにチャレンジする自分を発見した・・・	1	2	3	4
9) 高校の授業では見られない自分のよさを発見した・・・	1	2	3	4
10) 高校の授業の大切さがわかった・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4
11) 自分の生活で変えるべき点がわかった・・・・・・・・・・	1	2	3	4

次に あなたの就労に対する考え方についてお聞きします。

1 あなたはどこで就職したいと思いますか。希望するものをあげてください。

1. できれば大都市（東京・大阪など）で働きたい
2. できれば地方都市（福岡・広島・名古屋・仙台など）で働きたい
3. できれば地方（山口など）で働きたい
4. できれば外国で働きたい
5. 働く場所はどこでもかまわない
6. その他

2 仕事を見つけようとするとき、次のことはあなたにとって重要ですか。

	とても 重要	ある程度 重要	それほど 重要でない	ぜんぜん 重要でない
1) 場所（地域）・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4
2) 給料・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4
3) 仕事の内容が楽であるかどうか・・・・・・・・	1	2	3	4
4) 仕事上の権限や責任の有無・・・・・・・・	1	2	3	4
5) 休みがとりやすいかどうか・・・・・・・・	1	2	3	4
6) 自分にあっているかどうか・・・・・・・・	1	2	3	4
7) 職場の雰囲気・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4
8) 会社名などの知名度・・・・・・・・・・	1	2	3	4
9) 見た目や外見のかわいさ・かわいさ・・・・・・・・	1	2	3	4
10) 親の意見・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4
11) 社会的に評価の高い職業に就く・・・・・・・・	1	2	3	4

3 あなたは「働くこと」についてどのように考えていますか。

- | | とても
そう思う | 少し
そう思う | あまり
そう思わない | ぜんぜん
そう思わない |
|--|-------------|------------|---------------|----------------|
| 1) 私生活を犠牲にしてまで、仕事に打ち込む
つもりはない・・・・・・・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2) 好きなことや関心のあることを仕事にしたい・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3) 同じ会社で一生働きたい・・・・・・・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4) やりたい仕事ができなければ、その職場をや
めてもいい・・・・・・・・・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5) 生活に十分なお金があれば働きたくない・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6) 多少妥協しても、とにかく正社員正職員をめざす・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7) 気に入る仕事が見つかるまでは、パート、
フリーターでもかまわない・・・・・・・・ | 1 | 2 | 3 | 4 |

フェースシート

1 あなたの性別はどちらですか。

1. 男性 2. 女性

2 高等学校は公立・私立のどちらですか。

1. 公立 2. 私立

3 学科の種類はどれですか。

1. 普通科 2. 理数科 3. 総合学科 4. 専門学科

4 あなたは学校で部活動に所属していますか。

1. 運動部に所属 2. 文化部に所属 3. 何も所属していない

5 あなたは現在誰と一緒に暮らしていますか。一緒に住んでいる人全てあげて下さい。

1. 一人暮らし 2. 父 3. 母
4. 兄 (人) 5. 姉 (人) 6. 弟 (人)
7. 妹 (人) 8. 祖父 (人) 9. 祖母 (人)
10. その他の人 (人)

6 あなたの家族で中心となって働いている人の主な職業は次のうちどれですか。

【 勤め人 】

1. 管理的職業……………会社・官庁・団体の役員，管理職（課長相当職以上）など
2. 事務的職業……………会社・官庁・団体の事務職員など
3. 専門的職業……………弁護士，医師，芸術家，教師，公認会計士など
4. 技術的職業……………技術者・エンジニア，看護師，保育士など
5. 販売的職業……………店員，販売員，セールスパーソンなど
6. サービス的職業……………ウェ이터，ウェイトレス，コック，理容師・美容師など接客従事者
7. 技能的職業……………熟練工，整備士，大工など
8. 保安的職業……………自衛官・警察官・消防士など
9. 生産工程・運輸従事者……………工場勤務者，建設作業者，運転手，雇用されている農林漁業従事者など
10. 非正規雇用者¹（パート・アルバイト・派遣社員・非常勤）

【 自営業者・家族従事者 】

11. 自営の農林漁業……………農林漁業の経営者，家族従業者
12. 自営の商工サービス業……………商工サービス業の経営者，家族従業者
13. 自由業（ピアノ教師など）
14. 働いている人はいない
15. わからない

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査

平成 18 年 2 月

山口大学アドミッションセンター

田 中 均

林 寛 子

この調査は、高校生の進路形成意識が学校における活動や経験、生活経験といかに関連しているのかを明らかにし、今後の高大接続のあり方を模索するために実施するものです。調査項目は、学校での活動や経験、生活経験、生き方・価値意識、進路意識・職業観・フェースシートとなっています。

この調査そのものは学問的研究で実施するもので、結果は統計的に処理します。あなたのお答えが直接他人の目に触れたり、他の目的に使われたりすることはありません。決してご迷惑をおかけすることはありませんので、ご協力をよろしくお願いいたします。

【 記入にあたってのお願い 】

- ・名前を記入することはありませんが、あなた自身のことをお答えください。
- ・回答は、解答欄から当てはまる番号を選び、○で囲んでください。
- ・○をつける数は「いくつでも」とか「5つ」といった指示がない限り、1つだけ○をつけてください。

【 お問合せ先 】

国立大学法人山口大学 田中研究室

〒753-8511 山口市吉田 1677-1

TEL 083-933-5048

あなたの学校での活動や経験についてお聞きします。

1 今、学校で勉強していることは、あなたにとって将来、どの程度役に立つと思いますか。

1. 大いに役に立つと思う	8.5	2. かなり役に立つと思う	39.4
3. あまり役に立たないと思う	30.1	4. ぜんぜん役に立たないと思う	2.2
不 明	19.8		

2 あなたは今、次のことをどのくらい大事に思っていますか。

	とても 大事	まあ 大事	どちらと もいえな い	それほど 大事でな い	ぜんぜん 大事でな い	不明
1) 学校に毎日行くこと	45.4	41.3	6.6	4.7	1.7	0.3
2) 課題や宿題の期限を守ること	47.0	39.7	8.2	3.6	1.2	0.2
3) 授業中に発言をすること	8.0	30.9	34.4	19.4	6.9	0.4
4) まじめに授業を聞くこと	35.6	45.1	13.5	4.4	1.2	0.2
5) 校則を守ること	19.3	45.5	21.9	9.9	3.3	0.1
6) 受験勉強をすること	47.0	34.2	13.3	3.5	1.8	0.3
7) 部活動を一生懸命すること	47.3	29.3	14.8	5.0	3.4	0.2
8) 誰にでもあいさつを必ずすること	39.6	38.8	15.8	3.8	1.7	0.3
9) 先生に敬語で話すこと	36.3	43.9	14.2	3.7	1.7	0.3
10) 先生の言うことを聞くこと	16.4	42.3	30.8	7.4	2.7	0.3
11) 親の言うことを聞くこと	16.9	44.2	30.9	6.1	1.8	0.2

3 あなたは学校の授業のなかで、次のようなことに取り組むとき、どの程度積極的に取り組みますか。

	とても 積極的	まあ 積極的	あまり 積極的で ない	ぜんぜん 積極的で ない	不明
1) ひとりで公式や定理を使用して問題を解く	16.1	48.4	28.7	6.7	0.2
2) ひとりで文章を書く	17.7	44.0	32.0	6.1	0.1
3) ひとりで美術や音楽の作品を作る	23.2	32.6	28.3	15.7	0.2
4) おおぜいで演劇をしたり演奏したりする	19.2	32.1	31.3	17.2	0.3
5) おおぜいの前で発表する	9.3	26.9	41.9	21.7	0.2
6) おおぜいと討論する	9.6	26.2	42.7	21.2	0.3
7) グループで実験したり観察したりする	12.8	43.8	33.9	9.1	0.4
8) インターネットや図書館で調べる	17.1	43.3	30.6	8.7	0.3
9) グループで作品を制作する	14.5	43.5	32.5	9.0	0.5
10) 先生に質問して教えてもらう	12.4	39.5	36.8	11.0	0.4

4 あなたの成績はクラスの中でどれくらいだと思いますか。

1. 上 位	2. 中位の上	3. 中位の中	4. 中位の下	5. 下 位	6. 不明
8.5	19.6	29.8	20.8	18.2	3.1

次に あなたの生活経験についてお聞きします。

1 ふだん、どの程度家事をして（手伝って）いますか。

	よく する	ときどき する	あまり しない	ぜんぜん しない	不明
1) 自分の部屋の掃除	22.9	51.1	20.5	5.3	0.2
2) 家・庭の掃除	7.8	27.3	40.9	23.6	0.3
3) 衣類の洗濯	10.8	22.6	32.9	33.5	0.2
4) アイロンがけ	5.2	14.4	31.3	48.9	0.2
5) 食事作り	10.5	29.6	29.8	29.9	0.2
6) 食後の食器洗い	16.1	33.7	26.2	23.6	0.2
7) 食品・日用品の買い物	11.8	34.1	31.8	22.1	0.2
8) 風呂の掃除・準備	24.4	31.2	24.3	19.8	0.3
9) ゴミ出し	9.7	20.4	32.1	37.6	0.3
10) 育児・介護	4.7	9.7	18.6	66.1	0.9

2 子どもの頃から今までに学校外で次のようなことをどの程度したことがありますか。

	何度もある・かなりした	たまにある・たまにした	あまりしない・あまりしなかった	ぜんぜん ない	不明
1) 自然観察（鉱物や植物、昆虫採集・天体観測等）	21.5	38.2	25.8	14.3	0.2
2) 花や植木を育てる	21.0	44.2	24.7	10.2	0
3) 生き物をペットとして飼う	39.4	29.8	16.6	14.1	0.1
4) おもちゃ・人形・機械づくりや修理	20.7	34.4	28.7	16.0	0.2
5) 農作業体験・漁業体験	9.0	24.2	32.2	34.5	0.1
6) 野外キャンプ	16.0	29.9	25.9	28.0	0.2
7) 料理・おかしづくり	37.7	35.7	17.1	9.5	0
8) 裁縫・手芸	23.5	32.4	25.3	18.8	0
9) 文学作品や学問的な専門書を読む	16.9	21.3	33.6	28.0	0.1
10) 詩歌・俳句を詠む・小説を書く	9.2	15.8	27.6	47.1	0.2
11) 絵画・書などの芸術的な創作活動	22.9	22.2	24.2	30.3	0.3
12) 音楽活動（ピアノなどの教室やバンド活動など）	33.6	19.8	16.7	29.5	0.3
13) スポーツ活動（スポーツ少年団やスポーツ教室など）	41.8	22.7	16.8	18.4	0.2
14) 伝承遊び（こま・たこ・あやとり・お手玉など）	11.2	28.0	32.0	28.3	0.5
15) 外国語、そろばん、書道、華道などの資格取得	29.5	25.6	17.5	26.9	0.5
16) 大学・短期大学・公民館などの講座参加	4.3	15.8	26.9	52.2	0.8
17) 就業体験（アルバイトや新聞配達など）	17.1	21.1	15.8	46.0	0

	何度もある・かなりした	たまにある・たまにした	あまりしない・あまりしなかった	ぜんぜんない	不明
18) ボランティア活動	14.5	35.0	29.1	21.3	0.2
19) パソコンの活用 (メールの利用やHP作成やゲームも含む)	52.4	24.7	14.8	7.9	0.2
20) 地域の活動・行事に参加	16.8	36.4	29.6	17.1	0.1

3 あなたはあなたのご両親をどのようにとらえていますか。

	とても思う	少し思う	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない	不明
1) 父は、私のことをよくわかっている	13.9	34.7	29.5	13.8	8.1
2) 父は、私の勉強・成績について、うるさく言うほうだ	8.4	14.5	32.1	36.9	8.2
3) 父は、私にいろいろなことを話すほうだ	18.8	27.8	27.9	17.3	8.2
4) 父は、私に対してやさしくあたたかいほうだ	29.9	34.6	17.2	10.1	8.1
5) 私は、父の仕事についてよく知っている	19.2	35.2	26.0	11.3	8.2
6) 母は、私のことをよくわかっている	26.5	40.5	20.0	6.5	6.5
7) 母は、私の勉強・成績について、うるさく言うほうだ	20.2	25.4	28.6	19.4	6.4
8) 母は、私にいろいろなことを話すほうだ	38.8	34.0	15.4	5.1	6.6
9) 母は、私に対してやさしくあたたかいほうだ	34.5	41.0	13.7	4.4	6.4
10) 私は、母の仕事についてよく知っている	34.5	38.1	15.5	5.5	6.5

次に あなた自身のことについてお聞きします。

1 あなたは今、「自分」について、次のようなことがあてはまりますか。

	とても思う	少し思う	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない	不明
1) 今の自分が好きだ	7.6	33.3	41.7	17.3	0.2
2) 自分がどんな人間かわからなくなるときがある	30.4	39.5	20.3	9.6	0.2
3) 状況によって本当の自分と偽(にせ)の自分を使い分けていると思う	32.9	39.2	19.7	7.8	0.3
4) 本当の自分は1つだけしかないと思う	16.3	20.8	41.7	20.6	0.5
5) 本当の自分を見つけることが大切だと思う	33.4	34.6	24.1	7.6	0.4
6) 今の自分を変えたいと思う	36.5	37.9	18.5	6.6	0.5
7) どんな場面でも自分をつらぬくことが大切だ	25.3	36.4	31.9	6.1	0.3
8) 人の持っていないものを身につけたい	49.8	33.3	13.1	3.5	0.2

2 あなたは、同じ学年の友だちと比べて、自分自身をどう思いますか。

	とても 思う	少し 思う	あまり 思わ ない	ぜん ぜん 思わ ない	不明
1) 運動神経がいい	8.1	26.3	39.1	26.3	0.2
2) 勉強がよくできる	3.4	19.1	45.1	32.1	0.3
3) 心がやさしい	7.8	31.9	44.7	15.3	0.3
4) みんなから信頼されている	4.0	26.9	50.7	17.9	0.4
5) 友だちが多い	10.7	36.2	38.7	14.0	0.4
6) 先生からかわいがられる	5.4	20.4	50.3	23.4	0.5
7) 髪型やファッションに気がつかっている	12.4	33.3	35.4	18.5	0.4
8) 行動力がある	11.1	27.9	43.0	17.7	0.3
9) 決断力がある	10.1	24.3	44.8	20.5	0.3
10) 努力型である	11.7	27.8	38.5	21.8	0.2

次に あなたの生き方・考え方についてお聞きします。

1 あなたの生き方にとって次のことはどの程度重要ですか。

	とても 重要	ある程度 重要	それほど 重要で ない	ぜん ぜん 重要で ない	不明
1) 自分のしたいことをする	57.4	39.8	2.5	0.3	0.1
2) その日その日を自由に楽しく過ごす	39.8	46.5	12.2	1.4	0
3) しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く	30.7	50.4	16.2	2.5	0.2
4) 夢をもってその夢に向かって突き進む	55.8	34.5	8.1	1.6	0.2
5) 自分で決めたことに対して努力する	64.8	29.1	5.2	0.8	0.1
6) 自分の将来について考える	56.2	36.3	6.5	0.9	0
7) 高い収入を得る	27.1	44.6	23.9	4.2	0.1
8) 有名になる	11.1	18.6	46.0	24.2	0
9) 自分に誠実に生きる	36.5	44.7	16.5	2.1	0.2
10) 信仰心を持つ	14.1	27.3	38.5	19.8	0.3
11) 道徳心を持つ	34.5	44.1	17.3	3.8	0.3
12) 正義感を持つ	27.1	47.6	21.3	3.8	0.2
13) 幸せな家庭を築く	60.8	28.1	8.4	2.5	0.1
14) 身近な人と良い関係を築く	64.0	30.0	4.9	0.9	0
15) 社会に役立つ人間になる	36.6	40.8	18.0	4.5	0
16) 人のために尽くす	34.5	41.7	19.1	4.5	0.1
17) みんなと力を合わせて世の中をよくする	30.5	42.8	19.9	6.7	0

2 あなたは次のような意見をどう思いますか。

	とても そう 思う	少し そう 思う	あまり そう 思わ ない	ぜん ぜん そう 思わ ない	不明
1) どんな家柄か育ちかで人生が決まってしまう	13.8	39.9	29.1	17.0	0.2
2) どんな学校を出たかで人生が決まってしまう	10.1	33.9	35.2	20.6	0.2
3) 学歴は本人の実力をかなり反映している	11.7	36.3	38.6	13.2	0.2
4) お金持ちや地位の高い人が得をする社会だ	41.6	37.5	15.6	5.3	0.1
5) 定職についていないと信用されない社会だ	43.7	42.4	11.4	2.2	0.2
6) 成功は運やチャンスによって決まる	19.7	45.5	28.9	5.6	0.3
7) まじめに努力をすればむくわれる社会だ	14.4	35.0	40.2	10.2	0.1
8) 才能があれば十分に活躍できる社会だ	24.9	43.3	27.0	4.6	0.2
9) 成功するためには人脈が大切だ	29.9	52.0	15.6	2.2	0.2
10) 物質的に豊かな社会だ	38.0	40.5	18.0	3.1	0.4
11) 自分のことしか考えていない人が多い社会だ	44.3	42.5	11.7	1.3	0.2
12) 日本社会の将来に希望が持てない	28.0	40.7	26.7	4.2	0.3

3 あなたは将来結婚したいですか。

1. 10代で結婚したい	2.0	2. 20代で結婚したい	69.0
3. 30代で結婚したい	4.9	4. 40代以降に結婚したい	0.2
5. いつでも良い	16.6	6. 結婚したくない	7.1
不 明	0.2		

4 結婚した場合、夫と妻で家事をどのように分担したいと思いますか。

1. 妻がほとんど行う	5.1	2. 妻が主に行い、夫が手伝う	53.8
3. 妻と夫が半々に分担する	38.1	4. 夫が主に行い、妻が手伝う	1.2
5. 夫がほとんど行う	1.1	不 明	0.8

次に 進路についてのあなたの見方や考え方についてお聞きします。

1 あなたは、次のことについてどの程度あてはまると思えますか。

	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ぜんぜんあてはまらない	不明
1) 自分の能力・適性をきちんと理解している	9.7	53.4	32.5	4.2	0.2
2) 自分の将来について、はっきりした目標がある	30.6	32.2	25.2	11.9	0.1
3) 進路を選ぶうえで重視することがはっきりしている	28.0	37.9	27.4	6.5	0.3
4) 自分には将来つきたい職業がある	42.4	26.7	20.8	9.9	0.2
5) 自分の希望する職業について十分知識をもっている	7.8	33.5	42.7	15.7	0.2
6) 最近の産業・職業について知識をもっている	4.7	18.5	55.2	21.2	0.3
7) 受験がうまくいくか心配	58.2	25.7	10.3	5.4	0.4
8) 将来の就職がうまくいくか心配	57.1	28.3	10.3	4.0	0.3
9) 進路のことで、親と意見が食い違う	9.6	20.5	35.3	34.1	0.4

2 あなたは、自分の進路をかなえるために、現在どんなことに取り組んでいますか。あてはまるものにもいくつかでも○をつけてください。(複数回答)

1. 資格を取得する	22.8	2. 資金をためる	17.2
3. 学校や講座などを利用して勉強する	47.5	4. 人脈をつくったりひろげたりする	10.8
5. 練習やトレーニングにはげむ	22.2	6. 特に何もしていない	27.1

3 あなたは、自分の進路をかなえるための情報をどのようにして入手していますか。(複数回答)

1. インターネットを活用している	56.5	2. 受験や就職の情報雑誌をよむ	43.4
3. 新聞をよむ	13.9	4. 進学説明会や就職説明会などに参加する	15.2
5. テレビをみたりラジオをきいたりする	14.6	6. 大学・短大・専門学校や会社を訪問する	14.2
7. 保護者に話を聞く	22.7	8. 学校の先生にたずねる	20.9
9. 友人や先輩と話をする	34.1	10. その他	3.4

4 あなたは、進路について次の人と真剣に話したことがありますか。

	かなり真剣に話している	わりと真剣に話している	あまり真剣に話していない	ぜんぜん真剣に話していない	不明
1) 保護者	28.5	49.2	18.4	3.8	0.2
2) 学校の先生	13.0	43.1	33.4	10.3	0.2
3) 友人や先輩・	19.3	43.5	28.7	8.3	0.2
4) 塾や予備校の先生	11.1	18.6	15.8	49.1	5.4
5) 親戚の大人	2.7	10.7	24.4	61.4	0.9
6) その他の大人	4.1	9.4	19.9	65.6	0.9

5 あなたは、人と話し合っ、これからの生き方や進学、就職についての見方や考え方が変わったことがありますか。

1. しばしばある	19.9	2. ときどきある	53.2
3. あまりない	17.5	4. ぜんぜんない	8.7
5. 不明	0.7		

6 あなたが進路について深く考えた時期はいつごろですか。あてはまる時期を5つ以内で選んでください。

中学3年	高校1年 1学期	高校1年 夏休み	高校1年 2学期	高校1年 3学期	高校1年 春休み	高校2年 1学期	高校2年 夏休み	高校2年 2学期	高校2年 3学期	高校2年 春休み
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11

12. この期間に考えたことはない

13. 今まで深く考えたことはない

7 進路を考える自分自身の様子を表すとしたら、A・Bどちらの言葉がふさわしいですか。

A		とても A やや A やや B とても B 不明					B		
1)	積極的	・・・	17.7	43.1	31.9	6.5	0.8	・・・	消極的
2)	能動的	・・・	9.1	40.2	42.2	7.2	1.3	・・・	受動的
3)	柔軟	・・・	7.7	43.3	40.7	7.2	1.1	・・・	硬直
4)	建設的	・・・	5.9	49.6	36.5	6.3	1.6	・・・	破滅的
5)	自律的	・・・	13.2	51.0	30.0	4.2	1.6	・・・	他律的
6)	上昇志向	・・・	19.3	46.1	27.3	6.1	1.3	・・・	下降志向
7)	挑戦志向	・・・	22.3	32.5	34.2	9.9	1.1	・・・	安定志向

次に 進路選択のことについてお聞きします。

- 1 あなたが上級学校（大学・短大・専門学校。ここでは「大学など」とします。）に進学を希望するとして、次のようなことがあったら、進学先の選択についての悩みや不安が無くなると思いますか。

	とても そう 思う	少し そう 思う	あまり そう 思わ ない	ぜん ぜん そう 思わ ない	不明
1) 自分でじっくり考える時間	20.0	45.7	28.0	5.8	0.4
2) 親や家族の人と話し合う時間	19.8	46.4	26.7	6.7	0.3
3) 友人や先輩などと話し合う時間	22.3	46.4	24.2	6.7	0.4
4) 学校の先生とじっくり話し合う時間	20.9	44.8	26.3	7.8	0.3
5) 進路希望を考え直す機会	17.0	44.7	30.3	7.5	0.5
6) 大学などの先生に直接授業を受ける機会	24.6	42.5	26.3	6.1	0.5
7) 大学などに行って自分で施設などを見る機会	32.6	43.3	18.9	4.7	0.4
8) 強く方向を決めてくれる助言を得る機会	28.4	41.8	23.3	5.7	0.4
9) 自問自答をうながしてくれる助言を得る機会	19.7	44.1	29.8	6.2	0.3
10) 悩みや相談をうち明けられる機会	29.8	43.7	20.0	6.0	0.4
11) 進学情報誌などのより多くの情報・	21.3	44.6	26.4	7.3	0.4
12) 自分の成績で合格できるかという情報	37.9	41.5	16.1	4.1	0.4
13) 将来職業に就いた自分のイメージ	29.4	43.0	21.6	5.6	0.4
14) この人のように生きたいというイメージ	31.2	40.9	22.0	5.6	0.3

- 2 あなたは大学などの先生の授業を受けたことがありますか。

1. ある	45.3	2. ない	52.3	3. 不明	2.0
-------	------	-------	------	-------	-----

【2で 1. ある と答えた方にお聞きします。】

- 3 大学などの先生の授業を受けて、どう感じましたか。

	と ても あ て は ま る	や や あ て は ま る	あ ま り あ て は ま ら な い	ぜ ん ぜ ん あ て は ま ら な い	不明
1) 学問を研究する楽しさがわかった	8.9	21.5	12.2	3.2	54.1
2) 学問を研究するむずかしさがわかった	15.5	21.7	6.9	1.8	54.1
3) 学問研究の勉強の方法がわかった	3.2	12.4	23.5	6.7	54.1
4) 今まで知らなかった知識が増えた	14.6	21.3	7.2	2.7	54.2
5) 大学などで自分が学ぶ意味を考えることができた	6.5	17.9	16.7	4.6	54.2
6) 取り組んでみたい分野をはっきりさせることができた	8.2	14.4	16.9	6.3	54.2
7) 志望する大学などをはっきりさせることができた	6.8	11.2	18.9	9.0	54.1

	とてもあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	ぜんぜんあてはまらない	不明
8) むずかしいことにチャレンジする自分を発見した	4.0	13.4	23.0	5.5	54.2
9) 高校の授業では見られない自分のよさを発見した	3.8	9.5	23.8	8.6	54.3
10) 高校の授業の大切さがわかった	5.6	17.2	16.6	6.4	54.2
11) 自分の生活で変えるべき点がわかった	5.9	13.2	19.3	7.4	54.2

次に あなたの就労に対する考え方についてお聞きします。

1 あなたはどこで就職したいと思いますか。希望するものをあげてください。

1. できれば大都市（東京・大阪など）で働きたい	40.3
2. できれば地方都市（福岡・広島・名古屋・仙台など）で働きたい	17.8
3. できれば地方（山口など）で働きたい	12.7
4. できれば外国で働きたい	7.5
5. 働く場所はどこでもかまわない	18.9
6. その他	2.1
7. 不明	0.6

2 仕事を見つけようとするとき、次のことはあなたにとって重要ですか。

	とても重要	ある程度重要	それほど重要でない	ぜんぜん重要でない	不明
1) 場所（地域）	38.1	45.1	13.9	2.9	0.1
2) 給料	43.3	48.4	6.9	1.4	0
3) 仕事の内容が楽であるかどうか	14.3	34.3	42.2	9.0	0.2
4) 仕事上の権限や責任の有無	19.5	52.9	24.3	3.1	0.2
5) 休みがとりやすいかどうか	22.3	47.3	26.2	4.1	0.1
6) 自分にあっているかどうか	79.5	17.5	2.2	0.7	0.1
7) 職場の雰囲気	64.2	30.5	3.7	1.4	0.2
8) 会社名などの知名度	10.7	36.7	40.9	11.6	0.1
9) 見た目や外見のかわさ・かわいさ	10.7	30.7	43.5	14.7	0.4
10) 親の意見	7.7	35.9	37.2	19.1	0.1
11) 社会的に評価の高い職業に就く	13.3	35.5	38.7	12.4	0.1

3 あなたは「働くこと」についてどのように考えていますか。

	とてもそ う思う	少しそ う思う	あまりそ う思わな い	ぜんぜん そう思わ ない	不明
1) 私生活を犠牲にしてまで、仕事に打ち込む つもりはない	17.9	49.4	27.8	4.6	0.2
2)好きなことや関心のあることを仕事にしたい	72.0	23.6	3.8	0.5	0.1
3) 同じ会社で一生働きたい	22.6	38.6	33.1	5.6	0.1
4) やりたい仕事ができなければ、その職場をや めてもいい	16.1	39.1	38.0	6.6	0.2
5) 生活に十分なお金があれば働きたくない	11.7	23.3	45.4	19.2	0.3
6) 多少妥協しても、とにかく正社員正職員をめ ざす	17.6	41.1	32.1	8.7	0.5
7) 気に入る仕事が見つかるまでは、パート、フ リーターでもかまわない	9.4	26.5	38.9	24.9	0.3

フェースシート

1 あなたの性別はどちらですか。

1. 男性	43.0	2. 女性	56.7	不明	0.3
-------	------	-------	------	----	-----

2 高等学校は公立・私立のどちらですか。

1. 公立	100	2. 私立	0
-------	-----	-------	---

3 学科の種類はどれですか。

1. 普通科	2. 理数科	3. 総合学科	4. 専門学科
67.3	5.2	27.6	0

4 あなたは学校で部活動に所属していますか。

1. 運動部に所属	2. 文化部に所属	3. 何も所属していない	4. 不明
51.3	23.2	25.0	0.5

5 あなたは現在誰と一緒に暮らしていますか。一緒に住んでいる人全てあげてください。

1. 一人暮らし	0.6	2. 父	80.5	3. 母	88.9
4. 兄 (人)		5. 姉 (人)		6. 弟 (人)	
7. 妹 (人)		8. 祖父 (人)		9. 祖母 (人)	
10. その他の人 (人)					

6 あなたの家族で中心となって働いている人の主な職業は次のうちどれですか。

【 勤め人 】

1. 管理的職業……………会社・官庁・団体の役員，管理職（課長相当職以上）など	15.5
2. 事務的職業……………会社・官庁・団体の事務職員など	11.3
3. 専門的職業……………弁護士，医師，芸術家，教師，公認会計士など	8.8
4. 技術的職業……………技術者・エンジニア，看護師，保育士など	9.0
5. 販売的職業……………店員，販売員，セールスパーソンなど	5.1
6. サービス的職業……………ウェ이터，ウェイトレス，コック，理容師・美容師など接客従事者	3.9
7. 技能的職業……………熟練工，整備士，大工など	4.5
8. 保安的職業……………自衛官・警察官・消防士など	2.8
9. 生産工程・運輸従事者……………工場勤務者，建設作業員，運転手，雇用されている農林漁業従事者など	9.5
10. 非正規雇用者（パート・アルバイト・派遣社員・非常勤）	2.4

【 自営業者・家族従事者 】

11. 自営の農林漁業……………農林漁業の経営者，家族従業者	0.7
12. 自営の商工サービス業……………商工サービス業の経営者，家族従業者	6.1
13. 自由業（ピアノ教師など）	0.9
14. 働いている人はいない	0.5
15. わからない	5.1
16. 不明	13.9

参考文献・引用文献（アルファベット順）

- 安部晃士 2008 「6 章社会意識はどのように変わったのか—満足感・不平等感の動態と学歴意識の変化—」海野道郎・片瀬一男編『＜失われた時代＞の高校生の意識』有斐閣
- 雨宮処凛 2007 『生きさせろ 難民化する若者たち』太田出版
- 天野郁夫・喜多村和之 1976 『高学歴社会の大学』東京大学出版会
- 1992 『学歴の社会史 教育と日本の現代』新潮社
- 荒川（田中）葉 2000 「5 章学習指導組織・進路指導組織」樋田大二郎他編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 荒牧草平 2001 「第 3 章高校生にとっての職業希望」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 81-106
- 新谷周平 2004 「ストリートダンス体験と居場所・社会つながり」子どもの参画情報センター編『居場所づくりと社会つながり』（子ども・若者の参画シリーズ I）萌文社
- 浅野智彦 1999 「2 章親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣 p41-57
- 2001 『自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ』勁草書房
- 2006 『検証・若者の変貌 失われた 10 年の後に』勁草書房
- 2007 「オンラインコミュニケーションとアイデンティティの変容」『Mobile Society Review 未来心理 10 号』モバイル社会研究所
- アンソニー・ギデンズ著・秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也 2005 『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』ハーベスト社
- 愛知県総合教育センター 小久保清隆他 2006 「豊かな心の育成を目指す指導の在り方に関する研究」『愛知県総合教育センター研究紀要 第 95 集』愛知県総合教育センター
- http://www.apec.aichi-c.ed.jp/shoko/yutakanakokoro/kiyou_jidoseito.pdf
- 朝日新聞・株式会社 VIBE 2007
- <http://aspara.asahi.com/club/user/member/contentsDetail.do?oid=-37761&contentOid=220896>
- Berger,P and Luckmann,T 1966 The social construction of reality. A treatise in the sociology of knowledge. Doubleday 山口節郎訳 1977 『日常世界の構成』新曜社
- Bourdieu,Pierre, et Passeron, Jean-Claude 1970 La reproduction, Minuit 宮島喬訳 1991 『再生産 教育・社会・文化』藤原書店
- et Passeron, Jean-Claude 1970 Les heritiers : les etudiants et la culture,Minuit 石井洋二郎訳 1997 『遺産相続者たち 学生と文化』藤原書店
- 1979 La distanction, Minuit 石井洋二郎訳 1990 『ディスタンクシオン I』藤原書店
- Bowlby,J. 1969 Attachment and loss: Volume1; Attachment. New York Basic Books.
- Clark, R. B. 1960 "The Cooling Out Functionin Higher Education, " American Journal of

Sociology, No. 65 p569-576

- 土居健郎 1971 『「甘え」の構造』弘文堂
———2001 『続「甘え」の構造』弘文堂
土井隆義 2004 『「個性」を煽られる子どもたち 親密圏の変容を考える』岩波書店
———2008 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房
Erikson, E.H. 1950 *Childhood and society*. New York W.W.Norton. 仁科弥生訳 1997 『幼児期と社会』みすず書房
——— 1959 *Identity and the life cycle Psychological Issues, vol.1*. New York International Universities Press 小此木啓吾訳 1973 『自我同一性』誠信書房
——— 1982 *The life cycle completed*. New York W.W.Norton. 村瀬孝雄・近藤邦夫訳
——— 1989 『ライフサイクル、その完結』みすず書房
遠藤俊彦・数井みゆき編 2004 『アタッチメント 生涯にわたっての絆』ミネルヴァ書房
藤田英典 1979 「社会的地位形成過程における教育の役割」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会 293-328 富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会
福重清 2006 「4 章若者の友人関係はどうなっているのか」浅野智彦『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房 p132
Gergen, K.J. 1994 *Realities and Relationships—Soundings in Social Construction* President and Fellows of Harvard College 永田素彦・深尾誠訳 2004 『社会構成主義の理論と実践—関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版
Goffman, E. 1952 *On Cooling the Mark Out: Some Aspects of Adaptation to Failure*, *Psychiatry*, 15(4) 451-463
——— 1961 *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, Doubleday 石黒毅訳 1984 『アサイラム—施設収容者の日常世界』誠信書房
後藤道夫・吉崎祥司 2007 『格差社会とたたかう 努力・チャンス・自立 論批判』青木書店
萩原建次郎 2001 「3 章子ども・若者の居場所の条件」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想「教育」から「関わり」へ』学陽書房 51-65
原ひろみ 2005 「新規学卒労働市場の現状 企業の採用行動から」『日本労働研究雑誌』№542 4-17
原純輔・盛山和夫 1999 『社会階層—豊かさの中の不平等』東京大学出版会
——— 2008 『社会階層と不平等』放送大学教育振興会
長谷川裕 2004 「自己肯定感を規定するもの—21 世紀初頭の教育における競争と子ども・若者」『琉球大学教育学部紀要』第 64 集 111-131
橋口昌治 「若年者の雇用問題と「やりたいこと」言説」『Core Ethics Vol.2』立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006 165-180
秦政春・片山悠樹・西田亜希子 2004 「現代高校生にとっての「高校」」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第30巻113-142
畠中宗一 2002 『自立と甘えの社会学』世界思想社

- 2004『社会病理学と臨床社会学 臨床と社会学的研究のブリッジング』学文社 2-10
- 林寛子（沖田寛子）2007「若者の進路形成と自己実現を求める意識—高校生調査より」『やまぐち地域社会研究』山口地域社会学会 4号 p41-52
- ・富永倫彦2007「山口大学AO入試入学者の受験準備と入学準備」『大学教育』山口大学大学教育機構4号p85-97
- 2008「若者の職業意識と保護者の期待」山口大学人文学部社会学研究室編『山口地域社会研究シリーズ 14 若者の職業意識にみる現代的課題—防府市における高校生と保護者調査にもとづいて—』防府市サポートステーション
- 2008「高校生の自己意識と自立意識」『やまぐち地域社会研究』山口地域社会学会 5号 p41-52
- ・富永倫彦 2008「卒業時に保有する資質・能力と満足度の入学区分による差異」『大学教育』山口大学大学教育機構 5号 p47-58
- Havighurst,R.J 1972 *Developmental Tasks and Education* New York David McKay Company
- 児玉憲典・飯塚裕子・三島二郎訳 1997『ハヴィガーストの発達課題と教育 生涯発達と人間形成』 p 67-124
- 樋田大二郎・耳塚寛明編 2000『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 2000「おわりに 予見と失望と驚き」樋田大二郎・耳塚寛明編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 久田邦明 2000『子どもと若者の居場所』萌文社
- 広田照幸 2004『思考のフロンティア 教育』岩波書店
- 本田由紀 2004『女性の職業と親子関係 母親たちの階層戦略』勁草書房
- 2005『若者と仕事』東京大学出版会
- 2005『多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版
- 2006「第5章対人関係と高校生活・進路選択」石田浩編著『高校生の進路選択と意識変容』東京大学社会科学研究所 71-80
- 2007『若者の労働と生活世界 彼らはどんな現実を生きているのか』大月書店
- ・平沢和司 2007「学歴社会・受験競争 序論」『リーディングス日本の教育と社会 2 学歴社会・受験競争』日本図書センター
- 堀江宗正 1999「心理学的自己実現論の系譜と宗教」『東京大学宗教学年報』XVII 57-72
- 博報堂 2004「10～30代男女の携帯電話利用状況調査 2004」
- 井上俊・船津衛 2005『自己と他者の社会学』有斐閣
- 稲垣恭子 2006『子ども・学校・社会 教育と文化の社会学』世界思想社
- 岩木秀夫 2000「2章高校教育改革の動向—学校格差体制（日本型メリトクラシー）の行方—」
- 岩田考 2006「第5章 若者のアイデンティティはどう変わったのか」浅野智彦『検証・若者の変貌失われた10年の後に』勁草書房

- Jones,G・Wallace.C.1992 Youth, Family and Citizenship, Open University Press. 宮本みち子監訳1996『若者はなぜ大人になれないのか』新評論
- 門脇厚司 1999『子どもの社会力』岩波書店
- 梶田叡一 2002『自己意識研究の現在』ナカニシヤ出版
- 2005『自己意識研究の現在2』ナカニシヤ出版 2005
- 加澤恒雄2006「現代日本における大学教育のパラダイム転換の必要性に関する一考察 —「大学教育の中核としてのキャリア教育」論—」『広島大学高等教育研究開発センター大学論集第37集』131-147
- 片桐雅隆 2000『自己と「語り」の社会学 構築主義的展開』世界思想社
- 片瀬一男・友枝敏雄 1990「価値意識：社会階層をめぐる価値志向の現在」原純輔編『現代日本の社会階層②階層意識の動態』東京大学出版 125-147
- 2005『夢の行方 高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会
- 神原文子 2000『教育と家族の不平等問題』恒星社厚生閣
- 荻谷剛彦 1995『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社
- 2000「8章学習時間の変化」樋田大二郎他編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 2001『階層化日本と教育危機』有信堂高文社
- 2003「選抜と進路選択」『学校臨床社会学—教育問題をどう考えるか—』日本放送出版協会 170-188
- 2003『なぜ教育論争な不毛なのか—学力論争を超えて』中公新書ラクレ
- 2003「若者よ、丁稚奉公から始めよう」『文芸春秋』文芸春秋 81(6) 359-365
- ・志水宏吉 2004『学力の社会学』岩波書店
- 2008「学業成績を規定する要因の変化—中学校3年生時点の成績自己評価の分析—」中村高康編『2005年SSM調査シリーズ6階層社会の中の教育現象』SSM調査研究会
- 2008『格差社会と教育改革』岩波書店
- 吉川徹 2006『学歴・格差・不平等—成熟する日本型学歴社会—』東京大学出版会
- 近藤博之 2000『日本の階層システム3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会
- 小杉礼子 2001「2章変わる若者労働市場」矢島正見・耳塚寛明編『変わる若者と職業世界』学文社
- 久木元真吾 2005「青少年の社会的自立と意識」『青少年問題』第52集第9号
- 久世敏雄・久世妙子・長田雅喜 1980『自立心を育てる』有斐閣
- 厚生労働省 雇用動向調査（時系列表）
- http://www.dbtk.mhlw.go.jp/toukei/kouhyo/indexkr_14_1.html
- 厚生労働省 2008「平成19年度高校・中学新卒者の就職内定状況等（平成20年3月末現在）について」<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/05/h0516-2.html>
- 厚生労働省 労働経済白書 20年版

- Merton.R.K 1957 *Social Theory and Social Structure*, Free Press 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳 1961『社会理論と社会構造』みすず書房 p129
- Maslow,A.H.1954 *Motivation and personality*. Harper and Row 小口忠彦監訳 1975『人間性の心理学』産業能率大学出版
- 1968 *Toward a Psychology of Being, Second Edition*, Van Nostrand 上田吉一訳 1998『完全なる人間 魂のめざすもの』誠信書房
- 松下武志・米川茂信・宝月誠編著 2004『社会病理学の基礎理論』学文社
- 耳塚寛明 2000「4章進路選択の構造と変容」樋田大二郎他編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- ・矢島正見 2001『変わる若者と職業世界 トランジッションの社会学』学文社
- 宮本みち子 2002『若者が「社会的弱者」に転落する』洋泉社新書 2002
- 2004『ポスト青年期と親子戦略 大人になる意味と形の変容』勁草書房 2-20
- 溝上慎一 2005「第1章 形成としての青年期発達論」『自己意識研究の現在 2』ナカニシヤ出版
- 宝月誠 2004「逸脱とコントロールの社会学」有斐閣
- 元治恵子 2006「第2章進路に向けての活動の実態」石田浩編著『高校生の進路選択と意識変容』東京大学社会科学研究所 29-42
- 森岡清美・塩原勉・本間康平編 1993『新社会学辞典』有斐閣
- 森田洋司 1991『「不登校」現象の社会学』学文社
- 2004「病める関係性の時代」『病める関係性—マイクロ社会の病理—』学文社
- 望月由起 2007『進路形成に対する「在り方生き方指導」の功罪 高校進路指導の社会学』東信堂
- 室井研二・田中朗 2003「第3章 高校生の学歴＝地位達成志向—その現状と展望—」友枝敏雄・鈴木讓編著『現代高校生の規範意識—規範の崩壊か、それとも変容か—』九州大学出版会
- 文部科学省生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室2004「子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業 実施のための手引き」
- 文部省 1977「中学校・高等学校進路指導手引き—進路指導主事編」
- 文部省 1999『教育白書 平成11年度 我が国の文教施策—進む「教育改革」—』
- 文部科学省 2008 平成20年度学校基本調査速報
- http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08072901/index.htm
- 中村裕美子 2005「中・高校生の学歴アスピレーションと学歴アノミーの分析」『現代の社会病理』第20号 67-90
- 中村高康 2002「教育アスピレーションの過熱・冷却」中村高康・藤田武志・有田伸編『教育から見る日本と韓国 学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社 73-90
- 中西新太郎 2007「第4章 「自立支援」とは何か—新自由主義社会政策と自立像・人間像」後藤道夫・吉崎祥司『格差社会とたたかう』青木書店
- 中山慶子・小島秀夫 1979「教育アスピレーションと職業アスピレーション」富永健一編『日本

- の階層構造』東京大学出版会 293-328
- 二宮克己・子安増生編 2005『発達心理学』新曜社
- 野田陽子 2000『学校化社会における価値意識と逸脱現象』学文社
- 内閣府 2005「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会報告」
- 内閣府政策統括官編 2005「青少年の社会的自立と意識 青少年の社会的自立に関する意識調査報告書」
- 日本経済団体連合会 2006「主体的なキャリア形成の必要性和支援のあり方—組織と個人の視点のマッチング—」
- 日本経済団体連合会 2008「2007年度新卒者採用に関するアンケート調査結果の概要」
- NPO 法人全国引きこもり KHJ 親の会 <http://www.khj-h.com/kouzou.htm>
- 尾高邦雄 1953『新稿職業社会学』福村出版岡田昌毅 2007「第1章ドナルド・スーパー」渡辺三枝子編『キャリアの心理学 キャリア支援の発達的アプローチ』ナカニシヤ出版
- 尾木直樹 2006『新・学歴社会がはじまる 分断される子どもたち』青灯社
- 尾嶋史章編著 2001『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房
- ・近藤博之 2000「教育達成のジェンダー構造」盛山和夫編『ジェンダー・市場・家族』（日本の階層システム4）東京大学出版会
- 沖田寛子 1997「不登校現象と子どもの『居場所』」『山口大学文学会志』第48巻山口大学文学会 17-35
- 1998「欧米と日本におけるフリースクールの比較研究」『社会分析』日本社会分析学会 第25巻 115-128
- 1998「山村留学における自然体験活動」『山口大学文学会志』山口大学文学会 第49巻 225-241
- 1999「野外教育活動の実践と課題」『社会分析』第26巻日本社会分析学会 193-206
- 2002「野外教育の実践と課題Ⅱ—今後の野外体験活動の役割を考える—」『下関短期大学学紀要』下関短期大学 第19・20号 57-73
- 折出健二 1986『人格の自立と集団教育』明治図書
- 2007『人間的自立の教育実践学』創風社
- 小内透 2005『教育と不平等の社会理論 再生産論をこえて』東信堂
- Riesman, D 1961 *The Lonely Crowd*. Yale. 加藤秀俊訳 1994『孤独な群衆』みすず書房
- Roger A.Hart 1997 *Children's Participation*, Unicef 木下勇・田中治彦・南博文監修 IPA 日本支部訳 2000『子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社
- Rosenbaum, J. 1976 *Making Inequality: The Hidden Curriculum of High School Tracking*. Wiley
- 臨時教育審議会 1987「教育改革に関する第4次答申（最終答申）」
- リクルート 2007「進学センサス 2007 高校生の進路選択に関する調査」

- リクルートワークス研究所 2008 「第 25 回ワークス大卒求人倍率調査 2009 年卒」
- Spector, M and J I Kitsuse 1977 *Constructing Social Problems*, Menlo Park Cummings Publishing Co. 村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳 1990 『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて』 マルジュ社
- Super, D.E.・Bohn, M. J. Jr. 1970 *Occupational Psychology*, Belmont, California Wadsworth Publishing Company, Inc. 藤本喜八・大沢武志訳 1973 『(企業の行動科学6) 職業の心理』ダイヤモンド社
- 1980 A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior* 16, 282-298
- 斉藤耕二 1990 「第 2 章発達課題と社会化」 斉藤耕二・菊池章夫編 『社会化の心理学ハンドブック 人間形成と社会と文化』 22-23
- 斉藤貴男 2004 『教育改革と新自由主義』 子どもの未来社
- 坂本昭 1997 『進路指導の理論と実践—生き方指導を視座として—』 中川書店 住田正樹・高島秀樹・藤井美穂 1999 『人間の発達と社会』 福村出版
- 佐藤(粒来)香 2004 『社会移動の歴史社会学 生業・職業・学校』 東洋館出版社
- 2006 「第 4 章若年者の「着地不安」 高校卒業生の意識をめぐって」 石田浩編著 『高校生の進路選択と意識変容』 東京大学社会科学研究所 55-70
- 佐藤博樹・佐藤厚 2004 『仕事の社会学』 有斐閣
- 千石保 1991 『「まじめ」の崩壊—平成日本の若者たち—』 サイマル出版会
- 島崎征介 1991 『社会学 自立と関係性』 学文社
- 白井利明 2005 『迷走する若者のアイデンティティ』 ゆまに書房
- 進藤兵 2008 「ポストフォーディズムと教育改革 資本主義史の第 3 段階と新自由主義の歴史的
位置」 佐貫浩・世取山洋介編 『新自由主義教育改革 その理論・実態と対抗軸』 大月書店
- 数土直紀 2001 『理解できない他者と理解されない自己 寛容の社会理論』 勁草書房
- 住田正樹・高島秀樹・藤井美穂 1999 『人間の発達と社会』 福村出版
- ・南博文編 2003 『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』 九州大学出版会
- 2003 「序章子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在」 住田正樹・南博文編 『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』 九州大学出版会 3-17
- 総務省 2008 「平成 20 年版 情報通信白書」 第 3 章
<http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h20/index.html>
- Trow, M 1961 *The Second Transformation of American Secondary Education*, *International Journal of Comparative Sociology* 2:144-165 天野郁夫訳 1980 「アメリカ中等教育の構造変動」 天野郁夫他編訳 『教育と社会変動 (下)』 東京大学出版会
- 1974 *Problems in the Transition from Elite to Mass Higher Education*. In *Policies for Higher Education*. Paris OECD 天野郁夫他訳 1976 『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』 東京大学出版会

- 高原生興 2004『病める関係性 ミクロ社会の病理』学文社
- 高橋勇悦 1995『都市青年の意識と行動 若者たちの東京・神戸 90's 分析編』恒星社厚生閣
- 高塚雄介 2001「2章心理学から見た「居」場所」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想「教育」から「関わりの場」へ』学陽書房 36-50
- 田村鍾次郎 1986『生き方にせまる進路指導』ぎょうせい
- 田中治彦 2001「1章子ども・若者の変容と社会教育の課題」田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想「教育」～「関わりの場」へ』学陽書房 15-35
- 竹内洋 1991『立志・苦学・出世：受験生の社会史』講談社現代新書-1038 講談社
 —— 1995『日本のメリトクラシー—構造と心性—』東京大学出版会
- 友枝敏雄・鈴木讓編著 2003『現代高校生の規範意識—規範の崩壊か、それとも変容か—』九州大学出版会
- 富田英典・藤村正之 1999『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣
- 富永幹人・北山修 2003「第11章 青年期と「居場所」」住田正樹・南博文編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会 381-400
- 辻大介 2004「若者の親子・友人関係とアイデンティティ 16～17歳を対象としたアンケート調査の結果から」『関西大学社会学部紀要』35巻2号 p147-159
- 筒井美紀 2006『高卒労働市場の変貌と高校進路指導・就職斡旋における構造と認識の不一致 高卒就職を切り拓く』東洋館出版
- 中央教育審議会 96年第一次答申 1996「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」
 中央教育審議会答申 1999「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」12月
 中央教育審議会大学分科会学士課程教育の在り方に関する小委員会 2007「学士課程教育の再構築に向けて＜審議経過報告＞」
- 東京都生活文化スポーツ局私学部私学振興課 2000「東京都の私学行政 平成20年」
 東京都青少年・治安対策本部総合対策部青少年課 2008「ひきこもりの実態調査結果について 実態調査からみるひきこもる若者のこころ」
- 東京都 2008「東京都の昼間人口」（平成17年国勢調査結果）第7表 平成20年3月27日公表
- 上野千鶴子編 2001『構築主義とは何か』勁草書房
 —— 2005『脱アイデンティティ』勁草書房
- 海野道郎・片瀬一男編 2008『＜失われた時代＞の高校生の意識』有斐閣
- Vivien Burr 1995 *An Introduction to Social Constrictionism* Routledge, 田中一彦訳 1997『社会構築主義への招待言説分析とは何か』川島書店
- 渡辺秀樹 2005『現代日本の社会意識 家族・子ども・ジェンダー』慶應義塾大学出版会
- 渡辺三枝子編 2007『キャリアの心理学 キャリア支援へのアプローチ』ナカニシヤ出版 37p
- 若者自立・挑戦戦略会議 2003「若者自立・挑戦プラン」
- 山田昌弘 2007『希望格差社会「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房
- 山本多喜司・Wapner.S編 1991『人生移行の発達心理学』北大路書房

- 柳井修 2001『キャリア発達論 青年期のキャリア形成と進路指導の展開』ナカニシヤ出版
- 安田雪 2003『働きたいのに 高校生就職難の社会構造』勁草書房 2003
- 米川茂信 1987『社会的アノミーの研究』学文社
- 1991『現代社会病理学—社会問題への社会学的アプローチ』学文社
- ・矢島正見 1993『成熟社会の病理学』学文社
- ・松下武志・宝月誠編著 2004『社会病理学の基礎理論』学文社
- 吉田辰雄 2005『キャリア教育論 進路指導からキャリア教育へ』文憲堂
- ・篠翰 2007『進路指導・キャリア教育の理論と実践』日本文化科学社
- 芳賀学 1995「1章青年の価値志向—自己評定と自己表出を中心として」高橋勇悦監修『都市青年の意識と行動』恒星社厚生閣
- 1999「1章自分らしさのパラドックス」富田英典・藤村正之『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣 19-34
- 山口大学アドミッションセンター2006「山口大学大学進学時調査 2006」
- 山口大学アドミッションセンター2007「山口大学大学進学時調査 2007」
- 山口大学人文学部社会学研究室編 2008「山口地域社会研究シリーズ 14 若者の職業意識にみる現代的課題—防府市における高校生と保護者調査にもとづいて—」防府市サポートステーション
- 山口県教育庁高校教育課 2008「平成 20 年 3 月公立高等学校等（全日制・定時制）卒業生進路状況調査」 <http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50300/shinro/20top.html>

あとがき

本論文は、若者のさまざまな社会問題に共通する若者の自立の課題に焦点をあて、現代日本の若者が個性や自立、自己責任を重視され、自己実現を求められているにもかかわらず、実際には学校要因、家庭要因、地域社会要因が若者の自立を阻害していることを「高校生の進路形成意識と学習経験に関する調査」結果にもとづいて実証的に解明したものである。調査にあたっては東京と山口の高校 23 校にご協力をいただいた。この場をかりて改めてお礼を申し上げる。

筆者は修士論文「不登校現象と日本の学校」以降、本論文に至るまで、不登校の子どもたちの居場所であるフリースクールや子どもの居場所としての山村留学、野外体験活動に関する研究を行ってきた。また、職務上、高校生の進路選択に関する研究を行ってきた。不登校など若者の社会問題、高校生の進路選択を考えたとき、若者の自立の課題が不明確になっており、若者は自立が困難になってきていると感じた。若者の自立を支援する居場所の取組みは数多くあるが、若者の自立の課題が不明確な状況にあっては、支援そのものも困難な状況にある。本研究が日々の生活の中で悩み苦しみながらも困難な問題を乗り越えていかなければならない若者の一助となることを願っている。

本論文を作成するにあたって、指導教官である小谷典子先生、副指導教官である辻正二先生、湯川洋司先生からたくさんのご指導をいただいた。特に小谷典子先生には、長年にわたり根気よく丁寧なご指導をいただいた。先生方からのご指導、ご指摘は、私自身の研究力の未熟さや論理性の弱さを痛感するものであった。なんとか研究をひとつのかたちにした今、それらのご指導は今後研究を続けていく大きな財産となった。先生方の学恩に感謝し、今後、より一層の自己研鑽に努めていく。

また、有益な助言を与えてくださった多くの先生方、大学院生にも心から感謝している。そして、研究に対して理解し、応援してくださった職場の上司である山口大学アドミッションセンター長 富永倫彦先生、高校生の進路選択についてともに議論していただいた田中均先生（現在 島根大学）に感謝申し上げる。最後に、身勝手を許容し、応援してくれた家族に感謝する。

2009 年 2 月

林 寛 子